DREAM総決算！ 青木×川尻の妄想マンガ掲載!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING

enterbrain MOOK

2010
148
特別定価 940yen

大会速報、選手ブログは携帯で！
kamiproMove

「このマンガ家たちは超大物ではないのかな？」
ゴッチさんも驚愕！ マンガから格闘ロマンを学べ！

『リングにかけろ』車田正美
『キン肉マン』ゆでたまご
『魁!!男塾』宮下あきら
『バカイチ』ハロルド作石
『喧嘩商売』木多康昭×町山智浩
『あしたのジョー』変態座談会
『プロレススーパースター列伝』梶原一騎
『愛しのボッチャー』河口仁
『ワイルド・ナイツ』古泉智浩

マンガみたいなホントがほしい！

あしたと闘うマンガ!!

10th ANNIVERSARY thanks! eb!

2010 No.148 CONTENTS

kamipro

表紙 ©高森朝雄・ちばてつや／講談社

©みのもけんじ

うわ～ん

みのも先生が描いてくれたよ～～～！！！

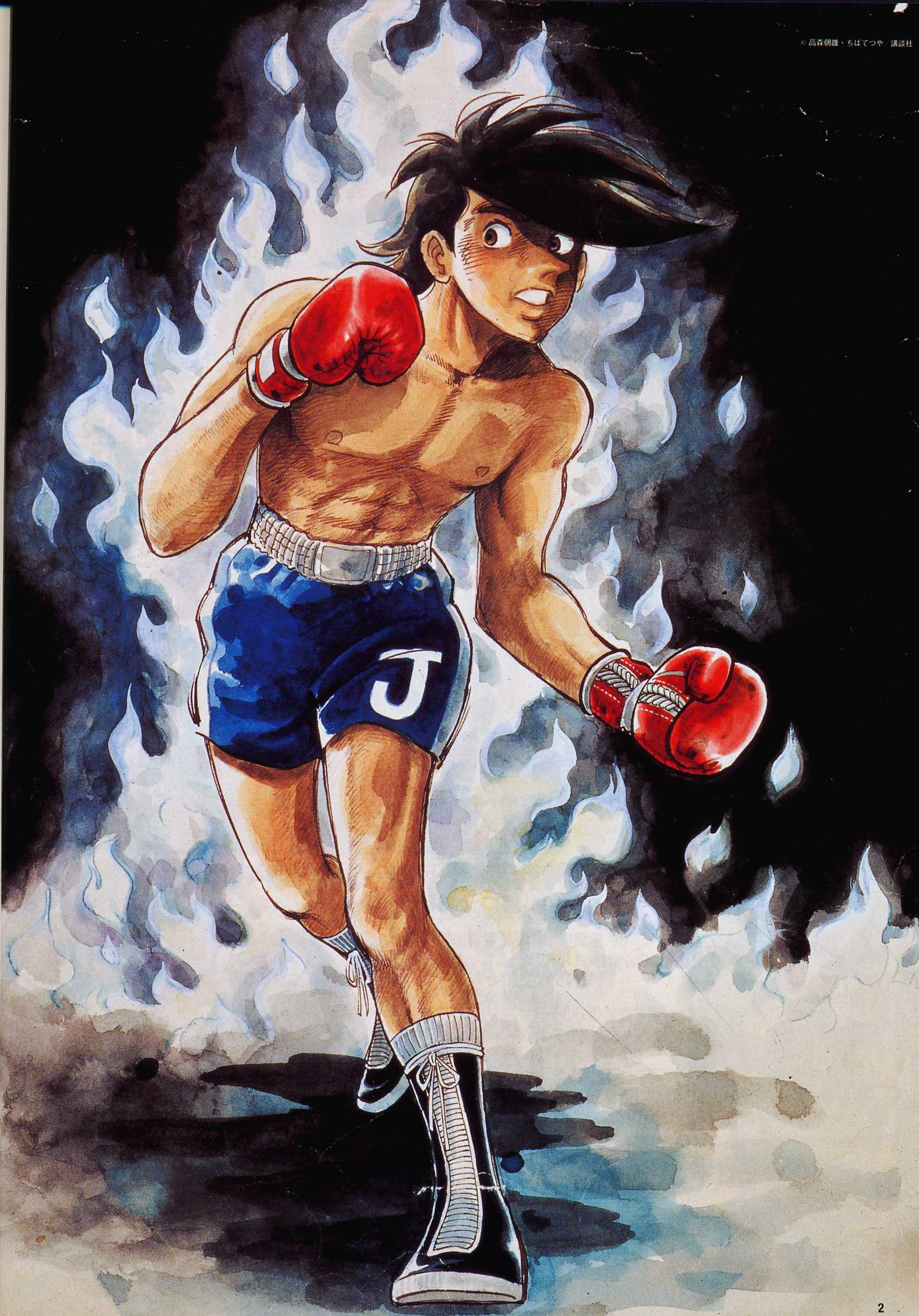
うわ～ん、うわ～ん、青木が泣いてるよお！

特集 闘うマンガ!!

COMICS

kamipro Special

MMA & K-1

Columns

特集
闘うマンガ!!

文／田中太陽

闘いは至上のエンターテインメントである。譲れない理由のある人間同士がぶつかり合うさまは、それ自体がすでに物語であり、第三者にまでも大きな熱狂と感動をもたらす力を持っている。

多くのプロスポーツはもちろんのこと、大衆娯楽の王様であるマンガもまた、そうした闘いそのもののおもしろさを取り入れて成長してきたジャンルの一つである。とくに"闘いの本質"に最も近いスポーツである格闘技とマンガの相性は抜群で、この組み合わせは数多くのヒット作を生み出してきた。

ひとくちに格闘マンガといっても、その種類および性質は大きく異なる。たとえばボクシングマンガだけを取り上げてみても、『はじめの一歩』のように現実からはみ出さないリアルなものから、マンガ的な必殺パンチの応酬を売りとした『リングにかけろ』、身長10メートルはあろうかという巨人を必殺パンチで天井までふっ飛ばす超人拳闘『B・B』など、その表現方法は多岐に渡っている。

90年代以降はあえて特定の格闘技を主題としない"異種格闘技もの"とでも呼ぶべきマンガが急増しており、これらの多くは『グラップラー刃牙』の影響を強く受けていると思われる。このなかにはリアリティや既存の格闘技にとらわれない、まるで格闘ゲームのような戦闘が特色である『エアマスター』や、種族の異なる動物たちによる格闘トーナメントを描いた『真・異種格闘大戦』のような変わり種も存在しており、格闘マンガの進化はまだまだ途上であることを思い知らされる。

しかしながらじつは、どういった格闘マンガもその本質は大きく違わないのである。おもしろさの肝は常に闘いの質そのものであり、設定や種目の影響は、多くの場合ほとんどないのである。このあたり、スポーツ自体のゲーム性をおもしろさをゆだねるところが大きいほかのスポーツマンガとは大きく異なる。

なによりも格闘マンガの直観的なわかりやすさと視覚的なインパクトは、ほかのスポーツマンガには決してマネできない独特のものだ。だからこそマンガというメジャーな娯楽のなかで、格闘技は野球やサッカーと互角以上に渡り合うことができたのだ。

いわば格闘マンガとは、現実の格闘技以上に求心力のあるエンターテインメントとして、世間に格闘技のおもしろさを知らしめてきた貴重なジャンルであるといえる。現実世界における格闘技の可能性を考えるうえで、格闘マンガのこうしたメジャー性はきわめて重要だ。

格闘マンガはフィクションであるがゆえに、格闘技の魅力的な部分だけを抽出して発信することができる。そしてマンガというメディアと格闘技の性質が相性抜群であったため、それは多くの人に伝わることとなった。ここに低迷するマット界、あるいは影響力を弱めつつある日本MMA界の助けとなるヒントは隠されていないだろうか？

そのカギとなるのは"闘いと物語性との融合"だ。かつてプロレスが独占し、MMAが引き継いだものである。その源流はおそらく、物語そのものである格闘マンガのなかにあるのではないだろうか？

当然ながらフィクションである格闘マンガの方法論を現実に通用させることは困難だが、その歴史と現状をたどることにより、何か見えてくるものがあるかもしれない。我々が現実におけるファイティング・エンターテインメントに求めているものは、つまるところ"マンガのような闘い"なのだから……。

やっぱり「何が」一番強いのか

こま

何が一番「強いのか」には興味があるんです

『BECK』『ゴリラーマン』作者
ハロルド作石

マンガ特集のトップバッターを飾るのは、『ゴリラーマン』でプロレスファンの心をくすぐるプロレスネタを入れ込み、『バカイチ』では空手をベースに当時はまだバーリ・トゥードと呼ばれていた総合格闘技を題材にしたハロルド作石先生だ！『BECK』のことはまったく語ってないが、読まないヤツはアルゼンチン・バックブリーカーの刑だっ！

聞き手／ジャン斉藤　撮影／岡本凜

——最近マット界の元気が足りないので、プロレス・格闘技マンガから勉強できるものはないかということで作石先生にお話をうかがいに来ました！

作石 勉強できること……ないと思いますけど（笑）。

——ありませんか（笑）。でも、先生が描かれる作品にはちょこちょこ格闘技・プロレスのネタが出てくるじゃないですか。

作石 はい。出てきますけど、そこが勉強になるのかなあ……。

——『ゴリラーマン』を読みながら「いまプロレスってどうなってるんだろう？」って思った潜在的プロレスファンってけっこういたはずですよ。

作石 そうなんですかね（笑）。

——少なくともボクは！　あの連載が始まった88年は「プロレス冬の時代」と言われていた頃ですよね。

作石 なるほど、なるほど。斉藤さんはずっとプロレスを観てらっしゃるんですか？

——タイガーマスクの頃はちゃんと観てましたけど、そのうちゴールデンタイムで放送しなくなったじゃないですか。

作石 はいはい。

——田舎に住んでいたから必然的に観る機会が減っていったんですけど、90年に入ってからもう一回見始めました。武藤敬司がアメリカから凱旋帰国した頃ですね。

作石 ああ、はいはい。スタイナー・ブラザーズが出てくる頃？

——そうです、そうです。そういえば、『ゴリラーマン』でもスコットの必殺技フランケンシュタイナーが出てましたね。

作石 そんなの描いたっけかなあ。

——プロレスラー志望の相撲取りがゴリラーマンにやってましたよ！

作石 もう覚えてないです（笑）。でも、確かにボクもスタイナー・ブラザースが来日したあたりから、再びプロレスがおもしろくなってるなという気がした。うん。

——そうですか。じつは先々月号の特集が「90年代」だったんですが、90年代に入ってからプロレスがガラリと様変わりしましたね。

作石 ああ、うまく言えないですけど、スタジアム的プロレスの時代だったんですかね。ちょっと活きのよさみたいなものもジャンルから感じたし。さっきのフランケンシュタイナーという技にしても、もともとはメキシコのレスラーがやるウラカン・ラナじゃないですか。それをヘビー級の選手がダイナミックにやるってことがカッコよかったなあ。

——スタイナー・ブラザーズは「投げっぱなしジャーマン」という大技も生み出して。

作石 そうそう。そういう技のリサイクルも非常におもしろかったな、と。プロレスに燃え上がった時期ではありますよね、あの当時。

次第にプロレスファンが一人減り、二人減り、最後にはサーッといなくなっちゃって……

——そんな作石先生がプロレスを見始めたのはいつからだったんですか？

作石 編集長はおいくつですか？

——ボクは35歳です。

作石 タイガーマスクのときには何歳ですか？

——ええと、タイガーマスクのときは5〜7歳ですね。

作石 ボクはね、中1の頃だったんですよ。その前は全然プロレスはそんなに好きでもなかったというか、家でお父さんが観てるのをチラチラ観てたぐらいだったんですけど。でも、タイガーマスクがデビューしてからはクラス中の男子がみんなプロレス好きになった時代だったんで。ボクもタイガーマスクでプロレスが好きになりましたし。

——ボクが中学生になった頃は、クラスにプロレス好きが一人いればまだいいほうでしたね。

作石 それはアレですか。UWFの時代ですか？

——そうですね。UWFの時代ですね。

作石 それ、凄くわかります！　ボクも中2ぐらいまではプロレスが流行ったりしてて、友だちの家に行っちゃあプロレスごっこしたり、それは学校なんかでもそう。で、「今日のタイガーマスクはいったいどんな試合になるだろう？　どういう結末になるだろう？」っていうふうに友だちと予想したりして、とにかくクラス中が凄く燃えてたんですよ。でも、なんか次第にプロレスがファンが一人減り、二人減り、最後にはサーっといなくなっちゃって……。

——やっぱりテレビの影響は大きいんですねぇ。

作石 俺はそのあともUWFを見続けて。学校の友だちに「木戸修がいまUWF

に行ったんだ」という話を振るんだけど、
友だちの反応が「いまそうなってるんだ」

い好きだったんで。
——前田のトレーニング方法を藤本が仲

だったんですけど。なんか、聞き手のライ
ターさんが凄くピリピリしてたんですよ

あるのかな……？」ってそろそろ疑問にな
ってきた時代でもありましたけど（笑）。
——そこもみんな同じでしょうね（笑）。

ハロルド作石

に行ったんだ」という話を振るんだけど、友だちの反応が「いまそうなってるんだ」というものから「ふーん……」っていう軽返事に変わっていって（笑）。

——クックックッ。

作石　プロレスってけっこう公なジャンルだったはずなんだけど、いつのまにか自分の心の中だけのものになったんだなあって……。

——気がついたら辺境に追いやられてしまったという。ところで、先生はプロレスに格闘技的なおもしろさを見ていたんですか？

作石　だってあのときは真剣に観てましたから！　違いますか？

——みんなそうです！

作石　いまの時代はエンターテイメントとしてね、割りきって観てると思うんですけど。やっぱり、その当時はPRIDEがなかった時代ですから。リング上のルールに則ってる真剣なものというふうに受け取ってましたよ。ロープに振ったらかならず返ってくる、相手の技をなるべく受けるというルールの名のもとに真剣にやっていると思ってたので。べつにプロレスがウソやってるっていうわけじゃないですけど、見方としては真剣勝負しているものとして観てましたよね。

——では、UWFという運動体はどのようにご覧になったんですか？

作石　さらにリアルを追及したというか、さらに真剣味が増しているというか。UWFも好きでした。前田（日明）さんが凄い好きだったんで。

——前田のトレーニング方法を藤本が仲間に強制するシーンがありましたね（笑）。

作石　はい（笑）。あれはボクがデビューしてまだ間もない頃、旧UWFがちょうど新日との業務提携を解消して盛り上がってるときに前田さんの取材をさせてもらって。対談みたいなことをやらせていただいたんです。

——あの頃の前田さんと。

作石　まあ取材というか、単なるプロレスファンとして前田日明に会うという感じだったんですけど。なんか、聞き手のライターさんが凄くピリピリしてたんですよねぇ……。

——わかります。前田さん、ホントに怖いんですよ！

作石　取材前に注意されましたから！「言葉づかいに気をつけるように」「この前、取材の人が殴られたから」とか。いったいどういう人なんだろうって（笑）。

——アハハハハ！

作石　やっぱり、あの頃はいまみたいに情報がない時代ですから、そんなことが全然わかんなくて。でも、単純にプロレスファンとして前田さんに会えたことはホントにうれしかったんです。「アンドレの背後から両手を回してみたけど届かなかった」という話をしてもらったり、あと道場でちゃんこを食べさせていただきました。ライターさんはピリピリしてたけど（笑）、凄くいい人だなあって。いい思い出になってますね。

——そして先生は大山倍達とか格闘技方面にも興味はあったんですよね。

作石　そうですね。もともとは梶原一騎のマンガから、いろいろ知識を得たというか興味を広げたんで。プロレスしかり、極真空手しかり。

——いま考えると『空手バカ一代』って理想の格闘技マンガですよね。ファンタジーとリアルの融合はあの時代性にもマッチしたんでしょうけど。

作石　うん、おもしろかったですね！……ホントにあったことだと思って読んでましたし。

——子どもたちはみんなそうです！（笑）。

作石　ねえ。香港カンフーとの5vs5の対決とか、ホントにあったものだと読んでますから。でも「三光なんて技、ホントにあるのかな……？」ってそろそろ疑問になってきた時代でもありましたけど（笑）。

——そこもみんな同じでしょうね（笑）。

作石　「さすがにこんなことはないよな……」って冷静に思いながらも「いや、でもあったに違いない！」って葛藤しながら読んでました。

——それくらい極真空手というものはファンタジーで支えられながらも説得力があったということですね。

作石　うん、ホントそうですね。やっぱり『四角いジャングル』と『空手バカ一代』の影響は強いですよね。あと、そういう意味だと小林（まこと）先生！

——『1・2の三四郎』、『柔道部物語』！　以前の『kamipro』で、小林先生に登場していただきました。

作石　小林まこと先生のマンガからはプロレスという成分を抜きにしても影響を受けてるし、プロレス成分を入れても一番かなあ。PRIDEは小林先生とよく一緒に行ってたんです。先生も格闘技、相当好きですよねぇ。

——作石先生も相当好きですよ（笑）。

作石　そうなんですけど、ボクはそんなに描いた覚えがないんですよ。よく指摘されるんですけど（笑）。

——あんなに小ネタを出してるのに覚えてないんですか？

作石　はい。なんか知らないうちに。プロレスネタを入れようと思ってるわけじゃないんですけど。いま『ゴリラーマン』と『バカイチ』の単行本を持ってきてくださってますけど、『BECK』のなかにもチョクチョク会話のなかに出てきてるんですね。

——出てきてますね。

作石　基本的に『BECK』というマンガ

彼の苦悩はベカちゃんに※アルゼンチン・バックブリーカーをかけても消えるものではなかったという……

ボキ　ボキ

アイタタタ……なんや荒れとるやないか!!

※アルゼンチン・バックブリーカー……アントニオ・ロッカが開発した必殺の背骨折り技

数種類のバックブリーカーの使い手として知られるゴリラーマン。藤瀬健次もアルゼンチンの犠牲者に。ハロルド先生の作品にはいつプロレス・格闘技ネタが混入されるか油断がならないのである……。

もともとは梶原一騎のマンガから知識を得たり、興味を広げたんです

は、なるべく時事ネタとか時代背景がわかるものは入れないようにしようと思ってて、「いまは何年」というセリフもないし、いつくらいのマンガだっていうのがわかんないようなふうに気を使ってるんですけど。その代わり、会話のなかにですね、「ハンセンってファンクス一家か？」みたいなものが入ってて（笑）。

——その代わりって（笑）。

作石 あと「ラ・マヒストラル」っていうバンドが出てきたりとかすると、プロレスファンからすると「あっ、これはいつぐらいに描いたものじゃないか」ってわかるようなわからないような（笑）。そのへんの脇はちょっと緩いというか甘いですかね。でも、そんなに世の中にね、プロレス好きをアピールしたいわけじゃないんですよ。

——充分アピールしてる気が……。

作石 う～ん、そういえば、いまは違いますけど、昔はアシスタント希望に必ず「君はプロレス好きかい？」って聞いてたらしんですよ。

——どんなプレッシャーですか（笑）。

作石 いやいや、俺は全然そんなつもりはないんですけど、ウチはプロレスファンと答えたほうがアシスタントの採用率が高いという噂が流れましたね（笑）。で、ある日、アシスタント候補に「君、プロレス好きかい？」って聞いたらしんですよ。そのコは「すいません。ボク、プロレス好きじゃないんですよ」って答えたんですけど、周りの先輩アシスタントが「そこは『好き』と言う約束でしょ」って軽く注意してて。そのコは「いや、でもボクは……」って困ってましたねぇ。

——その方は当然雇わなかったんですよね？（笑）。

作石 雇いましたよ！（笑）。ホント、そんなつもりはないんだけどな……。

——で、『ゴリラーマン』が始まった頃って、プロレスと格闘技がどんどん分かれていきましたよね。先生はその流れのさまをどのようにご覧になっていましたか？

作石 やっぱり俺はプロレスから入った人間ですから。やっぱりプロレスが最強であってほしいというような、願望とか幻想を抱いていたんですよ。一番初めにどのレスラーが（総合格闘技で）負けましたっけ？

——初期で言えば、ケンドー・ナガサキですかね。

作石 そうだ！ 最終的にダメなんだと思ったのは、ケンドー・ナガサキが負けたときかな……。

——ナガサキ敗戦で気づかされましたか！（笑）。

作石 だってケンドーはプロレス界のポリスマンだったわけですよね、立場的には。

——ですね。ナガサキは腕自慢で逆らうヤツはいなかったわけですから。

作石 そのポリスマンが出れば大丈夫と思ってたのに簡単に負けてしまって。あれでちょっとガックリ心が折れましたね～。あと安生（洋二）もショッキングでしたね。あれが一番ショックだったかもしれない。

——ヒクソン道場破りの失敗。

作石 あの頃は毎週早朝に『ゴング』と『プロレス』を買いに行ってたんですけど、顔面を腫らした安生が表紙を飾った号を買いに行ったあの朝は忘れないですねぇ……。いまだに取ってありますからね、あの本は。

——それくらいの衝撃でしたか。

顔面を腫らした安生が表紙の『週プロ』と『ゴング』はいまだに取ってある

『バカイチ』の主人公、大場一良が空手を学び、立ち技から総合格闘技にまで挑戦する、ハロルド作石版『空手バカ一代』である。

『週プロ』と『ゴング』はいまだに取ってある

ハロルド作石

作石 うん、ショッキングでしたね。もうプロレス界は俺が思ってたものじゃなかったという大きなショックを受けましたね。

――みんなそうでしたね、あの頃のプロレスファンは。

作石 ホントに。あとバンバン・ビガロの負けもイヤだったなあ（苦笑）。

――あれも切ないですねぇ。キモに何もできず血ダルマにされて。

作石 あれ、悲しかったですよ！ あのバンバン・ビガロがああいうふうに負けるというのは。あの頃のプロレスには、そういう悲しい思い出がいっぱいありますよねぇ……（しみじみと）。

――でも、先生はマンガにバーリ・トゥードのネタを取り入れたりするから、それはそれで楽しんでるのかなって思っていたんですけど。

作石 う〜ん、なんですかねぇ。やっぱり「何が一番強いのか？」ということには凄く興味があるんで。当然プロレスラーが負けると幻想が崩れるし、自分の価値観が変わるわけですから、それは凄い悲しいことですけど、何が一番強いのかには惹かれますよ。『空手バカ一代』もやっぱり「地上最強の空手」というのが一つのテーマじゃないですか。

――格闘技の魅力って最強追及が根本にありますからね。

作石 でも、桜庭（和志）さんがUFC－Jで勝ったじゃないですか。あの勝利には凄い救われましたねぇ。夜中にテレビを観てて、また今日も一人レスラーが負けるのかと思ったら……凄くうれしかったですねぇ。

――じゃあ最後のマイクアピールにも興奮して。

作石 うん。「プロレスラーは本当は強いんです」には、しびれましたよ！

――しかし、ここまでのお話を聞くかぎり先生はプロレスファンですね、あの頃たくさんいた（笑）。

作石 うん、そうですね！ 単なるプロレスファンだったという。

――それでもバーリ・トゥード要素を取り入れた『バカイチ』を始めたのは早すぎますよ。だってまだバーリ・トゥードというものが定着してなかった時期じゃないですか。

作石 ああ、そうかもしれないですね。ちょうどグチャグチャしてるというか、麻雀牌をシャッフルしてる時期。ジャンル自体が黎明期というかね。そんなにPRIDEに人気があった時代みたいに、格闘技ファンというのはあんまりいなかったかもしれないですね。プロレスファンは離れ、格闘技業界もまだ成立してないみたいな時期だったかもしれないです。

――K－1がようやくメジャーになりかけるかなという時代でした。そんな頃にバーリ・トゥードが出てくる格闘技マンガを描くにあたって、編集の方とどのようなお話をされたんですか？

作石 編集ですか？ このときの担当はあまり格闘技は好きじゃなかったですね。

――あ、そうなんですか（笑）。

作石 基本的にボクの編集担当で格闘技好きはあんまりいないですね（苦笑）。へんに担当が格闘技好きだと、ボクの場合はですよ、プロレスネタが多くなっちゃったりするから、そのほうが良かったのかもしれないですね。まあ担当はあんまり格闘技を知らなかったと思うんで、意味がわかんなかったかもしれないです（笑）。

――そもそもあの頃だと、バーリ・トゥードってなんだ？ プロレスと何が違うんだ？ という話ですし。

作石 ケンカと言ったらへんですけど、いまみたいに競技として固まる前、他流試合みたいな感じが殺伐としてあって。それはそれでおもしろかったですけどね。なんか、ワクワク感が凄かったです。ジェラルド・ゴルドーがメチャクチャなことをしたりとか。おっかなかったですよね（笑）。

――『バカイチ』で最終的にはそのバーリ・トゥードを扱ったのはどういう狙いがあったんですか？

作石 いやなんかね、基本的にはアレは空手のマンガですよね。空手のマンガだけど、空手のなかだけで総括するという感じではなくて、やっぱり『空手バカ一代』が好きな人間ですから。あのマンガって何がおもしろいかといったら、いろんなところに行って、いろんな格闘技と闘う物語がおもしろいわけじゃないですか。そういうマンガを描きたいなと思ったんですけど、ちょうど行なわれていたバーリ・トゥードみたいなのが、ちょっと描きたいと思ったんでしょう。……しかし、まさかいまになって『バカイチ』のことを振り返ることになるとは（笑）。

――すいません（笑）。先生は昔のインタビューでマンガ家として『ゴリラーマン』で終わりたくないというか、『ゴリラーマン』がいつまでも代名詞の漫画家にはなりたくなかった、と。それでいろいろ試行錯誤するなか、『バカイチ』を描いたんだけど

©ハロルド作石／講談社

『バカイチ』ではまだ当時は浸透していなかったバーリ・トゥードのセオリーを描写。UFCやK-1がスタートしたばかりでまさに黎明期における早すぎた格闘技マンガであったのだ。

不良学園モノの『ゴリラーマン』（一言もしゃべらない主人公はTKにそっくりだが、TKのプロデビュー前の作品）は後半から格闘技色が強くなり、そのカラーは『バカイチ』に受け継がれたと言える。

まさかにいまになって『バカイチ』を振り返ることになるとは……（笑）

あまり人気が出なかったとおっしゃってましたね。

作石 そうなんですよ、人気はなかったですねぇ……。『ゴリラーマン』という作品は、自分のキャリアのなかで「昔ああいうマンガ描いたな」と振り返ることは確かにありますけど、いつまでも「ゴリラーマン、ゴリラーマン」と言われるのもイヤじゃないですか。

――それだけの漫画家だと思われたくない、と。

作石 と、ボクはやっぱり思うんですよ。『ゴリラーマン』というマンガが終わってからも、似たようなマンガを求められるのもイヤだし、知らない人から「ゴリラーマンを描いてください」って言われてもイヤだし。なるべくそこから遠いところに行きたいというか、そういうつもりで模索していた時期ですね。

――産みの苦しみのなかで闘っていた頃の作品なんですね、『バカイチ』は。

作石 ということですね。いまの時代にもし格闘技を描こうと思ったら、また状況が違いますから全然違うものになると思いますけど『バカイチ』に関しては、なんですかね、格闘技の黎明期でもあるし、べつに空手自体がそんなに盛り上がってたわけでもないですから。

――ホントにそうなんですよね。

作石 だから「どういうふうに読者にアピールすればいいんだろう?」という点は苦労しましたね。要は……読者は空手だ、総合だと言われてもピンとこないじゃないですか(笑)。

――ワハハハハハ!

作石 むしろPRIDEの時代に、ああいう総合格闘技のマンガを描いたらパッと見、すぐにわかるんですよね。だけど、なんにもわかんない時代にわかんないこと描いてという苦労はあったと思いますけどね。でもね、今日の取材でこんなに語ることになったんだから、『バカイチ』も報われたと思いますよ、うん(笑)。

――光栄です!(笑)。

作石 取材に来てくださった方がチラッと聞いてくださることはありますけど、まさかこんなに聞かれるとは(笑)。まあ昔のマンガで、たとえば『ゴリラーマン』で「あの巻で、ああなってましたね」と言われても忘れてることも多いですけど。と

WOWOWのTUF効果でハロルド先生もUFCに夢中！　今回登場するいしかわ先生、古泉先生もハマってるから業界外関係者のビバUFCぶりは侮りがたい……

ミルコvsヒョードルを昔のファンはアンドレvsハンセンとして観てた

くに『バカイチ』に関しては、触れられることはあんまりないですから。

――もしかしたらこの取材が最後になるかもしれない(笑)。でも、この作品以降ですもんね。総合格闘技というものがどんどん認知されていったのは。

作石 そうですねぇ。おもしろかったですね。いやあれはもう『PRIDE・1』から途中まではほとんど観に行ってますね。PRIDEというイベントはホントに楽しかったですよ。あれを2ヵ月に一回、必ずやっていたというのが凄い。桜庭の試合は全部好きだし、小川直也vsグッドリッジも燃えましたし、ミルコとヒョードルの試合も凄かったですよね。たぶん昔のファンはこういう試合をアンドレvsハンセンとして観たんだろうなと思って(笑)。

――いずれ伝説として語られるんでしょうね。いまはどの程度チェックしてるんですか?

作石 いや、そんなに観れてないです。いまはテレビであんまりやらなくなりましたからね。でも、UFCは観てます。

――あ、UFCだけは。

作石 WOWOWで必ず。ホントにいい選手が凄いいっぱいいて、これが日本の会場で観られないのはつまんないなと思ってますけど。

――ホントにそうなんですよねぇ。

作石 だってジョルジュ・サンピエールとか凄くないですか? いま一番凄い選手だと思います。で、アンデウソン・シウバも異常に強いし。要はみんながキャラクターがあって、それでいてメチャクチャ強いわけですから。唯一残念でならないのは、UFCって試合の間隔が長いことかなぁ。

――3ヵ月か4ヵ月にいっぺんで。

作石 たくさんGSPの試合を観たいんですけど、試合するのはホントに何ヵ月かに一回ですよね。もっと観たいんですよ、GSPの試合が!

――なるほど(笑)。

作石 うん。たとえば、ブロック・レスナーのことがホントに憎いという気持ちを何ヵ月間も持たないといけないじゃないですか。

――あ、レスナーのことは憎たらしいですか(笑)。

作石 あと、いまアレにハマってるんですよ。UFCのガチンコ・ファイトクラブ。

――『ジ・アルティメット・ファイター』(=TUF)』。

作石 そうそう、『ジ・アルティメット・ファイター』! 俺、今回のヘビーウェーターズから観てるんですけど、凄いおもしろくないですか?

――ですね。ランペイジが最低すぎて最高ですね(笑)。

作石 そうそう。チーム・ランペイジとチーム・ラシャドの抗争がホントにおもしろいなって。今回までは全然観てなくて、同業者の若杉(公徳)くんが「おもしろいですよ」って言ってて。

――『デトロイト・メタル・シティ』の若杉さん。

作石 若杉くんの薦めで見始めたんですけど、異常におもしろいですよね。あのチーム・ラシャドとの罵り合いや選手

――日本人がやるとあんまりカッコよくないところはありますからねぇ。でも、今日は安心しました。ちょっと離れていて

WOWをみんなに薦めてますね。

――WOWOW最強説(笑)。

作石 WOWOWはメチャメチャいいですよね。あとはサッカーのスペインリーグもやってくれるし。ボクシングもWOWOWのおかげでパッキャオやメイウェ

作石　若杉くんの薦めで見始めたんですけど、異常におもしろいですよね。あのチーム・ラシャドとの罵り合いや選手たちの個性も。キンボ・スライスとかね。

──ランペイジがキンボと同じ髪型にしてましたよね、なんの説明もなく（笑）。

作石　そうそうそう。そしてランペイジがたいして教えないというね（笑）。

──そういえば、昨日でしたね、ラシャドとランペイジの試合が……。

作石　（猛然と）結果は言わないでくださいっ！

──う、うわっ！　言いません。

作石　すいません、まだ観てないんですよ。あとで観るのがホントに楽しみで楽しみで……。

──死んでも言いません（笑）。

作石　それ以外の話題でお願いします（笑）。だから、それまでは全然あの番組を観てなかったんで、ＷＯＷＯＷのＵＦＣ中継を観てても「この選手はオーディション番組の『ジ・アルティメット・ファイター』から人気が出た選手」と紹介されても「なんだよ、そんなの知らねーよ」みたいな。

──まあそんな感じですよね。

作石　こっちは基本的にＰＲＩＤＥに出てた選手を応援してるじゃないですか。「知らねーよ、そんなヤツ」みたいな感じだったけど、いまは『ジ・アルティメット・ファイター』出身選手に感情移入してますから！

──ガハハハハハ！

作石　『ジ・アルティメット・ファイター』観てから、ＵＦＣがもっとおもしろく観られるようになりましたねえ。ああいう番組は日本の団体ではやらないんですかね？

──日本人がやるとあんまりカッコよくないところはありますからねえ。でも、今日は安心しました。ちょっと離れていてもおもしろいものにはアンテナが効くんですね。

作石　いやいや、ボクはＰＲＩＤＥのときからは、あんまり最先端なものは追ってないと思いますけど、でもＵＦＣはおもしろいなって。

──ＵＦＣは最先端ですよ。

作石　そうなんですかね。最近はそんなに詳しくないですよ。というか、ＷＯＷＯＷがおもしろいんですよ。ボクはね、ＷＯＷＯＷをみんなに薦めてますね。

──ＷＯＷＯＷ最強説（笑）。

作石　ＷＯＷＯＷはメチャメチャいいですよ、ホントに！　ＷＯＷＯＷには俺のおかげで二人も入りました（笑）。

──ＷＯＷＯＷも加入者が伸び悩んでるみたいな話も聞きますけど。

作石　それはいかんでしょ？ ＷＯＷＯＷはホントにね、かゆいところに手が届くというか。たとえば映画だったら「あっ、それ、俺、借りるまではなかったけど、観たかったんだよ」っていうのをよくやってくれるし。格闘技はＵＦＣをやってくれますよね。あとはサッカーのスペインリーグもやってくれるし。ボクシングもＷＯＷＯＷのおかげでパッキャオやメイウェザーを知ることができたし。

ＵＦＣの選手はみんなキャラクターがあって それでいてメチャクチャ強いですね

はろるど・さくいし■1969年3月16日、愛知県出身。19歳のときに『週刊ヤングマガジン』にて『ゴリラーマン』でプロデビュー。『バカイチ』終了後はプロ野球と舞台とした『ストッパー毒島』を連載し、このたび映画化される『BECK』は音楽マンガとしては異例の大ヒットとなった。

──そう考えると、ＷＯＷＯＷは凄く重要な存在ですね（笑）。

作石　ＷＯＷＯＷはメチャメチャ重要です。最先端はＷＯＷＯＷです！　サッカーもやっぱりリーガ・エスパニョーラが観られるんですから重要＆最先端、ホントに。

──何か文化を語るときに、ＷＯＷＯＷに入っているかというのが問われるかもしれないですね。

作石　ハッキリ問われますね！　凄く問われる（笑）。

──となると、かつて先生は「プロレスが好きか？」と聞いてましたけど……。

作石　「ＷＯＷＯＷ入ってるか？」って聞く……かもしれないです（笑）。

──「ＵＦＣは好きか？」とも付け加えてください（笑）。今日はありがとうございました！

【10年5月31日／都内・某所にて収録】

熱血格闘作品の巨匠が語る

小宇宙（コスモ）的マンガ論

創作の疲労度は肉体的にも精神的にもプロの格闘家と変わらない(笑)。そんな世界で

35年以上歩き続けてきた

『聖闘士星矢』作者

車田正美

これまでに『リングにかけろ』や『風魔の小次郎』など数々のヒット作を世に送り出してきた車田正美。とくに不朽の名作『聖闘士星矢』は世界的なムーブメントを巻き起こし、これまでにない少年マンガの様式を確立した。そんな巨匠が小宇宙全開でマンガ哲学を激語り！ さぁ、君も心の小宇宙を燃やせ!!

聞き手／鈴木佑

——いや〜、今日はお会いできて光栄です！

車田　いやいや、もっと楽にしてよ（ニッ

やられればやられるほど、ヒーローのほうが巻き返したときに「ワーッ！」ってなる。これはプロレスだけじゃなく、ドラマや映

修行に行くっていうから、仕事場に飾ってあった本物を「これ持ってけよ」って餞別代わりにね。

親とも教師じゃない？　だからってガチガチの堅物じゃないんだけど、やっぱりスジの通ってる男らしい男だよね。そうじ

—いやー、今日はお会いできて光栄です！

車田　いやいや、もっと楽にしてよ（ニッコリ）。

—今回は「闘うマンガ」特集なんですが、『リングにかけろ』や『聖闘士星矢』などの大ヒット作のお話はもちろん、熱血マンガ家としても知られる車田先生の豪快なエピソードもお聞きできればな、と。

車田　そんな言うほどないぜ（笑）。もう、俺なんか普通の人間よ。でもさ、最近はプロレスラーでも昔みたいな豪快な伝説って聞かないよね。逆に俺のほうが酒飲みだったりするんだから。

—車田先生のほうがレスラーらしいわけですね（笑）。

車田　ハハハハ。ほら、よく昔はアイスペールにドンペリやら何やらチャンポンにして、一気飲みやったとか聞くじゃない？　いまはホント、みんなおとなしいもんね。まぁ、そういう伝説が生まれにくい時代なのかもしれないけどさ。

—いまのレスラーや格闘家はアスリート的というか。

車田　そうね。みんなしっかりしてるし、挨拶なんかもきちっとできるじゃない？　そういう意味でもアスリートなんだろうね。俺なんかが観てきた力道山の時代のレスラーは、みんな野獣みたいだったから。いまのプロレスはエンターテインメントとしての側面が強いけど、昔はブラッシーの噛みつき攻撃とか、ホント殺し合いみたいなリアリティがあったよね。そしてそこには必ず悪と正義の闘いっていうのがあってさ。

—勧善懲悪の世界ですよね。

車田　うん。昔からそうだけど、ヒールがいるからヒーローが引き立つ。ヒールにやられればやられるほど、ヒーローのほうが巻き返したときに「ワーッ！」ってなる。これはプロレスだけじゃなく、ドラマや映画やマンガも含めて娯楽の鉄則だと思うんだよね。だから『リンかけ』なんかもそうよ。高嶺竜児しか出てないときはまだ人気がイマイチだったんだけど、剣崎順という敵役を出したことによって盛り上がってきてさ。『あしたのジョー』で言えば、矢吹ジョーに対する力石徹とかね。

—強大なヒールの存在というか。

車田　そうそう。だから、プロレス界もそうでしょ。いまの新日本プロレスでいえば真壁（刀義）くんなんか元気あるよね。

—先生は真壁さんと交流があるそうですね。

車田　うん、この前も「IWGP、ピンで獲りました」ってメールくれてさ。「ああ、苦労人だからよかったなあ」って思ったよね。

—そういえば前に真壁さんを取材したときに、「車田先生から『風魔の小次郎』のお宝グッズをもらった」って聞いたことがあるんですけど？

車田　ああ、あれよ。彼が『風魔の小次郎』のファンだっていうから木刀をあげたのよ、「風林火山」。

—え～、小次郎が使ってた伝説の剛刀「風林火山」ですか!?

車田　そうそう（笑）。あれはまだ真壁くんがヤングライオンのときで、海外に武者修行に行くっていうから、仕事場に飾ってあった本物を「これ持ってけよ」って餞別代わりにね。

—さすが太っ腹ですね～、それは真壁さんも感激したでしょうね。

車田　でもさ、気づいたら真壁くんも木刀じゃなく鎖をトレードマークにしちゃったけどね（笑）。

—ダハハハ！　先生は真壁さん以外にもさまざまなファイターと交流があるとお聞きしたんですが？

車田　そうね。まぁ、あと新日だったら永田くんだね。あのね、昔ウチで俺の作品のキャラクターグッズなんかを扱うショップをやってたのよ。

—「セイヤクラブ」ですね。

車田　そうそう、その店に永田くんの妹が来たの。それで永田くんが『リンかけ』の大ファンだってことをウチのマネージャーが聞いてさ。俺も「永田さんの妹さんが見えましたよ」って言われたときは、「え、新日の永田かよ？」ってちょっと驚いたんだけど。そこから「じゃあ、マンガの推薦文とかに出てもらおうか」って話になって、新日の道場に行っていろいろ話したりさ。あそこは弟の克彦くんも含めて、ありがたいことに兄弟全員が車田マンガのファンなんだよね。

さまざまなファイターたちと親交のある車田先生。過去には高山善廣、魔裟斗、武蔵など7人の格闘家との対談集『リングにかけろREAL 車田正美熱血対談伝説』も出版している。

—先生から見て永田さんはどういった方ですか？

車田　いやあ、マジメだよ。あの家はご両親とも教師じゃない？　だからってガチガチの堅物じゃないんだけど、やっぱりスジの通ってる男らしい男だよね。そうじゃなきゃ強くなれないだろうしさ。まぁ、でも難しいよね、プロレスは強いだけじゃなく華もなきゃダメじゃない？　観る者に、よりアピールできる遊び心ってヤツかな。まぁ、エンターテインメントの根本的なものだけどね。でも、真壁くんなんかはうまく自分のキャラをつかんだよな。まさかヒールでいくとは思わなかったもん。

—雑草育ちからチャンピオンまでたどり着いて。

車田　うん。昔、ある企画で若手の頃の真壁くん、棚橋（弘至）くん、柴田（勝頼）くん、井上（亘）くんと対談したことがあったんだよね。で、「このなかから誰がいくかな？」って思ったら、まず華のある棚橋くんが人気者になった。で、先輩の真壁くんはちょっと出遅れた感じだったけど、ちゃんとキャラを確立させたよね。

—あとは「風林火山」を武器にすれば完璧ですね（笑）。

車田　ハハハ！　違いない（笑）。

—先生はレスラーと飲む機会も多いんですか？

車田　けっこう飲んだね。

—ちなみに先生はいまもリアルタイムでプロレスや格闘技はご覧になってるんですか？

車田　たまに行くよ、『DREAM』なんかに招待してもらって。でもね、最近はあんまり大きい会場は出かける気がしないんだよね、人疲れしちゃうから（苦笑）。まぁ、映像とかでチェックしたりはするけど。

—いま興味のあるファイターはいますか？

車田　いまだったら柴田じゃないかな。

だってアイツ、かわいいぜ！
――かわいいですか！（笑）。
車田　あれは天然なところがかわいいんだよな。なんて言うんだろ、全然政治的な意図がないっていうか。
――生き様が不器用というような？
車田　そうそう。そこが凄くかわいいっていうか、男気を感じるよね。だって、いまどき入場から突っ走ってくるヤツもなかなかいないじゃない？（笑）。
――先生のマンガでも男気全開のキャラが数多く登場しますが、やっぱり先生自身もそういうタイプのファイターがお好きなんですか？
車田　そうだね。いや、でもレスラーも生活がかかってくると真っすぐ進むだけってわけにはいかないんだよね。だって家族とか子どもができれば、そりゃ少しは先のことを考えるようになるじゃない？　だから船木（誠勝）選手がまたプロレスに戻ったけど、あれも「男だな」って思ったよ。「俺はあくまで総合でいくんだ」って気持ちがあったって、やっぱり守るべき家族がいるとそうも言ってらんないしね。
――家族を守るために。
車田　うん。だからそういうふうに方向転換するっていうのも男だと思う。もちろん脇目もふらず自分の道を真っすぐに進む柴田も男。でも、柴田は家族がいないからそれができる（笑）。
――なるほど（笑）。
車田　この二つは両極端でパターンは違うけど、どっちも男だよね。そこがこの二人のかっこいいところかな。こういう選手にもっとスポットライトが当たってほしいよね。

現在に生き残った忍びたちの闘いを描いた『風魔の小次郎』は1982〜83年に『少年ジャンプ』で連載。その後、07年にはテレビドラマ化された。

『リンかけ』をボクシングだと思って読んでた人はいないでしょ（笑）

――さて、先生の作品についてもお聞きしたいんですが、まず「闘うマンガ」といえばなんといっても『リンかけ』ですね！
車田　まぁ、「闘うマンガ」といったって、『リンかけ』を連載してた頃は後楽園ホールやジムに取材に行ったりはしたものの、正直ボクシング自体にのめり込むということはそんなになかったのよ。というのは、『リンかけ』の場合はそうなっちゃうと、逆にルールとかにがんじがらめになっちゃってよくないんだよね。発想が凝り固まるっていうかさ。
――はー、のめり込まずにほどよい距離感を保ったのが、いわゆる「SFボクシングマンガ」という新ジャンルの開拓につながったんでしょうか？
車田　そうそう……って、SFかよ？（笑）。結局マジなボクシング道を追求したマンガは『あしたのジョー』とか『がんばれ元気』があるわけだから、同じことをやったってしょうがないじゃない？　それに『少年ジャンプ』ってこともあったし、途中からは娯楽に徹しようと思ってああいう方向性になったんだよね。まぁ、最初はシリアスな感じで描いてたんだけどさ。
――「左を制するものは世界を制す」とか、ボクシングの要素が強かったですよね。
車田　だってモハメド・アリの自伝や昔のアメリカのボクサーの本とかいろいろ読んだもの。でも、そういう路線だと結局人気で伸び悩んでね。だからそこで「マンガはマンガ、娯楽は娯楽」ってことで割り切れたのよ。じゃないと「ギャラクティカマグナム」みたいなのは出てこないよ（笑）。
――技の名前を叫んだ瞬間に相手が吹っ飛ぶという（笑）。
車田　だから、もしマジなボクシングマンガをリアルに描いてたら、『リンかけ』はいつのまにか消えてたかもしれないよね。
――方向転換したことで見事に大ヒットにつながった、と。しかし、『リンかけ』の必殺ブローの独特なネーミングはどういった発想から生まれたんですか？
車田　いやもう、しぼり出すのが多いよ。グーっと考えて考えてさ。ボクシングの技からはホント外れてたもんな。あれをボクシングだと思って読んでた人なんていないでしょ？（笑）。
――そうかもしれません（笑）。先生がマンガを描くうえで、格闘技という素材は作品に落とし込みやすかったですか？
車田　まぁ、あくまでも俺は数あるなかの一つの題材だと思ってるけどね。だから、相撲でもプロレスでもいいんだけど、たまたま一番スマートさがあったのがボクシングだったのかな。でも、昔はプロレスのマンガを描こうと思ったこともあったんだよ。女子プロレス版の『あしたのジョー』みたいなヤツをさ。
――じょ、女子プロ版『あしたのジョー』ですか!?
車田　プロレスも女子のほうがファッショナブルだし、お色気の要素も取り入れれば人気出そうじゃない？　たとえば、自分の女子レスラーの姉さんがリング上でヒールに殺される。で、マジメなメガネをかけた文科系の妹が、それを機に女子プロの世界に入ってそいつを倒す、と。ど

知ってもらえるわけだから。あのね、これも先輩の漫画家の言葉なんだけど、「マンガがアニメになるのは、娘を嫁に出すよう

たんですか？　なんでも柔道をやられてたそうですけど。
車田　いや、バリバリでもないよ。柔道は

ないから、つらいときはつらいんだけどさ（笑）。正直これからは歳も歳だし締め切りに追われてやるような仕事はしたくない

『聖闘士星矢』を連載してたときは「汝に休息なし」って言われたね

ールに殺される。で、マジメなメガネをかけた文科系の妹が、それを機に女子プロの世界に入ってそいつを倒す、と。どう、おもしろそうだと思わない？『kamipro』で連載する？（同席した『少年チャンピオン』の担当者を見て）あ、「ヨソでやらないでくれ」って顔してるな（笑）。

——ダハハハ！　あと、車田先生といえば『リンかけ』もさることながら、『聖闘士星矢』はそれを凌ぐ大ブームになりましたけど、当時は相当お忙しかったんじゃないですか？

車田　『星矢』のときはホンット忙しかった！　でも、そういうときにかぎってマンガ家の宿命なんだけど、読み切りとかオールカラーとか入るんだよね。だって『少年ジャンプ』で『星矢』が巻頭カラーで20ページあって、それと同じ号に読み切り30〜40ページとかあったからね。

——うわ〜、そういうときはどうやってモチベーションを保つんですか？

車田　これは先輩のマンガ家の言葉なんだけど、「一番売れてるときは汝に休息なし」って言われたね。でも、そういう時期があるからこそ、いまだにやってられるんだと思うよ。『リンかけ』『小次郎』『星矢』、みんな20代〜30代前半だったから、もうとにかくがむしゃらよ。やっぱり「あそこまでやれたんだ」みたいなのがあるから、いまも冷めることなくこの仕事に熱気を持ってられるんだろうね。まぁ、そうは言ってももう若くはないから、つらいときはつらいんだけどさ（笑）。正直これからは歳も歳だし締め切りに追われてやるような仕事はしたくないんだよね。寡作でも自分の納得のできるものを丁寧に作っていく。そんなふうにしていきたいと思ってるんだ。とはいえ商業誌で活動してゆく以上は、かなり難しいけどね。

——『星矢』はアニメや舞台になったり、マンガ以外にいろいろな分野で広がっていきましたけど、車田先生はどう感じてました？

車田　それはうれしい部分もあるし、マイナスなところもあるよね。まずうれしいというのは宣伝になるじゃない？　それまでマンガを読んでなかった人も、アニメや映画や玩具なんかを見ることで原作も知ってもらえるわけだから。あのね、これも先輩の漫画家の言葉なんだけど、「マンガがアニメになるのは、娘を嫁に出すようなもんだ」って言ったんだよね。

——自分の作品を嫁に出す、と。

車田　そうそう。だから「ちゃんと大事にされてるか？」「へんな扱いされてないだろうか？」みたいなね。あんまり細かいことは言いたくないんだけど、よっぽどのときは言いたくなるっていうかさ（笑）。

——複雑な親心というか（笑）。あと、車田先生の作品は男気あふれる熱血マンガというイメージが強いですが、美形キャラも多いので女性ファンからの支持も高いのが特徴だと思うんですね。

車田　う〜ん、俺はそんなに男気とかを前面に出してるつもりはないんだけど、やっぱりにじみ出るものがあるのかな。まぁ、俺が好きなのは本宮ひろ志先生の作品で、「ああいうマンガを描きたいな」と思ってたから、その影響はあるだろうね。そもそも俺は本宮先生のマンガを読むまでは漫画家になろうなんて思ってなかったし、第一なれるとも思ってなかったのよ。やっぱり漫画家っていうのは手塚治虫先生みたいに医師免許を持ってるとか、もの凄く本もいっぱい読んでるインテリがなるような感じがしてたから。

——車田先生はバリバリの体育会系だったんですか？　なんでも柔道をやられてたそうですけど。

車田　いや、バリバリでもないよ。柔道は好きだったけどその道一筋ってわけではないし。もう、それまでの人生は中途半端よ（笑）。それが本宮先生の『男一匹ガキ大将』と出会って変わったんだよね。だって、それまであんなマンガはなかったんだから。あれは主人公が正義のヒーローじゃないもんな、ケンカでのし上がってさ。

——それまでの少年マンガの既成概念を覆したというか。

車田　だからある意味、格闘技系のマンガと通じるところはあるよね、「力こそすべてだ」みたいなさ。

——ちなみに車田先生ご自身は若い頃はヤンチャだったんですか？

車田　まぁ、マジメな生徒ではなかったけどヤンキーとかああいう感じじゃなかったよ。人様に迷惑はかけなかったし、ケンカするにしろ自分と同じようなツッパったヤツとさ。いまどきツッパリとか言わないか（笑）。

——あまり聞かないですね（笑）。

車田　で、俺らのあとの世代になると暴走族とか出てくるんだよね。俺もバイクには乗ってたけど、つるんでは走らなかったし。そういえば、いつもバイクで登校して校門のところに停めて、そのまま雀荘に直行してたな（笑）。

——授業に出席せず（笑）。

車田　雀荘に行くとツレがいるわけ。それで15時頃になると「ああ、部活だ」って学校に戻って柔道。なぜか部活だけはちゃんと行ってたんだよな、そういうところはマジメだった。

——ちなみにお勉強のほうは？

車田　それでも一応倍率の高い公立だっ

©車田正美／集英社

©車田正美／集英社

見よ！　高嶺竜児の必殺ブロー「ウイニング・ザ・レインボー」を食らって天高く舞い上がり、掲揚された日本国旗の彼方に消えていく剣崎順の姿を!!　このファンタジーあふれる攻防こそ車田マンガの真骨頂なのだ。

車田正美

たから、それなりにやるときはやったけど。あるとき、たまたま授業に出たら先生に「ああ、よかった、車田。もし来なかったら留年だったぞ」って言われたね。で、どうにかこうにか卒業したんだけど、高3の夏ぐらいに『ジャンプ』のマンガ賞に応募したんだ。そこで編集部の人に「マンガのことを勉強するんだったらアシスタントでもやったらいいよ」って誘われて、当時『侍ジャイアンツ』を連載していた井上コオさんのところでアシスタントを1～2年やってね。そのあいだに描いた作品でデビューするんだけどね。

——『スケ番あらし』ですね。

車田　そうそう。あれもね、デビュー作なのに週刊の人気投票でいきなり1位を獲ったんだよ。だからデビュー戦でKO勝ちしちゃうみたいな感じでさ。でも、そんなうまくいくわけないんだよね。次の何試合かはどんどん負けが続いて。で、連載が終わってから『リンかけ』まで1年ぐらいはブランクがあったのかな。その1年間でもの凄く本を読んだんだよね。それまではろくに読んだことなんかないのに（笑）。

——どんなものをお読みになったんですか？

車田　歴史ものだね。司馬遼太郎とか吉川英治とか海音寺潮五郎とかさ。どれもキャラの宝庫だから凄くよかったよ。そういうのはマンガに活かせるんだよね。信長、秀吉、家康、政宗……『リンかけ』のときも、チャンピオンカーニバル編なんかは歴史上の人物をモチーフとしてけっこう使ったよね。河井武士なんて河井継之助がモデルだから。

——『星矢』では神話がモチーフでしたね。

車田　あのね、いま思うと俺には二つの過渡期があったのよ。最初は『スケ番あらし』から『リンかけ』までの1年。で、『リンかけ』でブレイクして、次の『風魔の小次郎』も人気を得ることができた。それが終わって次に『男坂』を連載したんだけど、これはうまくいかずコケてしまった。そうすると「次は何を描けばいいんだ？」って自分のなかで葛藤するじゃない？　そこから『星矢』を連載するまでの1年ぐらい、またブランクがあったんだよね。それが次の過渡期。このときは歴史小説じゃなくて、エッセイだとか星座関連の本だとか、それまで自分が得意としてないようなものをすんで読んだんだよね。なんていうか、エレガントなものっていうかさ（笑）。

——なるほど。

車田　そもそも最初は星座なんか全然興味なかったんだから。とくに朝にやってる星座占いなんて大嫌いだったし。「嘘ばっかり言いやがって」みたいなさ（笑）。

——ダハハハ！

車田　まぁでも、そうやって黄道12星座とか88星座、ギリシャ神話とか読んでたら「これはマンガに使えるな」と思ってね。

——僕も『星矢』で星座や神話を学んだくちです（笑）。

車田　そういう人多いよな（笑）。だから、俺にとってはその二つの過渡期はデカいね。やっぱり人間、くすぶってるときに何をするかによって、次に大きくジャンプアップできるかどうかにつながると思うんだよね。これはマンガ家だけじゃなくて、格闘家にしろサラリーマンにしろみんな当てはまるでしょ。生きてれば誰しも壁にぶつかるときがあるわけで、そのときに何を考えてどう行動するのか……これいいこと言ってない？（笑）。

——先生がおっしゃると説得力があります（笑）。やっぱりマンガ家という職業は、とくに産みの苦しみが常につきまとう過酷な仕事だと思うんですよね。

車田　創作の疲労度は肉体的にも精神的にもプロの格闘家と変わんないかな（笑）。だって一本でも人気がないものを描いちゃうと、「あいつはダメだ」って見なされる世界なんだから。俺は35年以上、ずっとそういう道を歩いてきてるわけ。『ジャンプ』なんてとくにそうだよな。そういうところが、サラリーマンとちょっと違う部分というか、毎回毎回が勝負だからね。でも、ちゃんとキチッとした仕事をしてると、いろんなところから仕事をもらえるんだよね。最近だったらハリウッド映画の『タイタンの戦い』のポスターをやったりさ。

——いろんな駅で大きなポスターが貼りめぐらされて話題になりましたね。

車田　あれも監督でフランス人のルイ・ルテリエ氏が『星矢』の大ファンってことで、配給会社のワーナーから依頼が来てね。

——先生の作品は日本にかぎらず世界中でも人気を博してるわけですけど、そういう実感というのは？

車田　正直あんまりピンと来ないんだよね。マンガ家って観客の反応を直に感じるような仕事じゃないからさ。ただ、『少年チャンピオン』が出た次の週に、『YouTube』なんかで翻訳された海賊版みたいなのが流れてるのを見ると、「そこまでするファンがあちこちにいるんだな」とは思うよね。

——そういう熱狂的ファンからもらったプレゼントで変わったものとかありましたか？

車田　そういや昔、『男坂』をやめるときに「なんでやめるんだ」って血で書いた血判状をもらったことあるよ。こっちにしてみれば「やめるも何も、やめさせられたんだ」って話なんだけどさ（笑）。

——熱いファンですね～（笑）。そういえば先生も『人生を語らず』（秋田書店刊）で「車田語録」と題して熱いメッセージを書かれてますよね。

車田　そう？（笑）。まぁ、ああいうセリフはね、昔の人がよく言ってたんだよ。俺なんかはほら、月島の下町育ちだから、生活のなかで周りに職人の人とか任侠ふうの人なんかが多かったんだよね。そういう人たちって、普段からポロっと男気のあるセリフを吐いてたんだよ。たとえば「父ちゃん、今日は帰り遅いの、早いの？」なんて母ちゃんが言ったりすると、「そんなのわかんねえ。男は一歩外に出たら7

©車田正美／秋田書店

現在、『週刊少年チャンピオン』では『聖闘士星矢』の連載から20年以上を経て、その続編である『聖闘士星矢NEXT DIMENSION冥王神話』が好評連載中。世代や国境を越えて、さまざまな読者から人気を集めている。

中心だったんだよね。まだ当時の新刊は高価なイメージがしたから貸本屋で5円とかで借りるんだけど、そこで俺は劇画に

れ方がすっ飛んだりカッコよくないと、全然サマにならないからね。

——リアリティが重要だ、と。

どん変わっていくんだろうね。うん、ここ10年で大きく変わっていくと思うよ。iPadなんかができたことによって、こう

マンガがデジタルになったって俺たちがやることは変わらないのよ

ゃん、今日は帰り遅いの、早いの？」なんて母ちゃんが言ったりすると、「そんなのわかんねえ。男は一歩外に出たら7人の敵がいるからな」とかさ（笑）。

——ダハハハ！　映画のワンシーンみたいですね（笑）。

車田　下町情緒が残ってたっていうか、そういうセリフをみんな普通に吐いてたんだよ。いまのサラリーマンはそんなこと言わないよな（笑）。で、こういう仕事をしてると「そういうのも使えるな」って思うわけよ。いまの時代だから逆に新しかったりするしね。なんか、編集者でも車田プロに来てから会社に帰ると、しゃべり方や言うことが芝居じみておかしくなってることがあるらしいよ。で、「あいつ、車田先生のところに行って感化されやがった」とかさ（笑）。

——凄い影響力ですね（笑）。

車田　ハハハハ。だからそういう影響力をマンガのなかで持ちたいよね。たとえば、昔はヤクザ映画を観るとみんな影響されて、映画館から一歩外に出ると肩で風を切って歩くようなさ（笑）。そういう力が映画にはあるわけじゃない？　マンガでもそういう力を持ったものを描けたら最高だよね。

——車田先生は格闘シーンの多いマンガを描くうえで、ポリシーにしてるものはありますか？

車田　そうね……俺なんかが子どもの時代は、いまと違って娯楽が多かったわけじゃないから、貸本屋がけっこうその中心だったんだよね。まだ当時の新刊は高価なイメージがしたから貸本屋で5円とかで借りるんだけど、そこで俺は劇画に出会ったわけ。それまでは手塚治虫先生とか読んでたんだけど、劇画はなんか大人っぽい感じがして、よくその構図なんかを模写してたんだよね。で、劇画の何がカッコいいって、そのやられ方がカッコいいんだよ。だからいま格闘シーンを描くときなんかでも、その模写してたのが役に立ってるんじゃないかな。格闘マンガもやられ方がすっ飛んだりカッコよくないと、全然サマにならないからね。

くるまだ・まさみ■1953年12月6日、東京都出身。1973年、『週刊少年ジャンプ』にてデビュー。『リングにかけろ』『風魔の小次郎』『聖闘士星矢』など次々とヒット作を送り出す。現在、『週刊少年チャンピオン』にて『聖闘士星矢』の続編である『聖闘士星矢NEXT DIMENSION冥王神話』をオールカラーでシリーズ連載中。

——リアリティが重要だ、と。

車田　そうそう。構図にした場合、カッコよく倒れるシーンを描くのってなかなか難しいのよ。殴るほうはだいたいポーズが決まってるんだけどね。ほら、任侠映画なんかでも斬られ役がカッコよくやられると、斬ったほうもカッコよく見えるからさ。まぁ、そうは言っても俺はあんまりマンガは読まないからよくわかんないけど（笑）。

——最近の格闘技マンガはお読みになったりしないんですか？

車田　読まないねえ。昔だと本宮先生とか梶原一騎先生とか読んでたけどね。でも、それも20代前半までじゃないかな。漫画家を職業にしてからは同じ読むにしろ、「肥やしになるものや使えるもの」って考えるから。そうなると小説やエッセイとかそういうほうを読むようになったね。だって、マンガからマンガを取ってもしょうがないじゃん。

——と、言いますと？

車田　一時期、若い漫画家がほかのマンガを読んで材料を取るような風潮があったけど、結局はマンガからマンガを取っても嘘になっちゃうのよ。だって嘘から嘘を取るんだから。でもたとえば歴史ものだったら本物じゃない？　マンガってフェイクだから、それをいかにカッコよくそれができるかが重要なんだよね。まぁ、じつは本物っていうのもなかなか少ないんだけどね。書物にしても何十冊読んでも、使えるのはわずかなもんでさ。

——なるほど。さて、先生は今後、マンガという文化はどのように変化していくと思いますか？

車田　まぁ、これからマンガの形態もどんどん変わっていくんだろうね。うん、ここ10年で大きく変わっていくと思うよ。iPadなんかができたことによって、こういう紙の文化もこれから変化せざるをえないというか、そのうち出版社もいいかげんなところは淘汰されていくだろうしさ。だって、漫画家が自分で作品を配信できるような時代なんだから。

——『ブラックジャックによろしく』の佐藤秀峰先生は「これからはネットで作品を発表していく」という発言をしてますね。

車田　そうそう。そのくらいマンガを取り巻く環境も変わってきてるわけだから、逆にこっちがこれからどうなっていくのか知りたいよ（笑）。

——大御所ですら知りたい、と（笑）。

車田　まぁでも、俺らがやってることなんて原始的なことなんだよ、紙とペンで描くだけなんだから。マンガがデジタルになったとかパソコンを導入したって言ったって、基本的なことは変わらないのよ。だから、出版社や書店や周りの世界は変わっていっても、俺たち漫画家がやることは鉛筆持ってアイデア練って、紙に表現するだけでさ。

——根本的なものは一緒なわけですね。

車田　もちろんいまはパソコンで作業するっていう漫画家も増えてるよ。でも、結局アイデアを考えるのは人間がやることなんだから。俺なんて時代遅れの漫画屋だからさ、これからも機械じゃ考えつかないようなおもしろいことを描いていくだけよ……。こんな感じでどう？　けっこう使えそうなこと言ったんじゃないかな（笑）。

——今日は非常に勉強になりました、貴重なお話をありがとうございました！

【5月24日／神奈川県・横浜ランドマークスタジオにて収録】

――嶋田先生は作画担当の中井義則先生と小学4年生のときに出会ったということですが、それ以前からお二人ともプロレスがお好きだったそうですね。

嶋田　そうですね。日本プロレスですよ。力道山はもういなかったですけど、BI砲の全盛期でしたね。

――それで本気で漫画家を志し始めた5年生のときに、初めて描いた漫画が『おんぼろボクシング部隊』という作品ですよね。これはどんな内容だったんですか？

嶋田　あれは完全に『あしたのジョー』のパクリでしたね（笑）。丹下段平みたいな元プロボクサーのアルコール依存症のおっさんが、素質ある不良少年にボクシングを仕込むという話なんですけど。そのおっさんが平平平平（ひらたいら・へいべい）っていう名前で。

――もう、その名前だけでおもしろそうですね（笑）。

嶋田　ええ（笑）。だから当時はプロレスや格闘技と並行して漫画文化というものも僕のなかに入ってきたという。『少年ジャンプ』や『少年マガジン』なんかはいつもそばにあったし、そのなかでもとくに梶原一騎さんの作品が大好きでした。

――梶原先生のほかには、どんな作家さんの作品を読んでいらしたんですか？

嶋田　本宮（ひろ志）先生、ちばてつや先生ですね。手塚治虫先生みたいな芸術的な作品というか、一般にも幅広く評価される作品よりも、梶原さんとか本宮さんみたいな大エンターテインメント、先々まで展開を考えないでダイナミックにストーリーをグイグイ進めていくっていうほうが好きでしたね。

――その手法はのちに『キン肉マン』が継承をした部分でもありますね。

最強プロレスマンガ『キン肉マン』作者が語る プロレス&格闘技ファン人生

マンガもプロレス・格闘技も一番大事なことは「闘う理由・動機づけ」です！

『キン肉マン』原作者 ゆでたまご 嶋田隆司

誰もが知っている最強のプロレスマンガといえば、なんといっても我らが『キン肉マン』！　その原作を担当し、子どもの頃からプロレスファンであり、現在もプロレス&格闘技に深い関わりを持つ嶋田先生に、『キン肉マン』のルーツから新日本プロレスのキン肉マン登場未遂、『Dynamite!!』のキン肉万太郎、『キン肉マニア』まで、たっぷりと語ってもらった。屁のつっぱりはいらんですよ！

聞き手／井上崇宏　構成／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄、乾晋也

新日本のキン肉マン登場未遂から
『Dynamite!!』のキン肉万太郎
『キン肉マニア』まで!!

その手法はのちに『キン肉マニア』が継承をした部分でもありますね。

嶋田隆司

嶋田　そうです。手塚先生も『鉄腕アトム』とかは見てたんですが、ほかの作品はテーマ性とかが壮大すぎて子どもにはちょっと敷居が高い感じがしましたね。

――最初に『あしたのジョー』のパロディーを描いたというのもそうなんですが、梶原作品が一番好きだった理由はなんだったんですか？

嶋田　やっぱり、実際に自分もやってみたくなるというか。たとえば『空手バカ一代』を読んだら、みんな空手をやってみたくなるし、『あしたのジョー』を読んだらボクシングをやりたくなるし。『四角いジャングル』なんか、虚実がないまぜになっているところが凄くおもしろかったですね。現実の世界とマンガの世界がリンクしているという。『タイガーマスク』はちょっと毛色が違っていたんですけど、〝虎の穴〟みたいなものが実際にあったわけじゃないですか？

――スネークピット（蛇の穴）ですね。

嶋田　だから、そのへんの梶原さんの取材力というか、格闘技への造詣の深さ。また〝虎の穴〟と名づけたのが抜群ですよね。

――それでは、中学に上がってから中井先生と一緒に柔道部に入部されたというのも……。

嶋田　完全に『柔道一直線』とか『柔道讃歌』の影響ですよ（笑）。

――アハハハハ。だから、まず先にマンガなんですね。柔道をやってる人が柔道マンガに親しむんじゃなくて、マンガ好きの少年がマンガの影響で柔道をやっちゃうっていうパターンですね。ちなみに先生は運動のほうはどうだったんですか？

嶋田　全然ですね。プロレスごっこばっかりでしたよ。

――なるほど。傾向として勉強もダメ、スポーツもダメって子がことさらプロレスごっこに走るんですよね（笑）。

嶋田　ああ、絶対にそう（笑）。プロレスごっこをやっているとね、な～んか満たされたんだよなぁ。

――アハハハハ！　確かに満たされますよね（笑）。

嶋田　だから、僕はマンガ少年ですから柔道も長くは続かないですよ。1年の夏休みにOBの先輩におもいっきり大外刈りで叩きつけられて、あっさり心が折れましたね（笑）。

――大外刈り一発で（笑）。

嶋田　それで「俺はやっぱりマンガや」と（笑）。しかし本当に梶原さんや本宮さんの作品には影響を受けましたね。だから、のちに『キン肉マン』ごっこで子どもがケガをしたという報道を目にした時は、思わず「してやったり」という。

――「俺はこれがやりたかったんだ」と（笑）。

嶋田　そう、まさにこれがやりたかった。もちろんケガはまずいですすけど、漫画家になったときに、「梶原さんみたいに思わず子どもがマネしたくなるような作品を描こう」と決めてましたからね。

――それで、当初はギャグマンガだった『キン肉マン』が、徐々にプロレスマンガ化していったのはなぜですか？

嶋田　まあ、連載開始した当初からなんとなく馬場や猪木が出てきたり、けっこうプロレスのギャグも多かったんですよね。そこにたまたま描いたキン肉マンとテリーマンが組んで、アブドーラと猛虎星人組が闘うという話のときにバーっと反応があってね。

――『夢のオールスター戦』の馬場&猪木vsブッチャー&シンになぞらえた闘いの

梶原先生の作品のように子どもがマネしたくなる作品を描きたかった

シーンですよね。それが読者アンケートとかで反応が良かった、と。

嶋田　そうなんですよ。それで「あ、これでいいんや」って。当時は『少年マガジン』にも『愛しのボッチャー』っていうプロレスマンガがあったんですけど。

――ええ、河口仁先生の。

プロレス大決戦の巻

今回の怪獣・猛虎星人は石川県の得田知明くんのアイデアを採用させてもらいました（ゆでたまご）

キン肉マン テリーマン 日本武道館においてきさまらふたりに果たしあいを申しこむ

試合方法は60分1本勝負のタッグマッチだ…

これによって怪獣と超人のどちらがえらいかきめたいと思う 名づけて怪獣と超人どちらがえらいか決定戦だ

アブドーラ 猛虎星人より…

230

これが『キン肉マン』がプロレスマンガになるきっかけとなった、『夢のオールスター戦』のパロディの回。現在発売中の文庫版『キン肉マン』第1巻に収録されているので、読むべし！

嶋田　あれも僕らと同じプロレスギャグマンガだったんです。それで僕らの初代担当編集だったアデランスの中野さんが、「あのマンガに勝つには、オールスター戦のパロディをこっちが一週でも早くやることだ」って言ったんですよ。僕はオールスター戦が終わった少しあとぐらいに出そうと考えてたんですけど、「絶対に先に出したほうがいい！」って言われて、その言葉に従ってオールスター戦より先に出したら本当に人気が出まして。実際に『愛しのボッチャー』では何週かあとにオールスター戦ネタをやっていたんですけど、読んでみるとね、やっぱりネタとしては古かったんですよ。

――なるほど。

嶋田　だから、「中野さんの言ったことは正しかったんだ」って思いましたね。そこから「超人オリンピック編」につながって、人気が爆発したんですよね。

――それで嶋田先生は現在もプロレス・格闘技界との関わりが密であるわけですが、先日の青木vsメレンデス戦もナッシュビルまで観に行かれたんですよね。

嶋田　行きましたね。もともと初期UFCでのホイス・グレイシーvsケン・シャムロックとか「これは！」と思う試合はどこまででも観に行ってましたから。アブダビとか。そうそう、ホイスvsシャムロックが行なわれたノースカロライナ州シャーロットでは、大会前日にエリオとホリオンがやった柔術セミナーにも参加しましたね。

――それはまたレアな体験を（笑）。

嶋田　エリオおじいちゃんとスパーリングもしましたから（笑）。もうそれだけで現地に行く価値があるじゃないですか。だからこないだのナッシュビルも、「これまで俺は歴史の証人になってきたやないか。これを見逃したら、まずいんちゃうんか」って思って、直前になって行くのを決めましたよね。

――数少ない現地観戦者として、あの一戦はどうでしたか？

嶋田　もうね、青木が勝つものと思ってましたけどね。でも、あれだけ緊張感のある空間はひさびさでした。試合前日にね、僕は偶然ダウンタウンの夜の街でメレンデスの姿を見ているんですよ。さすがにお

嶋田　メレンデス本人はいなかったんですけどね。そこで僕、日本語なんですけどニックに「おまえはマッハに勝てない

“キン肉マン登場未遂事件”は「OKも出してへんのにさすが猪木や」って思いました（笑）

おっと出た、キン肉マン！ 84年に権利問題をまったくクリアせずに進んだ新日版・キン肉マンは、マスクの上に目出し帽を被って登場。結局、ストロングマシンとしてデビューすることになった。

空間はひさびさでした。試合前日にね、僕は偶然ダウンタウンの夜の街でメレンデスの姿を見ているんですよ。さすがにお酒は飲んでなかったですけど、「こいつ余裕があるな。だけどこれは青木、勝ったな」と思ったんですよね。

――試合をご覧になっているときの心境はどうだったんですか？

嶋田　もうドッキドキですよ。

――終盤でわかってくるじゃないですか、「あ、このまま取れなかったら判定負けだな」って。

嶋田　はい。試合中に「もう日本に帰りたい……」って思いましたから。もう青木が負けた瞬間、メインのダンヘンの試合なんかどうでもよくなっちゃって（笑）。それぐらいショックでしたね。だからメインのあとに乱闘があったこととかもあとで知りましたから。

――えっ、そのときはどこにいらっしゃったんですか？

嶋田　すでに会場の外ですよ。ヤケ酒を飲みに繰り出してました（笑）。

――さまようように（笑）。

嶋田　どこをどう歩いたか全然覚えてないですもんね。それでさらに財布をスラれたんですよ。夜中にスーパーで買い物をしてたら、そこで誰かにドンとぶつかられて、「エクスキューズ・ミー」みたいな感じで去ってったんですけど、気がついたらポケットの財布がなくて。

――ナッシュビルの悲劇ですねぇ。

嶋田　もう踏んだり蹴ったりで。あ、そうそう、スーパーに行く前に浴びるように酒を飲んだんですけど、飲み屋でばったりジェイク・シールズとニック・ディアスに会ったんですよ。

――祝勝会をやってたんですね。

嶋田　メレンデス本人はいなかったんですけどね。そこで僕、日本語なんですけどニックに「おまえはマッハに勝てないぞ！」って絡みまして。

――何やってんですか、先生（笑）。

嶋田　そうしたら、ニックが僕の手を引っぱるから、「なんや⁉」と思って身構えたら、なぜかニックと一緒に記念撮影をしてしまって（笑）。

――完全にファンと間違えられたと（笑）。

嶋田　しかし、青木敗戦はすげえショックでしたねぇ。

――また話を変えますが、先生はかつて梶原先生がやっていたように、実際のプロレスや格闘技のリングとクロスオーバーするような企画をやってこられてますよね。

嶋田　え〜と、新日本の「キン肉マン登場未遂事件」は完全にこちらはあずかり知らぬ話ですけど（笑）。

――ええ（笑）。あれは先生サイドは完全にノータッチだったんですよね？

嶋田　そうですね。ある日、突然中野さんが「アントニオ猪木が君たちに会いたいって話が編集部に来たけど」って言ってきて。

――新日本のほうから問い合わせがあったんですね。

嶋田　はい。ちょうど初代タイガーマスクが引退した直後だったんで、なんとなく胸騒ぎがしたんですよ。で、「これはまずいんじゃないかな」って思って、面会をお断わりしたんですけど。

――まずいというのは？

嶋田　アニメの『キン肉マン』が全日本の中継もやっていた日本テレビでしたからね。だけど、そのままにしといたら『週プロ』とかで「キン肉マンが新日本でデビュー」みたいな報道が毎週出てくるじゃないですか。「なんやこれ？」と思って。

――許諾もしていないのに、どんどん話が進んでいた、と。

嶋田 でも、表向きは「そんなの勝手にあかんで」とか言ってましたけど、内心では「新日本はキン肉マンをどう転がしていくつもりやろう?」って楽しみにしてましたね（笑）。

――そうなんですか!?（笑）。

嶋田 ワクワクしてました。「ＯＫも出してへんのに、さすが猪木や」って（笑）。まあ、さすがに未遂に終わらせてくれましたけどね。

――それでのちに先生が初めて許諾をした企画が、２００８年の『Ｄｙｎａｍｉｔｅ!!』になるんですよね。キン肉万太郎がボブ・サップと闘うという。

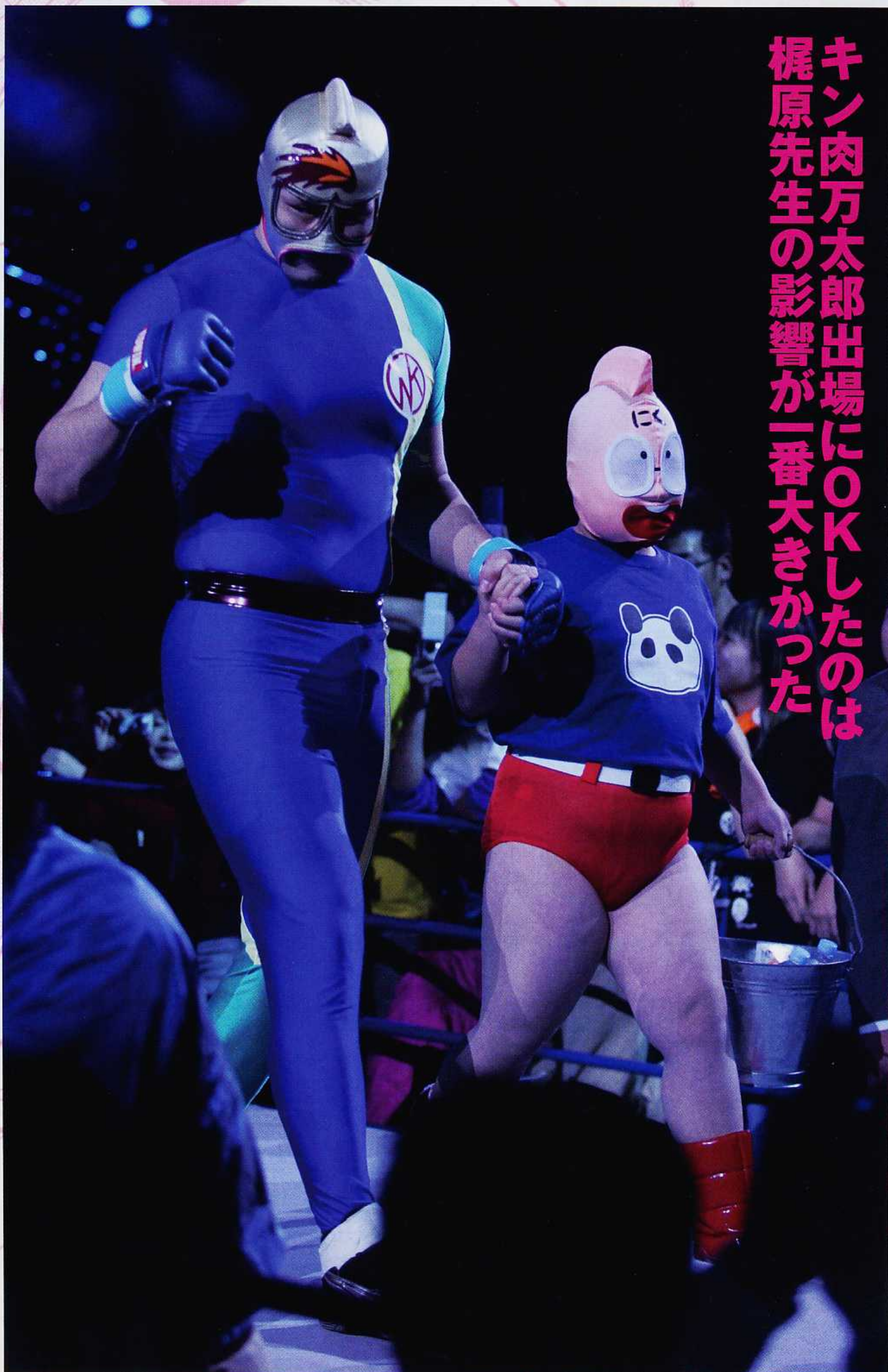
嶋田 そうですね。ただ、あれはいまでも覚えてるんですが、オファーがあったのが12月15日なんですよ。急に大会2週間前に主催者サイドから連絡があって、「ぜひ『キン肉マン』のキャラクターを大晦日に出してほしい」と。

――正直、唐突すぎましたよね。

嶋田 でも、瞬間的に「あ、出してみたいな」っていう気持ちがあったんですよね。格闘技人気がこう盛り下がってきてるときだったんで、何か力になりたいっていうのもあったし。大晦日ってお茶の間が一番テレビを観る日ですから、出す舞台としても申し分ないなあ、と。だから、最初は「負けたらどうすんの?」とか思いましたけど、最終的には「本当にガチンコでやってくださいね」というお願いをしましたね。でも、いろんな意味で時間がなさすぎでしたよ。

――だから逆に猛烈に口説かれたんじゃないですか?

嶋田 そうですね（笑）。でもやっぱり、自分のなかでは梶原先生の影響が一番大きかったと思います。マンガのキャラクターが総合のリングでガチンコをやるなんておとぎ話ですからね。去年、ＵＦＣを観に行ったついでにランディ・クートゥアーのジムを取材したんですけど、僕がキン肉マンのＴシャツを着てたら、そこにＵＦＣファイターのステファン・ボナーがいて、そのＴシャツを見て「おお、サップと試合をしたマスクマンだろ? 知ってるぞ」って。そしたらほかの選手も寄ってきて、みんな話しかけてくるんですよ。「負けて残念だったな」とか。イヤなこと思い出させやがって、と（笑）。

キン肉万太郎出場にＯＫしたのは梶原先生の影響が一番大きかった

08年『Dynamite!!』の目玉の一つとして急きょデビューが決まったキン肉万太郎。ミートくんを引き連れて登場したが、準備不足がたたり、ボブ・サップにKO負けを喫してしまった。

――アハハハ！ そしてその翌年5月には、ついに先生自らがプロデュースした『キン肉マニア２００９』というプロレスのイベントをやりましたよね。

嶋田 あれは構想から5年かかった企画でしたからね。どこかのリングにキン肉マンを上げるのではなく、『キン肉マン』ワールドの舞台をずっと作りたかったんです。あのイベントの直前は超人に扮してくれる中身の選手選びとか、マスク屋さんに試作品製作をお願いしたりとか、スポンサー集めにも奔走しましたね。各所に頭を下げて回りまして。

――完全に興行師的な動きをされたんですね（笑）。

嶋田 「俺は漫画家やのに、何をやってん

嶋田　そうですね（笑）。でもやっぱり、自

をしたマスクマンだろ？　知ってるぞ」っ

でしたからね。どこかのリングにキン肉

嶋田　「俺は漫画家やのに、何をやってん

嶋田隆司

のかな？」って思いましたけど。

――「梶原先生はこんなことまでやってないだろう」と（笑）。

嶋田　でも、結果的にはイベントも大成功で、そういったすべての苦労が吹っ飛びましたね。僕は本当にＰＲＩＤＥ、ＤＲＥＡＭチームの演出が凄く好きで、佐藤大輔さんも映像を作ってくれましたしね。あとは構成にマッスル坂井さんに参加してもらったりとか。

――以前から佐藤大輔さんに関しては、最大限の評価をされてますよね。

嶋田　そうですね。プロレス・格闘技が生んだ三大発明は、「入場テーマ曲」と「古舘伊知郎」「佐藤大輔」だと思っていますから。この三つが劇的にジャンルを変えたな、と。いま、煽りＶとか入場テーマ曲なしではイベントが成立しないですからね。

――ちなみにマッスル坂井さんとお仕事をされてみていかがでした？

嶋田　素晴らしかったですね。ただ、途中でかなり不安にはさせられましたけどね。打ち合わせとかで彼の言うことは要領を得ないというか、何を言ってるのかがさっぱりわからない。あとは突然音信不通になったりとか。ただ、やる気だけは常にマンマンなんですよ。

――「言葉の意味はわからんが、とにかく凄い自信だ」と（笑）。

嶋田　だけど結果的に最高の仕事をしていただきましたね。『キン肉マニア』はまたやりたいです。こないだの『ＢＡＰＥＳＴＡ!! ＰＲＯ−ＷＲＥＳＴＬＩＮＧ』も最高に楽しかったし。

――あの大会には先生が考案されたＡＰＥＧＯＮ（エイプゴン）というキャラクターが登場しましたよね。あの経緯というのは？

嶋田　あれはプロデューサーのＮＩＧＯさんから「お会いしたい」というお話があって、武藤（敬司）さんも交えて会食をしたんですね。そこで、「今度のＡＰＥ興行に先生がデザインしたＡＰＥＭＡＮを出したい」というお話をいただきまして。それで、ＮＩＧＯさんも非常に『キン肉マン』が好きで、とくにペンタゴンとキン肉マンソルジャーが好きだって言ってたんで、「それじゃ、その二つのキャラクターを合わせたらおもしろいんじゃないか」って。それでＡＰＥＧＯＮができたんですよ。でね、そこでおもしろい話があるんですけど、いきなり僕の目の前で武藤さんがマッチメイクの話をし始めるんですよ。

――それは興味深いですね。

嶋田　要は「ＡＰＥＧＯＮの相手は誰がいいんだろう？」みたいな感じで、ずっと目をつむって難しい顔をして唸ってるんですよ。それでしばし熟考したあとに武藤さんの口から出た言葉が、「……ユニクロマンがいいんじゃねえか？」って。

――ユニクロマン!!（笑）。

嶋田　ナイスセンスですよね（笑）。

――めちゃくちゃ笑えますけど、凄く正解を言っている気がしますね（笑）。

嶋田　いや、本当にそう。僕もマンガの連載をやっていていつも心がけていることって、「闘う理由、動機づけ」なんですよ。絶対に闘う理由が明確じゃないと、読者は読む気になりませんから。

――そこはプロレスもまったく一緒ですね。

嶋田　そうなんです。なんとなく闘っているのは絶対にダメなんです。『キン肉マン』が初期に連載打ち切りになるかもしれないくらい不人気だったのが「アメリカ遠征編」なんですけど、あの失敗は闘う理由がアメリカの超人レスリング界のテリトリーの奪い合いで、つまりは大人の利害の争いだったでしょ？

――なるほど！　確かに闘う理由としては子どもに伝わりづらかったかもしれません。

嶋田　でも、それを「７人の悪魔超人編」ではガラリと変えて、一回目でミートくんをバラバラにしたんですよ。「これでこのシリーズは決まりや！　これで闘う理由がハッキリした」と。みんなの好きなミートくんがバラバラにされて、命懸けでそれをみんなで集める。それからはもう闘う理由づけばかり意識しましたよね。「黄金のマスク編」とか「キン肉星王位争奪編」もそうだし。そこは武藤さんも僕らと同じことを考えていたんですよ。

――いやあ、それは本当にマット界にも通じる核心の部分ですね。

嶋田　そうですよね。だから僕は馬場派ですけど（笑）、かつての猪木も「闘う理由づけ」が天才的にうまかったですよね。だから、僕はいまの格闘技界も充分に楽しんでますけど、この「闘う理由づけ」という部分をビシっと示してくれたら、さらにいいんじゃないかなって思ってますね。

【10年6月7日／都内・某喫茶店にて収録】

昨年、5月29日にJCBホールで開催された『キン肉マニア2009』。ケンドーコバヤシ、バッファロー吾郎が司会を務め、映像を佐藤大輔、構成にマッスル坂井が加わり、ミノワマンvsキン肉マンなど夢の対決が実現し大成功！　第2回大会が観たい!!

しまだ・たかし■1960年10月28日、大阪府出身。ゆでたまごのストーリー部門、原作シナリオ執筆を担当。作画担当の中井義則先生とは小学生の頃に知り合い、中学時代からコンビを組んでいる。79年に『キン肉マン』の連載がスタートし、人気が大爆発。現在も集英社『週刊プレイボーイ』誌上で『キン肉マンⅡ世』を好評連載中。

ブ

それが

嘩商売

煉獄

格闘大河ロマン

喧

『喧嘩商売』作者 木多康昭×映画評論家 町山智浩

俺は俺のやり方で喧嘩を極める

聞き手／橋本宗洋

〝ルールなしの状況で最強の格闘技は何か〟という巨大なテーマを掲げ、緻密な格闘表現と圧巻のバイオレンス描写、そしてド下ネタも満載して読者を魅了し続ける『喧嘩商売』（『週刊ヤングマガジン』で大好評連載中）の作者・木多康昭先生に、本誌にもたびたび登場している評論家・町山智浩氏がインタビューするという。

その情報をキャッチした『kami-pro』編集部は、抜け目なく相乗り取材を敢行。ポッドキャスト番組『町山智浩の、漫画師に訊け！』（花沢健吾や福満しげゆき、今号登場している古泉智浩先生などが出演→http://www.radiodays.jp/artist/show/385）収録現場にお邪魔し、番組の終盤に出演&終了後にも町山氏とともにインタビューすることに成功したのだった。

木多康昭先生といえば、デビュー作となった『幕張』を初めに常に話題作を手がける漫画家である。今回の特集テーマである格闘マンガの話題はもちろんのこと、とてもじゃないが活字にはできないマンガ界の裏話も含め、語りに語った3時間！　その一部を再構成し、ここにお届けする次第——。

バトルマンガ史上に残る必殺技〈煉獄〉の秘密がいま、あきらかに！

——先生の『喧嘩商売』は〝ルールなしでの最強〟がテーマになっていますよね。そこで僕が知りたいのは、先生がどれくらい

ンガの資料というより、一視聴者として観てますね。逆に観ているぶんには、ボクシングの4回戦みたいな技術のない、気持ちだけの殴り合い、みたいなのがおもしろか

ントっぽいのを使ってみる感じですね。ホントかウソか、突き詰めて調べるには時間が足りないんで。

——そのほうが想像力が膨らむというか。

したけど。

木多　あれは……青木選手が頭にきてたんですよね？

——そうですね。試合前の舌戦とかカー

とした〝魔
を使って
だ。主人
な死闘は
も衝撃的!

善でも悪でも試合がおもしろくてキャラが立っていればいいと思う

――先生の『喧嘩商売』は〝ルールなしでの最強〟がテーマになっていますよね。そこで僕が知りたいのは、先生がどれくらい格闘技が好きなのか、逆にどんなところに不満を持っているかなんですよ。

木多　もともとプロレスとか格闘技は好きなんですけど、それはゴールデンタイムでやってた頃ですね。大ブームのとき。裏が『金八先生』だったんですけど、僕はずっとプロレス観てたんで。でも、山田邦子とかが出てきて観なくなっちゃいましたけど。「なんだよ！」っていう。

――あぁ、悪名高い『ギブUPまで待てない‼』で（笑）。

町山　K-1とか、最近の格闘技ブームは観てないんですか？

木多　PRIDEは連載前に観に連れてってもらいましたね。

町山　実際に選手に会ったりもしました？

木多　ボクサーに会わせてもらうって話もあったんですけど、マンガを描く時間がギッチリ詰まってるんで、ちょっと……という感じでしたね。

――『喧嘩商売』はオリジナル度合いが強いというか、実在の選手や技をモデルにすることがほかの格闘マンガより少ないですよね。

木多　格闘技というより、喧嘩ですからね。〝なんでもあり〟で考えるので。あと、実在の選手をモデルにするのはほかのマンガでたくさんやってるので、それはもう〝済んでいること〟というか。格闘技は、マンガの資料というより、一視聴者として観てますね。逆に観ているぶんには、ボクシングの4回戦みたいな技術のない、気持ちだけの殴り合いみたいなのがおもしろかったりするんですよ。駆け引きよりも、前に出る闘いが好きですね。

――描くスタンスと観るスタンスは逆なんですね。

木多　実際に格闘技やってるわけじゃないし、だから技術的なところは甘いんでしょうけど。技なんかはネットで調べて、ホントっぽいのを使ってみる感じですね。ホントかウソか、突き詰めて調べるには時間が足りないんで。

――そのほうが想像力が膨らむというか。

木多　まあ、普段、誰とも格闘技の会話しないんで（笑）。

――実際の選手で、気になる存在はいますか？

木多　やっぱりヒョードルは好きですね。ヘビー級が好きなんで。打撃にしても寝技にしても、パワーがあるほうが好きなんですよ。チェ・ホンマンとかは好きじゃないけど（笑）。

――試合ではいかがですか？　たとえば、去年の大晦日に青木真也が相手の腕を折ったうえに中指を立てたことが騒がれましたけど。

木多　あれは……青木選手が頭にきてたんですよね？

――そうですね。試合前の舌戦とかカード変更で。

木多　それで感情が抑えられなかったんでしょうね。俺は、レフェリーが止めなかったんだから仕方ないと思いますよ。タップする時間もあったわけだから。ネットのニュースで処分されたって記事を読んで「それは厳しいんじゃないか」って思いましたけど。でも、青木選手ってまじめなんじゃないですか？

――格闘技に関してはもの凄くまじめですね。

木多　格闘技も紳士じゃないとダメなんですかね。俺はキャラクターが立ってると思うんですけど。善でも悪でも、試合がおもしろくてキャラクターが立ってればいいと思うんですけどね。青木選手への処分も、処分自体がヤラセならいいんですけど、そうじゃないわけですよね。

町山　やっぱり、礼に始まり礼に終わるっていう武道的文化があるからですかね。

――いまの格闘技って、基本的に悪役人気がないんですよね。すぐネットで叩かれて、その影響がスポンサーまでいっちゃったりするので。

木多　いいじゃないですかねぇ。中指を立てるのは難しいところですけど。

町山　強くて悪いヤツって最高なのに。そんなこと言ったら十兵衛（『喧嘩商売』の主人公）なんか格闘技界にいられないですよ（笑）。

木多　いや、十兵衛は世論を誘導する方法も考えますから。

――妹が2ちゃんを使いこなしますし（笑）。あ、ダーティヒーローってことで言

笑うたびに俺には幸福が訪れる

!?

〝魔王〟秋山成勲をモチーフにした〝魔人〟金田保は、あらゆる手段を使ってのしあがる柔道金メダリストだ。主人公・十兵衛との〝卑怯vs卑怯〟な死闘は町山さんも絶賛。金田の結末も衝撃的!

獄〉の秘密がいま、あきらかに！

青木真也の腕折り中指挑発もマンガのなかなら強烈な個性としてオッケーなのかもしれないが、現実では生々しいということなのか、それとも相互監視の時代性が許さないのか。

昔だったら秋山さんみたいな存在をうまく盛り上げていったんでしょう

木多康昭×町山智浩

えば、先生は秋山成勲はお好きですか？

木多　まあ、好きですね（笑）。秋山さんも格闘技界では嫌われてるんですか？

町山　『kamipro』は好きだよね、秋山（笑）。

──そうなんですけど（笑）、まあ人気があるとは言い難いですね。

木多　そうなんですか。強いじゃないですか、だって。それこそ叩かれて、使われ方としてもったいなかったなと思いますね。

──『喧嘩商売』の金田のなかには、かなり秋山的なエッセンスが入ってますよね。

町山　金田は打撃で闘うじゃないですか、柔道出身なのに。あのへんも秋山と似てますよね。

木多　もともと金田のポジションは、柔道は関係なかったんですよ。連載前に考えてたのはプロレスラーのキャラクターで。でも、ネット上で真偽はともかく秋山さんがいろいろ言われたんで、それを取り入れたほうがとっつきやすいだろうな、と。

──たとえばグローブのメリケンサック疑惑ですね。

木多　そういうのを取り入れると、悪の表現としてオーバーじゃないんだって思わせることができるので。

町山　本当におもしろかったですよねえ、十兵衛と金田の闘いは。

──読んでいるうちに金田に感情移入してくる部分もあって、そういう意味では先生にとっての〝理想の秋山〟が金田なのかな、と。

木多　いや～、でも秋山さんは強いですからねぇ。ヌルヌルとかもしなくてよかったと思うんですけど。もっと日本で闘ってほしかったですねぇ。

──秋山はダーティヒーローとしての自分を受け入れられなかったという感じもありますね。あくまでも純粋なスターでありたいという。

町山　そのわりにはファッションセンスがねぇ（笑）。昔だったら、ああいう存在をうまく盛り上げていったんでしょうけどね。

木多　秋山さんのなかでは、ヌルヌルはダーティじゃなかったんですかね？

──そのほうが幻想はあるんですけど、本人は「故意じゃなかった」と言ってるんですよ。

木多　それは無理だよなぁ。柔道着に洗剤を塗り込むことは、自分で言ってるわけだし。僕は、秋山さんのなかでは「そこまではアリ」だと思ってたんじゃないかなって。

──その秋山を、『kamipro』では〝魔王〟って呼んでたんですけど、『喧嘩商売』の金田は〝魔人〟じゃないですか。そこも「おおっ！」てなりましたね（笑）。

木多　あれは眠くて、いいネーミングが思いつかなかったんです（笑）。秋山さんはキャラクターとしておもしろいですよね。

町山　『喧嘩商売』に〈金剛〉っていう、相手の心臓を殴って気絶させる技が出てきますけど、あれって千石パンチじゃないですか？

木多　千石パンチってなんですか？

町山　先生の『泣くようぐいす』で主人公

な、と。

木多 いや〜、でも秋山さんは強いですか

木多 千石パンチってなんですか？

町山 先生の『泣くようぐいす』で主人公の千石うぐいすは相手の心臓を殴るハートブレイクパンチを使うんですよ。全然覚えてないですか？（笑）。

木多 いや、覚えてないです（笑）。〈金剛〉は、拉致被害者の蓮池薫さんが、拉致されたときに気絶させるために胸をおもいっきり蹴られたという話を聞いて、「これを使おう」と思ったんですよ。

町山 え、じゃあ〈金剛〉は北朝鮮工作員の技だったんですか⁉

——着想が凄すぎますよ！

町山 〈煉獄〉の着想も知りたいですね。あの技がどこから出てきたのか。

木多 武道の型ってあるじゃないですか。あれは基本的に一対複数を想定してるんですけど、もっと役に立ったほうがいいんじゃないかと思って。

——一対一の実戦で役に立つ型という。

町山 格闘ゲームでよく〝ハメ技〟ってあるじゃないですか。そこからではないんですか？

木多 そこからじゃないんですよ。純粋に「型を覚えるのってもったいないんじゃないかな」っていうところからで。

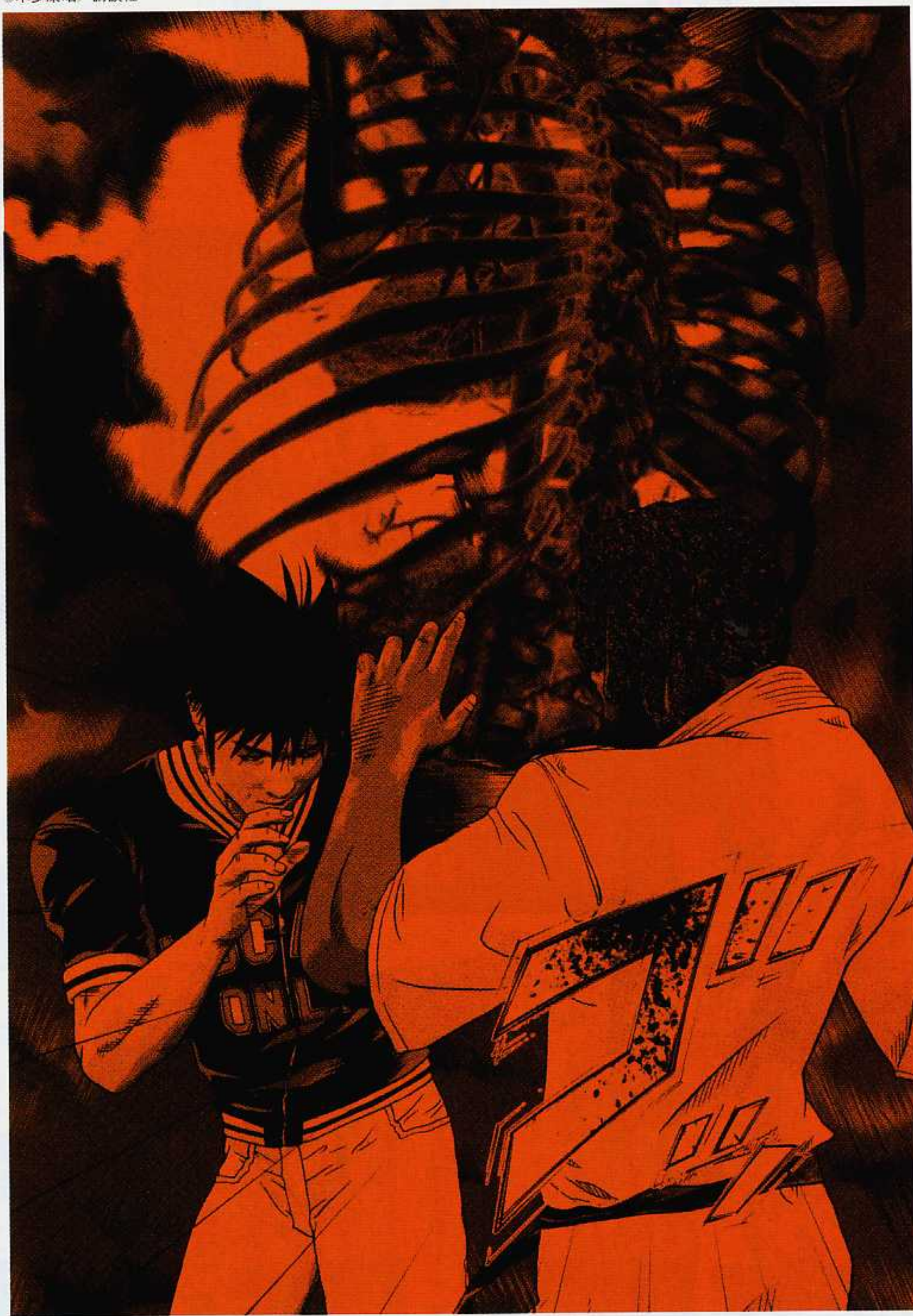
——僕は、『あしたのジョー』に出てきた〈舞舞（チョムチョム）〉の理論的発展形かなと思ったんですよ。横にも前にも倒れることができないってところとか。

木多 あ、それは僕もあとで思いましたね。僕も『あしたのジョー』は好きなんで。あと〈煉獄〉は、理屈は僕が考えたんですけど、個々の技は編集が考えてくれたんですよ。空手の黒帯が個々の技と、そのつなぎを考えてくれてビデオも送ってくれたんですよ。

町山 〈煉獄〉の演武ビデオが実在するんですか！

木多 「こんなことまでやってくれるんだ⁉」って感動しましたね。マンガ家になって初めて、編集者が仕事をしてるの見ましたよ（笑）。

え、じゃあ〈金剛〉は北朝鮮工作員の技だったんですか⁉

『喧嘩商売』には多くの必殺技、格闘術が登場するが、勝利への戦略等を含めて「最低限の論理、リアル」に基づいて描写されているという。この必殺技は〈金剛〉！

——〈煉獄〉も含めて、『喧嘩商売』は読んでいて空手幻想を凄く感じるんですよね。いまの格闘技界では〝MMAという一つの競技〟と言われますけど、やっぱり異種格闘技戦にもロマンがあるなってあらためて感じました。

木多 そこなんですよね。僕はやっぱり猪木の異種格闘技戦が好きだったから。

——『喧嘩商売』では、異種格闘技と総合格闘技がうまくミックスされてますよね。

木多 意図的にではないんですけど、自分が好きだった時代がそこなんですよ。『空手バカ一代』の頃は極真が最強だって言われたり、そういう幻想を背負ったまま闘うのが好きなんですよね。

——『喧嘩商売』は、そういう部分も含めてリアリティとファンタジーのバランスがいままでにない成立の仕方をしてる気がするんですよ。

木多 マンガとしてはおもしろいけど、理論的に成り立たなくなっちゃうのは気になりますね。「ここから先に行ったらギャラクティカマグナムだよな」っていう（笑）。でも、リアルすぎてもマンガとしてどうなのかなって。広く読んでもらうには、格闘技の解説書みたいにしてもいけないんで。

——ギャラクティカマグナム的な、ほとんど超能力みたいな世界にもいかず、小林まこと先生の『柔道部物語』のような競技スポーツものにもならずっていう新しいバランスだと思います。

木多 あぁ、でも『柔道部物語』は最高峰ですねぇ、僕のなかでは。マンガとしてギャラクティカマグナムもいいんですけど、最低限のリアル、理論をつけたくなりますよね、ボクは。

——理論ということで言うと、『喧嘩商売』で出てくる闘いはロジック合戦でもありますよね。理屈とか心理戦で上回ると優位に立てる。そこが凄く好きなんですよ。

木多 それは、僕が口だけだから（笑）。あと主人公が根性理論が好きじゃないんですよね。一生懸命さを見せたくないって設定なので。

——梶原マンガも、どんなに荒唐無稽な技であれ理屈はついてましたよね。

木多 子どもの頃は大リーグボール2号にも納得してたからなぁ（笑）。

——〈煉獄〉が〈舞舞〉の理論的進化バージョンだと思ったのも、そこからなんですよ。〈舞舞〉が出てくるジョー対金竜飛戦も、最後はロジックで勝ちますし。

木多 あぁ〜、確かにそうですね。

——減量が大きなテーマなんですけど、ジョーが「おまえ（金）は食えなかったが、力石は食わなかった」という理屈で精神的に優位に立ったところで勝つっていう。

木多康昭×町山智浩

『喧嘩商売』はこれからがおもしろいというか、まだ本編じゃないんです

木多 『あしたのジョー』は、何かをやられて、それを返してっていう展開が多いですよね。そこが好きなんですよ。金竜飛戦は、なかでも一番好きな試合かもしれない。

——もう一つお聞きしたかったのが、童貞の話なんですよ。主人公の十兵衛と師匠の入江文学が童貞っていう設定になってますよね。そこに何か強さの秘密があったりするのかな、と。

木多 それはないです（笑）。

——あ、なかったですか（笑）。ただ、十兵衛に負ける高野と金田は、セックスしてる描写があるんですよね。非童貞だと負ける（笑）。

木多 実際のところ、試合前にヌイちゃうと負けるんですかね？

——よく言われますね。よけいなエネルギーを使っちゃうってことなのか。

木多 でも、板垣（恵介）先生はその理論に絶対に反対でしょうね（笑）。

——じつは先生に童貞のことをお聞きしたのは理由がありまして。以前、青木真也がツイッターで自分は童貞だって言いだしたことがあったんですよ（笑）。

町山 どんな格闘家なんだ（笑）。

——あと『ａｎａｎ』のセックス特集の話ばっかりしたりとか（笑）。

木多 青木さんはそういうキャラづけを始めたんですかね？

町山 小山ゆう先生の『ももたろう』では、強さとセックスの関係が濃密に描かれてましたよね。あと梶原一騎もそうですよ。

先生、『人間兇器』って読まれましたか？

木多 あ、読んでないですねぇ。あらすじだけは知ってますけど。

町山 あれは凄いですよ。大山倍達的な師匠に憧れてる男が主人公なんですけど、もの凄いコンプレックスの塊なんですよ。あきらかに梶原一騎本人なんだろうなっていう。女の人に純情に恋するんだけど、それが認められないとほかの女を拉致して逆さ吊りにしたり三角木馬に乗せたりするっていう（笑）。

木多 あぁ～。

町山 要は女神に対する純愛と、それ以外はビッチだから何やってもいいんだっていう両極端の気持ちが混然としてるんですよね。

——あ、それって童貞っぽいですね。

町山 そう。精神的な童貞なんですよ。「ビッチと何百回セックスしても、俺は童貞なんだ」っていう。ほかの梶原マンガでもそうですよね。ジョーも飛雄馬も童貞じゃないですか。

——だけど左門とかマンモス西は結婚しますからね。

木多 共通点あるんだなぁ。そこは計算なんですかね。彼女ができないほうが読者に好かれるとか。

——『喧嘩商売』の場合はいかがですか？

木多 主人公の性格次第ですよね。今回は、基本的には性的には純真だっていう設定なんで。

——そこも『喧嘩商売』は梶原マンガにつながる感じがしますねぇ。

木多 そこは考えたことなかったです（笑）。

——今度『ｋａｍｉｐｒｏ』でもセックス特集やりたいですよ（笑）。

町山 話は戻りますけど、まだ『喧嘩商売』にはアマレスの選手が出てきてないですね。

木多 本当は出てくる予定なんですよ。でも、そこまで続くかどうか……。

町山 やめないでくださいよ（笑）。

木多 僕にとっては、「アマレス＝カレリン」なんですよ。だからアマレスラーはロシア人の設定なんですけど、話がそこまでいってないんですよね。それは話が世界に広がってからで。だからサンボも出してないですし。アメリカ海兵隊とかも（構想の中には）いますから。いまは日本人だけの話なので、アマレスとかサンボを出さないで考えるのが大変なんですよね。

町山 強いヤツらがみんな日本人なのは、まだストーリーがそこまでしか進んでないからなんですね。

木多 設定上は、世界中に強いヤツがいることになってますから。いま、そこまでやると話が広がりすぎちゃうんで。

町山 じゃあ、ゆくゆくは『グラップラー刃牙』の世界までいってもらって（笑）。

——カマキリと闘うという（笑）。

木多 さすがにカマキリと闘ったときは、板垣先生どうしちゃったんだろうと思いましたけど（笑）。

町山 『喧嘩商売』は今後も本当に楽しみですよ。十兵衛対工藤がメチャクチャおもしろかったのに、金田戦がそれを超えたじゃないですか。そして、これからもっと盛り上がっていくわけですよね。

木多 構想はあるんですけど……。でも疲れてるからなぁ。

——いやいや、お願いします！（笑）。

木多 もうね、地獄なんですよ。もっと入れるべきセリフとかエピソードもあったんですけど、はしょったんですよね……。で、本当はこれからがおもしろいんです。いまは主人公のダーティさも強さってことになってますけど、じつはそういうことをしなくても強いっていうポジションがあるので、そこからが本当はおもしろいというか、本編なんですよ。

町山 まだ本編じゃなかったんですか⁉（笑）。それは続けてもらわないと！

木多 …………。

町山 返事がない（笑）。

木多 だって、本当に大変なんですよぉ！ドクターストップ寸前なんですから。

町山 先生、そういう場合は〈無極〉を使ってください（笑）。

【10年6月4日／都内・某所にて収録】

きた・やすあき■1969年6月19日、千葉県出身。『幕張』で漫画家デビュー。いずれの作品も著名人や他の漫画家と思われるキャラが登場し、しばしば物議を醸す。『喧嘩商売』も格闘マンガだが、淫行条例について心当たりのある著名人らしき人物たちが議論する『朝までゴムTV』なるエピソードがまるまる1話分挿入されることがしばしばある。

というか、まだ本編じゃないんです

けの話なので、アマレスとかサンボを出さないで考えるのが大変なんですよね。

ってください（笑）。

【10年6月4日／都内・某所にて収録】

MMAスターウォーズ

みのもけんじ

4月17日（現地時間）
ストライクフォース
in ナッシュビル

グワッ！

ドゴーン

これが俺の必殺パンチ
エルニーニョ・
スクリューだあ!!!!

こ……これが噂の
エルニーニョ……

あ……
青木く〜〜〜ん!!

ついにメレンデスの必殺技が!! 青木はどうなる!? そして日本マット界は!!?

5月29日『DREAM.14』
in さいたまスーパーアリーナ

うぐく……
網をこんなことに
使うとは……

ああ……
マッハくん
まで……

うわ〜〜ん！
日本マット界は
もう通用しない
のかよう!!

うわわ〜ん!!

※この作品はフィクションです。

このままでは日本は
終わってしまう――
なんとかして
シーザー軍団の
強さの秘密を暴かねば……

その数日後――

川尻くん！
たいへんだよ!!

なんだよ石田くん
大声なんか出して

笹原さんが
シーザー軍団の
アジトで……アジトで
殺られたんだ！

な……
なんだってェッ!!!

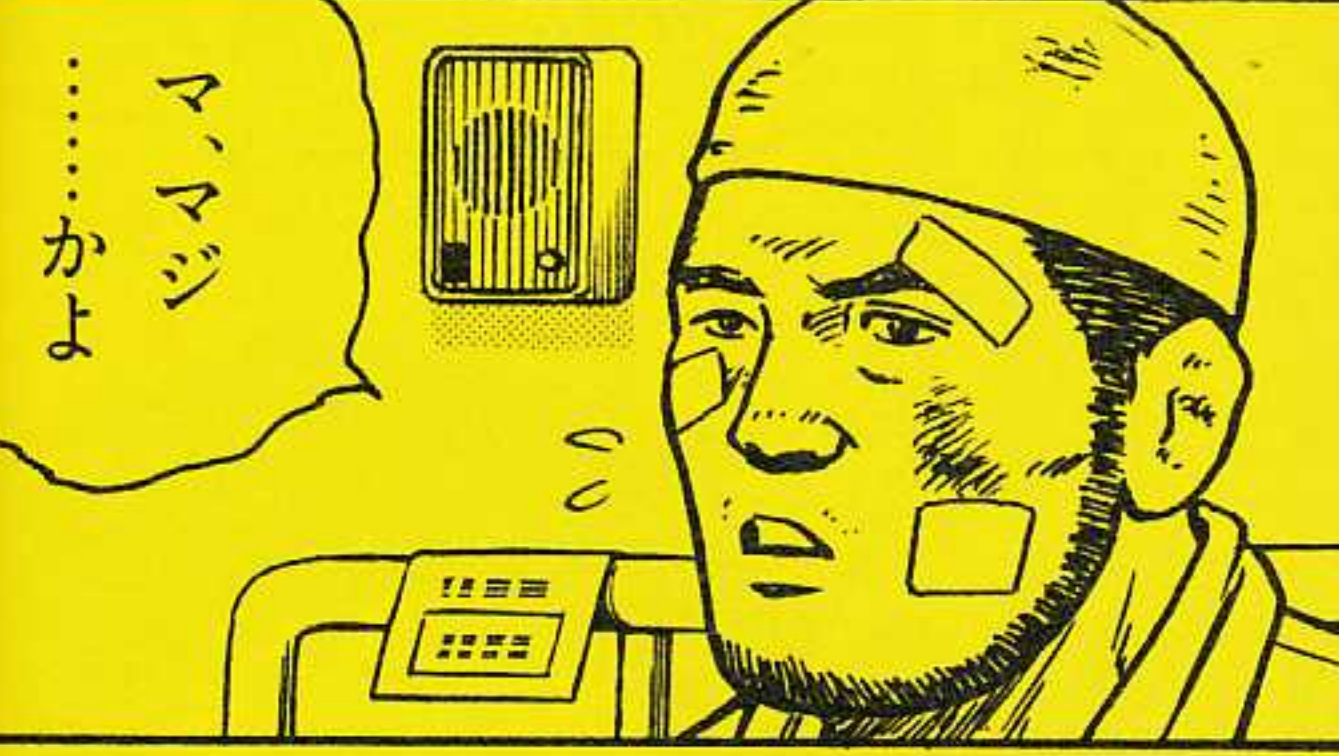
マ、マジ
……かよ

笹原さんが……
信じられん

ゴゴゴゴゴ――――

俺たちの日本侵略は
まだこれからだぜ

グルルル…

青木ッ！
聞いたか!!
笹原さんが……

うぐっくっ
俺のせいで……
俺のせいで

おおっ！
日本最強タッグの
誕生だ!!

なんだよ石田くん
大声なんか出して

青木ッ！
聞いたか!!
笹原さんが……

ガチャ

フンッ
聞いてねえ
わけねえ
だろっ！

青木、川尻
日本をたのむぞ!!
ここにわずかだが
シーザー軍団の
ヒミツを書いて
おいた。
※メレンデス…
ディアス…
シーザー…

うわ〜〜ん!!

さ……
笹原さぁ〜〜〜〜〜ん!!!

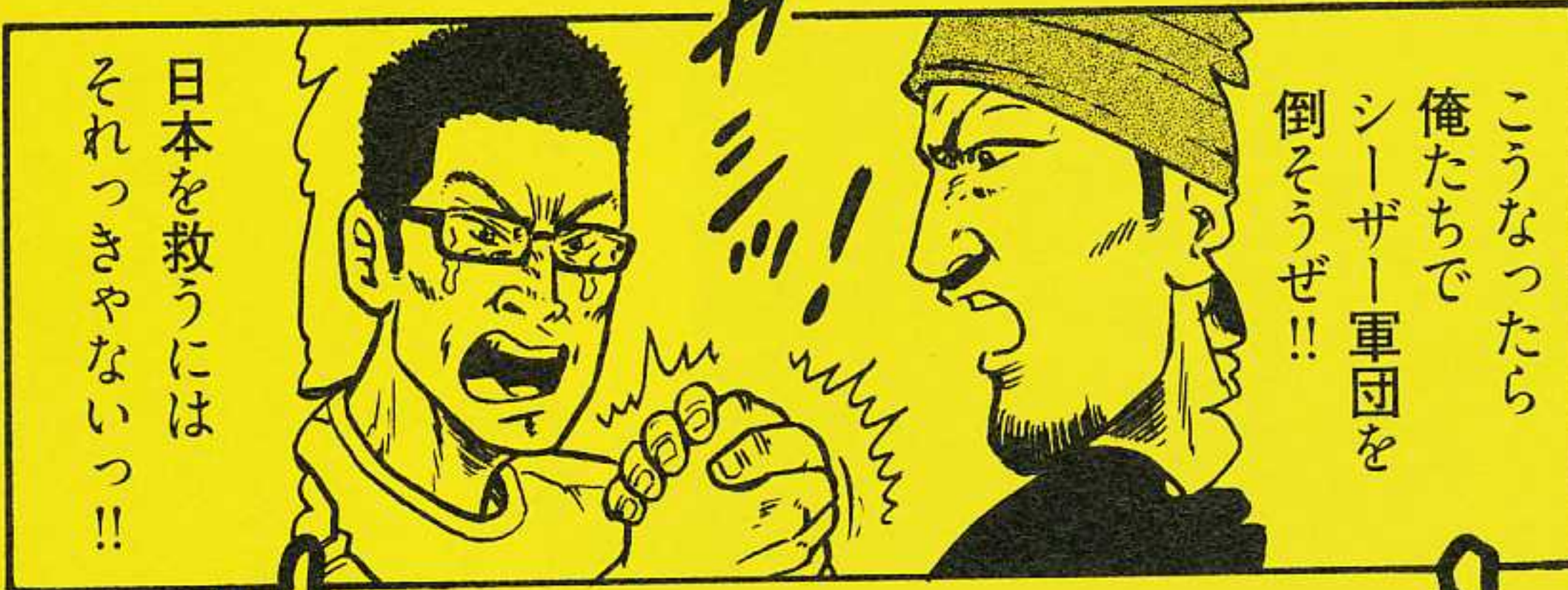
マジ
……かよ

うぐっくっ
俺のせいで……
俺のせいで

うっうっうっ…

泣いてる場合
じゃないぜ！
青木！これを
見ろっ!!

こうなったら
俺たちで
シーザー軍団を
倒そうぜ!!

ガシッ！

日本を救うには
それっきゃないっ!!

おおっ！
日本最強タッグの
誕生だ!!

青木さん！
川尻さん！
お願いします!!

任せたぞ!!

笹原くん——
キミの死はムダでは
なかったようだ
ありがとうっ!!

ドドーン

待ってろよ!!
シーザー軍団!!!!

CRUSHER

“最強タッグ”青木&川尻の逆襲の行方やいかに!? 次週第38話、乞うご期待!!

浅草キッドの玉ちゃんと語る!!

俺たちのあしたのジョー変態座談会

俺たちがプロレス・格闘技に求めるすべてが『ジョー』にはある!!

まいどおなじみ浅草キッドの玉ちゃんと語る変態座談会。「マンガ特集」である今回のテーマはなんと『あしたのジョー』！
これまで、どんなテーマで語っても必ず『ジョー』の話をしていた変態メンバーが、
「男の教科書」ともいえるこの作品をいったいどう語るのか？ 変態的プロレス&格闘技ファンのあしたはどっちだ。

構成／堀江ガンツ

ガンツ 今日はラッシャー木村に献杯してから座談会を始めますか。
玉袋 そうだな。〝俺たちの〟ラッシ

じでしたから。
椎名 図体のデカさと関西弁は、ジョーというよりマンモス西だけどね

連載時はまだ小さかったから、大学生ぐらいのときに単行本を買い揃えましたよ。その代わり豪華本だよ！

いつに「おまえ、将来絶対に大変だから、ボクサーになれ」って言ってたんだよ。小学4年生なのに「俺に身

ガンツ ジョーになれなかった男ですか（笑）。
椎名 俺さ、ずっとジョーのことが

俺たちが格闘技を話をすると結局『ジョー』にたどり着くんだよ！

ガンツ　今日はラッシャー木村に献杯してから座談会を始めますか。

玉袋　そうだな。〝俺たちの〟ラッシャー木村だからな。

椎名　ラッシャーも〝俺たちの〟なんだ（笑）。

玉袋　そりゃそうだろ。ラッシャー木村は俺たちに「挨拶の大切さ」を教えてくれた人だからよ。

ガンツ　というわけで、ラッシャー木村に献杯！

一同　献杯！

玉袋　それにしても、ついに変態がマンガにまで到達しちゃったよ。

椎名　前回のテーマ「女子プロレス」で格闘技からかなり離れたと思ったけど、ついにマンガに到達（笑）。

玉袋　「あしたのジョー変態座談会」だもん。

ガンツ　でも、変態座談会はこれまでいろんなテーマで語ってきましたけど、必ず『あしたのジョー』の話が出てきてたんですよね。

玉袋　そうなんだよ。結局、ジョーの話になっちゃうんだよ。

椎名　「あいつ、ジョーだよね」みたいな感じで（笑）。

ガンツ　格闘家の評価を「ジョーなのか、ジョーじゃないのか」で決めているという（笑）。

玉袋　五味（隆典）がガーっと上がってきたときは「俺たちの〝ジョー〟が現われた！」と思ってたんだから。

ガンツ　僕は前田日明も、リアルタイムで観れた〝ジョー〟みたいな感じでしたから。

椎名　図体のデカさと関西弁は、ジョーというよりマンモス西だけどね（笑）。

玉袋　でも確かに、前田日明にはジョー的なものを感じたよな。親父と二人暮らしで、その親父はなかなか家に帰ってこない浮浪児みたいな少年時代でよ。しかもケンカで明け暮れて。田中正悟先生が（丹下）段平なのかっていう問題はあるけどな。

椎名　じゃあ、長与千種が白木葉子なのかな（笑）。

ガンツ　葉子と千種って遠すぎますよ！　サチぐらいじゃないですか？

椎名　ゲタ持って暴れて（笑）。

ガンツ　そんなことはともかく、まずは皆さんのジョーとの出会いから聞いていきましょうか。

玉袋　俺はアニメの『ジョー』が再放送だったんだよ。世代的にリアルタイムじゃないんだよな。原作の単行本は買ってたけどね。

椎名　俺も『週刊少年マガジン』の連載時はまだ小さかったから、大学生ぐらいのときに単行本を買い揃えましたよ。その代わり豪華本だよ！

ガンツ　愛蔵版で（笑）。僕の世代はアニメの再放送も終わってて、そのアニメを一本にまとめた映画版からなんですよ。

椎名　あの映画は凄くヒットしたよね。主題歌もいいし。

ガンツ　それが小学1年か2年ですかね。

玉袋　俺は小学4年生ぐらいのときに再放送やってて、ボクシングってもんに興味を持ってよ。当時、同級生で凄く貧乏なヤツがいたんだよ。親父は飲んだくれで、ひどいボロのアパートに住んでてな。で、俺はそいつに「おまえ、将来絶対に大変だから、ボクサーになれ」って言ってたんだよ。小学4年生なのに「俺に身体預けねえか」って。

椎名　アハハハ！　なぜか段平になっちゃって（笑）。

玉袋　なんで段平になってんだかわからねえんだけどよ。ただ、結局そいつは将来、パチプロになったんだけどね。まさに「ぱちんこ・あしたのジョー」というね（笑）。

一同　ダハハハハ！

椎名　えぐり込むように、パチンコ玉を打つべし（笑）。

玉袋　だからガンツが観た映画版『ジョー』もいいんだけど、アニメを全部観てる人間からすると、ちょっともの足りないんだよな。

ガンツ　かなりエピソードがはしょられてますからね。なんせ、映画版は紀ちゃんがほとんど出てきませんから。

椎名　ええ～、それはダメ！　今回語るべきは紀ちゃんだもん！

ガンツ　紀ちゃんが一番重要ですか！（笑）。

玉袋　ちなみに俺の女房は「紀子」だから。字も同じ紀ちゃんだからね。となると、結婚した俺はマンモス西か（笑）。

ガンツ　ジョーになれなかった男ですか（笑）。

椎名　俺さ、ずっとジョーのことが好きでつくしてきたのに、マンモス西と結婚した紀ちゃんがかわいそうでさ～。

玉袋　ジョーに告白するんだよな。「ボクシング辞めて」みたいなね。あそこいいんだよ～。

椎名　いいですよね。「ついていけないわ！」ってなるところ。

玉袋　切ないんだよ～。だから映画だとはしょってる部分で、本放送で好きなシーンとかたくさんあるんだよ。

椎名　反社会、反大人っていう青臭い部分をちゃんと描いてるんですよ。ジョーって正確な年齢はわからないけど、20歳そこそこで亡くなってるでしょ？

ガンツ　ラストシーンで死んでいたとしたら、そのくらいでしょうね。

玉袋　きっと童貞のまま死んでいったんだろうな。

椎名　俺たちは五味をジョーと重ね合わせてよく語ってたけど、その童貞っぽさということで考えると、青木（真也）にも重なるんだよね。

ガンツ　勝手なイメージで童貞キャラ同士ですか（笑）。

椎名　まさか青木が本当に童貞だとは思わないけどさ、DEEPの会場でMIKUが来たときの絡み方とか凄い童貞っぽいよ。

ガンツ　好きな子をいじめちゃう子どもみたいな感じで（笑）。

椎名　そう。やさしくすりゃいいじゃんって。

玉袋　童貞っぽさっていうのは重要

椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみ。自転車の二人乗りをしては「キッズ・リターンごっこ」をするボクシング好き。

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の43歳。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。今回は泪橋の欄干を模した『あしたのジョー』DVD BOXや映画パンフを持参して参戦！

堀江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の36歳。変態座談会主催者。『ジョー』の影響で小1でボクサーに憧れ「グローブ買って」とおねだり。祖母が野球のグローブを買ってきた経験あり。

だな。

椎名　それとジョーって妖精みたいな感じもあるじゃないですか。どっから来たのか素性もわからないし。

玉袋　ふらっとドヤ街に流れ着いちゃったんだよな。

ガンツ　ハンチング被ってくるんですよね。あのハンチングほしいんですよ(笑)。

玉袋　俺はジョーが持ってるバッグに憧れた。どこに売ってるんだよ、あれ。あと俺は子どもの頃、グンゼのパンツ穿いてたけど、ジョーの影響でトランクス穿きたいと思ったからね。

椎名　ジョーと西がプロデビューするとき、紀ちゃんが手作りのトランクスをプレゼントしてくれるんですよ。ジョーには「J」ってイニシャルが入ってて。そういえば力石もシャツに「R」って入ってるけど、なんで昔のマンガって、自分のイニシャル入りの服着てるんだろうって(笑)。

ガンツ　ゴリライモの「ゴ」とあまり変わらない(笑)。

玉袋　でも、力石のシャツのはだけ方がよかったよな。

ガンツ　ジョーに出てくる人たちのファッションはみんなカッコいいですよね。

椎名　あと、梶原一騎独特の七五調のセリフがいいよね。「め○らのみじめなオッサンよ」とか、放送禁止用語がバリバリ出てくるという。

玉袋　そうだよ。メッ○チだもん。いまアニメが地上波でオンエアされたら、ピーピーピーって擬音だらけで観てらんねえだろ。

椎名　DVDとかで観ればいいんですけどね。

玉袋　そのDVDで俺があったまきたのが、いまネットで『ジョー』のDVDがずいぶん安く売ってるんだよ。何話か入って1枚500円だぜ。

ガンツ　『あしたのジョー』40周年で、500円DVDが出てるんですよね。

玉袋　BOXセットを買った俺の身にもなれって。このBOXを見てみろよ(と言って、立派なケースに入ったDVD BOXを取り出す)。

椎名　このBOX凄いなあ。ジョーの遺骨が入ってるんですか?(笑)。

玉袋　「泪橋の欄干を模した特製BOX」だってよ。これ3万円だぜ。

椎名　3万円!(笑)。俺は、衛星放送の「カトゥーンネットワーク」で『ジョー』をやってたんで観たんですけど、原作にはないアニメだけのエピソードで、ジョーが紀ちゃんの学校にブルマーを届けるっていうのがあったんですよ。

ガンツ　ありましたね! 紀ちゃんが恥ずかしがって、「バカバカバカ～!」って言うやつ(笑)。

玉ちゃんが持ってきた映画『あしたのジョー』(80年公開)のパンフ。『ジョー』のイラストはカッコいい!

不器用で殴り合うことでしかわかり合えないのがジョー

椎名　そのとき、紀ちゃんの通う学校名が出るんだけど、「泪橋高等学校」なんだよ(笑)。

一同　ダハハハハ!

玉袋　それ、人生負け組の学校だろ。

椎名　進学コースはありませんって感じで(笑)。

玉袋　「泪橋高校」って、もうちょっとこだわれよ。でもよ、『ジョー』はアニメも原作マンガもどっちもいいよな。

椎名　あれだけ汚らしいものがいっぱい出てくる少年マンガっていうのも凄いですよね。アニメもずっと息苦しくて、唯一、ジョーがプロテストに合格して、ドヤ街の連中が缶詰持ってお祝いに来るところだけほっとするんですよ。

ガンツ　ジョーってうれしいシーンがほとんどないんですよね。

椎名　でも、そのときは泣いたんだよ。二階に上がって一人で泣いて。それまでは人の温かみに触れて。それまでは人を信用してなかったからね。少年鑑別所に入る前の(警察病院で行なわれた)精神鑑定では、「一つの言葉から連想する言葉を言え」っていう問いに対して「赤」「血だ」、「親」「無責任」、「親切」「ありがた迷惑」って言うんだよ(笑)。

ガンツ　あの連想ゲーム凄いんですよね(笑)。

玉袋　どこまでひねくれてるんだっていうな。

椎名　「親」「無責任」だもん(笑)。

ガンツ　大喜利として優れてますよね。

椎名　本当にそうなんだよ。体制を嫌うときの言葉がいちいちよくて。少年院を出るときも「俺は式という式が嫌いだ」って言って、送る会みたいなのに出ないんですよ。

玉袋　ジョーだって本当は出てえんだよ。やせ我慢してんだよな。このやせ我慢がいいんだよ。

ガンツ　だからコミュニケーションは殴り合うことでしか成り立たないっていうのがジョーなんですよね。

玉袋　不器用だよな。それで最後は友情が芽生えるんだから。

椎名　でも、なぜか友情が芽生える相手の選手生命をことごとく奪っちゃうんですけど。

玉袋　ま、そうなんだけどな。

椎名　ウルフ金串の選手生命も奪っちゃうし。

玉袋　それにしてもよ、「ウルフ」で「金串」だぜ。最高のリングネームだろ。グレート金山とタメ張るよ。

椎名　ウルフ金串がゴロマキ権藤にやられたのがショックでね。

玉袋　ウルフが用心棒に身を落としたあとだよな。権藤がまたつええんだ。俺は権藤を見るたびに、コート

着た真樹(日佐夫)先生を思い出すよ。

一同　ダハハハハハ!

ガンツ　ゴロマキ権藤のモデルは、

が公開されるけど、香川照之さんは「拳○チ」って呼ばれるのかね?

ガンツ　『釣りキチ三平』がOKなら、

からな。だから、本当は殿に段平やってほしかったな。香川さんも素晴らしいボクシングマニアだと思うけ

に勃ってるのによ、それでもいかねえんだよ。もう先走り出てるぜ。

ガンツ　それでも死の戦場に向かっ

マンモス西
ジョーが少年鑑別所で出会った唯一人の親友。出会った当初は鑑別所のボスとして、子分に"新入り"ジョーのリンチを指示するが、逆にボコボコにされジョーの軍門に下る。少年院を出てからは、ジョーとともに丹下ジムのボクサーとなるが、拳のケガが原因で引退し、紀ちゃんと結婚。悲惨な末路をたどる人が多い『あしたのジョー』のキャラクターのなかで、数少ない幸せ者。しかし、減量中にこっそり屋台のうどんを食べていたのをジョーに見つかり、コテンパンにされ、鼻からうどんを垂らしたことから、いまだに「うどんやろう」と呼ばれる悲しき男でもある。

白木葉子
白木財閥の一人娘。当初は力石徹の後援者として登場するが、力石の死後、自らが白木ジム会長に就任。敏腕プロモーターとしての手腕を発揮し、カーロス・リベラ、ハリマオなど、次々と強敵をジョーにぶつけていく。しかし、そのなかで次第にジョーに惹かれていき、自分が送り込んだ強敵によってジョーがパンチドランカーになったことを知ると、ジョーにホセ・メンドーサとの世界戦の放棄を進言。さらには、ホセ戦の直前に「矢吹くん好きなの、あなたが!」と衝撃の告白で、ジョーが死のリングに向かうことをとどまらせようとするが、最後には「真っ白い灰になりたい」というジョーに対し、試合中に「最後まで闘うのよ!」と励まし、真っ白い灰になったジョーからグローブを渡される。少年マンガキャラクター史上随一のツンデレ美女。

サチ
『あしたのジョー』第1話でジョーがふらりと訪れ、のちに丹下拳闘クラブが作られるドヤ街に住む子どもたち、通称「チビ連」の紅一点。おでんを一口盗み食いしたばっかりに、下町のヤクザ鬼姫会に金泥棒の濡れ衣を着せられる。その鬼姫会との乱闘がジョーの初登場だ。それ以降、幼いながらジョーに恋心を抱く。ゲタがトレードマーク。

紀ちゃん(林紀子)
ドヤ街に咲いた一輪の花。少年院を出て丹下ジムに入ったジョーとマンモス西が、アルバイトで勤めた林食料品店の一人娘。ジョーに思いを寄せ、たびたび丹下ジムを訪れては、料理を作ったり、掃除洗濯をしたりと、かいがいしくジムのお手伝いをする。カーロスが廃人になったあと、ジョーにボクシングを辞めるよう強く進言し「(拳闘なんて)みじめだわ、悲惨だわ!」と叫ぶが、ジョーは聞き入れず。これによって「ついていけない」と悟り、家業である林食料品店の正社員となったマンモス西と結婚した。

ゴリライモ
『あしたのジョー』とはまったく関係ない、『ど根性ガエル』に出てくる番長の名前。胸に大きく「ゴ」と染め抜かれた斬新すぎるTシャツを常に着用していることで有名。

泪橋
ジョーたちが住むドヤ街にかかる橋。人生に敗れた人たちが、この泪橋を渡りドヤ街にやってくるという。そのため、ボクサーとなったジョーと段平の目標は、どん底から栄光に這い上がる＝「泪橋を逆に渡る」となった。なお、この橋の下に丹下拳闘クラブがある。ちなみにジムは段平の手作り。

椎名　DVDとかで観ればいいんで

〜!」って言うやつ（笑）。

任」、「親切」「ありがた迷惑」って言

だ。俺は権藤を見るたびに、コート

俺たちのあしたのジョー変態座談会

ホセ・メンドーサ役が稲川素子事務所から来たら困っちゃうんだよな

着た真樹（日佐夫）先生を思い出すよ。

一同　ダハハハハハ！

ガンツ　ゴロマキ権藤のモデルは、梶原一騎の実の弟だったかもしれない（笑）。

椎名　ウルフ金串でいうと、クロスカウンターってジョーのおかげで相打ちのことだと思われてますよね。

ガンツ　ボクもずっとそう思ってました（笑）。

玉袋　でもよ、両手ブラリ戦法が、最終的にはジョーがパンチドランカーになるっていう物語がつながるんだよ。ああいうところが凄いよな。あと、ちばてつや先生が力石徹の身体を大きく描きすぎたがために、あの過酷な減量というシーンが生まれたというね。最終的に帳尻が合ってくるのが素晴らしいよね。

椎名　ジョーも最後は減量に苦しむしね。

ガンツ　ジョーは1年で身長が6センチ伸びたって、それは伸びすぎだろって思いますけどね（笑）。

椎名　その6センチ大きくなったっていうシーンは、玉姫公園の遊具にサチ、キノコ、ジョーとか書いて傷つけてあるんだよ（笑）。

ガンツ　柱の傷で身長測ってるんですよね。5月5日の背比べかって（笑）。

玉袋　それにしても、あのチビ連たちはいいよな。丹下段平のこと「拳○チのおっちゃん」って呼ぶんだもん。拳○チだぜ。キ○○イだもん。来年、実写版の映画『あしたのジョー』が公開されるけど、「拳○チ」って呼ばれるのかね？

ガンツ　『釣りキチ三平』がOKなら、いいはずなんですけどね（笑）。

玉袋　でもよ、俺は香川さんがどんな段平になってくれるかわからねえけど、段平が一番似合うのは殿（ビートたけし）だろ！

椎名　ああ、そうですね！

玉袋　体格も似てるしさ。ボクシングだってうるせえしよ。

椎名　ボクシング好きなんですか？

玉袋　好きだよ。昔やってたから、パンチもすげえ速いんだよ。『フライデー』編集部の殴り込みのとき、「殿のパンチが凄かった」って聞いてるからな。だから、本当は殿に段平やってほしかったな。香川さんも素晴らしいボクシングマニアだと思うけどね。

椎名　でも、丹下段平が東大卒業してどうすんだって思うけどね（笑）。

ガンツ　ダハハハ！　そりゃそうだ（笑）。

玉袋　段平は小学校もロクに出てねえよ（笑）。風貌もあの風貌だしな。

椎名　実際、白木葉子の少年院慰問の劇団に紛れ込んだときも、ひどい役をやらされてましたよね。

玉袋　ムチで打たれる役な。

椎名　あのときの葉子はどうかと思うけど。

ガンツ　初期の葉子はひどい女ですよね。

玉袋　ひでえんだよ。金持ち特有の鼻につく感じでさ。ジョーも嫌ってただろ。でも、気の強い葉子がどんどん女らしいところを見せてくるのがいいんだよ。最終的にはジョーが好きだったっていうね。

椎名　ホセ・メンドーサとの試合前に言うんですよね。「矢吹くん、好きなのあなたが。行かないで！」って。

ガンツ　あんな勝ち気な女に「好き」と言わせる。たまらないですね（笑）。

玉袋　好きなら好きって言やあいいのによ、『ジョー』はそのやせ我慢もいいんだよ。お互いの我慢プレーだな。お互い完全に濡れてるし、完全に勃ってるのによ、それでもいかねえんだよ。もう先走り出てるぜ。

ガンツ　それでも死の戦場に向かっていくわけですもんね。あのシーンは、映画『レスラー』のラストシーンにも通じるものがありますよ。

玉袋　そうかもしれねえな。幸せよりもリングを取るというね。

椎名　実写版『あしたのジョー』は、力石戦までの話かな？

玉袋　力石までだろうねぇ。それ以降は、ジョーの対戦相手が外国人になっていくからな。ホセ・メンドーサ役がさ、稲川素子事務所から来ちゃったりするんだよ。

ガンツ　それは困りますね（笑）。

椎名　でも『ジョー』はガイジンのボクサーもまたいいんですよ。パンチドランカーになったカーロス・リベラのボタンのシーンとか。

玉袋　あれは泣いたよ。泣いたね。

椎名　あとカーロスがボタンしめられずに、ジョーがしめてあげようとしたら、ジョーもできなくて愕然とするんですよ。

ガンツ　カーロスだけでなく、ジョーもまたパンチドランカーだったというシーンですよね。

玉袋　俺もね、しょうべんの切れが悪くて、パンツ穿いたあとにおしっこが垂れてくると、ジョーと一緒かなって思うよ。

ガンツ　それはパンチドランカーと関係ないですよ！（笑）。

椎名　おしっこジョ〜って感じで（笑）。

玉袋　くだらねえな（笑）。

ガンツ　そんな冗談はともかく、やっぱり我々は『ジョー』を観ているが

修斗〜PRIDE全盛期、五味のそばにはいつも木口道場の子どもの姿が。これがジョーとチビ連を連想させた。五味は真っ白な灰になれるか？

泪橋
ジョーたちが住むドヤ街にかかる橋。人生に敗れた人たちが、この泪橋を渡りドヤ街にやってくるという。そのため、ボクサーとなったジョーと段平の目標は、どん底から栄光に這い上がる＝「泪橋を逆に渡る」となった。なお、この橋の下に丹下拳闘クラブがある。ちなみにジムは段平の手作り。

ドヤ街の連中
ジョーのいるドヤ街で日雇い労働などとして暮らす人たち。彼らにとってジョーは希望の星であり、ジョーの試合会場などでは、ほかの客とケンカしながら、ジョーを熱烈に応援する姿を毎回見かける。

少年鑑別所に入る前
ジョーが少年鑑別所、そして高等少年院に入るきっかけとなったのが、じつは葉子。下町の慈善家として、ジョーたちの住むドヤ街を訪れた葉子に対し、ジョーは募金詐欺を行ない、葉子が通報したため警察に身柄を拘束される。しかし、ジョーは取り調べ中に逃走。追われる身となったジョーはチビ連とともに廃墟に籠城するが、説得のために単身乗り込んだ段平にボコボコにされ、再逮捕される。

ウルフ金串
全日本バンタム級新人王に輝いた、名門「アジア拳」期待のボクサー。しかし、新人王を獲得した直後、控室でまだライセンスを持たないジョーにケンカをふっかけられ、クロスカウンターでダブルKOを喫する。これが報道陣の前で行なわれたため、ジョーは一躍注目の的となり、デビューのきっかけとなる。ジョーとの試合では、必殺のクロスカウンターを破り、勝利寸前かと思われたが、トリプルクロスカウンターで逆転KO負け。このパンチでアゴの骨を砕かれ、引退を余儀なくされる。その後、ヤクザの用心棒に身を落とすが、ヤクザ同士のいざこざでゴロマキ権藤の蹴りで再びアゴを折られてしまう。しかし、ジョーのプロ転向後、最初の強敵ということで、存在感と知名度はトップクラスだ。

ゴロマキ権藤
ヤクザの用心棒のプロ。ヤクザ同士の抗争で、ウルフ金串を半殺しにするが、ジョーとのケンカは分が悪いと拒否。このへんの判断がプロの喧嘩屋たるゆえん。その後はジョーに関わるようになり、野生児ハリマオ戦前には手下を多数引き連れ、ジョーのスパーリングパートナーを務めた。

両手ブラリ戦法
別名・ノーガード戦法。ガードをしない隙だらけにすることで、相手のパンチを大振りにさせ、カウンターを狙うジョー得意の戦法。でも、実際にこれをやると、たいていの人はボコボコにされてしまうので、よい子はマネをしてはいけない。

力石徹
少年院で出会った、ジョーの永遠のライバル。ジョーをボクシングに目覚めさせた張本人であり、少年院で引き分けに終わったジョーと決着をつけるため、プロ活動再開

ゆえに、実際の格闘技にも選手の生き様や人生が見えてくるものを求めてしまいますよね。

玉袋 それを俺たちはジョーに教わってるんもん。ジョー操教育ってな。

一同 ダハハハハハ！

玉袋 男の子の情操教育には『あしたのジョー』ですよ。

椎名 放送禁止用語だらけの教科書ですよね(笑)。

玉袋 だからよ、矢吹丈vsホセ・メンドーサ、矢吹丈vs力石徹っていうのは、何年経っても語れるんだよ。実際の格闘技でも桜庭和志vsホイス・グレイシーっていう何年経っても語れる試合があるけど、あれもサイドストーリーとガッチリはまったっていうのが、大きいんだよな。いま、なかなかこのサイドストーリーが追いきれてない気がするんだよ。

ガンツ だからPRIDE全盛期のヒョードルvsミルコなんて、まるっきり力石vsジョーみたいなもんでしたからね。ミルコがジョーで宿敵・力石＝ヒョードルを倒すために、ひたすら追っていくっていう。

椎名 そういう展開だったよね。

ガンツ ミルコの挫折が似合うところが、またジョーっぽくて。

椎名 でも結局、ジョーは勝てないんだよね。力石にも勝てないし、ホセにも勝てないし。

ガンツ カーロス戦もドローですもんね。

玉袋 だけど記憶に残ってるんだよな。こういうジョー的なストーリーや匂いがいまの格闘技に足りねえんじゃないかな。

椎名 ジョーvsカーロスって、タイトルマッチでもないのにいろんな仕掛けで盛り上げて、後楽園球場でやっちゃうのとか、すげえセンスいいと思う。

ガンツ あれをプロモートした白木葉子は過激な仕掛人ですよね(笑)。

玉袋 仕掛人だよ。しかも金があるというね。新間寿であり、メガネスーパー田中八郎でもあるんだよな。

ガンツ 「いまのマット界には白木葉子が足りない！」って感じですよ。

玉袋 葉子ほしいね～。じゃあ、ここでハッキリさせておこう。葉子と紀子、どっちが好みなんだよ。

椎名 紀子！

玉袋 ガンツは？

ガンツ ボクも紀子ですね。

玉袋 じつは俺も紀子なんだよ(笑)。

ガンツ 紀ちゃんは理想のお嫁さんでしょう。葉子はとてもじゃないけど、我々の手に負えない感じもありますしね(笑)。

玉袋 紀ちゃんをマンモスに持っていかれたときは悔しかったけど、あの二人ってさ、紀ちゃんはジョーに対する恋に破れて、西もボクサーで成功する夢が破れて、破れたもん同士が幸せになるっていうのが、またいいよね。それが泪橋のドヤ街に生まれた小さな幸せ。ラブストーリーとしていいんだよ。

ガンツ 結婚式のときの紀ちゃんの表情が切ないんですよ。「私はこの道を選びます」っていう決意みたいなものを感じて。

玉袋 でも、紀ちゃんはいま頃きっと、林食料品店を西の頑張りもあって大きくしてるんだよ。たしかいまコンビニ3店舗やってるよ。

一同 ダハハハハハ！

玉袋 こうやって俺は勝手に、その後の物語を考えちゃったりするんだよな。あのチビ連のなかにも、きっとジョーに憧れてボクサーになったヤツはいるだろうしな。で、サチは段平が死んだあと、丹下ジムの後を継ぐんだよ。

椎名 サチが継ぐ！ いいっすね～～！ 俺はサチがかわいくてしょうがない。一番気が強いしね。

玉袋 ゲタを持って、いつも怒るんだよな。

椎名 「レディに何すんのさ！」とか言ってね(笑)。

玉袋 その後の『ジョー』で言うと、チビ連のキノコはボクサーになってるよ。

椎名 やっぱりキノコですか。ブタ鼻のトン吉はない？

玉袋 ブーはないね。で、太郎は西のところに丁稚で入って、いまコンビニ一店舗任されてるよ。で、問題は葉子だよ。力石亡くして、ジョーも亡くして。白木ジムは閉じてるよな。ホセvsジョーのあと、スパッときれいにボクシング界から足を洗って、海外に移住してるよ。

ガンツ 葉子は海外に行ってそうですね～。

玉袋 パリに移り住んで生涯独身だろうな。岸恵子的なね。もしかしたらフランス人の映画監督と結婚してるかもしれねえな。

ガンツ パリで映画監督と結婚って、それが岸恵子ですよ！(笑)。

椎名 岸恵子いいですね。若い頃に葉子の役やってもらいたかった！

玉袋 だからよ、いまの人たちで『ジョー』を撮るっていうのは大変なことだと思うよ。だからさ、もし殿が『ジョー』を撮るなら、ドヤ街とかボクシングという設定は同じにするけど、話自体はオリジナルを撮ると思うんだよな。座頭市を金髪にしたみえてにさ。やっぱり原作にとらわれて、『新春かくし芸大会』のドラマになってほしくねえんだよ。マンガを忠実に追いかけたら逆にコスプレになっちまうかもしれねえからよ。

ガンツ 段平なんて特殊メイクになっちゃいますよね。

玉袋 そういや、まだ力石の話をしてねえよ。力石を語らずに『ジョー』は語れねえからな。

椎名 力石はホントにカッコいいですよねえ。

玉袋 実際の物語だってよ、ジョーとの決戦が近くなってきたら、ジョー目線じゃなくて、力石目線になってたからな。

ガンツ 主役が力石になってましたよね。

玉袋 アニメのエンディングテーマも「力石徹のテーマ」に変わるしさ。

ガンツ あのテーマ凄いですよね。

玉袋 寺山修司が作詞だよ。あれも放送禁止用語入っちゃってるんだよな(笑)。

椎名 ♪どこかで燃えている、メ◯ラの星一つ～(笑)。

玉袋 力石はニヒルでいいよな～。葉子に対して「お嬢さん」とか言ったりな。金持ちのブルジョアに飼われたグラジエーターなんだよ。それがまた切なかったりな。

ガンツ ちょっと悲しき存在でもありますよね。

後は本来フェザー級ながら、バンタム級に大減量。ジョーとの運命の一戦をアッパーで制すが、限界を超えた減量と、試合中にジョーのパンチをテンプルにもらい、後頭部を強打したことが原因で、試合直後に急死。マンガのお話なのに、寺山修司が中心となって、ファンが実際に葬儀を行なったことでも有名。

香川照之
『劒岳 点の記』で日本アカデミー賞助演男優賞を受賞した俳優。熱狂的なボクシングファンだったこともあり、映画『あしたのジョー』(来春公開予定)で、丹下段平役をうっかり引き受けてしまった。東京大学文学部卒業。

少年院慰問の劇団
金持ちの慈善家だった白木葉子が率いていた素人劇団。ジョーや力石が収容されていた特等少年院にも慰問に訪れたが、その際、ジョーに一目会いたい段平やチビ連が参加を志願し、劇を披露する。しかし、ジョーは葉子が段平に、ムチで打たれる役を与えたことに激怒。それを止めに入った力石とジョーの仲はさらに悪化した。

ホセ・メンドーサ
ジョー最後にして最大の敵。WBC・WBA世界バンタム級統一チャンピオン。頭蓋骨をも砕く、必殺のコークスクリューパンチでカーロス・リベラを廃人にした張本人。しかし、ジョーとの死闘で精も根もつきはて、髪はすべて白髪となり、玉手箱を開けたかのようにヨボヨボになってしまう。

カーロス・リベラ
白木葉子が日本に招聘したベネズエラ人ボクサー。あまりにも強すぎるため、チャンピオンが挑戦を受けないことから、無冠の帝王と呼ばれる男。ジョーとは後楽園球場で対戦し、ドロー。スラム街出身と、同じような境遇だったこともあり、試合後は友情が芽生えた二人だったが、ホセ・メンドーサ戦後、パンチのダメージで廃人となってしまう。

キノコ
チビ連の一人。ジョーと同じように、いつもハンチングをかぶっている。

トン吉
貧しい家庭の子どもたち揃いのチビ連で唯一の太めの体型。よくサチに下駄で殴られる。そういう役回り。

太郎
チビ連のボス的な存在。

山P
山本智久。ジャニーズ事務所所属のアイドルグループ「NEWS」のメンバー。なんとこの人が映画『あしたのジョー』で矢吹丈を務めるんだってさ！

玉袋 力石が少年院を出るときのあのカッコよさって言ったらねえよ。白いスーツ着ちゃってさ。あとは、

一日2カ所で舞台挨拶するとしたら、山Pが移動したら、きっとそのまま移動するからね。残された俺た

どな。

ガンツ いまの男の子に『ジョー』を観てほしいですよね。

オープニングテーマに匹敵するね。

ガンツ ♪おれたちゃ裸がユニフォーム～(笑)。

椎名 もちろん入ってますよ！ ガチンコだったら、おっとうが一番強いんだから！

ガンツ 国際プロレスはジョーの世

俺たちのあしたのジョー変態座談会

ジョーや力石、ラッシャーや破壊王 みんな俺たちの〝男神社〟に眠ってるよ

玉袋　力石が少年院を出るときのあのカッコよさって言ったらねえよ。白いスーツ着ちゃってさ。あとは、初めて少年院でジョーとボクシングで対戦したあと、二人が木の下でたたずんでるのがいいよな。

椎名　クロスカウンターでダブルKOですよね。

ガンツ　憎しみ合ってたはずなのに、力石が凄くやさしい表情してるんですよね。

玉袋　あれはもうホモだな。俺たちはホモっ気にやられちゃってるのかもしれねえ。

椎名　ホモっ気を山Pがやったらマズいかもしれないけど（笑）。

ガンツ　ダハハハハ！　けっこうハマり役じゃないか？って（笑）。

玉袋　でも、あしたのジョーを映画化するなら、男のホモっ気を出せるかどうかっていうのも重要かもしれねえな。

椎名　でも、いまこの時代に『ジョー』を映画化しようというのが不思議だよね。

ガンツ　リスクがある映画ですよ。我々のような「男の聖域を汚してほしくない」っていうファンばかりなんですから。

玉袋　だけどよ、実際に『ジョー』の映画を観に行ったら、初日舞台挨拶はみんな山P目当ての女だよ。

椎名　「キャー！　山Pーッ！」なんて言っちゃって（笑）。

玉袋　しかも彼女たちはよ、山Pが一日2ヵ所で舞台挨拶するとしたら、山Pが移動したら、きっとそのまま移動するからね。残された俺たちみたいな男がポツーンと映画を観てるわけだよ。

ガンツ　そうなりそうな気がしますね。舞台挨拶の映画館に立てこもって、チビ連と一緒に石を投げましょうか。「来るなーッ！」って（笑）。

玉袋　でも、ガンツが小学校1年でジョーの映画を観たようにさ、俺たちだって全員後追いと言えば後追いなんだから、また子どもたちとか、若い層がジョーに触れてくれるっていうのは、いいかもしれねえな。そういう作品にしてほしいよ。作る人たちは相当なプレッシャーだろうけどな。

ガンツ　いまの男の子に『ジョー』を観てほしいですよね。

玉袋　そうだよ。俺のDVD BOXだって、セガレに見せたくて3万円払って買ったんだから。ジョー操教育のためだよ。

ガンツ　教材でしたか（笑）。

玉袋　教材ですよ！

ガンツ　つらいことがあっても、『ジョー』のエンディングテーマかなんか口ずさみながらトボトボ帰ったら、「これも明日のために必要なことかな」とか思えますからね（笑）。

玉袋　『ジョー』に出てくる歌は、俺たちの人生のテーマ曲だからな。

椎名　音楽は丹下段平のテーマが子ども心に衝撃だったよね（笑）。

ガンツ　『ジョーの子守歌』ですね（笑）。

玉袋　あれは『アパッチ野球軍』のオープニングテーマに匹敵するね。

ガンツ　♪おれたちゃ裸がユニフォーム～（笑）。

玉袋　『ジョーの子守歌』なんて、いきなり尺八の音色から始まるんだもん。

ガンツ　浪曲ですからね。いまのアニメで浪曲がエンディングになるってありえないですよね（笑）。

玉袋　ねえよ。完全に商業ロックなんだから。だから『ジョー』の映画の主題歌がどうなるかっていう問題もあるよ。

ガンツ　そこはまたこだわりたくなりますね（笑）。

玉袋　そうなっちゃうんだよな。だから、どうせなら『がんばれ元気』を映画化してほしかったな『ジョー』の映画は椎名やガンツみたいに不満を持つヤツらが出てきちゃうから。

椎名　俺ら二人ですか（笑）。

玉袋　『がんばれ元気』や『はじめの一歩』の映画化ならいいよ。でも『ジョー』だけはやめてくれって、椎名が言ってるわけだから。

椎名　俺が言ってますね（笑）。

玉袋　だから、『あしたのジョー』の世界はデリケートなんだよ。なんか違うなっていうものを〝俺たちの男神社〟に合祀したら、俺たちの英霊たちに申し訳ねえからさ。

椎名　そうですよ。英霊が眠ってるんだからって。内政干渉だと！

ガンツ　俺たちの〝男神社〟には、たくさん英霊がいますからね。

椎名　梶原先生から寺山修司先生からね。

玉袋　そこにはラッシャー木村もちゃんと入ってるからな。

椎名　もちろん入ってますよ！　ガチンコだったら、おっとうが一番強いんだから！

ガンツ　国際プロレスはジョーの世界が入ってますよね（笑）。

玉袋　プロレス界のドヤ街だよ。

ガンツ　泪橋を逆に渡ろうとしている人たちのプロレス団体ですよね（笑）。

椎名　国際プロレスはジョーがいない『あしたのジョー』だから（笑）。

ガンツ　ジョーはジョーでも、いるのはジプシー・ジョーぐらいですからね（笑）。あとは丹下段平だらけですよ！

玉袋　でもよ、アントニオ猪木vsストロング小林の日本人対決のとき、国際プロレスの応援団は太鼓鳴らしてたからね。『ジョー』に出てくるドヤ街の連中と一緒なんだよ。

ガンツ　太鼓や笛の応援も辰吉丈一郎以来聞きませんね。

玉袋　やっぱり辰吉はジョーだな。

椎名　辰吉は死に場所を求めてるのに、死ねないんですよね。

玉袋　辰吉だって、いつか俺たちの男神社で眠るはずだよ。いろんな人が眠ってるからな。

ガンツ　ブルーザー・ブロディや破壊王も眠ってるでしょうね。

玉袋　俺たちもいつかはそこに行きてえと思ってるんだから。でも、参拝には訪れたいよ。毎年必ず公式参拝するぞ、俺は。

ガンツ　では、これからも男神社の参拝を続けていきましょう！

【10年6月3日／都内・「加賀屋」中野坂上店にて収録】

「あしたのジョー」は現在文庫となって、全12巻が発売中。アニメ「あしたのジョー」の「1」「2」も含めて、男なら一度は観なければならない作品だ！

伝説のレスラーたちによる珠玉の名言集!

声に出して読みたくなる

『プロレススーパースター列伝』語録

1980年代に全国1億2000万のプロレスファンを熱狂させた劇画『プロレススーパースター列伝』。
ここではこのプロレス漫画の金字塔に登場した、胸躍る名言の数々を徹底網羅!
ファンタジーにあふれたあの頃のプロレスよ、もう一度! ホゲ〜ッ !!

文/長谷川亮　構成/鈴木佑　©原作・梶原一騎/作画・原田久仁信/講談社

ザ・ファンクス編

恥ずかしいだと? うんと恥ずかしい思いをしろ! そしてその恥ずかしさをルー・テーズより強い男になるためのエネルギーにかえろ!!

▲ドリーとテリーの父シニアは、若き日に“地上最強の鉄人”ルー・テーズに挑戦するも7分で完敗。自らの限界を悟ると悪役へ転向し、はたせなかった夢は息子たちへと託す。そしてファンク一家はテキサスに移住し、プロレスの英才教育をスタート。一方でシニアは悪役として非道のかぎりをつくし、その名をとどろかす。学校でいじめと悪口を受ける子どもたちはシニアに「恥ずかしい」と訴えるが、それに対し父はこう言い放つ。怨念はネガティブながら強大なエネルギーだ。

パパは自分の人生も血と汗できずいた財産も、すべておれたち兄弟を正統派の強いレスラーに育てることにささげてくれた……偉大なる悪役!!

▶親子2代でルー・テーズの首を狙ったファンク一家だが、鉄人も寄る年波には勝てず、カナダの荒法師、ジン・キニスキーに敗北。キニスキーには父シニアが生涯消えぬ傷をつけられた因縁もあり、一家は標的をキニスキーに変更する。そして迎えた対戦ではドリーが一家秘伝のスピニング・トーホールドで撃破し、世界王者に。シニアは「ついにみじめな悪役の息子がルー・テーズと同格の男になりやがった……」と感涙。ケガの療養で実家に残ったテリーも、王座奪取の報を聞くと、子どもたちのために人生を捧げた父の愛を思って男泣き!

スタン・ハンセン編

ガッデーム!!

▲外国人選手の怒りを表わすフレーズとして『列伝』登場頻度の高いガッデーム!! (ちくしょう)。ほかにも「シャラップ(だまれ)!!!」「ゲラアウト(でてけ)!!!」「オフ・コース(そのとおり)!!!」「アイ・ハブァ・ウイン(われ勝てり)!!!」といった表現が見られ、マスカラス編ではアミーゴ(友)も。『列伝』は外国語勉強の入り口としての役目もはたしていた。

ザ・ファンクスみてえにデラックスな生活をしてえなあ!

▲まさにハンセンがなけなしのファイトマネーで買ったパンと牛乳で飢えをしのいでいた若手時代、師匠のファンクスはステーキ&ワインのリッチな食事を満喫! その姿を見ながらぼやいたのがこのセリフ。さらにファンクスは余ったステーキを愛犬にやってしまい、「あのとき、おれは犬になりてえとつくづく思ったぜ」とハンセンがシャワールームで述懐しながら鶴田と語る名場面が続く。

涙のしょっぱい味つけでパンを食った人間でなければ本当の人生に対するファイトはわかない!

▶地元で有数のバッドボーイとして鳴らし、スポーツの花形選手としてプロレス入りしたハンセンだが、若手時代は持ち前の怪力を持て余して泣かず飛ばず。少ないファイトマネーでパンと牛乳、よくてハンバーガーばかり食べていた。そんなハンセンの姿に添えられる一文がこれ。本編では「と、いわれるが」と続くのだが、「列伝」以外でこういわれているのを聞いたことがない……。

アンドレ・ザ・ジャイアント編

広い世界を股にかけて強敵をもとめ歩くのがおれの性にあっている、これでサヨナラとしよう

▲“帝王”バーン・ガニアに見込まれ、アメリカへ渡ったアンドレはトップレスラーとして活躍していく。そして転戦したフロリダで出会ったのが“アメリカン・ドリーム”ダスティ・ローデス。凶器も使って死闘を繰り広げた両者だが、この闘いを通じて友情が芽生えタッグを結成。「まさしく昨日の敵は今日の友!『強さ』のみが支配する男の世界!!」という解説もしびれる。二人のチームはまたたく間にタッグ王座を奪取するが、アンドレは新たなる敵を求めてローデスと別れ、新日本プロレスへ乗り込んでいく。3人分の旅客シートに身を収めて……。

かまわんぜ、個人的な感情とビジネスはべつだからな

▲一度はブッチャーをプロレス界から追放しようとしたシークだが、ブッチャーがスターに成長したのを見ると再びタッグ結成を持ちかける。当然快く思わないブッチャーだが、このセリフでもって承諾。さすが自分と金しか信じない男! ちなみにブッチャーはリック・フレアー編にも登場し「やつは世の中でマネーしか信用しねえ主義」と評されている。元祖・銭ゲバがここにいた!

血のしたたるステーキ

▲ステーキは成功したレスラーの象徴的アイテムとして『スーパースター列伝』にたびたび登場する(駆け出しの若手はスパゲティとコーラ)。タッグパートナーで有力プロモーターでもあるシークと仲間割れしたブッチャーは、各地で試合を干されあわや失職の危機に陥る。しかしディック・ザ・ブルーザーが1000ドルを賭け挑戦者を募っているのを見ると名乗りを挙げ、見事ノックアウト。このとき何よりブッチャーのモチベーションとなったのが「血のしたたるステーキ」だ。草食系? 高カロリー? ダイエット? 男なら血のしたたるステーキだ。

同情されるくらいなら憎まれろ! それが男だ!

アブドーラ・ザ・ブッチャー編

▲初来日を成功させたブッチャーは意気揚々と帰国。ワイフを驚かせんと土産の日本人形を手にドアを開けるが、衝撃の展開が待ち受ける! なんと妻が不在がちで悪役のため世間体も悪く、収入もよくないブッチャーに見切りをつけ男を作って家を出たのだ! あわれブッチャー、少年時代は親に捨てられ今度は妻に捨てられと、息子から同情を受けるが、「同情などするな!」に続けて語るのがこのセリフ。失意のとき、慰めてくれた友人に返す決め文句として"日常生活で使える列伝語"だ。

ああ、人間は信じられねえ!

▲母がアルコール依存症、父親が失踪と幼年期からハードコアな人生を送ってきたブッチャーは「愛」とか「友情」を信じない! 信じるのは「自分」と「金」だけだとハッキリ言うが、そのブッチャーをますます人間不信にさせたのがザ・シーク。人気と活躍をパートナーのブッチャーにほぼ依存しながら、ファイトマネーは小遣い程度。その人でなし度はブッチャーに違い目をさせ、さらに「わたしはハッキリいってザ・シークというレスラーを実力的にも人間的にも買わない」とアントニオ猪木(談)させるほど!

ミル・マスカラス編

あの人にあこがれあの人だけが貧しい少年時代の太陽だった日の記憶がよみがえってくるのは、どうすることもできん!

▲メキシコ・プロレス界におけるマスカラス以前の大スター、エル・サント。普段は人間嫌いといわれ、人里離れた地に城を建て暮らしたが、少年ファンだけは別。訪ねてくれば冷たい飲み物とサイン入りブロマイドで歓迎し、希望すればレスリングも指導した。かつてこの「エル・サント教室」の一人であったマスカラスは、成長してサント本人と対戦! 少年の日の思い出と憧れ、そして闘志とが激しく胸を交錯する。

しかしおれは男!! 信念のためには血を流すメキシカン!!

▶かつての"地上最強の男"ルー・テーズはマスカラスをスカウトして新団体IWAを旗揚げするが、他団体の妨害を受け客席はガラガラ。それでもレフェリーまで務めてIWAに懸けるテーズのために、マスカラスも自らを奮い立たせハッスルするのだが……。なお、メキシカンが本当に信念のためには血を流すかどうかは不明だが、「しかしおれは男!! 信念のためには血を流す○○!!」と入れ替え応用すると、非常に決まるこのセリフ。

オット! 昔やられた宿敵に教えちゃソンだ。あばよ!

▲日本での人気にやっかみを受けたマスカラスはバトルロイヤルで陰謀にハメられ、右ヒザを複雑骨折。失意のうちに故郷メキシコへと帰る。もはや再起不能かもと弟ドスカラスへ弱気に告げるマスカラスだが、そこへ現われたのがかつての宿敵・不死身仮面アズテカ。しかしアズテカ、嫌みでも言いに来たかと思いきや"不死身仮面"の名を支えた、負傷によく効く名湯をうっかり告白。これによりマスカラスは奇跡的な回復をはたす。「彼はリングでは悪役王でも……すばらしいアミーゴ(友)だった!」男のあるべき姿を示した名シーンだ。

さすがのわたしもこれで精魂つきはてて完全フォールだ……

▶すべての財産をつぎ込みIWAを運営したテーズだが、ある致命的ショックが襲う! 美人の誉れ高かったフレッダ夫人がテーズに愛想をつかし出ていってしまったのだ!「泣いている! 地上最強の男といわれた人が…」とマスカラスも驚愕したが、少年読者も最強の男すら完全フォールと白旗をあげる離婚、そして愛の痛みを列伝を通じて学んだのだった。

ひょっとするとある意味で……おれにとってイノキは……永遠の恋人なのかな?

▲「やつの、自分だけの英雄きどりが気に入らん」と、猪木を執拗につけ回すJ・シン。その姿は猪木が持つ、また別種の狂気に魅入られたかのようだ。猪木も「おれをここまでおいつめたシンの執念はプロの中のプロだ!」と敬服。最終話ではシンが猪木への捻じ曲がった愛情を告白して終わり、故・淀川長治先生なら両者のあいだに流れるホモセクシャル的感情を指摘しかねない勢いである。

これが有名な「アントニオ猪木夫妻・新宿襲撃事件」である!!

タイガー・ジェット・シン編

▶"インドの猛虎"タイガー・J・シンは「突如、まるでアラジンの魔法のランプから飛び出した」ように新日マットへ登場。これはシンの一方的殴り込みであったが、猪木は「プロレスはビジネス、いきあたりばったりのケンカじゃない」と参戦を拒否。しかし猪木が妻(当時)で女優の倍賞美津子と休日のショッピングを楽しんでいると、ここをシンと仲間たちが急襲!「これが有名な~である!!」と言いきり、勝手に「事件化」してしまう強引さは、のちの格闘マンガの傑作『魁!!男塾』における民明書房のテイストと同じものを感じさせる。

せ…先生ッ、なんたる無茶を！

▶昭和38年12月、納会と年末番組の収録を終えゴキゲンな力道山は、さらに赤坂の高級クラブへ繰り出す。しかしここで暴漢に刺されてしまう。だが、不死身の肉体と過信した力道山はなんといったん帰宅。その後やはり悪化して緊急手術となる。さすが不死身の肉体で一時は回復へ向かった力道山だが、ここでまた過信が出て、禁止されていた水分や見舞客の持ってきた寿司まで平らげてしまう（寿司に関しては真偽不明）。結局これがアダとなり、力道山は急死。「わたしは泣いた、泣いた、ただ泣いた!!」というアントニオ猪木（談）な最期になってしまう。

も……もうプロ野球は……断念するしかないッ……ウウッ！

▲野球部出身の馬場は、スカウトを受け高校を中退して読売巨人軍へ入団。豪速球で若き日の王貞治をきりきり舞いさせるという抜群のエピソードを残すが、大きすぎる身体が災いしてか芽が出ず、クビとなり大洋（当時）へ。「しかし、どこまでも不運は続き、大洋ホエールズ合宿のフロ場ですべって大ケガ!!」馬場はその超能力（?）でダメだと悟ったか、いきなり野球をあきらめてしまう。ともあれ「もう○○は断念するしかないッ」と応用すれば、日常生活で使える列伝フレーズだ。

G馬場とA猪木編

プロレスをあきらめようなんてバカ、バカッ、おれのバカモン!! これほど底の深いプロレスなら、どこどこまでもしがみつかねば！

▲馬場とともに力道山門下へ入門した猪木だが、早々にアメリカ遠征へ出されスター街道を行く馬場とは対照的に、つらい付き人生活を強いられる差別待遇。師に靴ベラで顔を殴られ、車の同乗さえ拒否された猪木はブラジルへ帰ることを決意する。しかし最後に技の天才カール・クラウザー（後のカール・ゴッチ）の試合を見届けんと会場へ駆けつけると、クラウザーは5台の満員バスを引っぱるグレート・アントニオをケンカ殺法で一蹴。「これこそが、まことのプロレス!!」と感動した猪木は押しかけ弟子となり、あらためてプロレス道をまい進するのだった。

ダラ幹（だらけた幹部）

▲東京プロレス崩壊後、猪木は日本プロレスへ復帰。馬場とのタッグB・I砲で頂点をきわめるが、そこで満足を覚えず馬場との頂上対決を打ち上げる。だが、当時はまだ日本人同士のトップ対決がタブーであった時代。猪木の挑戦は時期尚早として退けられる。馬場をエースにしておきたいという「ダラ幹（だらけた幹部）どものつごうでファンをごまかしてしまう時代だったのだ」と猪木は語るが、衝撃だったのが「ダラ幹」という短縮語。ちびっ子読者にとってダラ幹は、初めて出会う不正、あるいは“体制”というべき存在だったかもしれない。

わたしだよ。それともカール・ゴッチは超大物ではないかな？

▲クーデターの発覚で日本プロレスを追われた猪木は、新日本プロレスを旗揚げ。やる気に燃える猪木だが、日本プロレスの横やりが入り、外国人レスラーが参戦を了承しない。頭を抱える猪木だが、外国人レスラーの交渉に当たっていたカール・ゴッチは「新日本プロレスの旗揚げ興行は立派にやれるッ! 一人の超大物レスラーが日本へいき、きみと戦うからな!」と力強く国際電話。「そ、その超大物とは!?」と聞く猪木に、ゴッチが返すのがこの言葉。「あのときの感動は一生忘れない!」という猪木よろしく、列伝最高の泣きどころとして独断認定だ。

つねに新天地をもとめて現在に満足するな!! そして、たとえ親兄弟でも息子でも好敵手としての実力あれば戦えッ、倒せ!!

▶力道山の死後、アメリカ遠征へ出発した猪木は一流レスラーに成長。日本で馬場とエースの座を争うため帰国の途につくが、最後の試合に立ち寄ったホノルルで先輩・豊登が待ち受ける。ここで豊登が持ちかけたのが新団体・東京プロレスの設立。冒険心を刺激された猪木はこの話に乗るが、当然のように旧団体・日本プロレス側は激怒。だが馬場は冷静に、師・力道山の口ぐせであったということの教えを説くのだった。

タイガーマスク編

ガーンといけえ、カーン（本名小沢正志）！

◀列伝ではタイガーの正体に迫るヒント・秘話が多数明かされるが、「まず彼は、めっぽう腕力が強い!」というアントニオ猪木（談）のあとで登場するのが新日レスラー内での腕相撲。ドラゴン藤波との龍虎対決をタイガーが制すると、続いてキラー・カーンが挑む。しかし「ガーンといけえ、カーン（本名小沢正志）!」と送り出されるも、「ウフフフッ」と微笑むタイガーがやはり瞬殺。「おはずかし……」とスゴスゴ退散するカーンは、ダジャレのためだけに登場したようで何か悲哀を感じさせた。

もうひとつ、わかってることがある。あいつは、いいやつだ……と

▲昭和56年4月、さっそうと登場したタイガーマスクはアニメ顔負けの四次元殺法で一大ブームを巻き起こす。マスコミが正体暴きにやっきとなるなか、マスクド・ハリケーンとの覆面はぎデスマッチが行なわれるが、タイガーはこの試合も勝利。ハリケーンはマスクをはがれボビー・リーが正体であることをさらされるが、タイガーは勝ち誇ることなく去っていく。そんな武士の情けにボビーは遠い目をして「あいつはいいやつだ」とポツリ。ボビーの姿にタイガーがトレーニングを積む土手の夕日が重なり、列伝でも屈指の詩的場面となっている。

だんじてブラック・タイガーには負けん!! 傷だらけでプロレスを愛する猪木さんの夢のためにも！

▶無敗街道をひた走るタイガーだが、その座を脅かす未知の強豪が来襲する。裏タイガーマスクともいうべきブラック・タイガーだ。その正体はイギリス修業時代、タイガーに唯一「負けた」と思わせたテラー・ロッカが疑われ、タイガーは初敗北を覚悟する。しかし猪木はタイガーによるジュニアヘビーの世界征服（王座統一）計画を発表。ケガに倒れながらも自らのはたせなかった夢を託さんとする猪木の姿に、タイガーは必勝を誓うのだった。

一人の子だけ喜ばせても、あとの大勢の子たちがさびしい……それがタイガーの信念でした

▲タイガーブームのさなかに猪木はメキシコへ遠征。そこでタイガーに「ティグレ・エンマスカラド」とメキシコでの名を与えた老プロレス記者と出会う。記者の紹介でプロレスラー養成機関“虎の穴”へ入ったタイガーは100日あまりのスピード記録で卒業。大会場での試合へ出場できるようになる。メキシコでは無料入場が可能となるため、会場入りするレスラーのカバンをこぞって少年少女が持ちたがる。だが、そのすべてをタイガーは断った。老記者はその理由を説明し、火の酒テキーラを猪木に勧めながらさらに話を続けていくのだった。

ハルク・ホーガン編

ちょいとしたタイガーマスクだろうぜ!

▲ホーガン編の冒頭で、ホーガンはアンドレ・ザ・ジャイアントと対戦。名づけて"400キロ大戦争"!!（ホーガン145キロ、アンドレ256キロ）。ここでホーガンはアンドレをボディスラム、そしてベアハッグとウルトラ怪力を発揮するのだが、さらにトップロープからの攻撃で追撃!! 得意満面にこのセリフをのたまう（実際はただのダブルハンマーなのだが……）。日常生活でも困難に思える仕事をやり遂げたあとなど、使い回しの利く列伝フレーズだ。

ハルク、水に流そうや。おれの本心はユーを好きだったが、ただ、おってくるプロのライバルとしては大きらいだったたけよ……フフフ

▶打倒猪木を目指し、ロックミュージシャンから転身したホーガン。超人パワーで連勝街道を行き、早くからチャンスをつかむが、その実力を警戒・嫉妬したハンセンが乱入し台なしにしてしまう。両者の遺恨は深まるばかりでついに直接対決実現となるが、殺伐とした内容になるのを恐れた猪木はテレビ中継なしとする。試合はホーガンが超人パワーで優勢に進めるが、場外戦でイスを振るうと鉄柵にはまった腕が抜けなくなり無念のリングアウト負け。だが試合が終わるとハンセンは和解を持ちかけ、以後二人は酒を酌み交わす無二の親友となるのだった。

ビールだッ、ビール!! このホテルにあるビールを、ぜーんぶ飲みほしたる!

▶日本でアックスボンバーの開発に成功したホーガンは帰国後も大活躍。AWA世界王者ニック・ボック・ウィンクルに挑戦し圧倒するが、悪徳マネージャーボビー・ヒーナンに乱入され反則決着で逃げられる。怒りに燃えるホーガンは二人を組ませての2vs1ハンディキャップマッチを要求。超人パワーでこの一戦さえクリアするのだが、変則マッチの王"大巨人"アンドレは試合を観戦し嫉妬に荒れ狂う。そのときのセリフがこれだが、常人離れした食べっぷり、飲みっぷりもレスラーの魅力の一つであり、列伝もその伝説を損なうことはない。

リック・フレアー編

絶望してたまるか!! チビなりに、短足なりに、四角いリングにしがみつくぞッ! おれはネイチュア・ボーイ、野生児!

▲アマレスの下地と女性受けするルックスでプロレス入りしたフレアーだが、短足が災いし巨漢揃いのニューヨークで苦戦する。ならばと反則殺法を駆使し出し、フレアーは"狂乱の貴公子"と異名を取る。だが周囲のレスラーはその人気を快く思わず、バトルロイヤルでリンチにかける。重い傷を負いながらそれでも試合を干されないため会場へ向かったフレアーは、そこで"大巨人"アンドレと遭遇。その巨体を前に「チビの短足では絶望か?」とあきらめがよぎる。しかし自らを奮い立たせリングへ向かうと、そこで終生の必殺技4の字固めに開眼するのだった。

ブルーザー・ブロディ編

なッ、なんてムチャをしくさる!

▲79年11月、鉄のツメとキングコングの一戦はテキサス州ヘビー級タイトルを賭け実現する。先制ラッシュとキングコングパワーで押すブロディだが、恐怖のアイアン・クローが炸裂! 絶対絶命のピンチとなるが「不屈の闘争本能」が鉄のツメを逆に顔へ押しつけ、場外の床に叩きつけるという「大胆不敵な逆襲」を生む! そのときに発したエリックの一言がこれ。日常生活でも常識破りの大胆な発想や所業に対し、称賛を込め使ってほしい。

われわれはプロだ、そして、おれは興行主（プロモーター）も兼ねとる。ゼニもうけのためなら育ての親もヘッタクレもあるか!

▲"文明社会に迷いこんだキングコング"ブルーザー・ブロディは"大巨人"アンドレをKOするなど大暴れ。だが、その活躍を見た"鉄のツメ"フリッツ・フォン・エリックは、ブロディ育ての親でありながら自ら対戦を持ちかける。プロモーターでもあるエリックは、招聘したレスラーをエリック・ホテルに泊まらせ、ギャラはエリック銀行の小切手で支払う成功者。恩師との対戦をに驚きを隠せないブロディに、この言葉でもって自らを成功へと導いた、徹底したプロ意識を示すのだった。

世界一の美しい山に世界一強い男からハロー・コンニチハ……

▶ブロディが初来日したのは昭和54年1月、全日本プロレスの『新春ジャイアント・シリーズ』。機内から富士山を見たブロディは「フジヤマか……なるほど、噂にきいたとおり世界一のビューティフル・マウント（美しい山）だ!」と認めたのに続け、このセリフ。飛行機から富士山が見えた際は、世界一強くなくても闇雲にこのセリフをつぶやきたいものである。

ザ・グレート・カブキ編

キム先生、ありがとう……この大恩にむくいるためにも、おれは、世界のザ・グレート・カブキになってみせます!

◀シンガポールへ渡った高千穂だが、現地のレベルは低く、うらぶれた思いで日々を送る。だが、ここで「忘れもせぬ、その相手の名ウオン・チュン・キム! そして、魔性のカンフー殺法を!」という仰々しい解説とともに、運命の師とめぐり合う。キムはブッチャーに拳法を授けたガマ・オテナの一番弟子　であり、高千穂は道場へ入門。のちのカブキとしての下地が作られる。さらに渡った香港で高千穂はプロモーターの意向に逆らい命を狙われるが、その危機を救うためキムが手を回していたことが後に判明! 高千穂は歌舞伎面の下でひそかに涙を光らせる。

高千穂よ、男は冒険だ!

◀若き日のザ・グレート・カブキ=高千穂明久は、中学を卒業すると宮崎から上京し日本プロレスへ入門。「モヤシ」と呼ばれた体格を猛練習で鍛え上げ、前座試合のヒーローに成長する。だが、当時日本プロレスには大型新人が続々入門し、小型の高千穂は冷遇を受ける。やがてようやく海外遠征を命じられるも、行き先はスター候補生のアメリカではなく東南アジア。「自分のような小型は追放か」と腐る高千穂だが、猪木は東南アジアはアメリカにはない東洋の神秘があると励ます。自分も東京プロレスで冒険して失敗したという自虐を絡めつつ……。

プロレス・格闘技 マンガの時間

マンガ批評第一人者、オススメの作品は？

漫画家／マンガ評論家

いしかわじゅん

いしかわ先生といえば、漫画家であり『BSマンガ夜話』にレギュラー出演するなどマンガ批評家としての顔を持っている。そしてプロレスファンからすれば『週刊プロレス』のSWS報道をめぐるバトルで知られてる“プロレス者”！マンガとプロレス・格闘技を特集するなら話を聞かねば！

聞き手／ジャン斉藤

——いしかわ先生はいまでも熱心にプロレスを追いかけてますよね。
いしかわ　観てますね。青木真也vs

スものですよ！（笑）。
いしかわ　パイオニア戦志とのつながりはねぇ、もういまはなき『ファ

——そのTシャツはほしい（笑）。しかし、先生は、まんべんなくいろんなプロレスを楽しめるってことですね。

ル』はキックボクシングの話になるとね、もしかしたら「……これはあるかもしれない」っていうリアリテ

ては評価されてなかったんだよ。実際にSF小説で直木賞を獲った作品は一本もないから。筒井康隆も何度

梶原一騎が出てきた頃は、失なわれつつあった父性を求められていた

——いしかわ先生はいまでも熱心にプロレスを追いかけてますよね。

いしかわ　観てますね。青木真也vsメレンデスもニコ動で観たし、ここ1年ぐらいで一番よく観てるのはDDT。ここんところはDDT、ユニオン、マッスルとつるべ打ちでアイスリボンまで。凄くインディー好きに見えるかもしれないけど(笑)。

——それはインディーだけを観てるわけじゃなくて……。

いしかわ　たまたま。なんか一つ行くと「今度来てください」って言うから「ああ、いいよ」って。それがなんとなく続いちゃっただけで。

——それはアイスリボンだったらさくらえみさんに誘われたり。

いしかわ　さくらえみはね、FMWの頃から知ってるんだよ。FMWがスカパーで中継していた頃、杉作(J太郎)が司会をやってたじゃない。東京で中継をやるときだけ俺もしゃべってたんだよね(笑)。

——いまは昔のプロレスと比べて様変わりしましたけど、そういう意味ではいしかわ先生は時代についていってるというか、かなり希少な存在だと思うんですけど。

いしかわ　そうだねぇ。そういえば、会場に行っても、俺より年齢が上の関係者はいなくなったよねぇ。俺、力道山から観てたからなぁ。

——力道山から観てる方がアイスリボンを!(笑)。

いしかわ　パイオニア戦志の旗揚げも観に行ってるし、オリエンタルプロレスとか剛竜馬の大会は全部行ってるから。

——ワハハハハハ!　それはギネスものですよ!(笑)。

いしかわ　パイオニア戦志とのつながりはねぇ、もういまはなき『ファイト』のイベントが大阪のパルコの上であって、そこに行ったら控室に国際プロレスのファンクラブの会長が来てて。「サインをください」って言うからラッシャー木村の絵を描いたのかな。それでしばらくしたら「あのイラストを機関誌の表紙にしてもいいですか?」って聞いてきたんで、さすがにその場で描きなぐりだったからわりと丁寧に描いて送って。

——それはノーギャラですか?

いしかわ　うん。で、何カ月かしたら「次の号は鶴見五郎でお願いします」って言ってきて「連載になってんのかよ!?」って驚いたんだけど(笑)。

——ワハハハハ!

いしかわ　それから俺、ずーっと国際プロレスのファンクラブの機関誌の表紙をタダで描いてたんだから。で、そのおかげで国際プロレスのレスラー連中と仲良くなって。レスラーがまた大阪人に負けず劣らずゴッチャン体質なんだよね。で、ある日、剛竜馬から電話かかってきて(かすれ声のモノマネで)「先生!今度、新団体を立ち上げるんで、Tシャツの絵をお願いします」って頼まれて、剛と高杉とアポロ菅原の3人の絵を描いたんだよ、ノーギャラで(笑)。

——そのTシャツはほしい(笑)。しかし、先生は、まんべんなくいろんなプロレスを楽しめるってことですね。

いしかわ　そうそう。何かしらおもしろいものは見えてくるんだよ。

——お話を進めると、そのプロレス・格闘技にはマンガというのが欠かせない存在として……。

いしかわ　そうねぇ。そもそも梶原一騎作の『チャンピオン太』から始まって、あれでみんな熱狂したし。もうちょっとしたら『タイガーマスク』が出てきた。まぁ、その前に『ジャイアント台風』とかあったけどねぇ。

——梶原一騎原作、辻なおき先生の作品で馬場さんが主人公。

いしかわ　あと梶原と中城健の『四角いジャングル』にもみんな夢中になって読んでたしねぇ。少年だった俺たちからすれば「これがまさか、ホントに行なわれてるはずはないけど、でも描いてあるしなぁ」っていう感じだった。『ジャイアント台風』は小学生の頃たけど、あきらかにウソなのはわかったけど(笑)。

——小学生でもわかりましたか(笑)。

いしかわ　だって特訓でさぁ、首まで地面に埋められた馬場がジープに轢かれるんだよ。そういう特訓はないよね(笑)。

——あきらかに死んじゃいますよ!

いしかわ　でも、『四角いジャングル』はキックボクシングの話になるとね、もしかしたら「……これはあるかもしれない」っていうリアリティがあるんだよ。いま振り返ると、あれがリアルかっていうとリアルじゃないんだけど(笑)。馬場がジープに轢かれるのに比べれば、ずいぶんリアルじゃない。で、テレビを観ると、今週読んだことのカケラくらいは出てくるんだよ。そういうマンガとの相乗効果というか、キャッチボールでどんどん幻想が大きくなってって。あの頃は本当にいい関係だったよね。

——プロレスとマンガって相性がいいんでしょうね。

いしかわ　そうだね。どっちも本筋の文化じゃないみたいなところがあるから。昔ね、SFとマンガって仲良かったんだよね。ファン層がダブってて、SF大会にもマンガの読者がいっぱいいたし、マンガ家もSFをよく描いてて凄い親和性があったんだけど。それはやっぱり両方とも日陰の文化だった。でも、ファンは少数というわけじゃないんだよ。

——日陰だけど熱狂的なマニアはたくさんいたんですね。

いしかわ　だから20年前30年前から出版社を支えてたのはマンガだったんだけど、やっぱり編集者はみんなマンガ以外の仕事したかったんだよね。あの頃は「俺はマンガなんかやりたくないのに……」っていう連中がマンガを作ってた。だから、なんとなく漫画家もちょっと肩身が狭い思いがあって、SFは当時は新しい文化として凄い人気があって新しい試みもやってたんだけど、小説としては評価されてなかったんだよ。実際にSF小説で直木賞を獲った作品は一本もないから。筒井康隆も何度も候補になって、とうとう獲れなかったし。プロレスもそんなマンガやSFに近いところがあるよね。

——プロレスはずっと日陰者のジャンルですね。

いしかわ　プロレスだって、最盛期は平均視聴率を20パーセント獲ってても、誰もスポーツとして認めてなかったもんね。

——常に白い目で見られるようなところはありましたからね。梶原一騎は、日陰者のジャンル同士をうまく組み合わせたということなんですね。

いしかわ　そうだねぇ。時代性もあったと思うけどね。梶原一騎が出てきた頃は失なわれつつあった父性や、理想の父親像を世間が求めるようなところがあって。

——いわゆる雷オヤジが求められて。

いしかわ　その人気が終わった頃には格闘技・プロレスブームが訪れて、それとうまく乗っかった。そこはやっぱり梶原一騎はうまかったし、人気があるときって、うまく回っていくから。人気があるがゆえにいい漫画家と組めて、原作以上のものを漫画家が描いてくれたりね。たとえば『あしたのジョー』とかさ。

——あの作品の成功は、ちばてつや先生の筆によるところも大きかったわけですよね。

いしかわ　そこは時代や人とのめぐり合わせもあるけど、やっぱり梶原一騎はおもしろかったし、ああいう人間はもう出てこないよね。実人生

小林まことはプロレス好きだけど凄く冷静な視線が常にあった

でもちょっと危なかったんだけど。

――逸話は数多いですよね（笑）。

いしかわ　銀座の文壇バーに梶原一騎が行ってもさ、彼に話しかける作家や漫画家がいないんだよ。いっつもカウンターで一人で黙って酒を飲んでて、たまに編集長クラスが話しかけたりするんだけど、基本は誰も話しかけない。出版社のパーティとか行ってもね、会場の真ん中で酒を持って立ってんだけど誰も話しかけないんだよ。で、たまに小池一夫がちょっと話したりするんだけど。

――小池先生クラスでやっと（笑）。取り巻きもいなかったんですか？

いしかわ　取り巻き……ホントの意味での子分はいたけど、子分以外はあんまり付けようとはしなかったね。孤独な人だったね。

――よく言われるのは、マンガ原作者は地位が低かったので強面になろうって意識が強かったとか。

いしかわ　そういうところもあるよね。もともとマンガ原作者志望だったわけではないし。父親もインテリで新聞記者か何かだったわけだから。マンガ原作者としての自分に忸怩たるものはあったかもしれないよね。梶原一騎が楽しく談笑してるところなんか、見たことないもん。

――プロレスとマンガで一時代を築いたのに。タイガーマスクによって空前のプロレスブームが起きたわけですから。

いしかわ　タイガーマスクがまさか本当に出てくるとは思わなかったもんなぁ。それまで、猪木とか馬場とか実在の人物がマンガに出てくることはあったけど。だって、ジャイアンツ物語で王貞治、長嶋茂雄はマンガに出てくるけど、マンガの主人公が現実に、ジャイアンツの四番バッターになることはないじゃない。

――出てこないですよねぇ（笑）。しかも、アニメ以上に魅力的で。そのほかに印象に残っている格闘技・プロレスマンガってありますか？

いしかわ　『1・2の三四郎』だけが唯一おもしろかった。あとはつまんなかったんじゃない？（笑）

――どこが違うんですか？　『1・2の三四郎』とほかの作品では。

いしかわ　う〜ん、格闘技にインするかどうかって話だよな。

――イン？

いしかわ　つまり、淫乱の淫だよね（笑）。『1・2の三四郎』はマニアが描いてるプロレスマンガじゃなかった。小林まこと本人はプロレス好きだったと思うけど、凄く冷静な視線が常にあってあんまり入り込まなかった。まずは読者のことを常に考えて、そして自分が楽しんで、おまけにちゃんとプロレスの知識がある。そのバランスがよかったんだろうね。

――要するに漫画家の趣味マンガになっていない、と。

いしかわ　それとやっぱり本人の才能があったんだけどね。やっぱりマンガ描くのは才能がいるから。あたりまえの話なんだけどさ（笑）。才能のある人が、たまたま描けるほどプロレスの知識があるかないかってことだねぇ。……あっ、もう一つおもしろかったマンガがあった！

――なんでしょうか⁉

いしかわ　梶原一騎が原作の『プロレススーパースター列伝』だよ。

――なるほど！　納得です。

いしかわ　あれはねぇ、原田久仁信が職人に徹したんだよね。あの人はあんまり主張のない人なので、原作者の意を汲んで原作者の喜びそうに描くのが凄くうまいんだよ。梶原一騎はあの頃、すでに力が落ちてておもしろい原作を書けなくなってきてたんだけど、その衰えた部分を原田久仁信のサービス精神が埋めていた。

――原田先生が梶原ワールドを支えていたというか。

いしかわ　うん、梶原一騎は当時すでに荒唐無稽な存在になってたんだよ。あの時期、ほかのマンガを読んでても、ホントに通用しない人になっちゃったなぁっていう……。

――その頃は『サンデー』のラブコメみたいのが主流になりつつあったような時代だですし……。

いしかわ　梶原一騎が生きられる時代じゃないよね（笑）。『タッチ』がいる世界で両立はできないだろ。

――そうですね（笑）。

いしかわ　おそらく『列伝』も時代には通用しない原作だったんだけど、それを原田久仁信のサービス精神が埋めてたんだよ。あの人はオリジナリティがないけど、職人的にまとめていくのが凄くうまい人だったから。わかりやすくて初心者でも楽しめて、マニアでも原田久仁信が埋めたウソの部分が楽しめるっていう珍しい連載だった。で、原田久仁信はほかの人と組んでもダメだったね。梶原一騎のあの荒唐無稽がないと。

――確かに原田先生のマンガで一番印象深いのは『列伝』ですね。

いしかわ　DDTの『スーパースター列伝』って知ってる？　DDTの会場で売ってる16枚か20枚のペラペラのマンガがあるんだよ。原作・男色ディーノ、マンガは原田久仁信なんだけど。

――おもしろそうですね（笑）。

いしかわ　飯伏幸太物語やポイズン澤田物語があるんだけど、それがつまんないんだよ（笑）。

――そ、そうなんですか。いしかわ先生にそう言われたら……。

いしかわ　まぁ、男色ディーノも職業が原作者じゃないからいいんだけどさ（笑）、梶原一騎の原作ってね、たとえると大木の幹にボコボコ穴が開いてるようなもの。そこを原田久仁信は埋めていけたんだけど。男色ディーノはね、幹が細いんで埋めようがないんだよな。それでも毎号買って、俺に原作を書かせろよと思いながら読んでんだけど（笑）。

――さっそくオファーがくると思います（笑）。話を戻しますと、『列伝』からプロレスに入り込んだ人はけっこういるかもしれませんね。わかりやすいですから。

いしかわ　わかりやすいよ。ホントにわかりやすい。梶原一騎の太くて穴だらけの原作を原田久仁信が丁寧に丁寧に埋めて読めるものにしたんだよ。それは原田久仁信の手柄だけど。

――ちなみに『グラップラー刃牙』はどのように……？

いしかわ　いや、あれはもう『刃牙』っていうか、板垣恵介物語（笑）。刃牙の物語じゃないじゃん。

――板垣先生の世界観ですよね（笑）。

いしかわ　あれは板垣の自伝というか、『青春の門』みたいな板垣大河ロマンだよ。あれはあれで凄い。「自分はどれほど格闘技が好きか！」ってことを青筋立てながら描いてて、あれはあれで淫してるけどそれが極端だからおもしろいんだよね。あの極端さは凄いよな。

――小林まこと先生の熱狂と冷静で中和された『三四郎』、梶原一騎とその穴を埋めた原田先生が描いた『列伝』、「俺が俺が」感が極端に炸裂した板垣先生作品。いしかわ先生オススメはこの3作品ということですね。

いしかわ　まずはこの3つを押さえておけばいいんじゃない。結局、知識や愛情も必要だけど、マンガ家としての力があるかってことだよな。

【10年5月31日／都内・某所にて収録】

ファイアー キング・カフェ
Firekin Cafe
いしかわじゅん
那覇
ここじゃない
どこかを探して
光文社

いしかわ・じゅん■1951年2月15日、愛知県出身。マンガ家、漫画評論家。マンガ作品以外にも小説やコラム等、著作多数。光文社より那覇を舞台にした小説『ファイアーキング・カフェ』が最新刊（￥1680）。オフィシャルホームページ→http://ishikawajun.com/

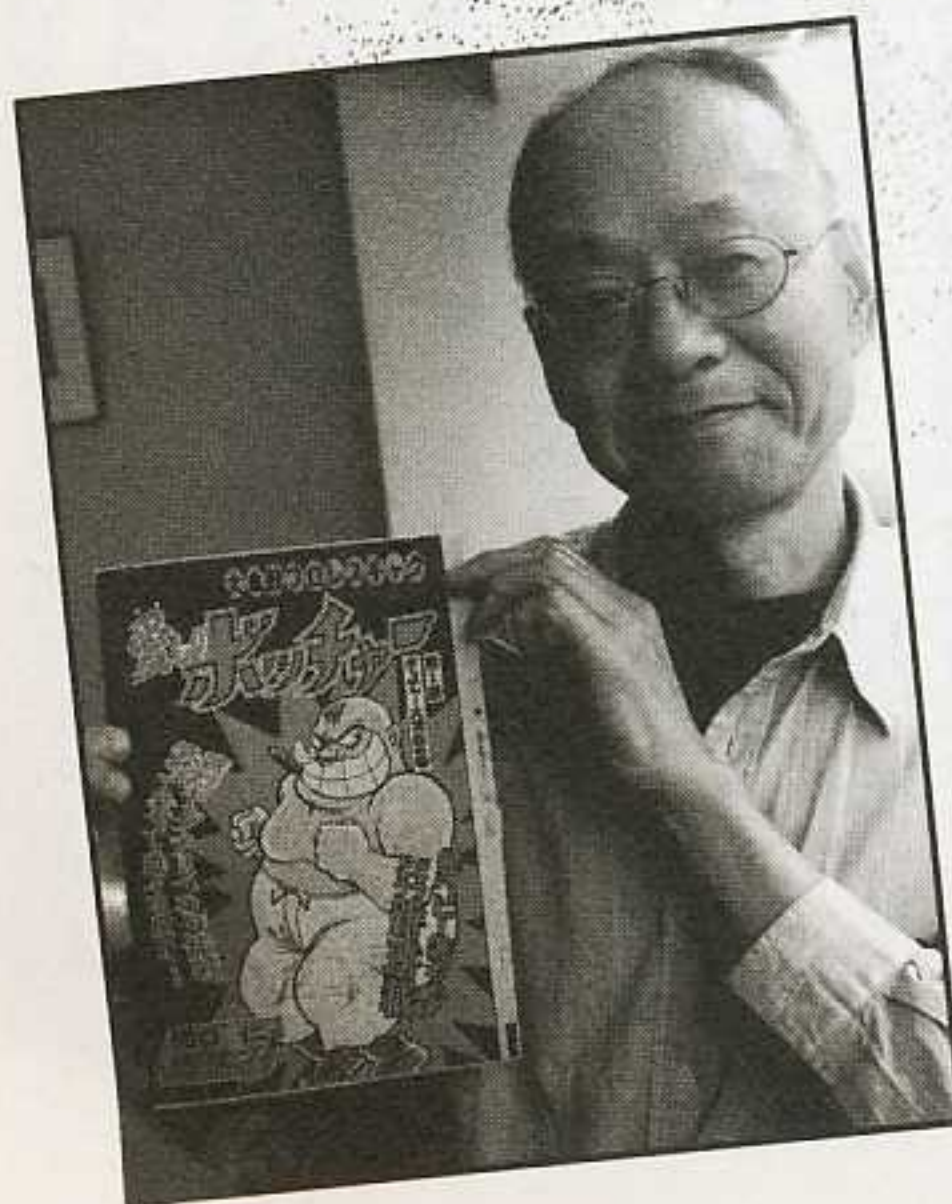
凄く冷静な視線が常にあった

埋めてたんだよ。あの人はオリジナ

わかりやすい。梶原一騎の太くて穴

『ファイアーキング・カフェ』が最新刊（¥1680）。
オフィシャルホームページ→http://ishikawajun.com/

プロレスの
神さま
どーも
ありがとー。
河口仁（談）

仁

超癒し系プロレスギャグ漫画家が語る
わーいわーいプロレスって楽しいな～と思う話

河口仁
『愛しのボッチャー』作者

かつてプロレスギャクマンガ『愛しのボッチャー』で人気を博し、『週刊ゴング』では「ワンポイントパフォーマンス」という連載で、常にプロレスの楽しさをポジティブに描いてきた河口仁先生。そんな河口先生は、どのようにして「プロレスの神様、どーもありがとー」と思うようになったのか、たっぷり語ってもらいました！

聞き手／堀江ガンツ　画／河口仁

アマリロでザ・ファンクスの試合を観たらプロレス八百長論が全部吹っ飛んだんです

——河口さんは『愛しのボッチャー』や、『週刊ゴング』で連載していた『ワンポイントパフォーマンス』など、プロレスギャグマンガで知られてますけど、やっぱり子どもの頃から大のプロレスファンだったんですか？

河口　いや、子どもの頃は興味なかったんですよ。

——あ、そうだったんですか。

河口　僕はとにかくマンガが大好きで、小学生の頃からマンガを描いてましてね。で、中学のときに隣町にやっぱりマンガ描いてる同い年の三井敏夫という友人がいて、彼が凄くプロレスファンだったんです。で、放課後にマンガ好き同士で会うと、僕はマンガの話がしたいのに、彼は「プロレスがおもしろい」って一生懸命話すんですよ。そこが入口です。

——友だちの影響で、中学時代からのプロレスファンになった、と。

河口　いや、ちゃんとプロレスファンになったのは高校を卒業してからかな。

——ずいぶん先までファンにならなかったんですね（笑）。

河口　僕の田舎は山口県の長門市なんですけど、高校を卒業して二人とも上京したんですよ。彼は日大の芸術学部に入って、僕はデザインの専門学校に入ったんです。で、上京したあと二人で初めて蔵前国技館へプロレス観戦に行ったんです。

——ようやくそこで初観戦。

河口　ジャイアント馬場vsボボ・ブラジルのインターナショナル選手権でしたけど、まだそのときはプロレスファンになってませんでした。

——なかなか頑なですね（笑）。

河口　でも、それから何度も一緒に観に行くようになると、好きとか好きじゃない以前になじんでくるじゃないですか。で、いつのまにか僕も好きになってた感じですね。

——知らず知らずのうちにプロレスファンになっていた、と。

河口　だから僕がプロレス好きだっていうのを本当に自覚したのは、友だちが田舎に帰ってから。彼は大学卒業して山口に帰ってデザイナーになったんだけど、僕は21歳で赤塚不二夫先生のフジオプロにアシスタントで入ったんですよ。フジオプロにはアシスタントがたくさんいたんですけど、みんなプロになりたい人たちだから、空いた時間は映画を観たり本を読んだりして、マンガに活かすための勉強をしている。でも、僕は時間が空いたらいつもプロレスを観に行ってた（笑）。友だちの付き合いで行ってたのに、友だちが田舎に帰っても観に行ってるんだから、僕はプロレスが好きなんだなあって思いましたね。

70年代末から80年代初頭にかけて、絶大な人気を誇ったドリーとテリーのザ・ファンクス。猪木の"過激なプロレス"の向こうを張って、プロレスのおもしろさを存分に見せつけていた。

——そこでようやく自分の気持ちに気づいた、と（笑）。当時は誰のファンだったんですか？

河口　猪木の試合もドキドキしながら観てましたし、馬場も観てましたけど、僕はファンクスが好きだったの。とくにドリーが。

——あの冷静沈着な正統派レスリングに惹かれたですか？

河口　いや、単純にドリーは動きがゆっくりしていてわかりやすかったの（笑）。

——動きがゆっくりだから理解できる（笑）。

河口　僕は速い動き苦手だったから。そうやってプロレスが好きになったんですけど、赤塚先生のフジオプロで周りからいつも言われていたのは、「プロレスなんて八百長だぞ」「あんなの観てもおもしろくない」ってことなんです。

——プロレスファンって、なぜかそういう迫害に遭いましたよね。

河口　こっちも「こういうおもしろさがあるんだよ」って言いたいんだけど、向こうは最初からプロレスに興味がないから聞いてくれないの。まだ、こちらも上手に伝える言葉を並べることができなかったし。

——八百長論を覆すような、それでもおもしろいんだっていう理論武装ができていなかったんですか？

河口　理論武装とか、そこまでの頭が回らなかった（笑）。実際、理論武装をしようにも、僕もプロレスがどうなってるのか、実体がわからないから。裏側のことを見てもいないのに勝手にしゃべれないしね。

——なるほど。八百長論に対して言い返そうにも、自分自身がプロレスのなんたるかを本当のところは知らないからしゃべれない、と。確かにそうですね。

河口　だから「八百長だぞ」って言われながらも、そうなのかどうかわからないし、そのままずっと楽しんできました。

——そのまま何十年も経っちゃいましたか（笑）。

河口　でもね、自分なりに「プロレスってこういうもんだ」って思ったきっかけはあったんですよ。僕が28か29歳のとき、フジオプロを辞めたんですよ。で、77年の暮れに全日本プロレスの『世界オープンタッグ選手権』がありましたよね？

——ザ・ファンクスが優勝して人気が大爆発した大会ですよね。

河口　フジオプロを辞めて自由な時間ができたから、その『オープンタッグ』の2カ月前に、アメリカへ一人旅に出たんですよ。本場のプロレスを自分の目で観てみようって。

——それはロマンあふれる旅ですね！

河口　そして、まずはテキサス州アマリロへ行ったんです。

——おお～！　いきなりザ・ファンクスの住む町へ行きましたか。

河口　やっぱりファンクスの試合を、ファンクスの地元の会場で、地元の客と一緒に観たい。それでアメリカまで来たようなものでしたから。

——どうでした？　アマリロで観るファ

ンクスは。
河口　アマリロでファンクスの試合を観たらね、日本にいるときにいつも言われ

河口　それでアマリロでは、ホテルのフロントのオババチャンが、旦那がドリーの友だちってことで、ファンクスに会わせ

しのボッチャー』で出たんです。
——あのマンガは、どのようなきっかけで生み出されたんですか？

プロレス八百長論が全部吹っ飛んだんです

ンクスは。
河口　アマリロでファンクスの試合を観たらね、日本にいるときにいつも言われていた「テリー・ファンクは相手の攻撃を待ってる」とか「だから、やらせなんだ」とか、そういうのが全部吹っ飛んだ！
——吹っ飛びましたか！
河口　アマリロで試合を観て、プロレスはインチキとか本気とか、そういう問題じゃない。〝これなんだ！〟って思ったんです。
——真剣勝負だとか八百長だとかを超えたものでしたか。
河口　超えた超えないではなく、ある意味、村祭りだったの。
——村祭り！
河口　うん。お客さんは地元のカウボーイとか、農家の人たちばかりですよ。週に一回、その人たちが、ジイちゃんバアちゃんからね、父ちゃん母ちゃん、ちっちゃい子どもまで、家族全員で集まってくるの。それで、テリーやドリーの試合をワーッて応援してるの。
——それを観て〝これがプロレスだ〟と。
河口　うん。やっぱり日本とアメリカって文化が違うんだよね。日本だと真剣勝負とか、インチキとかにこだわるけど、村祭りは真剣勝負は関係ないですよね。
——「あそこの村祭りはガチだぜ」とかありませんよね（笑）。
河口　そんなことは考えずに、熱狂的に楽しむ。それがプロレスだと思ったし、そのあとにあった『オープンタッグ』のファンクスvsブッチャー＆シークなんかも、そういうプロレスが日本でも、より花開くきっかけだったんじゃないかなあ。
——ファンクスvsブッチャー＆シークっていうのは、日本でもアメリカンプロレスの神髄を見せてくれたわけですね。
河口　それでアマリロでは、ホテルのフロントのオバチャンが、旦那がドリーの友だちってことで、ファンクスに会わせてくれたんですよ。あと、ファンクスのプロレスは1週間のうち3～4カ所、アマリロ近郊を回るんですけど、レフェリーの人が「車に乗せてってやる」って言ってくれて。それで、ちょっとサーキットについていきました。
——それは貴重な体験ですね。古き良きアメリカンプロレスを、サーキットで回れるっていうのは。うらやましいです。
河口　あとはセントルイスのキール・オーディトリアムにも行きました。
——おお！　NWAの総本山！
河口　それからマジソン・スクエア・ガーデンにも行きました。MSGはちゃんとプロレスがやってる日を調べて行ったんですけど、なぜかやってなくて、その代わりモハメド・アリの試合を観ましたね。
——それもまた貴重ですね～。
河口　あんまり試合の印象はないんですけどね。MSGの一番上のほうで、黒人たちがワーワー騒いでたのを覚えてるくらいで。それが一番最初のアメリカ一人旅、プロレス一人旅です。
——その体験が、その後の礎になってる部分はありますか？
河口　そうですね。で、アメリカから帰ってきて2年後、79年に『愛しのボッチャー』というプロレスギャグ漫画で、『週刊少年マガジン』でデビューしたんです。
——あれはデビュー作だったんですか。
河口　その前も単発ではやってましたけど、週刊の連載は初めてでしたね。あ、その前に『朝日小学生新聞』というのがあって、あそこでプロレスのギャグ漫画を少し描いてました。その1年後ぐらいに『愛しのボッチャー』で出たんです。
——あのマンガは、どのようなきっかけで生み出されたんですか？
河口　ええとね、フジオプロを辞めたとき、やっぱり同じようにプロを目指してるアシスタント仲間がいたんですよ。で、彼は『少年マガジン』に持ち込みをすると き、「ちょっと一人じゃ不安だから、ついてきてくれ」って言われたの。それでついていって、ついでに自分の原稿を持っていったら、編集の人が見てくれて、「あ、プロレスギャグか。また持っておいで」って言われて、それがきっかけ。
——なるほど。ブッチャーを主人公にしたっていうのは、やっぱり、あのキャラクターが際立っていたからですか？
河口　とくに主人公にしようと思ってたわけじゃないんですよ。プロレスファンだから、好きなレスラーが何人もいるわけじゃないですか。だけど、好きだからマンガになるってわけじゃないしね。で、たまたま、ブッチャーのコロコロした体型でコマを動かしてたら、「ああ、このキャラクター、おもしろい」って言われて。で、いろんな性格やエピソードをつけて、話を作ったんです。
——あんないいキャラクター、なかなかないですものね。あの体型、あの顔（笑）。
河口　でも、あのマンガは自分のなかで大変だったんですよ。自分はプロレスファンだから、プロレスのこといっぱい知ってるわけですよね。だから、プロレスのいろんなことをいっぱい出したいわけ（笑）。でも、『少年マガジン』はプロレスファンだけが読むわけじゃないから、プロレスの知識が何もない人でも楽しめるものを求められる。だから、「あ～、ここでこれを描けたらなあ」と思ったことはたくさんありました。だけど、そういうのを何回も繰り返して、ある意味、鍛えられましたね。
——プロレスを知らない人も楽しませるプロレスマンガを描くトレーニングができた、と。
河口　いま、プロレスラーでも、プロレスの技術は凄くうまいけど、プロレスをあまり知らないお客さんの前で表現するのがうまくできない人もたくさんいるじゃないですか。
——確かにたくさんいますね。
河口　それは、プロレスファン以外の前で試合をする訓練ができてないんだと思います。僕が『少年マガジン』で描いてたように、一般の人に専門用語を使わないでプロレスを伝える、それがいまのプロレス界には必要なんじゃないかな。
——それはプロレスの基本であり、マン

現在、河口仁先生の最もお気に入りのレスラーは、鈴木みのる。地方巡業でも必ずその土地のファンを満足させているところが好きだとか。なお、この画は河口先生の描きおろしです!

河口仁『愛しのボッチャー』

ガの基本でもある、と。

河口　そうですねぇ。それはもう、映画も何も、みんな通じるものじゃないかな。

——でも、『ボッチャー』によってブッチャーの知名度はかなり上がりましたし、また大悪党だったブッチャーのイメージも変わりましたよね？

河口　ああ〜、それは気にしましたね。みんながマンガの『ボッチャー』をおもしろがってくれるのはいいんですけど、アブドーラ・ザ・ブッチャー自身にも取材がいっぱい行きだしちゃって。一般の週刊誌なんかにも、ブッチャーの記事がいっぱい出たんです。でも、僕はプロレスファンなんで、悪役はそのイメージを保ってほしい。ところが、自分のやってることが矛盾してるの（笑）。

——そんなジレンマがありましたか。

河口　僕はギャグ漫画家だから笑いを表現してるけど、ブッチャーはヒールのプロレスラーだから、怖いブッチャーでいてほしいの。でも、たくさんの人が取材に押し寄せると、ブッチャーもそりゃ人間だからうれしいし、いままで見せなかった部分もいっぱい見せてサービスしだしたんです。

——自ら"悪"ではない部分を見せだした。

河口　もちろん試合では怖いブッチャーのままでしたけど、リングを降りるとそれまでは決して見せなかった笑顔なんかも見せだして。それを見たときに、「えっ⁉　違うだろう！」って思いました。一般の人が『ボッチャー』をきっかけにプロレスやブッチャーに目を向けてくれるのは凄くうれしいけど、ブッチャーのイメージが怖いブッチャーじゃなくなってしまったのは、よけいなことをしちゃったのかな……って。

——そんな思いも抱いていたんですね。ちょうどその頃、ブッチャーはコマーシャルにも出ましたよね。

河口　サントリーレモンのCMに出てました。当時、『少年マガジン』の編集からブッチャーを使ってマンガと一緒にコマーシャルをやる。そして、僕のイラストが描かれたブッチャーグラスが当たるっていうのをやってましたね。

70年代末、全日本プロレスのトップヒールだったブッチャー。その人気は『愛しのボッチャー』のモデルとなることで、一般層まで広がっていったが、"悪"のイメージが薄れることになったのも確かだった。

『ボッチャー』によってブッチャーの怖いイメージが薄れたのは気にしました

——そんなコラボもあったんですね。河口先生がブッチャー本人とお会いしたことはあるんですか？

河口　単行本が出てから全日本の会場に行って、広報を通じて本をプレゼントしたんですよ。「この本は、この人があなたをモデルに描いたんだ」って紹介してくれて。それだけですね。あとで、ほかの人にブッチャーが「このマンガは、俺にいくら入るんだ？」って言ったらしいんです。そしたら「バカなこと言うな。いっぱい宣伝してくれてるんだぞ」って言ってくれたそうなんですけど。

——ブッチャーはお金に関してはしっかりしてる人らしいですからね。

河口　その話を聞いたら、ちょっと近づきたくなくなって（笑）。そうじゃなくても、基本的に僕はレスラーとはちゃんと距離を保ってるんです。『週刊ゴング』とか『週刊プロレス』に描いてた頃は、会おうと思えばレスラーと会う機会はいくらでも作ってもらえたんだけど、そうすると一般ファンの感覚を忘れるんじゃないか、薄れるんじゃないかって、それを気にして。

——そこは大事ですよね。

河口　やっぱり、堀江さんにしても、文章を書くとき、自然に自分の気持ちとかが出るでしょう？　僕もファンとしてたくさん描いてきましたけど、実際に会って、その好き嫌いが出るのはイヤだったんです。だから、アニマル浜口さんを僕は大好きでしたけど、現役を引退してから浅草に遊びに行ったりしたんです。

——プロレス専門誌に描くようになってからも、プロレスファンであるという一線は守ってたわけですね。

河口　でも、一度だけその一線を越えちゃったことがあるんです。

——どんなことがあったんですか？

河口　最初に話した僕がプロレスファンになるきっかけになった友人、三井敏夫がいましたよね。彼はいまから14〜15年前、44歳のときにガンで亡くなったんです。

——そうなんですか……。

河口　彼は生前、天龍と阿修羅原の大ファンでね。で、いよいよ病気が重くなって、先があまりなくなったとき、「いま、彼に対して自分は何ができるだろう」って思った。それで、天龍源一郎選手にお願いに行ったんです。

——いままで、天龍さんにそういうお願いとかはしたことないわけですよね？

河口　ありません。お願いできる間柄でもないしね。こっちはただ、『週刊ゴング』とか雑誌で描いてるだけで、天龍選手のいちファンでしたから。でも、このときばかりは天龍選手に会いに行って、「いま僕の友だちで熱烈な天龍さんのファンが、病気と闘っています。彼に対して何かコメントをもらえますか」ってお願いしたんです。そしたら天龍選手が、録音するテープレコーダーに向かって話してくれました。三井に話しかけるように。それもね、8分くらい、

レスラーだから、怖いブッチャーでいてほ

ッチャーを使ってマンガと一緒にコマー

怖いイメージが薄れたのは気にしました

かなり長く話してくれたんです。

——天龍源一郎はやっぱり男ですねえ！

河口　それで僕は、そのテープを持ってすぐに飛行機で山口県の彼が入院してる病院に行って、ベットのそばでそのカセットテープを聞かせたんです。その時点で彼は、息はしていたけど言葉は出せない状態。その彼の顔を見ながら「天龍さんにメッセージもらったから」って言って。あと彼はアニマル浜口さんのファンでもあったから、浜口さんと奥さんの初枝さんもメッセージを入れてくれて。その3人のメッセージを聴かせたんですよ。

——大好きな3人のメッセージなんですね。

河口　彼は話しかけても、なんの反応も示せない状況でしたけど、天龍さんや浜口さんのメッセージを聴かせたら、彼の息づかいで〝あ！　聴いてる〟ってわかりました。それで僕をプロレスファンにしてくれた友だちに、喜んでもらえることができたかなって思いました。天龍さんとアニマル浜口さんと奥さんには本当に感謝しています。

——ファンとしての立場を守ってきた河口さんが、それを越えた数少ないエピソードがそれなんですね。

河口　大げさに言えば、そういうことですかね。僕は当時、『週刊ゴング』の連載で「天龍、阿修羅原、アニマル浜口の熱烈ファンの友だちが、いま病気と闘ってる」っていうことは描いたんですけど、いま話したエピソードは描かなかったんですよ。

——なぜですか？

河口　その時点でね、まだ自分のなかで生々しかったのもあるし、あともう一つは、プロレスラーにそういうことをやってもらいたい病気と闘ってるプロレスファンは、ほかにもいっぱいいますよね。でも、できない立場の人がほとんどじゃないですか。それなのに、自分がそれをやったということをマンガに描いたら、見せびらかしになる。それがイヤだったんですよ。

——なるほど。同じような境遇のプロレスファンの気持ちを考えてのことでしたか……。

河口　でも、天龍さんや浜口さんには本当に感謝してるから、いつか話す機会がきたら話させてもらおう、とは思ってたんです。それがいまなのかなって。

——いやあ、貴重なお話をしていただき、ありがとうございます！

河口　天龍さんについては、もう一つ個人的なエピソードがあるんですけど、87年に母が脳梗塞で倒れたんですよ。で、僕は2月から山口県の田舎に帰ってずっと介護をしてたんです。それから数カ月プロレスから離れていたんですけど、たまたま地元に全日本プロレスが来たんで、たまたま観に行ったんです。そしたら、こんな田舎まで『ゴング』の小佐野さんとか、マスコミの人たちが来ていて、「なんで、こんなところまで来てるんですか？」って聞いたら、「じつは今日、ここから天龍と阿修羅原が天龍革命をスタートさせるんです」って言うんですよ。

——へえ！　天龍革命がスタートする瞬間を観てるわけですか。それは運命的ですね。

河口　本当に偶然なんですけど、母の介護をして東京を離れていた天龍ファンである河口仁の地元で、天龍革命がスタートしたんです。そのときばかりは心から「プロレスの神さま、どーもありがとー！」って思いましたね（笑）。

——ハハハハハ！「河口仁（談）」というわけで、今日はありがとうございました！

【10年6月2日／都内・某喫茶店にて収録】

『河口仁のプロレスの河』
天龍プロジェクト
第2回
2010.6.9
新宿フェイス

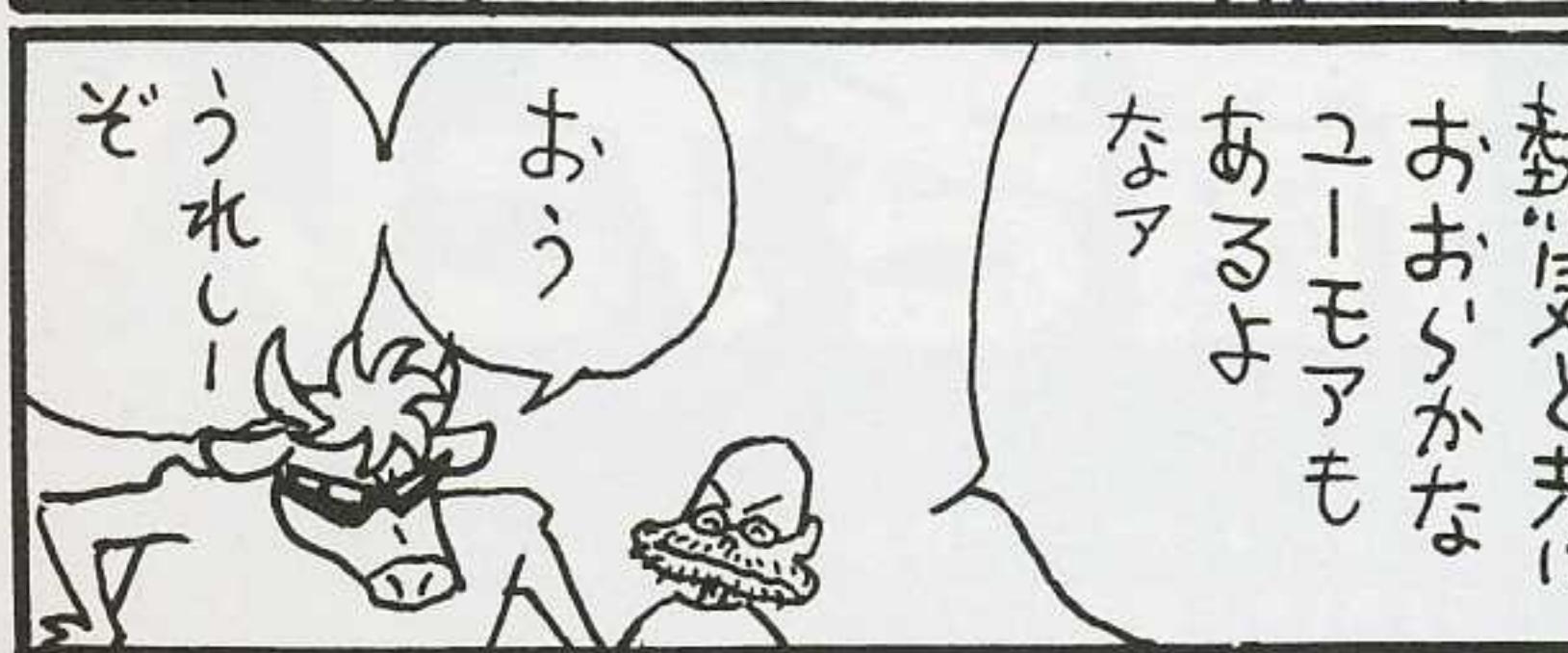
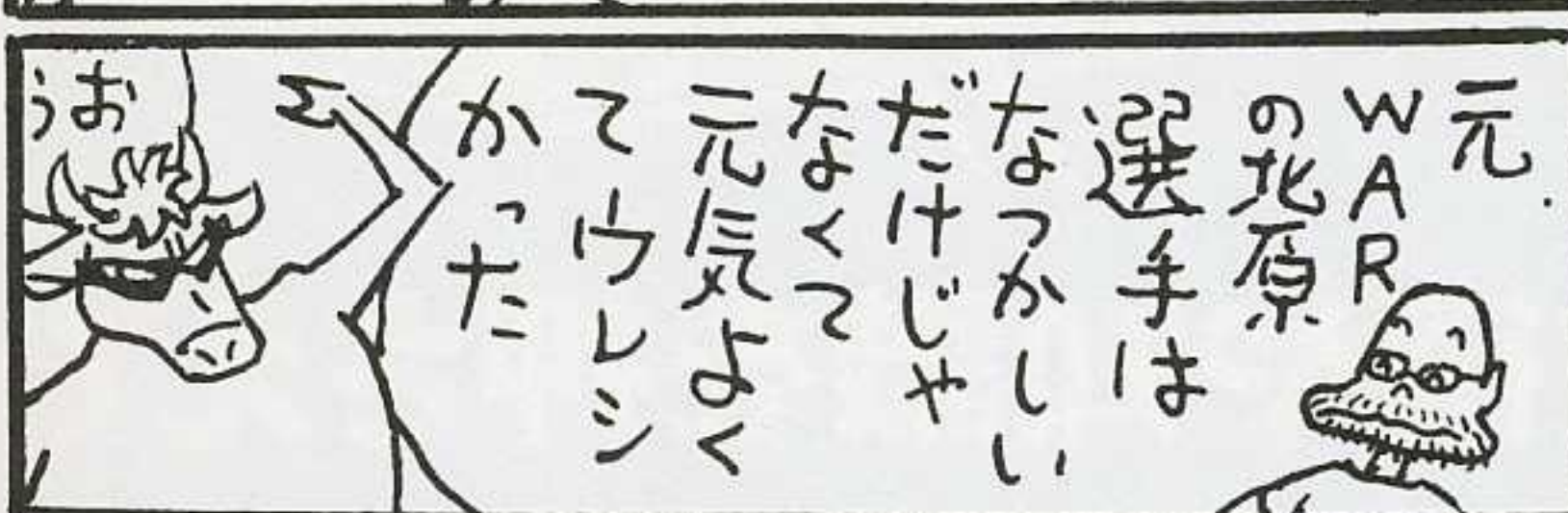
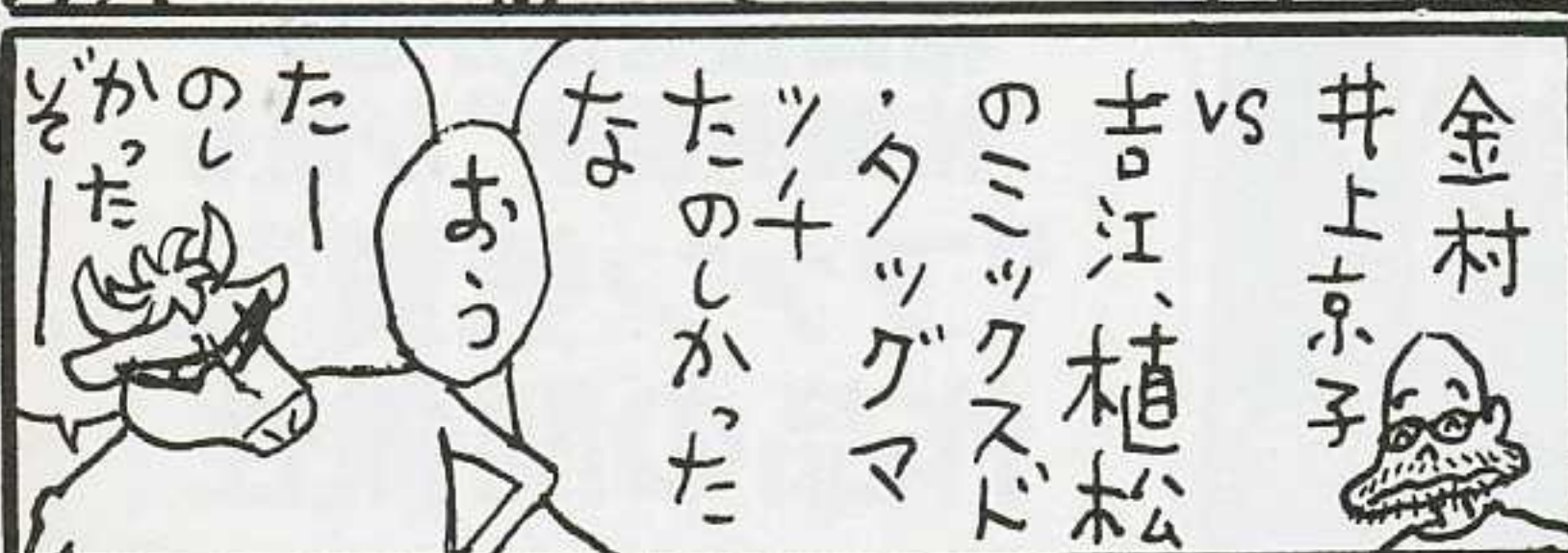
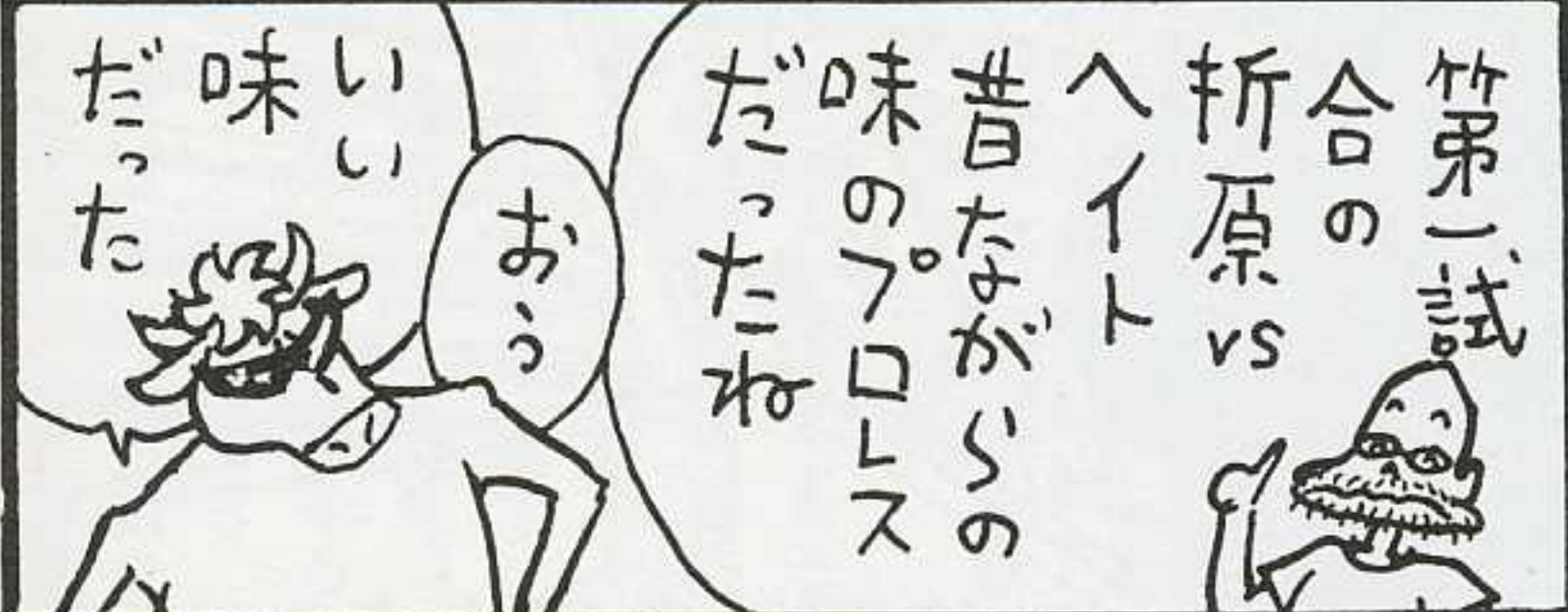
メインエベントで高山たちにやられまくられた天龍
まゆをそった関本
後藤

第一試合の折原vsヘイト
昔ながらの味のプロレスだったね
おう
いい味だった

金村 井上京子vs吉江、植松のミックスド・タッグマッチたのしかったな
おう
たーのしかったぞー

元WARの北原選手はなつかしいだけじゃなくて元気よくてウレシかった
うおー

西口プロレスの選手たちの試合もおもしろかったね
ハハハハ
笑った笑った

天龍プロジェクトって熱気と共におおらかなユーモアもあるよなァ
おう
うれしーぞ

☆世界6人タッグ王者決定戦　天龍、百田、北原vs高山、後藤達俊、関本

——今回、『kamipro』は格闘マ
ンガ特集なんですよ。
つの丸　でも、ボク格闘マンガ描い

——へえ、ジークンドー習ってたん
ですか！　どこで習えるんですか？
つの丸　サークルみたいな感じでし

マネして、壁に頭突きしたり（笑）。
そういう世代ですから。ただ、学校
にボクシング部やレスリング部があ

うになって。
——パラエストラに通うようになっ
たきっかけは、なんだったんですか？

格闘技って感じで。
つの丸　そうなんですよ。
——それをやられちゃうと、ファン

マ…マ…マキバオーが…!!!

とんだ〜〜〜っ!!!

うっ…

格闘技を描かない
“格闘漫画家”が語る
“ファン気質”と
作品の関係性

©つの丸／集英社文庫コミックス

「格闘技マンガを描くなら、技術や知識を押さえて ドラマや“魂”を描きたい」

『みどりのマキバオー』作者 つの丸

『みどりのマキバオー』の作者は柔術家だった！
パラエストラ千葉ネットワークの道場に通っているという
つの丸先生は、5.30修斗JCBホール大会に、ジムの仲間たちの
応援のため、忙しい週刊連載の合間を縫って来場。
その大会終了後、本誌のインタビューに答えてくれた。はたして、
つの丸先生と格闘技はどんな関わりがあったのか。
また、格闘技マンガを描く可能性についても聞いてみた。

聞き手&撮影／堀江ガンツ

——今回、『ｋａｍｉｐｒｏ』は格闘マンガ特集なんですよ。

つの丸　でも、ボク格闘マンガ描いてないじゃないですか（笑）。

——そうなんですけど「格闘技をやってる漫画家」ということで、格闘技との関わりをいろいろうかがっていこうと思います。つの丸先生は柔術をやられてるんですよね？

つの丸　そうですね。やってるっていっても、ここ数年ほとんどやってないんですけど。

——いまは「在籍してる」って感じですか。

つの丸　行きたいんですけどね。少なくとも（『たいようのマキバオー』の）連載が始まってからは、5回行ったか行かないかぐらいです。

——週刊連載しながら、柔術ってなかなかできないでしょうからね。もともと格闘技はいつ頃から好きだったんですか？

つの丸　好きなのはちっちゃい頃からですね。俺らくらいの世代だと、ブルース・リーがみんな好きだし、プロレスもいい時間帯で放送してたから、格闘モノが好きじゃない子どもがいないくらいでしたから。

——男の子はみんな好きでしたよね。

つの丸　学校でも普通にみんなプロレスごっこやってたし。でも、最初はブルース・リーなんですよね。だから格闘技を実際にやり始めたのも、最初はジークンドーだったんですよ。

子どもの頃、ブルース・リーとジャンボ鶴田が大好きでしたね

——へえ、ジークンドー習ってたんですか！　どこで習えるんですか？

つの丸　サークルみたいな感じでしたけどね。中村頼永さんの弟子たちがやってる支部が全国にあって、うちの近く、（千葉県）市川にある体育館でもやってたんで、始めたんですよ。ちょうど（『モンモンモン』の）連載が終わって、次の連載が始まるまでって、ほとんど何もしなくてよかったんで。

——子どもの頃や学生時代は格闘技をやろうと思わなかったんですか？

つの丸　いや、やりたかったんですよ。将来の夢は「プロレスラー」だった頃もあるし。

——そうなんですか！

つの丸　『1・2の三四郎』を読んでマネして、壁に頭突きしたり（笑）。ただ、学校にボクシング部やレスリング部があればやってたんでしょうけど、そういう学校じゃなかったんですよね。でも、プロレスを観るのはずっと好きでした。

——どなたのファンだったんですか？

つの丸　ジャンボ鶴田です。

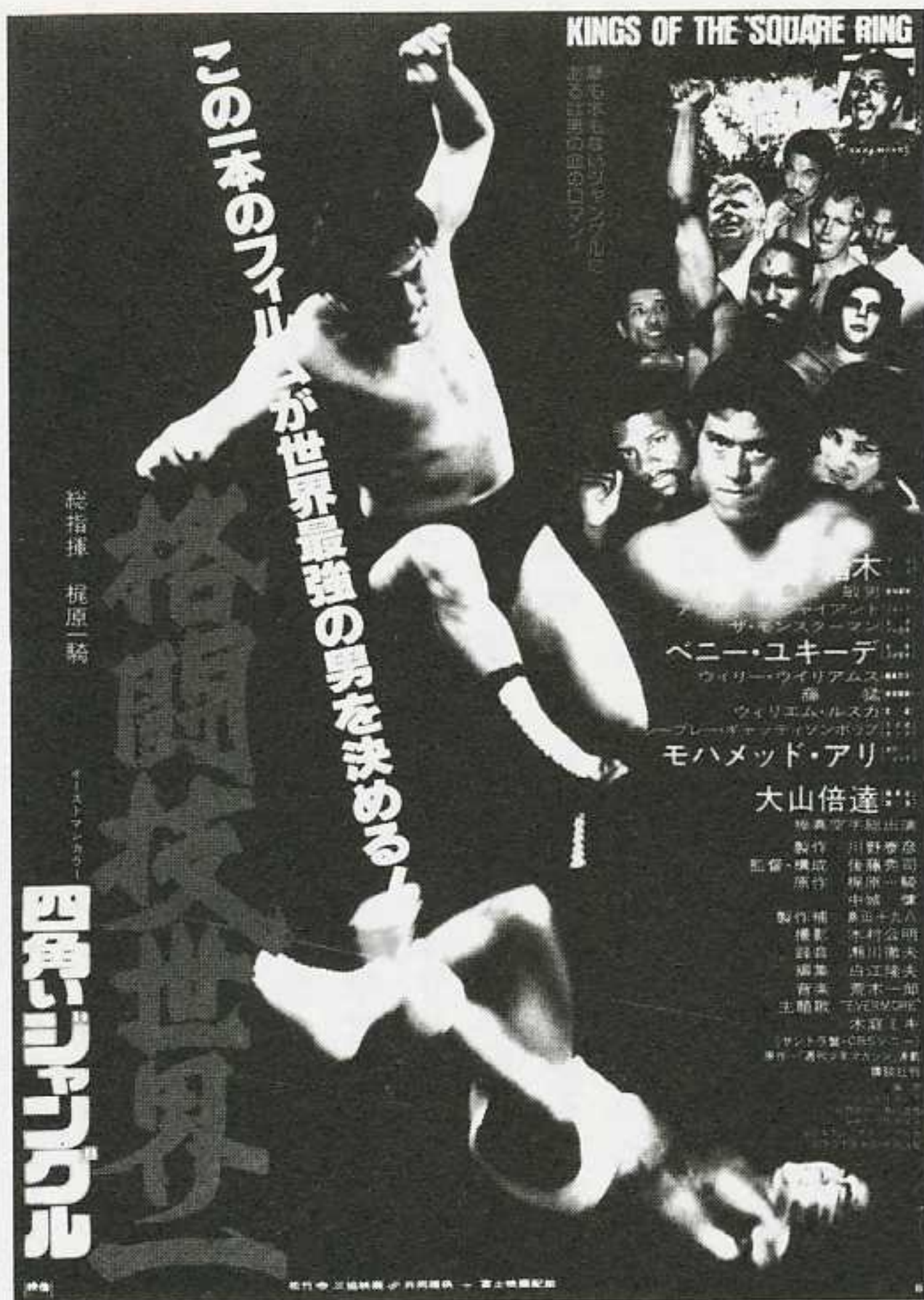
——鶴田ですか！

つの丸　全日派でしたから。世代的には珍しいんですけどね、みんな新日本が好きだったから。

——そうだったんですか。もともと全日派であり、最初に始めた格闘技がジークンドーで、いまは柔術をやっていて、今日は修斗を観戦（笑）。

つの丸　不思議な感じですよね（笑）。

——ジークンドーはどのくらいやられてたんですか？

つの丸　3年ぐらいですね。それとかぶるようにパラエストラに通うようになって。

マンガと映画、さらに実際の格闘技が渾然一体となり、フィクションとノンフィクションがごちゃ混ぜになった、伝説の梶原作品『四角いジャングル』。70年代末、少年たちはこのマンガや映画でベニー・ユキーデらのファンになったのだ。

——パラエストラに通うようになったきっかけは、なんだったんですか？

つの丸　最初は「柔術を習おう」という感じじゃなかったんですよね。ジークンドーは好きでしたけど、スパーリング的なことができないんですよ。

——型みたいなものばかりなんですか？

つの丸　多少、組手みたいなものもあるんですけど、基本、目を突いて金玉を蹴る格闘技なんで（笑）。

——そりゃできませんね（笑）。

つの丸　だからスパーリング的なものが行なわれたとしても、それはもうジークンドーではないんですよ。で、プロレスごっこが好きだった人間としては、実際にやってみたいじゃないですか。そうなると修斗かな、と。

——修斗のほうがプロレスごっこに似てるから始めましたか（笑）。

つの丸　実際、ジークンドーは修斗のジムを間借りしてやってるところも多くて、中村頼永先生と修斗のつながりがあったから「やってみようかな」って。だから連載やってないときは、修斗もやれば柔術もやって、毎日のように何かしらのクラスに出てましたね。

——格闘家は誰のファンだったんですか？

つの丸　いろいろ移り変わってはいるんですけど、最初はベニー・ユキーデなんですよ。

——それもブルース・リーの延長としては正しい感じですね。ブルース・リーにしてもベニー・ユキーデにしても、メディアミックスがありましたもんね。映画と格闘技、マンガと格闘技って感じで。

——それをやられちゃうと、ファンとしてはイチコロみたいな。

つの丸　ボクはガチがどうとか、そんなに気にしないんで。プロレスラーも格闘家も映画スターも分け隔てなく好きでしたね。そしてキックはいったん下火になったんですけど、俺が大学時代にまた人気が盛り返したんですよね。ピーター・スミットとか、ロブ・カーマンが出てきて。

——80年代末ぐらいですね。

つの丸　その頃はキックのジムに通ってみようかな、とも思ってたんですよね。根本はブルース・リーなんで、カッコよくハイキック決めたりとかは、やっぱりいいですよね。

——ジャンピングニーパッドも好きだし（笑）。

つの丸　もちろん大好きです。とにかく鶴田は好きでしたね。鶴田とか小橋（建太）とか、ちょっと抜けてる感じがいい（笑）。

——総合はどうですか？

つの丸　総合はPRIDEが人気出てから本格的に見始めて。だんだん打撃だけじゃなく、こっちもいいかなって。そこからだんだん柔術に移行していくような感じですね。そして柔術をやってからは、まったく打撃をやらなくなりました。やっぱり打撃格闘技はどこでケガするかわからないし、拳折れたりしたら大変ですからね。もちろん柔術でもケガはありますけど、柔術だったらちょっと「痛い」と思ったらタップすればいいし、一発でアウトになるケガはしにくいですから。

『みどりのマキバオー』つの丸

格闘技の技術ではなく、リング外のドラマを描いてあげたいですね

――だからか、柔術やってる漫画家さんってけっこういますよね？

つの丸　けっこういるんですよね。

――ボクが知ってるのは相原コージ先生、みやすのんき先生……。

つの丸　（みやすのんき先生は）なんか地下に練習場持ってるらしいですね。

――そうなんですか！

つの丸　そんな噂を聞きました（笑）。

――やっぱり皆さん、空いた時間ができるとやりたくなるんですかね。

つの丸　そうでしょうね。柔術や格闘技は人数集めなくてもできるじゃないですか。たとえば草野球やろうってなったら、人数集めなきゃできないけど。柔術は一人で道場に行っても、練習相手は誰かしらしますからね。

――確かにそうですね。それに漫画家というのは一人で黙々とやるのが得意な職業でもありますしね（笑）。

つの丸　自分でやれるっていうのが大きいですね。

――でも、プロレスや格闘技が好きな漫画家の先生は、なんとか自分の作品にその要素を入れようとするところがあるじゃないですか。つの丸先生はそれはないんですか？

つの丸　格闘技やプロレスのマンガも描いてみたいなっていう気持ちはありますよ。でも、なんでやってないのかというと、うまいバランスで描く自信がまだないのかな。

――バランスですか？

つの丸　やっぱり、あんまりマニアックになるのはよくないと思うんですよ。みんなに読んでもらえるものを描きたいんで。僕は格闘技が好きだから「これぐらい知ってるだろ」って思って、一般の人が知らないこと、理解できないことを描いちゃう気がして。

――なるほど。「いまの自分は格闘技の知識がありすぎる」っていう自覚がないと、格闘技のマンガは描けない、と。

つの丸　格闘技が好きな人だけに向けて描くのなら、それでもいいんでしょうけど、そういう感じでは描きたくないですからね。

――『マキバオー』なんて競馬をやっちゃいけない子どもたちにも向けて描いてるわけですもんね（笑）。

つの丸　あれも競馬に詳しくなくても読めるものにしないといけないって思ってますから。あと格闘技ってマニアックに観てる人と、ライトに観てる人のおもしろみってちょっと違うように感じるんですよね。

――確かにそれはありますね。

つの丸　テレビで中継される試合と自分の好みの試合を比べると、やっぱり世間とズレるんだなって思いますからね。DREAMなんかの地上波だと、「俺はこの試合が観たいのにカットなんだ」とか「これ興味ないのに、フルで流すんだ」みたいなことって、けっこうあるんですよ。

――あるでしょうね。

つの丸　一般の人がおもしろいと思ってることがわからなくなると、ちょっと描けないなって思ったりしますよね。自分としては『DREAM・14』の宮田（和幸）vs大塚戦はかなりおもしろかったんですけど、これが地上波で流れるのは難しいだろうなって思うし（笑）。今日のリオン（武）の試合なんて、最高でしたからね。ハンセンvsアルバレス戦以来の立ち上がって応援しましたから。それまでは（パラエストラ千葉ネットワークの）身内が3人とも負けて「今日は何を観てもつまらないな」って思ってたんですけど（笑）。最後はスタンディングオベーションでしたから。あれだと一般には届かないんですかね？

――内容的には届くものがあるでしょうけど、その選手を知らない人が多いのが難しいところでしょうね。キャラがわかってないと。

つの丸　確かにマンガもそういう部分はありますからね。みんながそのキャラクターをわかったうえで対決シーンがあるから燃えるっていう。

――物語を共有できるかどうか、ですよね。

つの丸　そのドラマを描ければ、いいんでしょうね。僕は実際にやってる選手を近くで見たりしてるんで、そのリングに上がるまでのドラマを「描いてあげたいな」って思ったりするんですけどね。

――今回、佐藤ルミナと対戦した松根良太選手も「ルミナの相手」としてだけ認識してるのと、彼の3年間を知っていて観るのとでは、全然違うでしょうからね。

つの丸　そうなんですよね。僕はその物語を知っているから、今日なんかも入場だけで泣いちゃいましたからね。僕は小橋がガンで戦線離脱して、武道館で復帰の挨拶をしたときも号泣だったんですけど。そういう部分を描いてあげたいなっていう気持ちはあるんですよ。

――リングに上がるまでのドラマですね。逆に格闘技を詳しくなりすぎちゃうと、格闘技の見方が変わってきちゃう部分もありますか？

つの丸　ありますね。実際にやってるから、格闘技に関してウソは描きたくないし。漫画はどうしてもウソが必要になってくるんですけど、それを自分のなかでどこまで許せるか。「こんなこと描いたら、『あいつ格闘技やってるくせにわかってない』とか思われないかな」とか。そんなこと考えちゃったりしますから。

――マンガでしかありえない展開でもリアリティがあるようにしなきゃいけないというか。

つの丸　そうなんですよね。それはいま描いてる競馬もそうなんですけど、バランスが重要だと思うんですよね。ウソを描いても、読んでる方を納得させないといけないし。

――梶原一騎作品がそうですよね。

つの丸　そうなんですよ！

――絶対にウソだけどなぜか納得させられる（笑）。ウソでも技術的裏づけがあるという。

つの丸　それを信じたい、ぐらいのものがありますからね。でも、ドラマの部分は格闘技でも競馬でも、どんなスポーツも共通する部分があると思うんですよ。どういう思いをぶつけるかですから。それが技術になっちゃうと、わからなくなると思うんですけど。格闘技漫画を描くと、技術を描きたくなっちゃうのが嫌なんですよ。

――なるほどなるほど。

つの丸　頭で読むんじゃなくて、心で読めるように描けないと、やりたくないなって。

――やっぱり漫画のストーリーとい

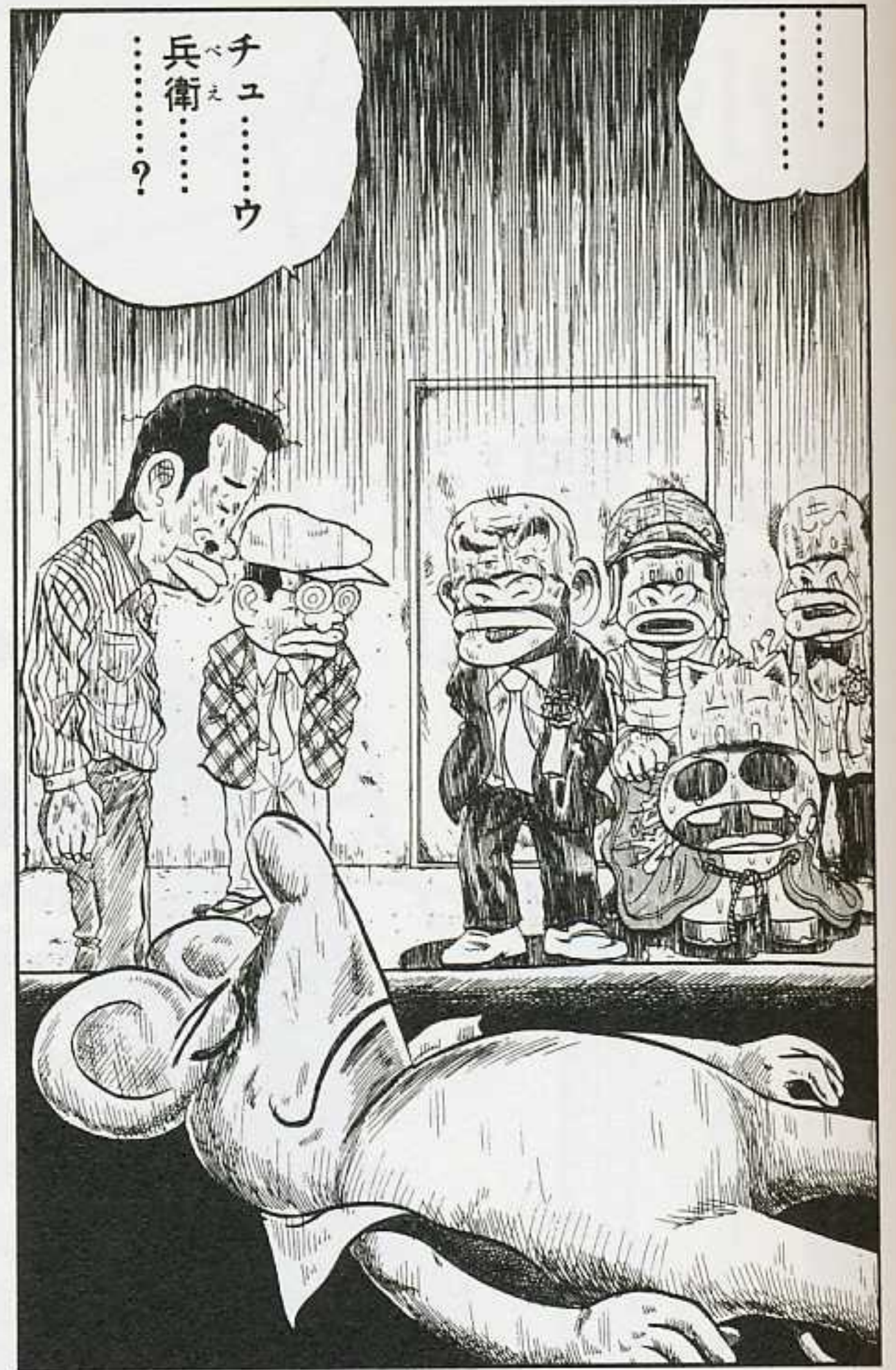
5.30修斗JCBホール大会では、つの丸先生と同じパラエストラ千葉ネットワークの松根良太が3年7カ月ぶりに復帰戦を行ない、佐藤ルミナと対戦。敗れたものの、松根を知る者にとっては、たまらない試合となった。またメインのリオン武vs日沖発では、前に出続けるリオンの闘いぶりが観客の心をとらえた。

て、一般の人が知らないこと、理解で

上がって応援しましたから。それま

ドラマを描いてあげたいですね

——やっぱり漫画のストーリーとい

©つの丸／集英社文庫コミック版

マキバオーが全幅の信頼を置く“親分”ことチュー兵衛が、落馬の影響で死去。読者の誰もが涙したこの控室でのワンシーン。こういったバックステージの壮絶ドラマを格闘マンガでも読みたい！

ストーリーを考えるのではなく 頭で〝観た〟ものを描いてるんです

うのは、自分で描いてて燃えてくるわけですか？

つの丸 そりゃ燃えますよ。マンガを描くときって、ストーリーを「考える」って感じじゃないんですよね。いろんなことを想像して、頭のなかで映像が見えてくるんですよ。僕はその頭のなかで観た〝映像〟のおいしい部分を抜き出して描いてる感じなんです。

——頭で〝観た〟ものを描いてる、と。

つの丸 みんなが読んでるものより、もうちょっと凄い映像が僕は観ているんですよ。だからマンガを描く前のネームという作業の段階で泣けてきちゃいますから。そういう意味で、マンガとしてみんなに届いてるのは、僕が観たものよりも少し小さくなってる物語なんですよ。この対戦での裏では、もっとこんなことがあって……っていうのが、僕のなかにはあるんです。

——〝外伝〟の部分が頭のなかでは描かれてる、と。

つの丸 だからマンガを考えて描くというより、自分が頭のなかで観たことの、どこをカットして、どこを使ってという作業なんですよね。

——じゃあ、映画の編集作業と一緒ですね。

つの丸 ホントに一緒ですよ。だから、「あそこでこんなことがあった」っていうのを自分だけが知ってていうことは、いくらでもありますよ。「あれ、描いてなかったっけ？」って「あ、みんな知らないんだ。こういうエピソードがあったのに」って。

——「俺だけか、知ってるのは」って（笑）。それは一番贅沢ですね。格闘技の試合でいえば、試合を観るだけじゃなく、バックステージの様子から、普段の生活から、その選手の頭のなかまで、つの丸先生には見えてるわけですもんね。

つの丸 不思議な感覚なんですよ。自分が観た映像なんですよ。俺も読み返すと泣いちゃうし。だから格闘技漫画を描くうえでも、自然とそうなれば描けるんだと思うんですよ。

——頭のなかの映像が動きだせば描ける、と。

つの丸 ただ、頭が働きすぎちゃうかもしれないんですよね。観た映像に自分の知識をつけ足しちゃう気がする。

——スケベ心が出ちゃう（笑）。

つの丸 「俺、こういうことも知ってるんだぜ」っていう、いやらしい思いが働くかもしれない。それを見せるおもしろさもあるんでしょうけど、自分としてはちょっと違うかなって。

——それができちゃうと、『マキバオー』に出てきたベアナックルみたいな選手は出せなくなっちゃうかもしれませんね。

つの丸 格闘技漫画はやっぱり、知識より熱いものがあって、魂を描かないとダメだと思いますからね。頭をどんだけ押さえることができるかでしょうね。

——格闘技の試合でも、もちろん技術の攻防も観たいですけど、選手の熱い気持ちが伝わってきたときが一番感動しますもんね。

つの丸 リオンなんてまさにそうでしたよね。そこをうまくミックスできたらいいですよね。マンガで描く格闘技術は、それこそウソでもいいし。読んでる人を圧倒するようなパワーがあれば。そういうマンガは描いてみたいと思いますけどね。

——ズバリ言って、それは非常に読みたいです！ ご自分のなかで「時が来たら」という思いはありますか？

つの丸 「時が来たら」っていう気持ちはホントにありますよ。一回はやるんじゃないかなっていう予感はあるし、やってみたい気持ちはありますからね。柔術マンガも描いてみたいし。格闘マンガはあっても、柔術マンガってないんじゃないですか？

——メジャーな連載では少なくともないですよね。

つの丸 スポーツの部活モノってけっこうありますけど、大人の部活モノみたいな感じで。昔、俺が行ってた道場はひどい道場で、そこをモデルにしてもいいかなって。汚くて、パンツ一丁で人がうろうろしてる感じですから。雑巾がけした汚いバケツ水を窓から捨てるような道場でしたから（笑）。

——丹下拳闘クラブみたいな（笑）。

つの丸 しかも、部活モノだとたとえば中学1年～3年生しか、選手のキャラは出てこないけど、柔術道場を舞台にしたら10代からおじいさんまで描けるんですよ。

——それは題材としておもしろいですねえ。

つの丸 柔術道場って、歳が離れた人と一緒に練習するっていうのもいいんですよ。おっさんが子どもにやられたり、女の子にやられたりしますからね。

——ああ、柔術道場を舞台にすると、子どもや女の子も同じ選手として登場させられるんですね。

つの丸 それに外から見たら、男と女が寝技の練習してるって凄くスケベに見えるじゃないですか（笑）。そういう感じとかもおもしろいなって。

——柔術という「競技」を題材にするというより「道場」という切り口なわけですね。

つの丸 だから、主人公も柔術を知らずに入って、読者と一緒に柔術を知っていくような展開だとおもしろいですよね。これをしゃべってるって、凄いヤバいんじゃないの（笑）。

——将来のプロジェクト、アイデアをしゃべっちゃってる（笑）。

つの丸 そういうの読みたいな、と。

——では、ぜひ近い将来、読めることを楽しみにしています！

【10年5月30日／都内・『ルノアール』水道橋店にて収録】

つの丸 けっこうマイナー競技を扱ったマンガで、そのマンガを読むことで、その競技を知っていくみたいなことってあるじゃないですか。そういうジャンルとして柔術もありじゃないかなって。早くやらないと、誰かにやられちゃいそうだけど（笑）。

——それは早く描いてもらいたいですね（笑）。

つのまる■1970年、千葉県出身。91年に『GOGOポチョムキン』にて『週刊少年ジャンプ』第2回準ギャグキングを受賞し、デビュー。『みどりのマキバオー』はアニメ化されるなど大ヒットし、第42回小学館漫画賞児童部門を受賞。現在は『週刊プレイボーイ』で『たいようのマキバオー』を連載中。

超リアル系！

第5試合
ライト級
クラスC2回戦

赤コーナー
総合格闘技道場
小暮ジム所属

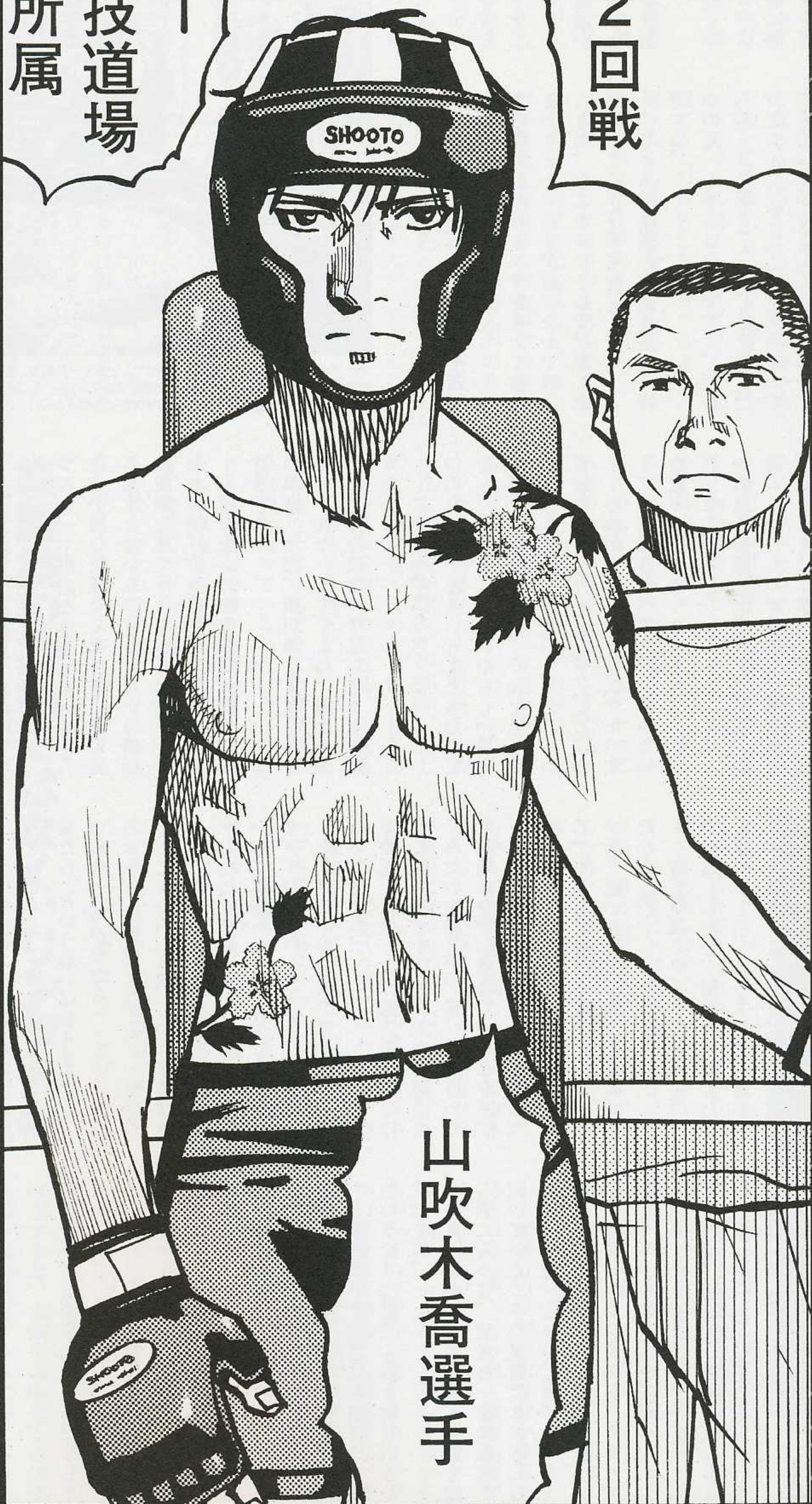
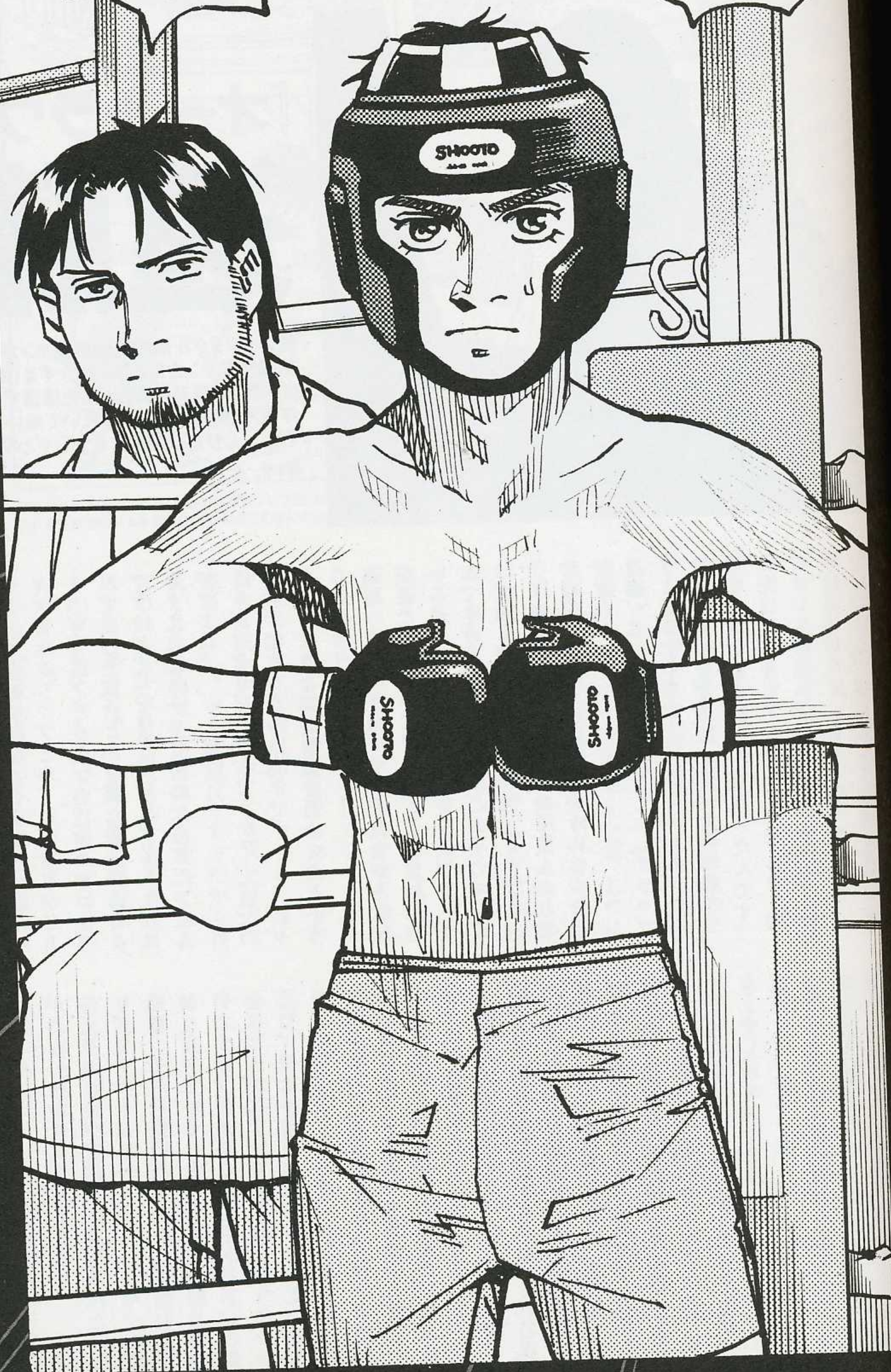
SHOOTO

山吹木喬選手

青コーナー

青春格闘マンガの世界

青コーナー
ファイターズ・
ブリュー所属

高柳廻(たかやなぎメグル)選手

——遠藤先生は相当格闘技に詳しいとお聞きしました！

遠藤　フフフ……。詳しいのかなあ？

——いやいや、格闘技の大会はほぼ欠かさずに観ているとお聞きしましたよ。

遠藤　まあ、ボチボチですよ。原稿が詰まっているとそれはそれで穴が開いちゃうんで、キック観て、修斗観て、DREAM観て、あとはネットで海外の試合を観て、という感じですよね。

——充分です（笑）。

遠藤　あとは、やっぱりアマチュアの物語を描いてるんで、できるかぎりそっちのほうを優先しなくてはいけないということもありますけど。

——そもそも格闘技を観るようになったのはどのくらいからですか？

遠藤　普通に子どもの頃から観てます。小学生のときは普通にプロレスファンでしたし、当時はタイガーマスクが全盛期だったんですよ。古舘伊知郎さんの実況が一番キレキレだった頃ですよね。まあ、僕は東北出身なんでゴールデンじゃなくて深夜の放送で観てましたけど。

——まさに全盛期を小学生で体験してたわけですね。

遠藤　あの時代の新日本プロレスですよね。先日亡くなられたラッシャー木村さんとかが国際プロレスから参戦したり、ジュニアヘビーがちょうどタイガーマスクで活性化してたり、長州力が戻ってきて前田日明に顔面を蹴られたりとか、素敵だったじゃないですか（しみじみと）。

——いまでも普通に語り継がれる話ですもんね。

遠藤　ああいう時代にテレビで観てて、その後UWFとかを好きになるんですよね。当時はちょうど思春期だったんで、そういう意味では、実感ベースである程度食い込んでいたんでしょうね。格闘リテラシーが低い人間としてもわかりやすくて凄く助かりましたし。

『オールラウンダー廻（めぐる）』作者

遠藤浩輝

超スペクタクル系の傑作格闘マンガは数あれど、超リアル路線の格闘青春マンガはここに紹介する『オールラウンダー廻』が素晴らしい。アマチュア修斗を舞台にした地道で等身大の物語を、作者・遠藤浩輝はどんな思いで描いているのか。そして、たびたび登場するヤ○ザとの抗争シーンについても聞いてみたぞ！

聞き手／松下ミワ

——そんな遠藤先生が描かれた『オールラウンダー廻』（以下、『廻』）は、アマチュア修斗を舞台とした物語です。

遠藤　ええ。僕が修斗を見始めたのは01年のNKホールからなんですよ。いまはもうないNKホールですけど、当日はシャトルバスに乗って行ったのを覚えてますよ。五味隆典vs三島☆ド根性ノ助のチャンピオンシップとか、川尻達也がビトー・シャオリン・ヒベイロにボコボコにされて負けた試合とかを観た記憶があるんですけど、じつはそのときにもう「これはネタにしよう」って決めたあとだったんですよね。

——あ、そうだったんですか⁉　『廻』の連載が始まったのは08年ですから、じゃあけっこうな期間構想を温めてたということになりますね。

遠藤　そうですね。ずっと機会があれば描きたいと思ってました。これ以外にもいろいろ四方八方アンテナを張っていたんですけど、まあ単純にこの手のマンガって誰もやってなかったんですよね。

——確かに格闘マンガはたくさんありますけど、等身大の物語というのは少ないですね。

遠藤　じつはそうなんですよ。『グラップラー刃牙』とか『TOUGH』もあったんですけど、要するにプロレスの流れを受けて描いてるものばかりだったんです。実際には修斗もプロレスの流れといえばプロレスの流れではあるんですけど、修斗は意識的にそこを断ち切ったわけじゃないですか。僕にとってはある意味それがおもしろかったんですよね。

——そのなかでも修斗に着目されたのはなぜですか？

遠藤　それは格闘技ってほら、弱い子が強くなっていくことができる分野じゃないですか。いきなり高校生がUFCの舞台には上がれないですよね。そうじゃなくて、僕は普通の高校生が少しずつ強くなっていく姿を描きたかったんです。いきなり強い人間が出てきて、周りを蹴散らして、ハッピーエンドってのも楽しいんですけど、いま自分が描きたいのとは違うなって気がしたんですよ。

——読んでるとホントに「こういう選手いるなあ」って世界ですもんね。それと同じくらい試合や技の描写もリアルですし。

遠藤　ああ、これはもうやっぱりいろんなジムに取材に行かせてもらってるからですね。都内だったらほとんど行ったんじゃないかなあ。

——さらには、三日月蹴りなんかも出てきますし。

遠藤　あ、そうですよね。いや、僕も三日月蹴りは菊野選手の試合を観て「実際に総合格闘技で使う人がいるんだ」ってビックリしたくらいですよ。「使ってる！」し

『オールラウンダー廻』は、少年時代、ともに空手を習っていた主人公の高柳廻と瀬川喬（のち山吹木喬）が数年後、アマチュア修斗の会場でばったり会い、試合をするところから始まる物語。上のセリフ一言だけでも、どこかシビれるぞ。

ね。当時はちょうど思春期だったんで、そ

ないですか。僕にとってはある意味それ

クリしたくらいですよ。「使ってる！」し

かも効いてる！」って。でも、これは決して僕が先だというわけじゃないんですよ。

講談社担当編集者（以下、担当） たしか、菊野選手がDEEPからDREAMに上がるようになった頃に『廻』で描かれたんですよね。DEEPではもうすでに使いだしてて。

──じゃあ、菊野選手がブレイクしたときとタイミングが同じだったわけですね。

遠藤 だと思います。というのも、普通に空手の『月刊 空手道』とか『フルコンタクトKARATE』とかを流し読みしているなかで、「三日月蹴り」という技は出てくる言葉ではあるんですよ。僕はそこから使ってみようと思ったんですけど、菊野選手が使ったときは本当に「やったー！」と思いましたから（笑）。

──ひそかに喜んでた、と。

遠藤 そうそう。だから、人間考えることは同じだなって思いました（笑）。

『廻』の見どころの一つが、細かく描かれている技の描写。MMAを見始めたばかりの人は、技の名前から極まり方まで普通に勉強になったりする。これも東京中のジムを練り歩いた遠藤氏の取材のたまものなのだ。

──ワハハハハ！ ただ、そんな感じで格闘技の世界観がリアルなだけに、ところどころで出てくる裏社会の描写が非常に気になるんですよ。たとえば突然人が殺されたりとか（笑）。

遠藤 ああ、あれはですね、完全に僕のクセなんですよ（キッパリ）。

──クセですか！

遠藤 ホントにそうなんです。僕、じつは歓楽街育ちで、水商売のおねえさんやヤ○ザのおじさんたちがいる風景というのはわりとあたりまえなんですよ。だからね、なんか出ちゃうんです。

──凄いですね、「出ちゃう」って。

遠藤 もう空気みたいなもんなんでね、停まっている車＝ベンツみたいな、そんな世界だったんで、どうしてもそうなっちゃうんですよ。それはどんなマンガでもなんですけどね。

担当 読み切りの頃からそうでしたよね。

遠藤 うん。でも格闘技マンガだから殺伐とした雰囲気を出すために使ってると言われると、それはちょっと不本意なんですよ。そうじゃなくて、遠藤浩輝だからヤ○ザが出てきちゃったと考えてほしいんですよね。

──それも凄い連想ゲームです（笑）。いまさらですけど、少年にとっては危なくなかったんですか？

遠藤 いやいや、とくに繁華街だから危険だというわけではなくて、そこに住んでいる人間として所作をわきまえればむしろ安全なんですよ。僕なんかは郊外のほうが怖いですもん。子どもを連れて、多摩のサンリオピューロランドに行くほうがむしろ怖いんです。暗くなってくると灯りがないですしね。

──た、確かにそれも一理ありますけど……。

遠藤 それにヤ○ザの人がいないし、浮浪者の人もいないし、ポン引きもいないし、水商売のおねえさんがいない。そうなると、なんか不安なんですよ。やっぱり街中で唸り声とかね、オヤジの怒鳴ってる声をとかが聞こえるほうが、ちょうどよく寝られるかなって。

──じゃあ、我々にとっては等身大のものとそうでないものが入り交じったように感じたんですけど、遠藤先生としては普通にリアルな感じなんですね。

遠藤 まあ、リアルといっても子ども時代だったんで彼らの内情なんてまったく知らないですよ。「ここで遊ぶな。あっち行け」って言ってるヤ○ザのおにいちゃんを見て、「カッコイイなあ」という感じでしたからね。だから、内部の事情に関してはむしろ一時期のVシネマとかを観て勉強したくらいですよ。

──いい教材ですね（笑）。

遠藤 あとノンフィクションという意味では『実話ナックルズ』も非常に読んだりしてますね。そうすると、昔の思い出とブレンドされて、僕のなかではいい感じでファンタジーになっちゃうんですよね。

──たとえば、主人公・廻のライバルである山吹木喬は、ヤ○ザの巣に乗り込んで

僕は普通の高校生が少しずつ強くなっていく姿を描きたかったんです

いって、空手技で倒すというもの凄いシーンがありますけど、それも“教材”からヒントを得たものなんですか?

遠藤 まあ、人が手刀で人を倒したりする場面を実際に観てたら、逆に僕はこんな世界にはいないと思います（笑）。

——ワハハハハ! ホントですね。

遠藤 実際に僕が街で見たケンカは、酔っぱらいがケンカしているのをヤ○ザが止めてるシーンとかですよね。ただ、だいたい膠着するんですよ。流血しながら。

——膠着しますか。

遠藤 そこに店のママがバケツの水をぶっかけて、「迷惑だよ」って言ったりするシーンだったりね。

——ディテールが細かいです（笑）。ちょっと話が凄い方向にいきましたけど、もう一つ気になったのは、途中で女性指導者の絹川まりあが出てくるじゃないですか。あれでまた雰囲気がガラッと変わったなって。

遠藤 あれはですね、テコ入れです（キッパリ）。

——そ、そうなんですか! でも、女子格闘技も相当ご覧になってるってことですよね?

遠藤 観てましたよ。というか、もともと最初は修斗のマンガを描くよりも、女子キックボクサーが修斗を始めるという短期集中連載ものをですね。何年くらい前かな? 96、97年くらいにちょっと考えていたんですよ。

——はー、そんな構想があったんですね。

遠藤 ちゃんとネームも作ったし、そのネームも通してたんですよね。なんだけど、まあちょっと流れちゃって。で、要するにそれは『廻』にも出てくる神谷真希ちゃんが主人公だったんですけどね。

DREAMで絶賛活躍中の菊野克紀といえば、言わずと知れた必殺三日月蹴りだが、偶然にも同時期に山吹木喬の必殺技として三日月蹴りが描かれていた。「映画の『プラトーン』と『ハンバーガーヒル』みたいにドンピシャのタイミングですねぇ」と遠藤氏。

『オールラウンダー廻』遠藤浩輝

手刀で人を倒す場面を実際に見てたら逆にこんな世界にはいないと思います

——神谷真希はまさにキックボクサーから総合に挑戦する女子高生ですよね。

遠藤 だから、もともとスマックガールもよく観てましたし、WINDY智美さんとかも大好きなんですけど、ちょっとその案はうまく発進できなかったんですよ。

——でも、『廻』のなかでは女子選手や指導者が凄く活き活きしてますよね。これも喬の世界と非常に対照的ですし。

遠藤 ありがとうございます。じゃあ、テコ入れ成功ですね（笑）。

担当 でも、ありがたいことに、ホントに格闘技関係の方にも凄い反響をいただいてるんですよね。

——ああ、やっぱり自分たちの世界を描いてもらえるのはうれしいでしょうしね。

遠藤 いや、僕もうれしいですよ。まあ、取材に行くといろんな選手と顔見知りになるじゃないですか。それとか会場でもそうですけど、声をかけていただいたりするんですよね。

——修斗はとくに常連ですもんね。

遠藤 かなり観させてもらってますね。チケット買ってですけど。

——……えっ!? 取材として入られてるわけじゃないんですか?

遠藤 実際にパスをもらったこともありますけど、でも僕は基本的にはお金を払って観たいなっていうのがあるんですよね。食事なんかでも、ごちそうしてもらうと味を覚えないじゃないですか。それと同じで、できるかぎり自腹切って観に行ったほうが、やっぱり試合展開とかを覚えてるんですよ。

——そこは一線を引いている、と。

遠藤 でも、いつか顔パスになるくらいにもなりたいんだけど（笑）。

——そこは複雑なんですね（笑）。でも、こう言ってはなんですけど、修斗にとって『廻』の連載は本当にうれしいばっかりですね。

遠藤 うーん、どうなんでしょうねえ? ただ、僕の目的はもちろん修斗のお客さんも増えたらいいなと思ってますけど、それ以上に競技人口を増やしたいなというのが大きいんですよね。そういった方向なんで、修斗に利するかどうかは、それこそこれが大ヒットするかどうかにかかっててはいるんでねえ、どうなんでしょう（笑）。

——その連載も、いま、クラスCのトーナメントが進んでいるところです。アマチ

『廻』を描く前に、遠藤氏はじつは女子格のマンガを描く計画があったそうだ。『廻』でも後半になるにつれて女の子のキャラクターが続々と登場中。美人指導者・絹川まりあにも注目だ。

ユアのトーナメントでこれだけ盛り上がるんだったら、プロではどうなるんだろうという期待してしまいます。どんどん

遠藤 そんな感じです。『廻』でいうとまりあ先生や真希ちゃんの登場はそうだし、ほかのマンガだって『ドカベン』も最初は

遠藤 人気が出るほうに向かってるんだと思いますよ。単純にマンガのフォーマットとしてそうしないとむしろ人気が出

——現実では苦労話が多い世界ですけどねえ。

遠藤 ですよねぇ（しみじみと）。ボクサ

ユアのトーナメントでこれだけ盛り上がるんだったら、プロではどうなるんだろうという期待してしまいます。どんどん強い人とかが出てきてほしいなって。

遠藤　そう思ってもらえるとありがたいですね。まあでも、格闘技マンガってそういうものですよ。強くなっていくということは強い人を相手にしなくちゃいけなくなるんで。でも、僕は比較的設定を緩やかにしてて、どんなフックを作れば読者に引っかかるんだろうって、いろいろと試行錯誤というか実験をしてるんですよ。逆に設定をガチガチにすると危険なんで。

――緩やかに動かしてその都度判断して描くということですか？

遠藤　そんな感じです。『廻』でいうとまりあ先生や真希ちゃんの登場はそうだし、ほかのマンガだって『ドカベン』も最初は柔道マンガだったわけですからね。『幽☆遊☆白書』も霊界探偵ものだったのに、格闘ものになったりということになりましたし。

――そう言われてみると、最初から最後まで設定が同じマンガというのは少ないのかもしれないですね。

遠藤　まあ、そこがマンガのというか、とくに『週刊少年ジャンプ』の恐ろしいところだったりするんですけど（笑）。

――ハハハハ！　編集サイドのテコ入れなんかもあるんでしょうね。

廻の成長とともに、どうしても見逃せないのが喬とヤ○ザの絡みである。まだティーンエイジャーであるはずの喬がヤ○ザの巣に乗り込み、手刀で相手を倒す様はまさに圧巻。喬に襲撃を依頼する謎の女からも目が離せない！

主人公がチャンピオンにならなくても べつにいいと思ってます。それより……

遠藤　人気が出るほうに向かってるんだと思いますよ。単純にマンガのフォーマットとしてそうしないとむしろ人気が出なくなるというか。だから、マンガって2時間の映画みたいに起承転結をつけるんじゃなくて、永遠に興味を持続させて、今週、来週、また来週というふうに読み続けてもらわないといけないじゃないですか。そのときにどういうエネルギーとしてどんな薪をくべるかというと、それはもう、男の子が強くなる、女の子が恋愛する、その二つしかないんですよ。

――なるほど。おもしろいですね。

遠藤　もちろんそういうものが大売れしたからこそ、違うものをやんなくちゃいけないってことで、それこそ『ブラックジャックによろしく』みたいな話もできるんですけどね。でもやっぱり王道は「恋愛」と「トーナメント」。その二つの太い柱は避けられないと思うんですよ。とはいえ、それは全盛は90年代なんで、この先はマンガの世界もどうなるかわからないですけどね。

――その点、『廻』もこの先はどうなるかわからないぞ、と。

遠藤　そうですねえ。だから、さっきの理論でいうと、もしかして気づいたら書道マンガになってるかもしれません（笑）。

――それは唐突すぎます！

遠藤　いやいや、それくらいマンガの連載ってどう転ぶかわからないものなんで。ただまあ、これはよく言うんですけど、主人公の高柳廻くんがべつにチャンピオンにならなくても、僕はいいと思ってるんですよ。というよりも、基本的に格闘技を通じて人が幸せになる物語を描きたいわけでなんで。格闘技に関わることで人が不幸になったらイヤじゃないですか。

――現実では苦労話が多い世界ですけどねえ。

遠藤　ですよねえ（しみじみと）。ボクサーにしたってそういう話を聞きますけど、でも僕はなんか格闘技に関わった人は基本的にみんな幸せになってほしいなって思ってるんです。だから試合に負けても、人生に勝つような話にしたいなって。

――ああ、いいですね。

遠藤　そういうメッセージを込めて、これからも描いていきたいと思ってますね。……と言いながら、とんだ展開になるかもしれないですけど（笑）。

――ハハハハ！　では、書道マンガにならないことを祈りつつ、これからも連載楽しませていただきます！

【10年5月28日／都内・某所にて収録】

えんどう・ひろき■1970年、秋田県出身。95年、武蔵野美術大学在学中に初作品「カラスと少女とヤクザ」がアフタヌーン四季賞に入賞し、漫画家としてデビュー。97年にはSF長編作品「EDEN」を連載。『オールラウンダー廻』は08年から連載されており、とりわけ格闘技関係者には広く人気を集めている。

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ!
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

PRIDEはもう忘れろ!

フジテレビショックから始まった日本マット界激動の歴史を追う!

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト『kamipro Move』で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判　336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

悪役道　ヒールたちのブルース

悪の道を歩けるのは選ばしれ者のみ!

"悪の道"に精通する豪華16名が珠玉の"ヒール哲学"を激白! 反則攻撃、挑発行為、ラフファイト、モンスター、エゴイスト、アナーキスト、アンチヒーロー……。悪とは何か? 悪役とは何か? 本書は因縁の内藤大助戦に勝利を収めた亀田興毅をはじめ、『kamipro』誌上に掲載されたさまざまな悪役のインタビューを厳選収録。時代に憎まれし、ヒールたちのブルースを聴け!

B6変型　304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

新日本プロレス学習帳

"業界の盟主"の魅力を凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判　320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王　秋山成勲 二つの祖国を持つ男

秋山成勲なのかチュ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日、秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションだ。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!

え、ターザンが死んだ!? 90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山穎男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判　304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

PRIDE機密ファイル　封印された30の計画

ついにその秘密のベールを解禁!! PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書

ダメな大人たちへ捧げる"変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本隊1,600円+税)

八百長★野郎

ミスター高橋本から7年……"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

底なし沼　活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本

井上義啓とは底が丸見えの底なし沼である——!!

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判　312ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

吉田豪インタビュー11連発!! インタビュー本の最濃傑作!

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

eb! enterbrain

おかげさまで10周年 エンターブレイン
ANNIVERSARY 10th

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

わしが男塾塾長江田島平八である!!

以上!!

――じつは以前にも宮下先生には取材をお願いしたことがあったんですが、その

なぁ。俺、格闘技とかプロレスはたまに観る程度で、しゃべれるほど詳しくないか

たりエジプトで古くから伝わる格闘技だったり、さまざまな武術が登場しますけど……？

宮下　そうそう。ジミヘンとかレッド・ツェッペリンとかロックが好きでね。高校卒業してからしばらくは、箱バン（＝クラ

超絶男気作品の第一人者が
その豪快な哲学を激語り!

「マンガの醍醐味とは荒唐無稽にあり!!」

『魁!!男塾』作者
宮下あきら

比類なき破天荒なストーリー、魅力あふれる豪傑たちの活躍で人気を博した『魁!!男塾』。その作者である宮下あきらがドドーンと登場だ！　いったいあの独特な世界観はどのように形成されたのか、そして伝説の『民明書房』秘話とは？　宮下先生の声に耳を傾けろ！　押忍!!

聞き手＆撮影／鈴木佑

ギャグテイストの強かった初期『魁!!男塾』でも屈指の名シーンといえばこれ！　男塾きっての頭脳派、田沢の手にかかれば、誰がなんと言おうと「九九八十八！」なんである！

—じつは以前にも宮下先生には取材をお願いしたことがあったんですが、そのときはお断りされてしまったんですよね。

宮下　あれ、そんなことあったっけ？

—はい。まぁ、『戦極』という格闘技イベントが『SENGOKU RAIDEN CHAMPIONSHIP』に改称することにちなみ、『魁!!男塾』にも雷電というキャラがいるというだけでお話を聞こうという企画だったので、それも当然だとは思うんですけど（笑）。

宮下　ああ、なんかあったかもしれないなぁ。俺、格闘技とかプロレスはたまに観る程度で、しゃべれるほど詳しくないからさ。

—でも『男塾』は戦闘シーンも多いですし、宮下先生はいろんな格闘技に精通されてるのかなと思ったんですが？

宮下　いや、俺のは格闘技マンガというよりも忍法マンガみたいなところがあるじゃない？　だから猿渡氏（哲也＝『高校鉄拳伝タフ』）のマンガなんかとは質が違うよね。

—そうは言われても、中国拳法であったりエジプトで古くから伝わる格闘技だったり、さまざまな武術が登場しますけど……？

宮下　いやいや、思いつきだよ、あれは。

—思いつきですか（笑）。

宮下　たとえば中国拳法ってなんでもアリの世界なんだよね。ほら、中国4000年っていうくらい歴史も長い国だから描きやすいのよ、ハッタリが。

—ハッタリ（笑）。あれだけ多くのキャラが登場しますし、てっきりいろんな資料を研究されてるのかな、と。

宮下　いや、俺はいっさい資料は使わない。ハッタリで固めてるだけ（キッパリ）。

—ダハハハ！　でも、それであれだけ説得力を持たせるのは凄いですね～。

宮下　まぁ、それはやっぱりマンガに男らしさとか友情だとか、そういうのを土台にしてるのも大きいんじゃないかな。読者が感情移入しやすいっていうかね。

—そもそも『男塾』にかぎらず、宮下先生の作品は『私立極道高校』『激!!極虎一家』にしろ男くさいのが特色だと思うんですが、ああいう作風になったきっかけは？

宮下　それは自分の本質的なものもあるし、本宮（ひろ志）先生から受けた影響も強いんじゃないかな。やっぱり男の強さというものに憧れはあったし。とはいっても、俺も最初はマンガじゃなくバンドのほうに夢中だったんだけどね。

—もともと、先生はプロのミュージシャンを目指してたんですよね？

宮下　そうそう。ジミヘンとかレッド・ツェッペリンとかロックが好きでね。高校卒業してからしばらくは、箱バン（＝クラブやレストランなどと契約して演奏するバンド）でギターやってメシ食ってたんだよね。でもある程度までやって、バンドはもうダメだと思って、マンガを始めた感じだから。

—でも、もちろん昔からマンガに興味はあったんですよね？

宮下　まあ、チョコチョコ描いてたけどイタズラ描きみたいなもんだよ。昔は『おそ松くん』とか『伊賀の影丸』とか好きだったね。あと『鉄人28号』とか。昭和30年代っていうのはマンガが一番マンガらしい時代だったからおもしろかったよね。

—宮下先生も最初は持ち込みで？

宮下　そうだね。それで高橋よしひろ先生のアシスタントを始めて、本宮先生の手伝いもやったりしてね。そのときに影響受けたんじゃないかな。

—何か本宮先生に言われたことで印象的なものはありますか？

宮下　たしか「マンガなんて1ページ1秒で読むもんだから」って言われたんだよね。読者はそのくらいのスピードでページを読み飛ばしちゃうんだから、そんなに悩むなっていう意味合いもあるし、その短い時間でどれだけのインパクトを残せるかって話でもあるんだけど、その言葉はいまでも覚えてるな……。まぁ、恐れ多い存在だけど、俺なんかはかわいがってもらったほうだと思うよね。

俺はいっさい資料は使わない。ハッタリで固めてるだけだから

――さて、『魁!!男塾』の話をお聞きしたいんですが、連載当初から人気は爆発したんですか?

宮下 いや、そんなこともないよ。俺はその前にも何本か連載してたけど、結局は鳴かず飛ばずだったんだよね。そういう意味じゃ『魁!!男塾』は満を持してって部分はあったかもしれないけど。ただ、最初は『男塾』もギャグマンガっぽかったんだよな。でも、あの当時は『キン肉マン』や『北斗の拳』、『ジョジョの奇妙な冒険』だとか格闘モノが注目されてた頃だったから、「だったら俺もそれに乗ろう」って感じで路線を変えたら人気が出てきたんだよね(笑)。

――なるほど(笑)。そもそも『男塾』という設定はどういうふうに生まれたんですか? 相当独特な世界観といいますか。

宮下 俺ね、へんな世界が好きなのよ。自衛隊だとか応援団だとか相撲部屋だとか、そういう異様な男たちが集まってるタコ部屋みたいなさ。たぶん、自分の昔の仲間にダブらせてるんだろうな。バンド時代なんかもおかしなヤツがいっぱいいたから。

――『男塾』はバラエティに富んだキャラがたくさん登場しますけど、やっぱり実在のモデルがいたわけですね。

宮下 まあ、イメージのなかでダブるヤツはいるよね。たとえば富樫源次とか虎丸龍次なんかはケンカで刑務所に入っちゃった友だちとかさ。

――男塾塾長の江田島平八のモデルは?

描いたキャラにどこか抜けたところがあるのが俺の真骨頂かな

宮下 あれはなんだろうなあ。まぁ、俺の頭のなかで男としての一番の理想像って感じかな。でも、自分のなかで思い入れのあるキャラを挙げるとすれば、王大人(ワン・ターレン)なんかは好きだよね。ああいうどこまでマジメなんだかわからないようなミステリアスなキャラは、描いててもおもしろいよ。

――闘いの最中にラーメン食べたりしてましたよね(笑)。ただシリアスなだけじゃなく、ちょっとくすぐりの要素があるキャラというか。

宮下 うん。もうさ、俺のマンガはほとんどギャグとストーリーマンガとの塀を行ったり来たりしてるようなもんだから(笑)。そもそも俺はバカバカしいのが好きなんだよ、荒唐無稽っていうか。だからキャラを描くにしろシリアスな面だけじゃなくて、男としての愛嬌がほしいんだよな。描いたキャラにどこか抜けたところがあるのが、俺の真骨頂だと思ってるんだけどね。それこそ雷電であったりさ。

――雷電がイヤミの「シェー!」をやったのは衝撃的でした(笑)。『魁!!男塾』では女性キャラはほぼ登場しなかったですけど、それはこだわりがあったんですか?

宮下 いや、単純に女を描くのが苦手だったんだよ。俺はホンットに女はヘタだったな~(しみじみと)。でも、『週刊プレイボーイ』で『天より高く』を連載してた頃は、成年誌ってことでセックスシーンなんかも描いたんだよね。あのときは「ようやく俺も女が描けるようになったか」って自信にはなったな。あれでヌイたってヤツもいたから(笑)。

――ダハハハ! それはやっぱりうれしいもんなんですか?

宮下 そりゃうれしいよ、あんなんでヌケれば(笑)。まぁ、そもそも俺は本質的には絵がうまくないからさ。

――そんなことはないんじゃないですか? 格闘シーンも迫力がありますし。

宮下 いやいや。まぁ、俺のはヘタなところを勢いだとかハッタリでカバーしてるマンガだから。

――その勢いという部分では、『男塾』は技名で非常に難しい漢字を使ってたのがインパクトあったと思うんですよ。

宮下 そうね。でも、ああいう技なんかは絵ができてから辞書をバーって開いて、難しそうな漢字をわりと適当に組み合わせてただけなんだよ。だから昔は写植屋さんが泣いてたって聞くもんな。「こんな字は写植にないです」ってさ。

――そういう技名なんかは覚えてるもの

『魁!!男塾』宮下あきら

宮下先生お気に入りのキャラ、王大人。作品中の壮絶バトルで命を落としたキャラに対し、「死亡確認!」と声高に叫ぶ姿は『男塾』の定番シーンだった。『天下無双 江田島平八伝』では若き学生時代の王大人が登場する。

終了から10年、

ほとんどしてないんだよね。ある意味でプロレスなんかに似てると思うんだけど、非常にショー的要素が強いマンガだから。

男塾』も6年以上やってるじゃない? だから技なんかでも「これはどこかで使ったんじゃないか?」って思う場合も多々ある

日本男児の教科書! それが『男塾』である!!

『魁!!男塾』
※ジャンプコミックス全34巻/文庫版全20巻

1985~91年まで『週刊少年ジャンプ』で連載。不良少年たちに軍国主義さながらのスパルタ教育を施す男塾を舞台に、塾生たちの友情や死闘を描いた大ヒット作。その破天荒なストーリーは話題を呼び、テレビアニメや映画にもなった。

『暁!!男塾 青年よ、大死を抱け』
※ジャンプコミックスデラックス24巻まで刊行

『魁!!男塾』の続編として、2001~10年まで『スーパージャンプ』で連載。前作の主人公剣桃太郎の息子、剣獅子丸を主人公とした物語。前作のキャラクターも要所要所で登場する。最終巻25巻は7月4日に発売。

『天下無双 江田島平八伝』
※ジャンプコミックスデラックス8巻まで刊行

03年から『オースーパージャンプ』で連載されている男塾塾長、江田島平八の波瀾万丈な人生を少年から描いた作品。王大人など男塾ではおなじみのキャラから、ダグラス・マッカーサーなど実在した人物も登場する。

『民明書房大全』
※ジャンプコミックスデラックス

『男塾』シリーズにたびたびその名が登場した架空の出版社、「民明書房」の書籍一覧や特別書き下ろしマンガ『大河内民明丸評伝 果てること未だ知らず』などを収録した一冊。大河内民明氏と宮下先生による世紀の対談は必見!

なんですか？

宮下 覚えてない、覚えてない。もう俺のやり方はメチャクチャだから（笑）。

宮下先生の担当編集者 通常、漫画家はネーム（下書き）の段階でセリフを入れてから絵を描くんですが、宮下先生の場合はいきなり絵を描いて最後にセリフを入れるんですよね。

——へ〜。なんでも宮下先生はネーム自体を作らないって聞いたことがあるんですけど？

宮下 うん。俺、ストーリーは絵を直接描きながら作ってくのよ。

——それでストーリーを作れるって凄いですね！

宮下 そのへんはね、もう長年やってるからコツとかもあるしさ。たとえば1時間半の映画でも、印象に残るシーンなんてほんの数カ所じゃない？ だからマンガでもどこにヤマ場を持ってくるか、先に絵をイメージしながらストーリーを作るのが俺のやり方だね。

——宮下先生は格闘シーンを描くときに気にされてたことはありますか？

宮下 俺はとくにないな。でも、たとえば人が絡んだりする場面を描くのって難しいんだよね。だから猿渡氏とかは凄いなって思うもんな。俺も昔は原哲夫氏の絵を真似しようと思ったこともあったんだけど、あんなにうまくは描けないのよ。でもね、『男塾』をよく読んでもらえばわかると思うけど、あれはいわゆる"格闘"は

富樫源次に伊達臣人に月光……『曉!!男塾』では前作のキャラがさまざまな場面で登場。『魁!!男塾』終了から10年、少年誌から青年誌に舞台を移して、あの無骨不器用で愛すべき男たちは活躍したのだ。

ほとんどしてないんだよね。ある意味でプロレスなんかに似てると思うんだけど、非常にショー的要素が強いマンガだから。

——エンターテインメントとしての側面ですね。

宮下 うん。だから、プロレスも電流爆破デスマッチとかやるじゃない？ 俺のマンガの発想もああいう感じじゃないかなぁ。もともと、おもしろければなんでもいいっていうタイプだからさ。ストーリーにしたって理屈に合わなくても無理矢理突っ切るというか、「その週がおもしろければいい」っていう考えだから。

——『男塾』でも一回死んだキャラが生き返ったりしてましたもんね（笑）。

宮下 うん、だって忘れちゃってるんだもん。よく周りに「先生、死んでますよコイツ」って言われたよ（笑）。読者からのツッコミなんかもしょっちゅうだったしね。「何々が違う」とか「裸だったキャラが翌週に裸じゃなくなってた」とかさ。まぁ、あんまり俺は細かい部分にこだわるとかないからさ（笑）。

——逆にいえば、こだわらないのがこだわりなのかもしれないですね。宮下先生は『男塾』を執筆されてきてご自分のなかで印象的なシーンはありますか？

宮下 う〜ん、どうだろうなぁ……特別ねえなぁ。

——そうですか（笑）。あまり自分で描いたものはやはり覚えてない感じですか？

宮下 うん、覚えてないね。だって『曉!!男塾』だって10年やって、その前の『魁!!男塾』も6年以上やってるじゃない？ だから技なんかでも「これはどこかで使ったんじゃないか？」って思う場合も多々あるからね。

——定期的に読み返したりもしないですか？

宮下 全然読み返さない（キッパリ）。自分のは読み返さないよ。そもそも、マンガはあまり読まないね。それに俺は小説とかも読まないしな……（ボソッと）。

——よく漫画家の方で小説や映画やほかのジャンルのものを見て参考にするって聞きますけど。

宮下 そういうのはダメだよな。だってああいうのは別ものだもん。まあ『バガボンド』みたいなのもあるけどさ。（声を大きくして）だから、そのへんはいろんなものがあっていいんだよ。小説っぽいマンガがあったり、俺みたいなグッチャグチャなマンガがあったりさ。だから日本のマンガは素晴らしいんじゃないの？ バラエティ豊かで。

——宮下先生がおっしゃると重みがありますね（笑）。あと『男塾』で欠かせないものといえば『民明書房』ですが、あの解説もご自分で考えてたんですか？

宮下 もちろん。俺、そういう作文みたいなのはヘタじゃないんだよね。作文っていうかインチキ解説だけどさ（笑）。あれはね、もともと白土三平先生の忍者マンガの影響なんだよ。よく忍術の解説なんかが書いてあって、それをおもしろいなと思って参考にしたわけ。

『男塾』はショー的要素が強いマンガだからプロレスに似てるんじゃないかな

©宮下あきら／集英社

全国の少年ファンはもちろん、大きなお友だちまでその記述の真偽に頭を悩ませた『民明書房』の引用場面。その書物名も当初は『世界の怪拳・奇拳』といういかにもなものが多かったが、そのうち『EYEこそすべて』など「これはひょっとして……？」と思わせるダジャレものも目につくようになった。「本は知識の泉、本は心の栄養剤！」（『民明書房』創業者・大河内民明丸）。

——当時は『民明書房』が実在すると思ってた少年ファンも多かったみたいで。

宮下　ああ、なんか凄く多かったらしいね。「どこに売ってるんだ？」って問い合わせが来たって聞くし。なんか一回、弁護士か何かから「ゴルフは中国の呉竜府（ごりゅうふ）という拳法の達人が創始者だって書いてあるが、それは大きな間違いだ」って指摘もあったらしいよ。

——そこまで勘違いされると思ってました？

宮下　いやいや、思わないよ。だっていつも自分で笑いながら書いてたんだから。ここだけの話だけど、高橋よしひろ先生なんかは「宮下はいいネタ本持ってるな」って言ってたらしいけど（笑）。

——プロまで『民明書房』が実在すると思ってましたか！（笑）。

宮下　でも、だんだん内容もふざけたのが多くなってきて、それでみんな気づいた感じだよね。一回、蜘蛛を操る拳法の解説で、「蜘蛛の調教に失敗した西洋の武道

『魁!!男塾』宮下あきら

家たちが発した『失敗だ〜』が『スッパイダ〜』→『スパイダー』と変化したのは言うまでもない」って書いたら、さすがに小学生も「これはあやしいぞ」って（笑）。まぁ、あのときはけっこう楽しんで書いてたね。

——逆に『男塾』を描いてきたなかで困ったエピソードはありますか？

宮下　一回、最初の頃に街頭販売で男塾勢がふんどしを売るって回があったんだよね。そのときに右翼の街宣活動みたいな口調で「憂国の士がどうのこうの〜」ってセリフを書いたら、本物の右翼から脅しの電話がかかってきてビビったことがあったな（笑）。

——うわ〜、それはシャレにならないですね。

宮下　右翼ってけっこう難しいっていうか、茶化した感じになっちゃうとたいへんだからさ。まぁ、いま思うとああいうマンガだから、逆にそっち方面の人でファンになってくれる人もいたけどね。

——よく『ジャンプ』は生存競争が厳しいと聞きますけど、宮下先生は長期連載で体調を崩されたことはありましたか？

宮下　いやいや、昔の『ジャンプ』なんてそんなこと許されなかったもん。「入院しても描け」って感じだったんじゃない？『ジャンプ』が600万部も売った時期っていうのはそういう時代だったよ。休載もないし、年に2回の合併号のときに休めたくらいかな。でもなんだかんだ自分の時間は作ってたけどね。

——必ず仕事以外に自分の時間は確保する、と？

宮下　まぁ、自分のなかにそんなルールはないけど、こっちは根っからの遊び好きだからさ。

——なんでも相当飲まれるとか？

宮下　前よりは落ちたけどなあ。でも周りに飲むやつがいるとついつい飲んじゃうんだよ、この歳になっても潰れるまでさ。よくピッチが速いとは言われるね。

——お酒以外にストレス解消はあるんですか？

宮下　最近だとまた音楽をやり始めたり、

©宮下あきら／集英社

男塾シリーズの最強キャラ、江田島平八の半生に迫った『江田島平八列伝』は、実在する歴史上の重要人物が次々と江田島の人間力に魅せられていくという非常に痛快な作品。塾長、貴方はやっぱり偉大です！

男色ディーノ? 俺はそっちの気はないからお姉ちゃんのほうがいいよ(笑)

車なんかはずっと好きだよね。フェラーリとかランボルギーニとかさ。

——は〜、マンガのイメージだと「日本国万歳!」的な要素が強いですけど、けっこう外来文化がお好きなんですね。

宮下 そうなんだよな。映画にしても邦画なんて観たことないもんね。俺はホント向こうのばっかりだよ。憧れじゃないけど、俳優でもマーロン・ブランドとかロバート・デ・ニーロとかさ。

——遊んでるときもマンガ用にネタ帳を持ってたりします?

宮下 いや、そんなの持たないよ。ほら、よくほかの漫画家さんとかは、風呂だとか便所だとか公園でアイデアが浮かぶとか言うけど、俺はもう机に座ってるとき以外はマンガのことは一切考えないから。いつもマンガのネタ探しをしてるとか、メモってるなんて絶対ない(キッパリ)。

——豪快ですね〜。

宮下 俺は遊んでるときはマンガのマの字もないよ。そのぶん、仕事のときに集中するからな。

——ところで、続編の『暁!!男塾』をやることになったのはどういったきっかけで?

宮下 ほら、バンドでもよく再結成したりするじゃない? そんな感じだよな。でも、昔好きだったバンドがまた始動するとたいていクオリティが落ちてるんだよ(笑)。

——いえいえ、先生は全然下がってないですよ!

宮下 フフフ。あとは編集部のほうでも続編は一番堅いっていう意思もあったんだろうな。まぁ、こっちとしても時代が変わって、よくあるパターンだけど『魁!!男塾』のキャラの息子たちを登場させたりね。

——いま連載中の『江田島平八伝』ではいろんな歴史上の人物も出てきますよね。東郷平八郎からスパイ・ゾルゲ、さらには毛沢東まで(笑)。

みやした・あきら■1957年10月8日、東京都出身。『私立極道高校』でデビュー。85年から連載を開始した『魁!!男塾』が大ヒット、『週刊少年ジャンプ』の黄金時代を支える。その後、01年から『暁!!男塾 青年よ、大死を抱け』を連載。現在は『天下無双 江田島平八伝』を『オースーパージャンプ』で連載中。好きなミュージシャンはジミ・ヘンドリックス。

宮下 あぁいうのを描くのはさすがに勉強しとかないと難しいよね。ほら、基本的な設定は変えられないじゃない? たとえば日本が戦争に勝ったとかさ。ホントは江田島平八の力で勝ったって描きたいんだけど、それをやっちゃうといろいろ問題になっちゃうからな(笑)。でもおもしろいよね、実在の人物と絡ませるのは。

——楽しんで描かれてる、と。

宮下 うん。でも、一番楽しんで描いたのはあれだよ、『天より高く』だよ。あれはおもしろかった。ストーリーから何から全部、一気に24時間ぐらいで描き上げてたから。

——そのくらいノッてたってことですね。

宮下 あれはホントになんでもアリだったもん。いま考えるとよくあんなこと描けたと思えるぐらいだよ。時の首相や横綱にそっくりなキャラを出しておちょくったりさ。時事性を盛り込みながら好きにできたからおもしろかったね。

——さて、宮下先生は今後こういうマンガを描きたいという構想はありますか? たとえばもう一つの夢であった音楽を題材にするとか。

宮下 いやぁ、音楽はマンガだと大変だよな。それに、俺が描くとバンドでバトルみたいになっちゃうよ。また『民明書房』が出てきて「これこそ指が30本に見えるナントカ奏法である!」とかさ(笑)。

——ダハハハ! では、基本的にはこれからも『男塾』路線という感じですかね。

宮下 そうだな。だって「ほかのものを描け」って言われたって、俺に恋愛モノなんて描けるわけないじゃない? クラプトンに「ヘビメタやれ」って言ったってできるわけないさ。

——なるほど。宮下先生は漫画家生活を振り返って、ご自身のなかで変化してきた部分ってありますか?

宮下 変化? なんだろうなぁ。わかんねえなぁ。

——では、逆に変わらないものは?

宮下 変わらないものは、やっぱしあれだな、俺には難しいマンガなんて描けない!(キッパリ)。

——いえいえ、『男塾』は充分難解なマンガだと思いますよ(笑)。

宮下 いや、オレは頭を使った文章の長いセリフのいっぱいあるようなマンガはダメなのよ。好きじゃないし、そんな知識もないしさ。いわゆるうんちく的なマンガは絶対無理だね。やっぱりハッタリで固めたようなマンガが得意なんだよ。まぁ、そこに友情や泣きを取り入れてね。あとはギャグね(笑)。

——それが宮下マンガの重要な要素なんですね(笑)。あと、最後の質問なんですが、マット界に男色ディーノというプロレスラーがいるのはご存知ですか?

宮下 何それ? ディーノみたいにシルクハット被って試合してるの?

——いや、ビキニパンツを穿いたゲイレスラーなんですけど(笑)。

宮下 あぁ、男爵じゃなくて男色か! え、そんなのがいるの!?

——人気レスラーなんですけど、いつか宮下先生にお会いしたいという発言もしていて。

宮下 なんかおっかないなぁ。俺、そっちの気はねえからさぁ。お姉ちゃんのほうがいいよ(笑)。

——ダハハハ! 今日は『男塾』のおもしろさの秘密を垣間見た気がします、ありがとうございました!

【10年6月2日/都内・宮下先生の仕事場にて収録】

蒼い目のオタクがマンガ愛を熱筆!!

『紙とインクのヒーロー』

文／ジョシュ・バーネット

マンガ特集といったらオタクのなかのオタクが黙っちゃいない!? というわけで、以前本誌がジョシュ・バーネットに書いてもらった、マンガに対する熱い原稿をここに再録する。『トランスフォーマー』からお決まりの『北斗の拳』まで、読めば読むほどやっぱりこの人はなんかおかしいぞ!

構成／松下ミワ

すべての子どもは、この〝紙とインク〟の世界に憧れの人を見つけるものだ。夢を感じさせ、元気づけてくれるヒーローたち。そのヒーローは、プロアスリートや彼らの親であることもあるだろう。

だが、それと同じくコミックやアニメも、世界中の数えきれない子どもたちにインスピレーションを与えてきた。また、想像から生まれたヒーローも多く、彼らは現実の世界に登場する偉人よりも、とうてい信じがたいことをやり遂げるのだ。

ボクも子どもの頃は、ほかの多くの子どもたちと同じように、登校前の朝の時間を好きなアニメを観てすごした。そして、先生や教科書と苦戦したあとには、自分の好きなアニメを観るために急いで家に駆け戻った。

アニメを観たことがない子どもをボクは知らない。子どもというものは、アニメを観るために存在しているようにさえ思う。みんなそれぞれ好みの番組があるが、たとえば『トランスフォーマー』［※注1］は、多くの子どもたちが熱狂していた。ボクも例外ではなかったが、バーネット家で『トランスフォーマー』よりおもしろいとされていたのは『宇宙戦艦ヤマト』［※注2］の米国版、『スターブレーザーズ』であった。『スターブレーザーズ』の時間になると、家族全員、暗黙のルールがあるかのようにぞろぞろとリビングに集まったものだ。

その後、ボクと友人たちは『超時空要塞マクロス』［※注3］の米国版続編『ロボテック』の世界に引きずり込まれた。その頃のボクは、ワルキューレの騎士を宇宙に放り投げた残忍なゼントラーディを倒すことに、すべてを懸けていたと言ってもいい。

そして、そんなボクがさらにファンタスティックな底なし沼へと足を踏み入れたきっかけがある。当時、マーベル・コミックスの中毒でもあったボクに、友だちがある一冊の〝マンガ〟を貸してくれた。神崎将臣の『重機甲兵ゼノン』［※注4］。ボクが11歳のときだった。叩きのめされるほどの衝撃を受けた。

これを読んだとき、「これはまさに自分のために描かれたコミックではないか!」と感じた。〝マンガ〟にはリアリズムがあり、背景のアートは信じられないほど細かい。しかも人間ドラマは悲喜劇にあふれ、信じら

れないほどその登場人物にはキャラクター性があった。また日本の〝マンガ〟に登場する人々は、ボクが慣れ親しんだアメリカンコミックのキャラクターとはまったく違う気質を持っていた。当然、彼らは屈強であったが、とても人間的でもあり、ときには傷つきやすい内面を持っていた。〝マンガ〟のヒーローは往々にして、常人ではありえない、とんでもないことをやってのけるものだが、彼らの繊細で傷つきやすいキャラクターは、現実を生きるボクとヒーローの距離をぐっと近づけてくれたのだった。

それぞれの人間にそれぞれのヒーローが存在する。

現在、〝マンガ〟の世界では多くのヒーローが誕生しているが、ボクにとってのヒーローとは、いつ何時でも、つねに『北斗の拳』のケンシロウである。どんなにこの世界が荒れはてて、残忍な悪党に苦しめられる混沌とした世界になろうとも、男であれば正しいことをやり遂げる力と勇気を持たなければならない。それがどんなに孤独な作業であろうとも、だ。

ケンはボクに、男とはこうあるべきだという究極の姿を見せてくれた。ケンは正義のために、心ない世界に秩序を取り戻そうと、その力を酷使する。幸せな時間もめったになく、足下にはつねに死が迫っている。でも決して闘いから逃げることはない。どんなに不利な状況であろうと、相手を倒す方法を模索するのだ。

インスピレーションとは何か ケンに出会った日にそれを知った

いつの時代も、常人はこの世の不幸・不正に耐える方法を模索し、やがてそれに慣れる。きっとそのほうが簡単なのだろう。だがケンにそんな考えはなく、偉大なヒーローは肉体的にも精神的にも想像を絶する苦痛を抱きながら立ち向かう。

「おれにはもうなにも目的はない。すべてを失った人間だ。ただ……きさまらのような狂信者のために犠牲になり、ながされる幼い子供たちの涙が……悲しみが……おれをここにつれてきた……きさまの野望はここまでだ!!」（『北斗の拳』「死のブーメラン」の巻より）。

誠実さをもって正義の守護者になりえるのなら、どれほど壮絶な痛みが生じようとも、そこには立ち向かう価値があるのだ。

ケンが示した決断力はボクに衝撃を与え、いまでもボクをインスパイアしてやまない。実際、『北斗の拳』には、多くの賛美すべきマーシャルアーツや超人間的なドラマがあるが、ボクの頭から離れることがないのは、やはりケンのキャラクターである。ジムでトレーニングしているときなど、つねに己のレベルを昇華させるため、『愛を取り戻せ！』[※注5]を聴く。楽曲だけならそれほど心に響くことはないが、『愛を取り戻せ！』は『北斗の拳』の象徴である。自分はケンシロウになり、この殺伐とした愛の歌を聴くと、闘いの爪痕が残る不毛の地を歩きながら、闘いに備え、つねに神経を研ぎ澄ましている心境になるのだ。ラオウ、シン、サウザー、ファルコ……カイオウ、道の最後にはどんな強敵（とも）が待ち受けているかわからない。そしてボクは彼に立ち向かう。いや、彼ら全員に立ち向かう、と言おう。ケンならいかなる条件であろうと、譲歩はないのだから。

ボクにとって、この曲で入場するということは、ファンタジーやインスピレーションを自分に与えるということなのだ。この曲がかかると、ファンが激昂し、泣く声が聞こえる。ボクは知っている。彼らもまたボクと同じく、『北斗の拳』に心を揺さぶられていることを。

〝マンガ〟のヒーローは多くの人を刺激してきた。そして、これからもずっと影響を与え続けていく。未来のPRIDEファイターは、『格闘太陽伝・ガチ』[※注6]や『餓狼伝』[※注7]を読み、その主人公のようになりたいと、日夜練習に明け暮れたファイターかもしれない。きっといつの日か、幕之内一歩[※注8]はリングに実在しているだろう。彼に憧れ、〝はじめの一歩〟を踏み出した若いファイターによって。

インスピレーションが降ってくるとき、それがいつなのか誰も知らない。10分後なのか、10日後なのか、10年後なのか――。幸運にもボクはケンシロウに出会った日、インスピレーションとは何かを知った。

そしてボクはケンになるべく常に努力してきた。もちろん、スーパーマンの力を持つ〝リアル・ケンシロウ〟になることは到底不可能だとわかっている。だが、もしも「ケンになれた！」という感覚が一試合、いや一瞬でもボクに訪れるなら、ケンシロウの道を歩んできたことを後悔することは絶対にない。

ケンシロウと『北斗の拳』。ボクを深くインスパイアしてきた〝マンガ〟。『北斗の拳』がキミをインスパイアすることがなくとも大丈夫、案ずることはない。心配しなくとも〝マンガ〟のヒーローは、天空に輝く無数の星ほどいる。

そのなかにはきっとキミに語りかけるヒーローがいるだろう。『北斗の拳』のそれぞれの戦士に背負うべき宿星があるように。

そして、そのヒーローは不可能だと言われることに挑戦し、成し遂げるよう、キミを鼓舞する。リングの上であれ、夢を実現する道を、しっかりとその目で見ることができるまで。

そう、どんなときもボクらは、紙とインクのヒーローに憧れ、前に進むのだから。

注釈

[注1] トランスフォーマー
玩具メーカー・タカラ社（現・タカラトミー社）が販売した製品をベースに、84年マーベル・コミック社が初期作品を制作したSFロボットアニメ。日本テレビなどが放送。

[注2] 宇宙戦艦ヤマト
74年から読売テレビ系列で放送されたSFアニメ。原作／松本零士、制作／西崎義展。劇場版「さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち」は日本アニメ史上記録的な大ヒットに。

[注3] 超時空要塞マクロス
SFアニメ。原作／スタジオぬえ、制作／タツノコプロダクションなど。若いスタッフによるラブコメやアイドル的な要素が加わった新機軸のストーリーが話題に。

[注4] 重機甲兵ゼノン
小学館「少年ビッグコミック」で86年より連載されたヒーロー漫画。神崎将臣著。講談社『ヤングマガジン・アッパーズ』にて続編「鋼〜HAGANE〜」が連載された。

[注5] 愛を取り戻せ！
クリスタルキングの代表曲の一つで、フジテレビ系アニメ『世紀末救世主伝説 北斗の拳』主題歌。「ユー・アー・ショック!!」の出だしはあまりに有名。

[注6] 格闘太陽伝・ガチ
小学館『ビッグコミックスピリッツ』で連載された格闘マンガ。プロレスラーの息子、原田太陽が自己流トレーニングで格闘家になった様を描いた。監修はルー・テーズ。

[注7] 餓狼伝
流浪の格闘家、丹波文七を主人公とする本格格闘マンガ。原作／夢枕獏、漫画／板垣恵介。谷口ジロー氏の作画版もあり。映画化もされている。

[注8] 幕之内一歩
森川ジョージが89年から講談社『少年マガジン』に連載中のボクシング漫画『はじめの一歩』の主人公。ボクシングを通して描かれたさまざまな人間模様は秀逸。

JOSH BARNETT■1977年11月10日、アメリカ出身。史上最年少でUFCヘビー級王座を獲得。03年、パンクラス無差別級王者に君臨。その後、PRIDE、戦極などで活躍。その一方で"世界最強"のオタクともいわれており、とくに『北斗の拳』に心酔。自身をケンシロウだと思い込んでいる筋金入りのオタク。

――今日はよろしくお願いします！
古泉　いやぁ、こちらこそよろしくお願

出せないんですけど（苦笑）。で、下北沢
に引っ越したあたりから、友だちが同じ

に凄く怯えて暮らしてたので、だからプ
ロレスラーの強さに凄く憧れがあったの

んど観なくなって。桜庭（和志）がホイラ
ー・（グレイシー）とやったときも観てな

青春童貞マンガの
第一人者が登場!!

暴力衝動の妄想マンガ

『ワイルド・ナイツ』作者

古泉智浩

童貞男子の暴力と性をリアルに描写することで定評がある、
古泉先生にも格闘技の話を聞きた〜い! というわけで、
新潟から上京してきた古泉先生をキャッチ。
『ワイルド・ナイツ』は先生の実体験だったんだよ!

聞き手／ジャン斉藤

――今日はよろしくお願いします！

古泉　いやぁ、こちらこそよろしくお願いします。感激ですよ、『kamipro』登場の夢がかなったんですから。

――それは凄く恐縮です（笑）。それでさっそくですが、まずは古泉先生がプロレスに興味を持ったきっかけから聞かせてください！

古泉　それはですね、前号の変態座談会でも触れていらっしゃったんですけど、同郷の小林まことさんの『1・2の三四郎』がとにかく好きで、ちょいちょい猪木だ、タイガー・ジェット・シンだって、プロレスネタが入ってくるじゃないですか。そっからプロレスを好きになっていったんですよ。

――ああ、マンガがきっかけだったんですね。

古泉　そうです。それで藤波（辰爾）が凱旋帰国してあまりのカッコよさにもの凄い衝撃を受けて、そしてタイガーマスクが登場するわけですからね。

――ハマらないわけがないですよね（笑）。そこからずっとプロレスを見続けてきたんですか？

古泉　いや、いったん離れたときがあったんですよ。90年代に入ってもうたくさんプロレス団体が出てきたじゃないですか。そのなかからUWFインターだけを熱心に観てたんですね。

――どうしてUWFインターだったんですか？

古泉　う～ん、とくに明確な理由は思い

婚約者とのあいだに生まれた子どもに復讐される恐怖があった

出せないんですけど（苦笑）。で、下北沢に引っ越したあたりから、友だちが同じアパートに住み始めて、結果〝リア充〟になっていったんです。そうしたらプロレスを観なくなって……。

――リア充になるとプロレスから離れますか（笑）。

古泉　僕の場合はそうですねぇ。リア充になった頃、新日本とUWFインターの対抗戦があって武藤（敬司）と高田（延彦）がやったんですよ。それでドラゴンスクリューで高田がやられてるんですよ！　アレには凄いビックリして。

――フィニッシュはUWFが否定してきたプロレスの古典技4の字固めでしたね。

古泉　ええ、「あんなつなぎ技でそんな効いてんの？」って思って。それに当時、僕はプロレスを完全にガチだと思ってましたんで。

――ああ、なるほど。

古泉　なんで高田があんなつなぎ技で負けたのかがわからないし、その光景に凄いショック受けたし、それからプロレスが嫌いになったんですよ。

――それより衝撃なのは先生がリア充だったことですよ。先生のマンガからはリア充への憎悪すら感じさせるのに!!

古泉　いやあ、あの頃はバンドとか始めて（笑）。

――何か満たすものあるんでしょうね、格闘技とプロレスって。

古泉　そうかもしれないですね。振り返ってみると、僕は中高生時代にヤンキーに凄く怯えて暮らしてたので、だからプロレスラーの強さに凄く憧れがあったのかもしれないです。

――そんな憧れの対象だったのに、生活が充実しちゃったことと高田の惨敗で興味を失なってしまった、と。

古泉　高田の惨敗ぶりがもう衝撃で衝撃で。武藤との試合は録画を何回も見直しちゃいましたよ。そしてフィニッシュになると必ず「なぜ4の字？」って言ってましたもんね（笑）。

――それからどれくらいプロレスから遠ざかっていたんですか？

古泉　まあ、それっきりプロレスはほとんど観なくなって。桜庭（和志）がホイラー・（グレイシー）とやったときも観てなくて。で、99年に新潟の実家に帰ることになるんです。「30歳で田舎に帰る」って親と約束してたんです、一人っ子なんで。そうして田舎に帰ったらリアルが全然充実しなくなっちゃって。まあ、10年も東京に住んでたから田舎の友だちは絶滅してるんですよね。

――そこから生活を満たすものを探すわけですか？

古泉　ええ。マンガ描きながらラジオばっか聴いてたら、FMで浅草キッドさんたちが『ラジオ黄金時代』という番組をやってたんですよ。そこで「小川直也がとにかく凄い！」って騒いでらして。ちょうどホイス（・グレイシー）と桜庭和志の試合が終わった直後の放送でも、その試合の話題で持ちきりで。そこから橋本真也の引退スペシャルとかもちゃんと見始めて、あと追いでPRIDEも。そこからいままでずっと観てますよ。

――じゃあ、いまもリア充じゃないってことですか？

古泉　いまはあんまりリア充じゃないですね。全然リア充じゃないからWOWOWでやってるTUFがおもしろくてしょうがないですね（笑）。

――いまのオススメは『TUF』（笑）。

古泉　ですね。DREAMもSRCも一応は観てますけど、もう観きれなくなっちゃってます。

――なるほど。ところで先生が空手を始めたのは格闘技好きという理由もあったんですか？

古泉　それもなくはないですけど、……ちょっと話は長くなりますが、結婚しなかった婚約者とのあいだに男の子が生ま

©古泉智浩／双葉社

空手を習いだした田舎のボンクラ青年がヤンキーを通り魔するという超絶マンガ『ワイルド・ナイツ』。それと並行して風俗でセックスにハマるという独特の日常を描いている。

れて、将来復讐されるという恐怖がホントにあったんですよ。

――未読の読者に説明すると、先生が描かれた『ワイルド・ナイツ』と同じあらすじという。

古泉 実際は2002年の話です。結婚しようと思ったんですけど、一緒に生活を営めるような雰囲気でもなくなっちゃって。で、婚約解消して慰謝料をめぐって彼女と裁判することになったんですけど。そうこうしているうちに彼女が「妊娠している」と言いだして。

――そこもマンガと一緒ですね。

古泉 僕の弁護士に伝えたら「嘘だろ」と言ってたんですよ。でも、本当に妊娠してて裁判の過程のあいだに生まれちゃうんですよ。

――それは凄く複雑な展開ですねぇ。

古泉 そうなんですよ。だから、僕はホントに「流産してくれ！」と神に祈ってたんですから。

――産まれた赤ちゃんは男の子だったんですか？

古泉 いや、女の子だったんです。そこはマンガと違いますね。それで「これで復讐されることない」って凄く安心したんですけど（笑）。で、その頃にAV男優を目指している男が女空手家とSEXしようとしたら蹴られて負けるというエロマンガを描いてて。そのために地元の空手道場を取材に行ったんです。

――しかし、非常に古泉先生らしいストーリーですね、そのマンガ（笑）。

古泉 そうしたらえらい和やかな雰囲気の道場なんですよ。僕も空手をやってみようと思って。で、そこに通ってるうちに『ワイルド・ナイツ』のイメージが膨らんで。「たむろしているヤンキーを不意打ちでやっつけてみたい！」というような妄想が湧いてきたんですね。

――空手を習ってるうちに（笑）。

古泉 思っちゃってたんですよ。ヤンキーたちをぶっ飛ばさないといけないみたいな。

――そうして描かれたのは『ワイルド・ナイツ』！ 凄い話だなあ（笑）。でも、このマンガのように先生が実際に襲ったことはないんですよね？

古泉作品には暴力とともに「性」がクローズアップされている。『転校生』が元ネタになった『転校生 オレのあそこがあいつのアレで』や『ライフ・イズ・デッド』はとにかく凄すぎる!!

どうすれば「車を見られないように通り魔ができるか」を考えました

古泉 いや、さすがに犯罪はしたことはないです。やっぱり一回裁判というものを味わうと法律に破ろうという気がもう一切なくなりますよ。もうだからね、我々は普段は意識せずに暮らしてるんですけど、じつは法律っていうクモの巣の上でウロウロしているだけなんですよ。いざ何かあったら法律というクモに簡単にからめ取られてチュウチュウ吸われちゃうんですよ。刑法、民法も含めて全部そう。あの裁判以来、自動車も法定速度を守ってずっと走っています。

――ちなみにその裁判はどういう決着になったんですか？

古泉 俺、あのときは1300万円請求されたんですけど。

――その金額もマンガと同じ。

古泉 でも、これまでの判例だと婚約解消はだいたい100～150万、あっても200万。でも、妊娠があったので300万だろうと弁護士さんは見立てて。実際は最終的な判決まで行かずに調停というかたちになって。それでも半年以上はやってました。

――そういうことがあると人生観は変わりますよね。

古泉 いやあ、法律はホントに恐ろしいですよ。たとえばもうケンカする気もないですから。正当防衛が認められるんだったらやりますけどね。相手に1発2発殴らせておいて。でも、やっぱり暴力は連鎖があるからな。

――連鎖ですか？

古泉 たとえ相手をやっつけて、仲間を連れてこられてやり返されるとか。暴力って連鎖するじゃないですか。

――あとで集団で仕返しされるというか。それが暴力の連鎖。

古泉 そうそう。それでヤクザが出てくるとか、実際キリがないと思うんですよ。マンガでも暴力の連鎖を描くのは凄いややこしくなるから、『ワイルド・ナイツ』は完全に連鎖が起こらないようなストーリーにしようと思って。結局、ケンカの行き着く先は殺し合いになったりしますからね。

――そういえば『ワイルド・ナイツ』は暴力が連鎖しませんね。

古泉 そうです。自分とあんまり生活圏じゃない場所で通り魔をする。そうすれば連鎖は避けられるかな、と。そういうこともずっと考えてたんですよ。

――ずっと考えてましたか（笑）。ホント先生の妄想なんですね。

古泉 そうなんですね。「どうすれば車が見られないように通り魔ができるのか」とか考えました。

――先生がそういう妄想をするのは、ヤンキーに対して感情的になってこともあるんですか？

古泉 そうですね。だってヤンキーって自分たちが喜んでヤンキーになってますから。べつにかわいそうでもなんでもないんですよ。

――まあ、そうなんですよね（笑）。

古泉 生活環境がどうのこうの言う人もいるけど、それでも普通に生活してる人はたくさんいますから。僕の通っている

――先生のマンガは暴力的というか、人間の暴力衝動が止まらない描写が多いですけど、それは先生の内面がそうなんで

ですよ。僕は一人っ子だから、争わずに暮らしてきたので、性格的にそういうところがあるのかもしれないですね。

今度はホント暴力の連鎖とか、この回では面倒くさいから触れなかったところをやろうかなって思ってます。井筒和幸監

古泉　生活環境がどうのこうの言う人もいるけど、それでも普通に生活してる人はたくさんいますから。僕の通っている空手道場にもヤンキーがたまに来るんですけど、みんなすぐにやめてくし。で、俺のほうが空手ルールだとやっぱり経験があって強いから、スパーリングのときにお腹をポーンと叩いたりできて凄い楽しいんですよ!!

―それは法律上OKですもんね（笑）。

古泉　そう。それで痛がってる不良に「休んだほうがいいよ」なんて言えるわけですよ。ハハハハハ！

―楽しそうですねぇ（笑）。

古泉　でも、アウトサイダーが始まってから、ヤンキーどもがこぞって格闘技を始めてるじゃないですか。ホントやめてほしいんです！

―アハハハハハ！

古泉　恐ろしい。ホントに強くなられると困るんですよ。

―ちなみに先生は何帯なんですか？

古泉　級は7級で青帯です（笑）。僕が空手を実際にやったのは2年ちょっとぐらいで、いまも道場に行ってトレーニングをしますけど、一人でサンドバッグを蹴るくらいです。

セックスと格闘技はマンガと相性がいいテーマだと思います

―先生のマンガは暴力的というか、人間の暴力衝動が止まらない描写が多いですけど、それは先生の内面がそうなんですか？

古泉　いやいや、あんまり僕、闘争心はそんなにないんですよ。実際に空手の試合に出ても、とにかく争っている空気がイヤでイヤでしょうがないんです。相手が俺を負かそうとしてるということが凄い気持ち悪い。ホントに負けてもいいから終わっちゃおうみたいな気分になるんですよ。

―試合の会場に行くまでは勝とうという気持ちはあるわけですよね？

古泉　それがですね、全然ないんです。高校のときは剣道部だったんですけど、剣道の試合のときもそういう気分だったんですよ。僕は一人っ子だから、争わずに暮らしてきたので、性格的にそういうところがあるのかもしれないですね。

『ワイルド・ナイツ』は先生の実体験がもとになっているが、心に染みるラストシーンも実際にあったことがもとになっている。ボンクラ男子はぜひ読むべし！そして妄想せよ！

古泉智浩

―でも、マンガのほうは非常に暴力的ですよね。マンガと格闘技って、親和性が高いものであると言われますけど、先生のなかで相性はいいと思いますか？

古泉　相性はいいと思います。やっぱり格闘技は画になっても伝わりやすいですからね。たとえば将棋マンガは将棋を知らないと何が起こってるのか全然理解できないですよね。でも、格闘技は見たまんまわかると思いますね。「ああ、殴られた」とか。

―つまり、暴力は誰もが知ってるものということですね。

古泉　セックスと格闘技はマンガに合うと思います。セックスも視覚的に興奮できるから。

―先生の作品は、セックスと格闘技という相性がいいテーマを頻繁に使われてますね。

古泉　そうですね。でも、僕が描く格闘技はいつも初心者止まり（笑）。

―でも、痛いですよ。先生のマンガからは痛さが伝わってきますよ。

古泉　いやいや、やっぱりホント僕の格闘マンガには夢がないんですよ。スケールがもの凄く小さい話ですから（笑）。

―確かに夢がないのかもしれないですけど、それがリアルなんだと思いますけどね。

古泉　まあ実際にね、『はじめの一歩』みたいな試合をしてたら、とっくにク◯ク◯パーになってるじゃないですか（笑）。

―そうですよね（笑）。

古泉　だから『ワイルド・ナイツ』の続編が思いついたら描きたいなと思ってます。今度はホント暴力の連鎖とか、この回では面倒くさいから触れなかったところをやろうかなって思ってます。井筒和幸監督の『ヒーローショー』という映画はご覧になりました？

―ああ、暴力描写がホントに凄いらしいですね！

古泉　凄いんですよ！　それがホント暴力の連鎖を正面から描いていて。

―やったらやり返されるという。

古泉　そう。ヒーローショーをやっているフリーター同士がケンカをするんですけど、お互いに知り合いのチンピラを連れてくるうちに、どんどんエスカレートしちゃって。最終的に殺し合いになっちゃんですよ。

―でも、あんまりお客さんは入ってないみたいですね。

古泉　全然入ってないんですよ。だからあの映画がコケたら日本映画の将来はないと思って凄く応援してるんですけどねぇ。ジャルジャルが主役なんですけど、そのファンがドン引きして帰るという（笑）。『ヒーローショー』を応援するためにも、暴力の連鎖をこれから向き合って描いてみたいですね。

―期待してます！（笑）。

【10年6月某日／双葉社にて収録】

こいずみ・ともひろ■1969年、新潟県出身。93年にマンガ家デビュー。短編集『青春☆金属バット』は映画化されている。現在は新潟在住。先生のブログ『オレは童貞じゃねえ！』→http://vivaall.cocolog-nifty.com/douteijanee/

2010年代のプロレスマンガ論
リアルとファンタジーの行方

文／田中太陽

プロレスを題材としたマンガは数あれど、そのすべてはプロレスを真剣勝負として扱った一種の格闘技マンガと、あらかじめ勝敗の決まったエンターテインメントとして描いたものの二つに大きく分けられる（キャラクターとしてプロレスラーが登場するだけの作品は含まず、あくまでプロレスそのものを主題としたマンガ限定とする）。

これらは同じプロレスマンガでありながら、まったく別のジャンルに属するものといっても過言ではない。前者はボクシングマンガや柔道マンガと本質的に変わりないが、後者はプロレスのデリケートな部分に踏み込んだマニアックな内容のものがほとんどであり、方向性としてはむしろ金融マンガや法律マンガのような〝職業の知られざる実態〟を描いたものに近くなっている。

後者のような作品は2000年代に数多く発表されているが、これは需要の変化というよりもむしろ、プロレスが真剣勝負であるとしたフィクションが説得力を持たない時代になったことを表わしていると言える。現実世界における〝プロレスの立ち位置〟が変遷してゆくとともに、プロレスマンガも変わらざるをえなかったのである。

その口火を切った作品として01年に連載開始された『ターキージャンキー』（『週刊コミックバンチ』にて連載）が挙げられる。作者はかつて『THE MOMOTAROH』（『週刊少年ジャンプ』にて連載）でプロレスを真剣勝負として描いたにわのまことだが、この作品では実力がありながらも〝負け役〟ばかりを担当している若手レスラーを主人公とし、勝ち負けの打ち合わせをする場面をも描写するなど、当時としてはかなり突っ込んだ内容となっており、たいへん興味深い。

また01年は、プロレスに勝敗の取り決めがあることを暴露して話題になった書籍『流血の魔術最強の演技—すべてのプロレスはショーである—』（ミスター高橋・著／講談社）が刊行された年でもあり、『ターキージャンキー』もこれを受けての作品であることは疑いようがないが、暴露本を書いた張本人であるミスター高橋もその後『太陽のドロップキックと月のスープレックス』（『週刊モーニング』にて連載）というプロレスマンガの監修を手がけていたりする。04年に発表されたこの作品にもまた、プロレスに転向した柔道家が〝取り決め〟の存在を知らされ愕然とするなど、暴露色の強いシーンが数多く描かれ話題となった。

以降のプロレスマンガにおいては勝敗の取り決め、すなわち〝ブック〟の存在を肯定することがあたりまえとなってゆく。そ

まさしくプロレスファンが思い描いたプロレスの構造そのものだ。ブックはないが八百長はあるし、イスの使い方がヘタなレ

ざるをえなかったのである。

なった。

以降のプロレスマンガにおいては勝敗の取り決め、すなわち〝ブック〟の存在を肯定することがあたりまえとなってゆく。そうした作品のなかには『肉の唄』（コウノコウジ・作／『週刊ヤングマガジン』にて連載）や『任侠姫レイラ』（梶研吾・原作、米井さとし・作画／『週刊少年チャンピオン』にて連載）のようにプロレスファンから高い評価を受けたものもあったが、内容がマニアックになりすぎているのか、はたまたプロレス人気そのものが衰退しているゆえか、一般読者からの支持をいま一つ受けられていないのが現状である。

ならば今後のプロレスマンガはどうあるべきなのか？

フィクションであるがゆえに現実のプロレス界よりもスマートなカミングアウトができ、そのインパクトに任せて00年代を乗りきってきたこのジャンルだが、それも限界にきていることは明白である。２０１０年代において、プロレスマンガは何を描くべきなのか？

その答えの一つが、00年代にもっとも支持されたプロレスマンガのなかにあるかもしれない。この時代に描かれたプロレスマンガのほとんどが〝ブック〟の存在に触れていることは前述のとおりだが、そういった〝21世紀のプロレス観〟をまったく無視し、古い時代の常識をもって現代のプロレスを描いた傑作がただ一つだけ存在する。ヒラマ・ツミノルの『アグネス仮面』である。

この作品について特筆すべきは、01年という〝プロレス冬の時代〟真っただ中に連載開始したにもかかわらず、山本小鉄的な〝昭和の論理〟に基づいてプロレスを描き続けた点である。『アグネス仮面』に登場するプロレスラーに打撃技は効かない。それどころか逆水平チョップ一発で空手家を吹っ飛ばす。がっちり決まった卍固めを外すことは不可能だし、アルゼンチン・バックブリーカーはギブアップしなければ失神する危険な技なのである。

これらが単なるでっちあげの作り話ではなく、かつては事実として人々に信じられていた〝神話〟であることは言うまでもないだろう。しかも『アグネス仮面』におけるプロレスの試合は、勝敗の取り決めこそないものの真剣勝負でもないという、まさしくプロレスファンが思い描いたプロレスの構造そのものだ。ブックはないが八百長はあるし、イスの使い方がヘタなレスラーは駄目レスラーなのだ。

繰り返すが『アグネス仮面』の連載時期は00年代であり、こうした主張が通る時代ではまったくなかった。同時期にしかも同じ雑誌に連載されていた格闘技マンガ『格闘太陽伝ガチ』（青山広美・作画）が、プロレスにおけるブックの存在を普通に描いていたような時代である。

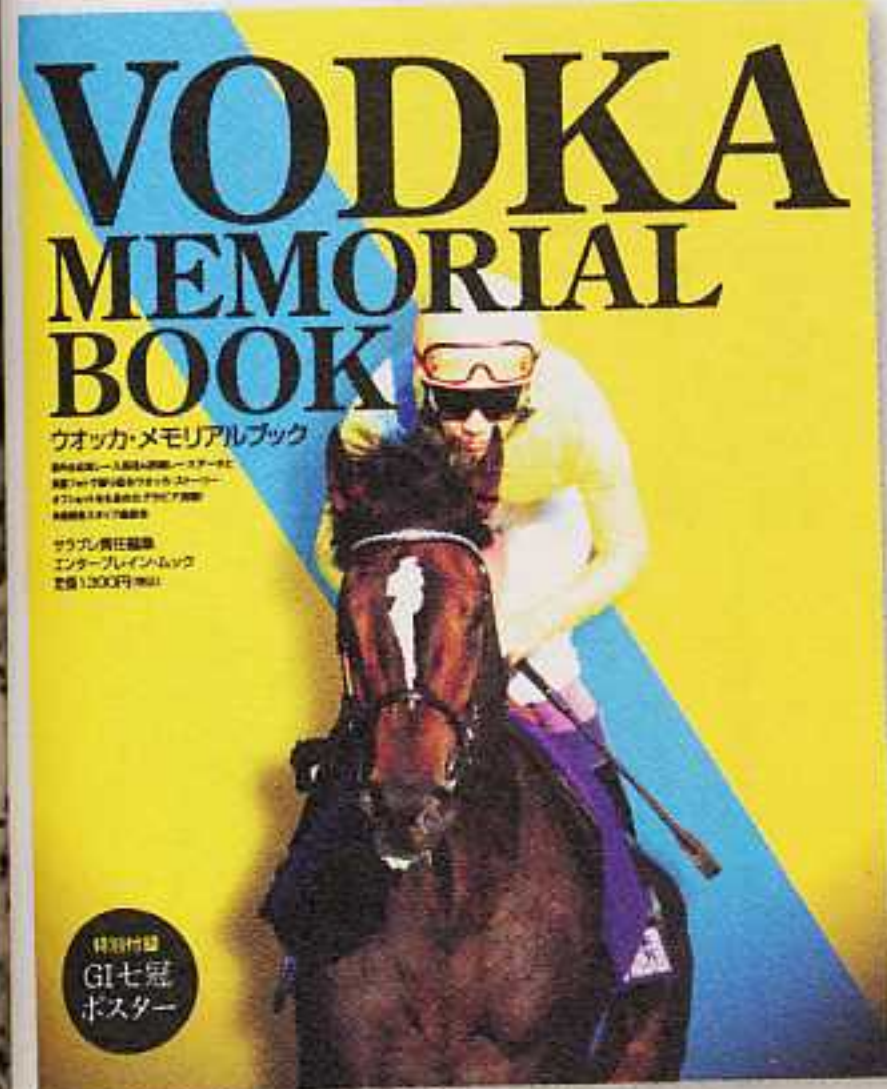
そして〝21世紀のプロレス観〟を描いた同時期のプロレスマンガが次々と短命で終わってゆくなか『アグネス仮面』の連載は06年まで続き、00年代に描かれたプロレスマンガとしては最多となる8冊の単行本を刊行している。生前の三沢光晴もこの作品を愛読し絶賛していたというが、そのことと『アグネス仮面』に馬場元子をモデルとしたキャラクターが登場し、性格の悪い女傑として描かれていたことはもちろんまったく関係がない。あるはずもない。

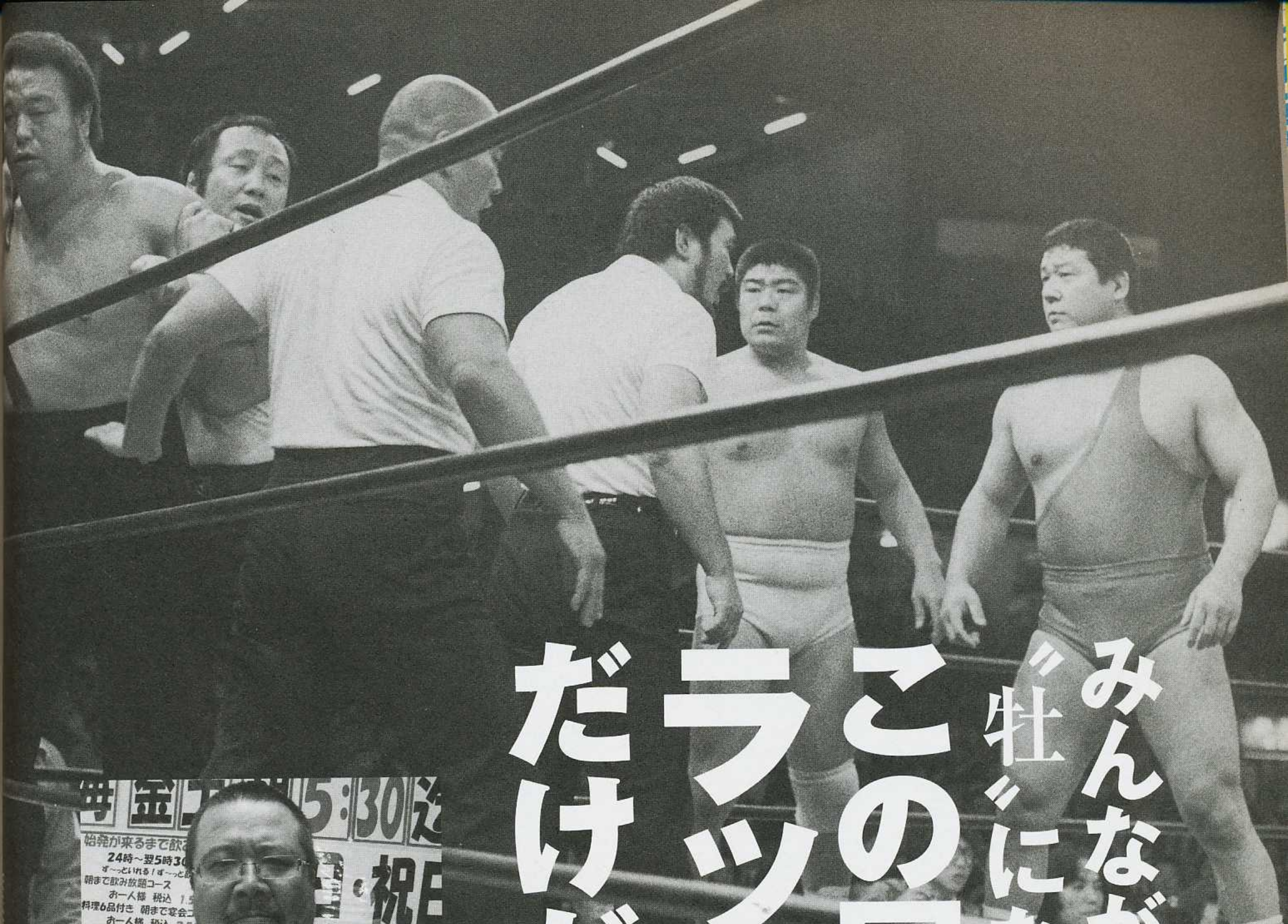
かつての時代における『プロレススーパースター列伝』や『1・2の三四郎』シリーズほどの影響力はないにせよ、プロレス人気が衰退している時代に最も支持を集めたプロレスマンガが、時代背景を完全に無視した〝ゴリ押し〟という表現方法をとっていたことはきわめて重要である。〝プロレスの現実〟をリアルに描いたフィクションなど、ファンははじめから求めていなかったのかもしれない。現実世界のプロレスがファンタジーを失なったいま、プロレスマンガこそが積極的にファンタジーを描くべきだったのだ。

『アグネス仮面』の局地的成功は、われわれプロレスファンに多くのことを伝えた。〝昭和のプロレス〟の色あせぬ魅力、理不尽な強引さがもたらすフィクションのおもしろさ、そしてなにより、プロレスにはまだまだファンタジーが必要であることを再確認させてくれたのだ。ならば２０１０年代のプロレスマンガが、そうした方向に進んでくれることを切に願おう。再びプロレスがファンタジーを取り戻す日が来るのであれば、その手助けをできるメディアはマンガ以外にないのだから。

背中で人生を語った男

追悼

ラッシャー木村

背中で人生を語った男

5月24日、ラッシャー木村さんが腎不全による誤嚥性肺炎のため死去した。享年68。木村さんといえば、国際プロレスでは"金網の鬼"の異名でエースに君臨したものの、団体崩壊後は「はぐれ国際軍団」を結成、アントニオ猪木の敵役として猪木ファンの憎悪を一心に浴びたことで知られる。当時、自宅にファンの嫌がらせが殺到し、愛犬がノイローゼになったりもしながら、ひたすら耐えて闘い続けてきた男だ。のちのマイクパフォーマンスだけではない、男ラッシャー木村の姿をお伝えしたい。

みんなが女にモテたい"牡"になったあの時代
この国でただ一人、ラッシャー木村だけが"男"だった！

男の墓場プロダクション代表
杉作J太郎

80年代頭、はぐれ国際軍団時代のラッシャー木村を最もマンガに登場させ、最も原稿に書いた人といえば、この杉作J太郎さんだ！ ラッシャー木村さんが亡くなったあとも、ツイッター上でラッシャー木村追悼のツイートをして、軽く100人以上の人にリツイートされたJさんに、あらためてラッシャー木村の生き様を語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

——今日は先日、ラッシャー木村さんがお亡くなりになったということで、追悼イン

自身「ラッシャー木村が亡くなるのはつらいな」って思いましたよ。なぜなら、ラッ

「何か違うな」と感じたんです。何が違うかといえば、まずラッシャー木村は怖かっ

——ラッシャー木村が「はぐれ国際軍団」として新日本プロレスで暴れていた頃で

――今日は先日、ラッシャー木村さんがお亡くなりになったということで、追悼インタビューということでお願いしたいんですよ。

杉作　追悼のインタビューが、僕なんかでいいんですかね？

――いやいや、ラッシャー木村の語り部といえば杉作さんですから。ライターやプロレス関係者など、いろんな人の追悼のコメントは出てますけど、一番ファンの心に響いたのは、杉作さんのツイッターですからね。

杉作　あ、そうですか。

――あの追悼文は、ずいぶんリツイートされてたんじゃないですか？

杉作　確かにずいぶんされました。僕は「ラッシャー木村が亡くなった」っていうこと自体をツイッターで知りましてね。「うわ～」ってショックを覚えたんですけど、みんなのツイートを見ても、やっぱり「ショックだ」っていう声が多かったんですよね。

――メディアでも「ラッシャー木村死去」のニュースは大きく取り上げられましたしね。

杉作　そういうのを見て、後年はプロレス以外の活動も多かった人だったので、思った以上にいろんな人に知られてるんだなって思いましたね。このところいろんな有名人の方が亡くなったりしますけど、僕自身「ラッシャー木村が亡くなるのはつらいな」って思いましたよ。なぜなら、ラッシャー木村というのは、僕の「男」というものの原点の方なんですよ！

――男の原点ですか！

杉作　そうなんです。「僕の人生における“男の原点”が、いまこの地上からなくなったんだ」って思ったら、「うわ～」って思ってね。でも、いろんなツイートを見てみると、みんなショックを受けながらも、僕みたいな感じでラッシャー木村を見てる人が少なかったんですよ。ラッシャー木村を普通の「いい人」として見てる人が多いなって。

――晩年のマイクパフォーマンスのイメージなんでしょうね。

杉作　若い方なんかはとくにそうだと思うんですけど、「やさしい方が亡くなった」という感じなんですよ。実際にやさしい方だとは思うんですけど、僕はそれを見て「何か違うな」と感じたんです。何が違うかといえば、まずラッシャー木村は怖かったぞって。

「やさしいおじさん」というイメージだった晩年のラッシャー木村。しかし、国際プロレスや「はぐれ軍団」を知る者にとっては“恐ろしい男”だったのだ。

――“金網の鬼”と呼ばれた国際プロレス時代や、アントニオ猪木と抗争してるときは、そうでしたよね。

杉作　とても「さん」づけで呼ぶようなレスラーじゃなかったんですよ。だからツイッターの追悼文だとはいえ、この最後の最後の瞬間に「さん」づけで書いたりしたら、ラッシャー木村を誤解したかたちで終わってしまう！　って思ったんですよ。

――本来、ラッシャー木村は呼び捨てだろう、と。

杉作　そう。「ラッシャー木村さん」なんかじゃない。「ラッシャー木村はラッシャー木村だろ！」って思ったんですね。僕は直接お会いしたことはないんで、ラッシャー木村を「さん」づけでなんか呼んだことないですから。

――これまでさんざん、漫画やコラムでラッシャー木村を書いてきたけれど「さん」づけしたことはない、と（笑）。

杉作　だから、そこが気になったんですよね。ラッシャー木村はホントに僕にとって男の原点なんです。これはツイッターにも書きましたけど、僕が知るかぎり、間違いなくこの日本という国で“男”はラッシャー木村しかいない時代があったんですよ！

――ラッシャー木村だけが「男」と呼べる時代がありましたか！

杉作　それが1980年代の頭ですよ。

――ラッシャー木村が「はぐれ国際軍団」として新日本プロレスで暴れていた頃ですね。

杉作　そうです。その80年代というのは、世間的には『なんとなく、クリスタル』とともに幕を開けるんですよ！

――ダハハハハ！　田中康夫の軟派なベストセラー小説ですね（笑）。

杉作　あの『なんとなく、クリスタル』こそが80年代の幕開けを象徴しているんです！　というのも、まず80年代頭にみんながオシャレになったんですよ。とくにヤングが。

――「ヤング」ですか（笑）。

杉作　あの頃、僕の高校時代のすっごく悪い凶悪犯みたいな同級生たちが、一気にテニスラケット持ち始めたんですよ！

――ダハハハハ！　凶悪犯が急に軟派になってテニスですか（笑）。

杉作　すっごい悪かったヤツが、髪をサラサラにし始めて、バンダナかヘアバンドして。それでテニスラケットですよ！　去年までは「大学出たら自衛隊入りたい」って言ってたヤツが、急に「大学出たらクレープ屋さんやりたい」って言いだしたりしたんですよ！

――自衛隊からクレープ屋さんって、変わりすぎですよ！

杉作　ホントにそういう時代が『なんとなく、クリスタル』で幕を開けてしまったんです。で、80年代頭というのは、東映でいうとヤクザ映画の終焉というのがあったんですよ。

追悼文とはいえラッシャー木村を「さん」付けしたら誤解したまま終わってしまう

――確かに任侠映画が一気になくなりましたね。
杉作　それに代わって、企業ヤクザの社会派映画みたいなものが出てきて、野良犬のチンピラが野垂れ死ぬような映画がなくなったんですよね。
――ヤクザ映画までスタイリッシュになっちゃって。
杉作　そうなんですよ。それまではドブネズミかドブ犬が主人公で、最後はドブ板のなかで死んでいくか、刑務所に入って終わり、みたいなものが多かったんです。
――最初から最後までドブだらけの映画ですか（笑）。
杉作　また、若者向けの雑誌でも「ハウ・トゥ・セックス」のブームが来るんですよ。
――そんなブームがありましたか（笑）。
杉作　それまでも「ハウ・トゥ・セックス」というのはあったんですけど、それはポコチンが軟らかくなった中高年の男性のためにあったんですよね。ところが、80年代頭から若者向けになるんです。「こうやると女が喜ぶ」というかたちで。
――『ポパイ』や『ホットドッグプレス』なんかで。
杉作　あと『スコラ』ですよね。ちょうど80年代頭ぐらいから、「どうやったら女が喜んでくれるか」という記事が増えるんですよ。あえて名前は言いませんけど「ホ○チョイプロ」とか木村○久なんかが「女のゴマのすり方」みたいなものを書いて、そんなもんばっかりがもてはやされるようになるんですよ！

――男たちが女のケツを追うような世の中になってしまった、と。
杉作　そうなんです。その現状を見て僕なんかは「くっそ〜〜〜！　もう世の中終わった」と思ったんですよ。
――「俺の愛した男の国が終わってしまった」と（笑）。
杉作　そうです。僕はその"男の国"で大人になることを夢見て少年時代を送ってきましたから、『なんとなく、クリスタル』に支配される世の中というのは、危機的状況ですよ！　たとえて言うなら『帰ってきたウルトラマン』の第1話のような状況です。
――どんな状況ですか（笑）。
杉作　東京に突如、二大怪獣が現われて「もう日本は終わりだ。もう地球は終わりだ」っていう状況。
――二大怪獣に打つ手なし、と（笑）。
杉作　そんなときに、空がピカーッと光って現われたウルトラマン。それが僕にとってラッシャー木村だったんですよ！！！！！
――あの時代の救世主がラッシャー木村でしたか（笑）。
杉作　ホントにそうでした。「この世は終わった」とあきらめかけてましたから。でも、最初はラッシャー木村がウルトラマンだとは気づかなかったんですよ。僕は高校時代まで地方にいたんで、国際プロレスが観られなかったもんですから。
――東京12チャンネル、いまのテレビ東京での放送で全国ネットじゃなかったんですよね。

『なんとなく、クリスタル』に支配された日本を救いに来たのがラッシャー木村！

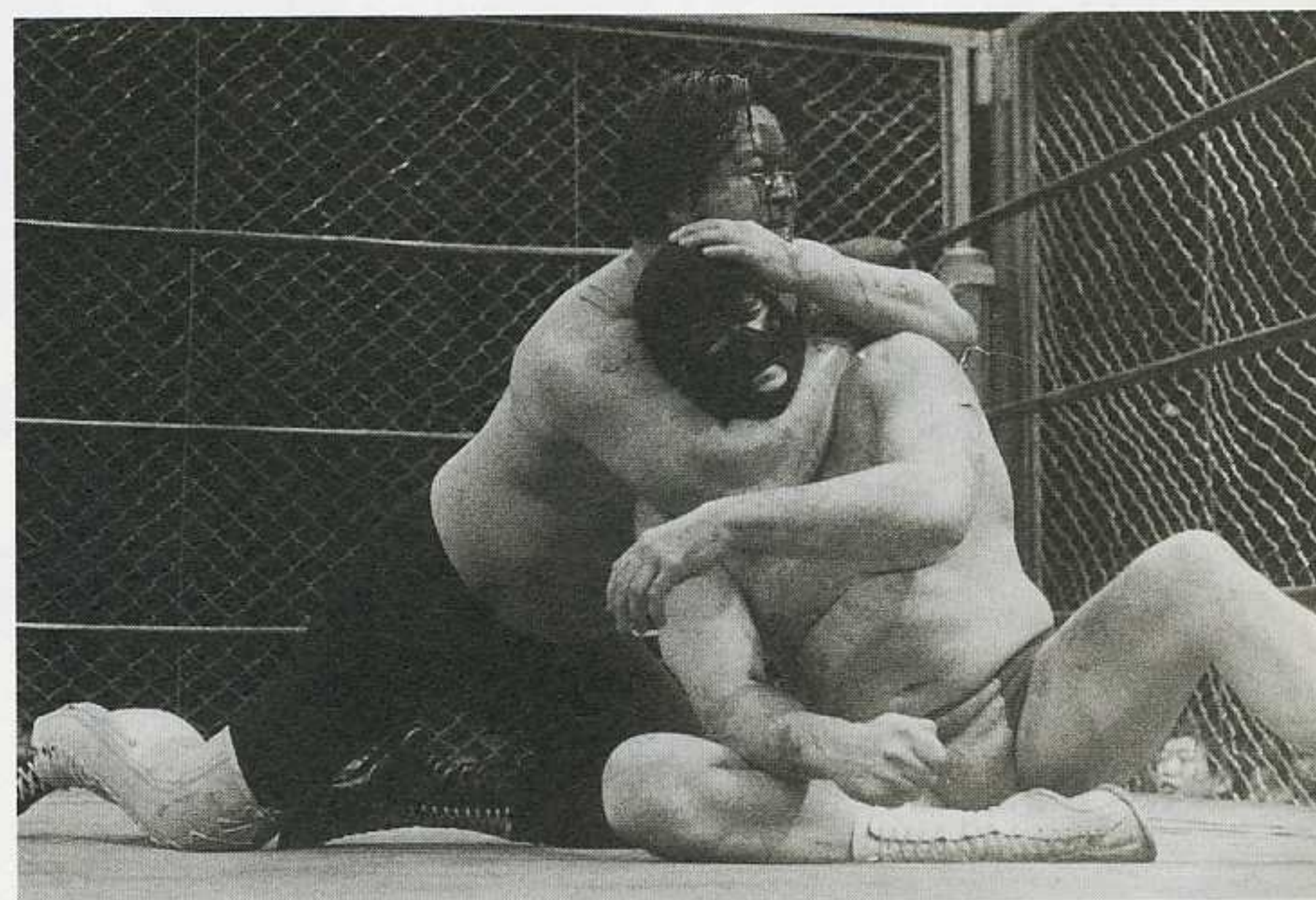
杉作J太郎

杉作　だからね、国プロのレスラーはエロ本のモノクロページでしか見てなかったんです。それも大手のエロ本じゃなくて、白夜書房というか、セルフ出版の末井（昭）さんが手がけたものでしか目にしなかった。末井さんが手がけたものにしか出てない男がいた時代というのも確実にありましたから。
――そんな時代がありましたか（笑）。
杉作　で、僕はその頃上京して当時童貞でしたけど、とてもじゃないけどいまさらテニスラケット軍団には合流できないわけですよ。上京する前は、菅原文太、渡哲也、さらに刑事ドラマとか、そういう男らしさを信じて今日まで生きてきたのに、ここで白旗あげて、軟派な連中のほうに鞍替えしてまで、そこまでして童貞って捨てなきゃいけないものなのかって葛藤があったんです。

――凄い葛藤があったんですね（笑）。
杉作　そして、上京する前まで僕は新日本と猪木さんが好きだったんですよ。豪華外国人が多数参戦する全日本に比べて、手弁当感丸出しの無名ガイジンだらけの新日本が、お金がない自分の青春時代とリンクして好きだったんです。でも、国プロは観ることすらできなかった。田舎にいた頃は動く国際プロレスのレスラーっていうのは、東映の映画でしか観たことがなかったんですよ。
――国プロのレスラーって映画に出てたんですか？
杉作　けっこう出てたんですよ。でも、もちろんまともな役じゃないですよ。鶴見五郎、大位山勝三、マンモス鈴木あたりが、鬼の役とかで出てたんです。
――ダハハ！　鬼の役ってどんな役ですか！（笑）。
杉作　大位山さんやマンモス鈴木さんが、

鬼になって人間をすり潰してたりするん

〜、あの怖いラッシャー木村がリングに現

他団体を視察する国際プロレス時代のラッシャー木村と阿修羅原。そのファッションと風貌がカッコよすぎる！ 彼らこそが男の中の男"であったのだろう。

人気凋落に歯止めをかけるべく、国際プロレス末期に乱発された金網デスマッチ。お金がないがゆえに、身体を張った大流血戦が常に展開されていたのだ。

あまりにも有名な81年9月23日、田園コロシアムでの「こんばんは」事件。国際プロレスが崩壊し、新日本プロレスに乗り込んできた“大ヒール”であるラッシャー木村の第一声は「こんばんは」という挨拶だったのだ。素晴らしい常識人!

日本を救いに来たのがラッシャー木村！

です。

杉作　大位山さんやマンモス鈴木さんが、

鬼になって人間をすり潰してたりするんですよ。さすがにラッシャー木村は大物でしたから、そういう映画には出てませんでしたけどね。でも、そういう映画を観て、少年時代の僕は「国際プロレスって恐ろしいな～」って思ってたんです。

――国プロのレスラーといえば、東映の「鬼」のイメージ（笑）。

杉作　で、上京してから初めて国際プロレスの試合をテレビで観てみたら、地獄の鬼のイメージどおりだったんですよ！　あのお金がなさそうだった70年代の新日本ですら、無名ながらもガイジンレスラーを呼んでいたのに、末期の国プロはヒールをガイジンではなく、鶴見五郎や大位山勝三がやって、日本人同士で血みどろの闘いをやっていたんですね。

――国プロ末期はそんな感じだったんですね。

杉作　そして、そのトップに君臨していたのがラッシャー木村ですよ。ゴツい身体して、顔は怖いし、パンチパーマだし、いつも血まみれだし。「うわ～、こんなに怖いレスラーがいるんだ」って思ってましたから。そしたらある日、国プロが経営的にヤバくなって、ラッシャー木村たちが新日本に乗り込んでくるって聞いたんで、テレビの前でドキドキしながら待ってたんです。

――有名な（81年）9・23田園コロシアムですね。

杉作　そしてラッシャー木村が派手なシャツを着てリングに上がってきて、「うわ～、あの怖いラッシャー木村がリングに現われた。新日本プロレスどうなるんだ～～！」って思ってたんですけど、そのあとラッシャー木村がマイクに音が入ってるの確かめてるのを見て「なんかおかしい」って思ったんですよ。

――恐ろしいはずなのに、マイクの音声を気にしてる（笑）。

杉作　そして、かの有名な「こんばんは」が出るわけですけど、その言葉が出た瞬間、僕はピカーッと光るものを感じたんですよ。それは『帰ってきたウルトラマン』において、第1話で二大怪獣が大暴れして「もう東京は終わりだ～」となった瞬間、主人公・郷秀樹の頭上でピカーッと光る、あれと同じ光でしたよ！

――そんな光をなぜか「こんばんは」で感じましたか（笑）。

杉作　なぜなら『なんとなく、クリスタル』で「この世は終わりだ」と思ってた僕に、ラッシャー木村があの「こんばんは」以来、男の生き方をずっと見せてくれたんですよ！

――あそこから、男の生き様が始まりましたか。

杉作　それまで僕は、男として生きていきたいと思って、渡哲也さんや菅原文太さんを手本にしようとしてましたけど、あの方たちは主役だからカッコいい。自分とは違う。だから志賀勝さん、山城新伍さん、室田日出男さん、小林稔侍さんとか脇役の男に焦点を絞ってマネしてましたけど、その人たちも映画俳優だから、やっぱりカッ

かの有名な「こんばんは」が出た瞬間 僕はピカーッと光るものを感じました

第一次UWFはてっきりラッシャー木村がエースの新団体だと思ってました

じつは第一次UWFの旗揚げメンバーであるラッシャー木村。UWFといえば、いまでこそ格闘技系のイメージがあるが、旗揚げ当初は、ラッシャー、剛竜馬、マッハ隼人など、国プロ色が強かったのだ。

コよすぎるんです。しかも脇役だから出番も少ない。僕の人生は僕が主役ですから、あまりにも出番が少ない人のマネをしても、僕の人生の支柱にはならないわけですよ。

——それは確かにそうですね。

杉作　だから、当時の僕は男として生きていきたくても、誰を手本にしたらいいかわからなかったんですね。そして、80年代頭というのは「男＝女にモテないと意味がない」という暗黒時代ですよ。そんな恐ろしい思想で日本が覆われた危機的状況。それが『帰ってきたウルトラマン』における二大怪獣出現にダブるわけですけど、そのときにピカーッと光って出てきたのが、ラッシャー木村だったんですよぉぉぉぉぉぉ!!

——『なんとなく、クリスタル』から日本を救うために出てきたのがラッシャー木村でしたか（笑）。

杉作　まさに救世主ですよ！　あのラッシャー木村のたたずまい、「こんばんは」、新日に来てからの乱入の仕方、姑息な反則、ファイト内容、そして『東スポ』で紹介される特訓風景！　さらにプロレス月刊誌でお話しになるあの恨み節！　何一つ取っても「女性にモテたい」っていう気持ちがどこにもないんです!!

——ダハハハハハ！

杉作　その姿が最高に男らしかった。僕は「これだ！」と思って。それ以来、僕は人前に出るときも原稿を書くときも、何をするときも「こうやっていたほうが女にモテるな」っていうことは、一度も考えたことがありません（キッパリ）。そういう男の生き方をラッシャー木村が教えてくれたんですよ!!

——その勇姿を『ワールドプロレスリング』で毎週観られたわけですもんね。

杉作　天国ですよ。そして「はぐれ国際軍団」として新日で暴れてしばらくしてから、『デラックスプロレス』かなんかのインタビューで、あのラッシャー木村が本音をしゃべったんですよね。

——どんなことをしゃべったんですか？

杉作　「新日本の客はどうかしてる。よそ様のリングに上がったら『こんばんは』と挨拶するのはあたりまえじゃないか。そのあたりまえのことをやって、どうして私が悪く言われるのか。新日ファンのモラルはどうなっているんだ。しかも、ウチで飼っている犬に生卵をぶつけた人間がいた。猪木を応援しているファンはどうなっているんだ」って言ってたんです。

——正論ですね。

杉作　全部正論！　すべてが正しいんですよ!!　あのあたりから、僕のなかで価値観の逆転すら起こりましたから。それまで僕は新日ファンで、猪木至上主義だったわけですけど、『なんとなく、クリスタル』ブームから日本を救うべく、ラッシャー木村が出てきたわけじゃないですか。あのファッション、表情、パンチパーマ、すべてにおいて「女にモテたい」という気持ちがまったく見えないラッシャー木村。それと比べると、ほかのスターレスラーは、

やはり女性にモテる。僕の教祖だった猪
木さんだってそうでした。

木を担いで控室に拉致してね。でも、番組
最後の提供スポンサーの場面で控室が映

お目当てはラッシャー木村！　なぜなら、
僕らは「ついにUWFというラッシャー木

んですよね。それで「ああ、終わったな」
って思って。

みんなでお金を出し合って田コロ跡地に「こんばんはの碑」を建てましょうよ！

杉作J太郎

やはり女性にモテる。僕の教祖だった猪木さんだってそうでした。

——なんせ奥さんが女優ですからね。

杉作　で、新日のリングでは、『なんとなく、クリスタル』から日本を救うラッシャー木村が、猪木に鉄拳制裁されている。そして、それを観て観客は大喜びしている。このシーンが『ウルトラセブン』にリンクしたんです。

——『帰ってきたウルトラマン』から、今度は『ウルトラセブン』ですか（笑）。

杉作　あれを観て「俺が今日まで信じてきたアントニオ猪木は、じつは侵略者だったんじゃないか」って思ったんですよ。（『ウルトラセブン』第42話の）「ノンマルトの使者」ですよ！　「本当の男はラッシャー木村じゃないのか！」って。

——本当の「正義」とは何かを考えてしまいましたか。

杉作　そうですよ！　ラッシャー木村が、いまリングの上で猪木にボコボコに殴られて泣いている。それまで国プロを観て「人間じゃない、鬼だ」と思っていたラッシャー木村こそが本当の男だって気づいて、僕のなかで価値観の大逆転が起こったんです。だから、それからあとの人生、今日に至るまで「男＝女にモテてなんぼ」という思想は僕のなかにないんですよ。

——ラッシャー的価値観になってしまいましたか（笑）。

杉作　あの黒のロングタイツを穿いた細い脚！　そしてラッシャー木村は猪木の試合中に疾風のように現われて乱入し、猪木を担いで控室に拉致してね。でも、番組最後の提供スポンサーの場面で控室が映ると、猪木の逆襲に遭ってラッシャー木村はまたボコボコにされている。その姿を見て、どこの女性が「カッコいい」と思いますか!!

——思いませんね（笑）。

杉作　そんな役回りを本当に毎日毎日やり続けたわけですよ。それでも新日に参戦した末期には、試合の順番もどんどん下がってきて、夜8時に番組が始まった瞬間、すでにラッシャー木村の試合は揉み合いになってて、終わる寸前なんです。だいたいバッドニュース・アレンと一緒に揉み合いになってました。

——ダハハハ！　ブッチャー軍団を離脱したアレンと、浜口、寺西に裏切られたラッシャー木村が結託して（笑）。

杉作　でも、そのシーンは番組オープニングに映るだけで、CM明けにはラッシャー木村の出番は終わっているというね。あれを観て、僕は本当に寂しくなってたんです。そんなときにUWFがスタートしたんですよ。

——当初はラッシャー木村も参戦してた第一次UWFですね。

杉作　そこで、僕といしかわじゅんさん、いしかわさんのアシスタント、あと赤田っていういま墓場プロにいる人間の4人でUWFの旗揚げ戦を観に行ったんです。

——あの大宮スケートセンターに行ってますか！

杉作　行きましたよ。4人とも、もちろんお目当てはラッシャー木村！　なぜなら、僕らは「ついにUWFというラッシャー木村をエースとした団体がスタートした」と思っていたからですよ。

——UWFのエースがラッシャー木村ですか！（笑）。

杉作　そりゃそうですよ。当時の格で言えば、前田日明さんよりラッシャー木村のほうがずっと上でしたから！

——確かに、そういえばそうですね。

杉作　でも結局、ラッシャー木村はセミファイナルで、メインは前田さんでしたよね。あのUWF旗揚げ戦は、メインの最中に「アンドレ出せ！」とか「猪木出せ！」みたいなヤジが次々と飛んで、前田さんが客に対して怒ったじゃないですか。じつは僕らも野次ってたんです。でも、それは「ホーガン出せ！」とかじゃなくて、「メインイベントはおまえじゃない！　ラッシャー木村だろ!!」って叫んでたんですよ。

——UWFはラッシャー木村の団体だろ、と（笑）。

杉作　でも、そうじゃなかった。だからあの大宮スケートセンターは、僕のなかで苦い思い出として残ってますね。そのあと僕はUWFはほとんど観に行ってますけど、お目当てであったはずのラッシャー木村の印象が薄いんですよね。それで徐々に僕も前田さんを中心とした格闘スタイルのUWFが好きになってきちゃって。その頃、ラッシャー木村はUWFを静かに離脱するんですよね。

——本当に静かに去っていきましたよね。

杉作　そのあと全日本プロレスに参戦して、マイクパフォーマンスでまさかの人気者なりましたけどね。じつはその人気絶頂期も一度、観に行こうとは思ったんですけど、チケットが買えなくて入れなかったんですよね。それで「ああ、終わったな」って思って。

——もう『なんとなく、クリスタル』の時代でもなくなってましたしね（笑）。

杉作　でも、だからといってマイクで人気者になったファミリー軍団のラッシャー木村を否定する気は全然ありません。心の底から「よかったですねぇ」って言いたかった。あれだけひどい目に遭い続けたラッシャー木村が、みんなの人気者になったんですから。これだから人生はわからない。……そうだ！　いま大事なことを思い出しましたよ。

——どうしたんですか？

杉作　僕は若い頃から、あんまり格言とか座右の銘みたいなものはなかったんですけど、一つだけ常に心のなかに持ち続けた言葉があるんですよ。それがラッシャー木村の言葉なんです。

——ラッシャー木村にそんな名言ありましたっけ？

杉作　これは何かのインタビューで言ってたんですよね。「人はそれぞれが別の場所で別の花を咲かせ、それぞれが別の実を結ぶのだと思う」って。それをラッシャー木村が言ったんだよ！！！！！！！！！！

——重みがある言葉ですね～（笑）。

杉作　僕はね、若い頃ずっと童貞だった、ずっと女にもモテなかった、いろんなつらいこともあった、でもずっとその言葉を心に宿しながら生きてきたんですよ！

——確かにこれをラッシャー木村が言うと、『世界で一つだけの花』なんかより、はるかに心に染みますね。

杉作　ラッシャー木村自身がその言葉どおりの人生でしたからね。まさかあの田園コロシアムで「こんばんは」と言って笑われたとき、マイクで人気者になる日が来

人はそれぞれが別の場所で別の花を咲かせ
それぞれが別の実を結ぶのだと思う
ラッシャー木村

るとは誰も予想もしなかったでしょう。それどころか、若者に人気の音楽番組の審査員にまでなるんだから。

——『イカ天』の名物審査員ですよね。

杉作　その頃、僕も童貞ではなくなってましたから、知り合いの女子大生の部屋に転がり込んでSEXのあとに、テレビを観ていたんですよ。そしたら、ラッシャー木村が出ていて、ニコニコしながら若者を励ますようなメッセージを発している。そして僕は僕で、一生童貞だと思っていたのに、いま横にはSEXが終わりぐったりしている女性がいる。「人はそれぞれが別の場所で別の花を咲かせ、それぞれが別の実を結ぶのだと思う」。まさにそのとおりじゃないですか！　しみじみそう思いましたよ。

——ラッシャー木村と杉作さんの人生がそこでリンクしたわけですね（笑）。

杉作　ホントに「よかったな〜」って思いましたよ。だから今回、ラッシャー木村が亡くなって、「いい人だった」と、いろんなメディアで取り上げられるのが嫌なんじゃないんですよ。ただ、「あの人は呼び捨てが似合う本当の男だった」、「ブラウン管のなかで、あの人ただ一人しか男の炎を燃やしてなかった時代がこの国にはあったんだ」ということをね、伝えたいと思ったんです！

——ラッシャー木村の生き様を伝える義務がある、というか。

杉作　そう。いま僕も細々ながら男の炎を守り続けているつもりではいるんです。だから言いたくないけど、人前でセンズリの話もするんです。それをなぜやるかと言えば、「女にモテたくて人前に出てるわけじゃない」ということをあえて見せるためですよ。そういう男が世の中にはいるんだぞ！　というね。その炎を燃やす作業をいま僕がやれるのも、あの時代にラッシャー木村がただ一人、男の炎を絶やさずにいてくれたおかげなんですよ！

——あの時代のラッシャー木村は、男の種火だったわけですね。

杉作　だから、ラッシャー木村が亡くなったいま、本当に「ご苦労さまでした!!」と言いたいですね。もう我々は最敬礼しなきゃいけない！

——田園コロシアムの方向に最敬礼しましょうか！

杉作　もう、みんなでお金を出し合って田園コロシアム跡地に碑を建てましょうよ！「こんばんはの碑」というものを！

——「こんばんはの碑」（笑）。それはまさに男が一度は巡礼しなきゃいけない場所ですね。

杉作　そしてその「こんばんはの碑」の裏には句を刻むんですよ。「人はそれぞれが別の場所で別の花を咲かせ、それぞれが別の実を結ぶのだと思う」というね。素晴らしい！　本当にラッシャー木村の存在は大きかった。男の火を守り続けてくれて、ありがとうございます！　本当にお疲れさまでした！

【10年5月31日／都内・某喫茶店にて収録】

すぎさく・じぇいたろう■1961年9月26日、愛媛県出身。漫画家であり、タレント、ミュージシャン、ライター、映画監督でもある。男の墓場プロダクション代表。80年代頭にはラッシャー木村やはぐれ国際軍団を主人公にしたマンガや、エッセーを多数執筆した。

渕！
そろそろ
結婚しろ!!

マイクで最もいじられた男が語る
素顔のラッシャー木村

渕正信

「木村さんのマイクのおかげで あの頃はずいぶんモテたよ（笑）」

ラッシャー木村の現役後期を語るうえで欠かせない男といえば、ジャイアント馬場に次いでこの渕正信の名前が挙がるだろう。
あのマイクパフォーマンスは渕の「独身ネタ」という鉄板なネタがあってこそ、成り立ったといっても過言ではない。
そんなマイクで最もいじられた男が、ラッシャー木村の素顔を語る。

聞き手／堀江ガンツ

付き人の急死と国際の崩壊があったから
新日本であそこまでのヒールができたんだろう

渕　今日は木村さんの話でしょ?

——そうなんです。ラッシャー木村さんの現役後期に関わりが深かった渕さんにいろいろうかがっていきたいんですけど。

渕　でも、ここ10年くらい会ってなかったんだよ。全日本とノアで分かれちゃったからさ。

——じゃあ、最近木村さんがどんな状態だったかは知りませんでしたか?

渕　風の噂では聞いてましたね。脳梗塞を患って、しばらく寝たきりの状況だっていう……。でも、実際にどんな状態だったかはわからなかった。見舞いに行こうとしたら断られてね。「そんな姿は見せたくない」ということで……。

——自分が弱った姿は見せたくないっていうのは、プロレスラーですね。引退も突然でしたし。

渕　それも東京ドームで引退試合をやるはずだったのが、できなかったたって聞いたけどね。

——もともと渕さんと木村さんの親交が始まったのは、木村さんが85年に全日本プロレスに参戦してからですか?

渕　いや、じつはもっと前なんだよ。35年くらい前になるかな。

——35年!?　そんなに長いんですか?

渕　俺がまだ新弟子の頃だよ。俺と大仁田厚が当時、目白にあった全日本プロレスの合宿所に住んでた頃。75年か76年だったかな。当時、木村さんの付き人をやってたスネーク奄美さんが、昔から知ってる人だったから。

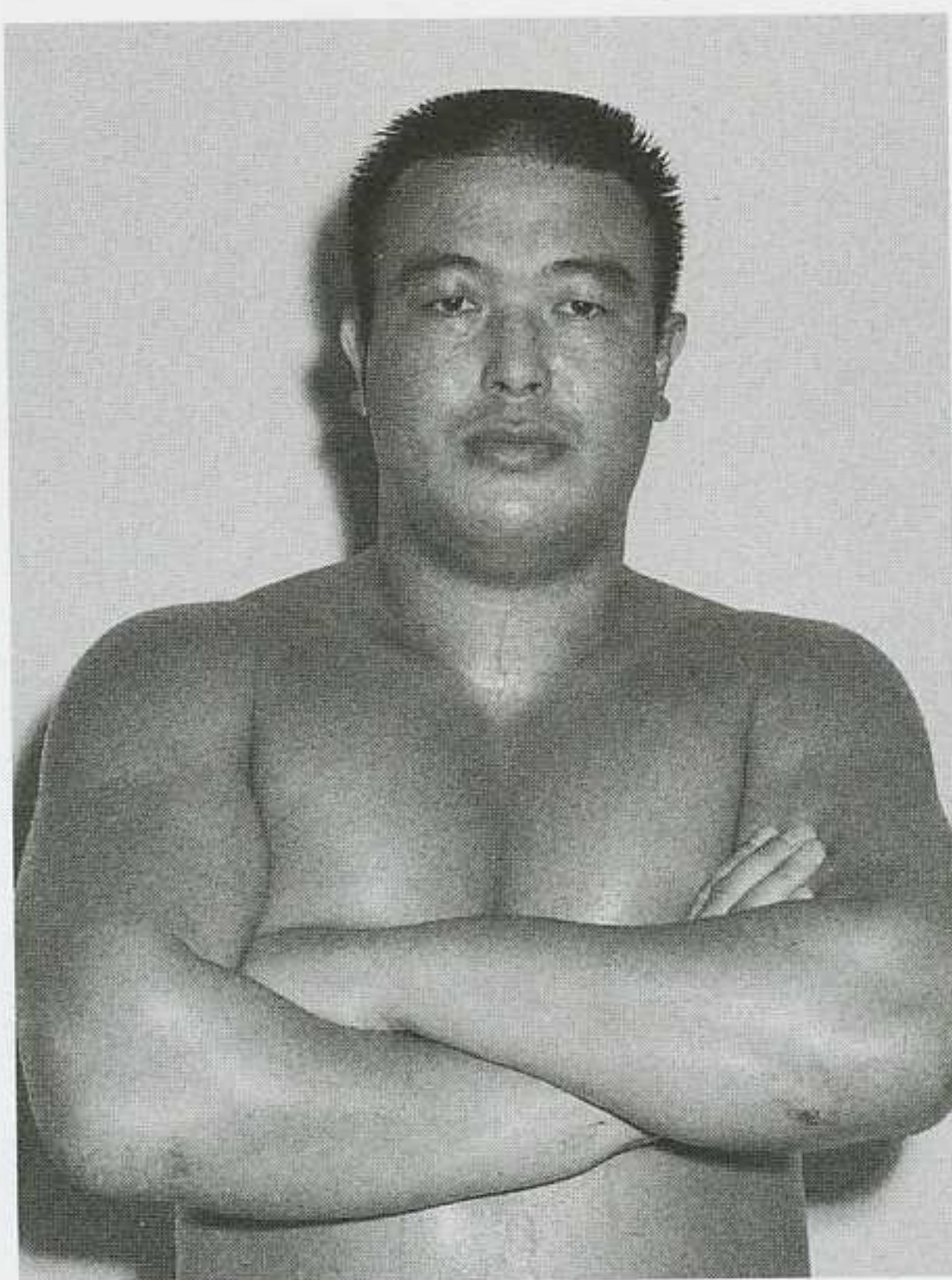
——そうなんですか。

渕　奄美さんは鹿児島出身で学生時代、レスリングの全九州チャンピオンだったんだよ。で、学年は俺と一緒で、なぜか歳は俺より二つ上でね(笑)。アマレス時代から知ってる人だったからさ。

——渕さんも九州出身でしたよね。

渕　俺は福岡だから。それで、向こうは国際プロレス、俺は全日本プロレスに入って。お互い金がなくてさ、いっつも二人で安い飲み屋に行ったりしててね。

——全日本と国際の垣根を越えて交流が続いていたわけですね。

渕　で、ある日、奄美さんから「渕、木村さんが『いまから飲みに来い』って言ってるから来るか?」って電話が来て、二人で木村さんの家に行ったんだよ。そしたら、木村さんが玄関のところで待っててくれたんだよな。新人二人のために。

まだ"金網の鬼"と呼ばれる前の、若き日のラッシャー木村。鍛え抜かれた、いかにも頑丈そうな上半身は、まさにプロレスラーとして理想の肉体。「セメントなら、おっとうが一番強い(浜口・談)」というのもうなずけるのだ。

——へえ、国際プロレスのトップレスラーが、新人の二人のために待ってましたか!

渕　だから奄美さんは、付き人やってるときもエラそうな付き人でね。「あ、木村さんどうも～」って感じだったから。

——付き人なのに、あまり上下関係が感じられない、と(笑)。

渕　それで3人で飲んだら、もう凄く楽しい酒になっちゃってね。「ウチにも二人、大仁田と(ハル)薗田っていうのが合宿所にいるんです」って言ったら、木村さんが「今度、連れてこいよ」って言ってくれて。「いいんですか?」って。それから何度か、木村さんに飲みに連れていってもらって、それが最初だったかな。

——そんな若手の頃からかわいがってもらってたんですね。

渕　それで、そのスネーク奄美さんは29歳で亡くなったんだよ。脳腫瘍でね。そのとき、ホントに木村さんが落ち込んで。二日間くらい、ほとんど寝ないで線香を換えたり、水を換えたりしていたという話を聞いてるね。

——自分の付き人に対して、そこまでやってましたか。

渕　うん。ホントにもう、「おまえが亡くなって、俺はどうすればいいんだ」っていう落ち込みようだったって聞いたよね。奄美さんが亡くなったのは、俺がアメリカ遠征に行ってるときだったから、その場にはいられなかったんだけど。そして、奄美さんが亡くなって半年くらいで国際プロレスは終わったんだよな。

——木村さんにとっては、もの凄いショックなことが続いたわけですね。

渕　だから開き直って、新日本であそこまでのヒールとしてやっていた部分があったと思うんだよね。

マイクで最もいじられた男が語る素顔のラッシャー木村

——素顔のラッシャー木村さんを知っている人にとっては、「"はぐれ国際軍団"のラッシャー木村」というのは全然イメージが違うんですよね。

渕　違うよね。だから、誰もあの人の悪口を言う人はいないでしょ?

——ええ、そうですよね。

渕　木村さんは、そういう人だったよ。

——渕さんと再会したのは、木村さんが全日本に来たときですか?

渕　そうだね。1984年暮れの『最強タッグ』で、馬場さんの"幻のパートナーX"として木村さんが全日本に来たんだよな。あれは開幕戦が松戸だったかな。控室で「幻のパートナーは誰なんですかね」なんて話してたね。

——あ、渕さんも誰が馬場さんのパートナーになるか知らなかったんですか。

渕　そうなんだよ。一応、箝口令が敷かれててね。一部の選手は知ってたみたいだけど。それでマイティ井上さんに「渕、幻のパートナーが来てるぞ」って言われて控室に行ったら木村さんがいて。「幻のパートナーって木村さんだったんですか!」なんて話したのが再会したときだったな。

——それからは、またよく飲みに行くようになったんですか?

渕　いや、木村さんが全日本に来て、国際血盟軍としてやってた頃は移動のバスも違ってたし、ホテルも違ってたんで、しばらくはあまり交流がなかったんだよな。やっぱり、よく飲みに行くようになったのは、ファミリー軍団vs悪役商会になった頃からだよ。

——巡業先で試合が終わったあとに飲みに行く感じですか?

渕　そうだな。あの人は有名人だったから、飲んでると遠目で見られたり、声をか

馬場のパートナー「X」として全日本に参戦したラッシャーだったが、結局、リーグ戦の途中で馬場を裏切り、国際血盟軍を結成。鶴見、剛、アポロ、高杉と国際出身の"前座"ばかりを従えたラッシャーは、じつにいい哀愁が漂っていた。

裏の話をすれば、木村さんのマイクのネタを俺が考えたことも何度かあったよな(笑)

けられたりしたんだけど、木村さんは聞こえないフリをして黙って飲んでるんだよ。で、あの人が黙って飲んでると、やっぱり周りの人は怖いからさ、そのうち周りからいなくなるんだよね。それでいなくなったときに、いろんな話をし始めるんだよな。

――なるほど。やはり木村さんは静かに飲むタイプですか?

渕　そうだな。俺なんかが「木村さん、ちょっと女の子のいるところに行きましょうよ」って言うと、「うん、わかった。行こう」って言うんだけど、結局行かないんだよな。行ったらけっこうモテるのに。でも、やっぱり奥さん一筋だからな(笑)。

――派手に遊ぶことはなかった、と。

渕　なかったな。俺は行きたくてしょうがないんだけど(笑)。

――ラッシャー木村さんはマイクパフォーマンスで人気が出ましたけど、渕さんの独身ネタっていうのは、どういうところから始まったんですか?

渕　あれはね、俺が35歳の誕生日を迎えたときだったかな。後楽園ホールだったと思うんだけど、いきなり「渕!　おまえも35歳になったんだから、そろそろ結婚しろよ」って言ってね。そこからがスタートじゃないかな。

――それがウケて恒例になった、と。

渕　そうなんだよな。89年の夏だったと思うけど。あれがウケたんで、地方に行っても毎回言うようになったんだよ。それで俺が言ったんだよ、「木村さん、同じことばっかりホント毎回毎回よく言いますね」って。そしたら「いや、同じことでもその地方では初めてなんだから」って言ってね。ホントに日本全国で「そろそろ結婚しろ」って言われたよ(苦笑)。

――東京でウケたことを、ちゃんと地方でも見せてあげるっていうのは大事ですよね。巡業の基本というか。

渕　やっぱり対戦カードはいつもちょっと違うからさ、大熊(元司)さんのことを言ったり、永源(遥)さんのことを言ったりしたけど、結局オレのがいちばんウケたんだよな。だから途中からは、最初から「渕!」って言わないで、大熊、永源、といって最後のオチで渕にいったらおもしろいとか、そこまでやってたからな。

――そんなマイクパフォーマンスの流れまでできてましたか(笑)。

渕　木村さんが永源さんに対してマイクでしゃべってるあいだに、俺が控室に戻ろうとすると「渕!　まだおまえにも話があるんだよ」とか言ってね(笑)。俺もそういうタイミングがわかってたからな。いま思い出すと、ホントに楽しい思い出だよな。

――渕さん的にはあの「結婚ネタ」っていうのはどうだったんですか?

渕　もう、いろんな人に言われたけど、俺自身は凄く楽しかったよ。全然、嫌じゃなかったし。お客さんも楽しんでくれてたし、俺のネタを待ってるのがわかってたからな。逆に俺のネタを言わないと、ファンが納得しない感じもあったから。

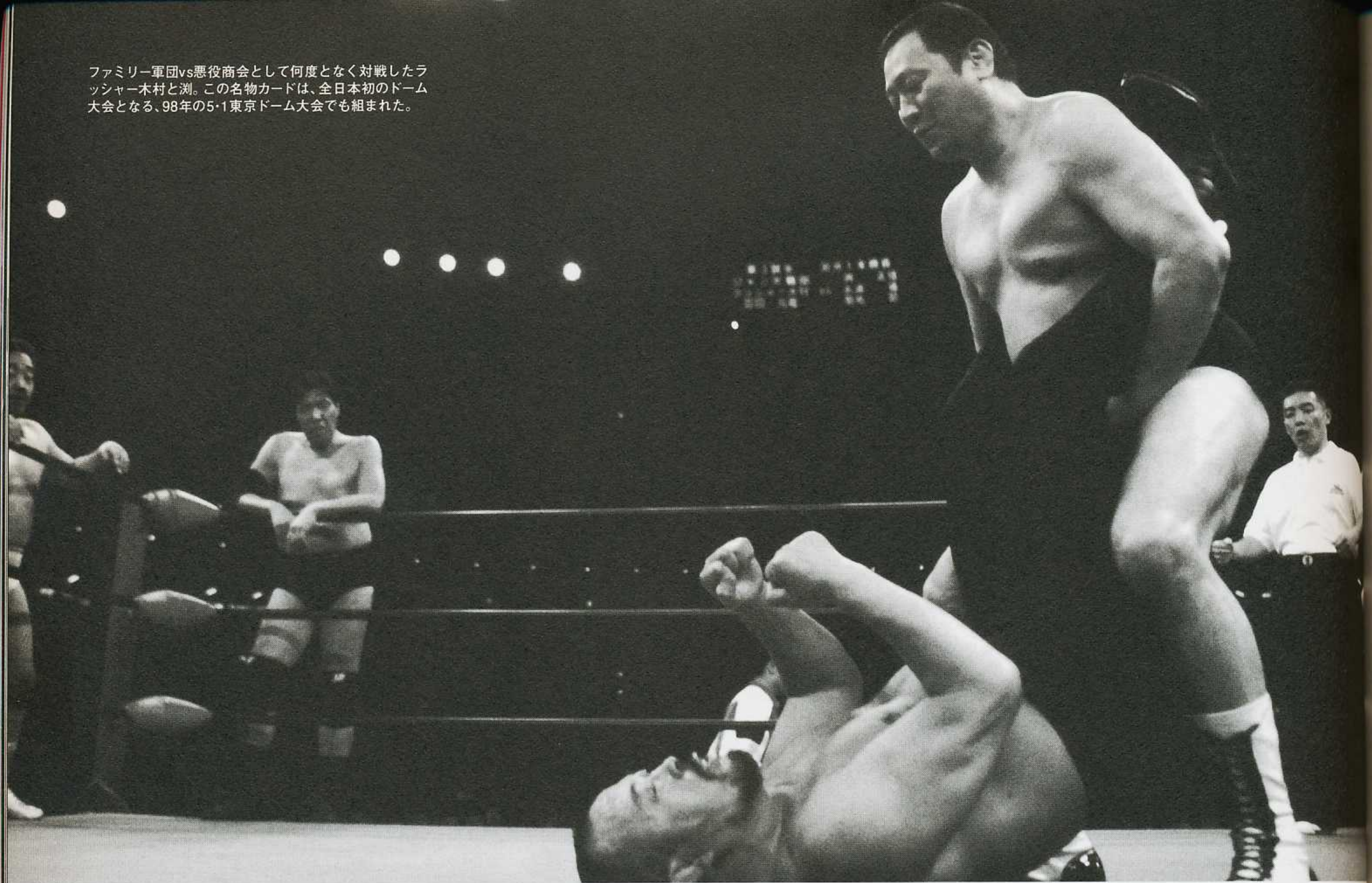
――全日本名物になってましたか(笑)。

渕　1990年だったと思うけど、ゲスト

マイクで最もいじられた男が語る素顔のラッシャー木村

でブルーノ・サンマルチノが来たんだよ。
——『オールディーズ・バット・グッディーズ』というレトロ企画ですよね。
渕　ちょうど、俺たちの試合が終わったあと、サンマルチノが挨拶するはずだったんだよ。で、俺たちの試合が終わって、マイクコールが起きたんだけど、次にサンマルチノの挨拶があったから、木村さんはマイクしなかったんだよね。
——ああ、その日はサンマルチノがかつてのライバルであり親友である馬場さんに対してメッセージを送る企画だったわけですよね。
渕　それでサンマルチノが挨拶のためにリングに上がったら、木村さんのマイクがないってことで、ファンが凄いブーイングしたんだよ。
——せっかく来てくれたサンマルチノに対してブーイング（笑）。
渕　サンマルチノは絶対的なベビーフェイスだったからさ、あんなにブーイングを浴びたのは初めてだったんじゃないかと思うんだけどね。
——それくらい木村さんのマイクは人気があったということですね。
渕　ホントにファンに愛されていたんだよな。
——木村さんは毎日必ずマイクパフォーマンスをしてますけど、あのネタは全部、木村さんが考えてたんですか？
渕　まあ……、これは裏の話になっちゃうけど、俺が自分で考えたこともよくあったな（笑）。
——ダハハハ！　自分がいじられるネタを自分で考えてましたか（笑）。
渕　試合後に木村さんと飲みに行ったときに、二人で一緒に考えたりしてね（笑）。ただ、ネタはともかく、あの間の取り方というのは、木村さん独特だったよ。やっぱりネタ以上に木村さんの話し方がウケたんだと思うんだよな。
——それは確かにそうかもしれませんね。
渕　木村さんのマイクと、永源さんのツバで10年間盛り上がり続けたんだから、凄いことだよ（笑）。
——渕さんの独身ネタが有名になったことで、やたら縁談が増えたりしなかったんですか？
渕　いろんな話が来たよな（笑）。
——行く先々で、「いい女性紹介しますよ」とかそういう話が（笑）。
渕　そうそう。「渕さん、飲みに行きましょうよ。女を紹介します」とか。手紙とかもたくさん来てね。プロレス雑誌なんかでは、俺をダシにしたネタが読者投稿でよく載ってたしな。あの頃はモテない男の代名詞みたいになってたから（笑）。
——でも実際には、渕さんはモテてましたよね？
渕　当時は、いまなんかの何十倍もモテてたよなあ。
——キャラ的には独身キャラですけど、実際の私生活は違ったんですよね？
渕　私生活は……まあまあ、仕事もやって、遊びもやって、みんなで飲みに行ったりしてたしね。小橋（建太）なんかはよく飲みに行ったし。川田（利明）とか、田上（明）なんかともよく行ったし。元気だったなあ。俺なんかはファミリー軍団との試合プラス四天王との試合、そしてジュニアの試合があったろ？　あるいはマッチメイクの仕事も馬場さんと一緒にやってたりしたから。そんななかでよく飲みに行ってたな。それで、なおかつバスの中ではあんまり寝なかったよね。いろいろ考え事をしたりしながら。だから平均睡眠時間は4～5時間。ずっと旅先から東京に戻って飲んで……そんな感じだったけどね。
——そこまでエネルギーにあふれていましたか。
渕　ホント元気だったね。今日は疲れたから、飲みに行くのやめようかな～って思うんだけど、夜になったら元気になるんだもんな（笑）。
——さすがですね。
渕　それも木村さんにマイクで言われたことがあるんだよ。たしか俺が負けた試合かな。「渕！　今日はおまえ、元気なかったじゃないか。でも、おまえはいまから夜の街に出かけて、そこでは元気になるんだろう？」ってな。
——そんなリアルなネタもありましたか（笑）。
渕　それで、隣に馬場さんが立ってるから「アニキ、渕を叱ってやってください」とか言うんだよ。あとは地方に行くと、その地方の盛り場の名前を出して「渕！　今日はこのあとススキノに行くんだろう」とかね（笑）。
——いろんなバリエーションがあったんですね。渕さんから見て、レスラーとしての木村さんはどうでしたか？
渕　これは木村さんにかぎらず、大熊さんや馬場さん、昔のレスラーに共通したことなんだけど、みんなタフで打たれ強いんだよ。おもいっきりチョップしたら、こっちの手が痛いくらいでさ。
——凄く頑丈な感じはありましたよね。
渕　あと猪木さんや馬場さんとやってた頃の木村さんのあの表情は凄いよな。や

ラッシャー木村の人気に火がついたのは、なんといっても"宿敵"だった馬場に何度目かの敗戦を喫し「これだけ馬場と試合をしていると、もう他人とは思えないんだよ。これからは"アニキ"って呼ばせてくれ」のマイクがあってから。義兄弟タッグは馬場にとっても晩年最高のタッグだっただろう。

ファミリー軍団vs悪役商会として何度となく対戦したラッシャー木村と渕。この名物カードは、全日本初のドーム大会となる、98年の5・1東京ドーム大会でも組まれた。

木村さんは耐える表情だけでお客を惹きつけた いまの若いレスラーが学ばなきゃいけないことだよ

っぱりいい顔してるよね。たとえば猪木さんのナックルや馬場さんのチョップを真正面から受けて、もの凄い形相で耐える顔をお客さんに見せて、その表情だけで熱狂させるというね。

──あの耐える表情は印象的ですね。

渕 いまのレスラーは技を食らったあと、下を向いちゃうヤツが多いんだよ。それじゃ、お客さんに伝わらないだろ？ 木村さんは必ず顔を上げて、耐える表情をお客さんに見せていた。技がどうのこうの以前に、いまの若いレスラーが一番学ぶべきことだと思うね。

──なるほど。木村さんがチョップされたり蹴られたりしたら、やられたほうの木村さんに目がいきますもんね。

渕 うん。それは表情だけで観客を惹きつける、木村さんのプロとしての技術なんだよ。だから派手は技をやらなくても、チョップの応酬や、頭突きだけでも盛り上がるんだから。

──やはりレスラーは、そういったファンの深層心理がわかってないといけないわけですね。

渕 プロレスラーは360度全部、さらに上からもお客さんに見られるわけだ。いまのレスラーは技を出しすぎて、お客さんがどこを見ていいかわからないんじゃないかな。確かに凄いことをやってるんだけどね。でも、レスラーはボディスラムで投げたあとの表情、ヘッドロックで力を入れたときの表情だけで、ホントはお客さんの惹きつけられるんだけどな。

──渕さんはファミリー軍団vs悪役商会をやりながら、木村さんたちの試合を見て「あ、なるほど」と思うことはありました？

渕 その頃は俺もベテランになったから、プロレスをよく知っているつもりでいたけど、凄くやりやすいというのはあったな。みんなプロレスの呼吸を知りつくしている人たちばかりだからさ。

──だから、ファミリー軍団vs悪役商会ってけっこう長い試合が多いんですけど、長さを感じないんですよね。

渕 それは、みんなうまかったってことなんだろうな。馬場さんもやってて楽しそうだったしな。

──やっぱり渕さんにとっても木村さんとは、いい思い出ばっかりですか？

渕 そうだね。だから全日本とノアに分かれちゃった時点で、ちょっと寂しかったよな。木村さんも、全日本の頃が楽しかったんじゃないかな。飲みに行くとさ「国際のときは金網で流血戦をやらなきゃお客さんが納得してくれなかったけど、いまはマイクを握るとお客さんが納得してくれる」って言ってたからな（笑）。

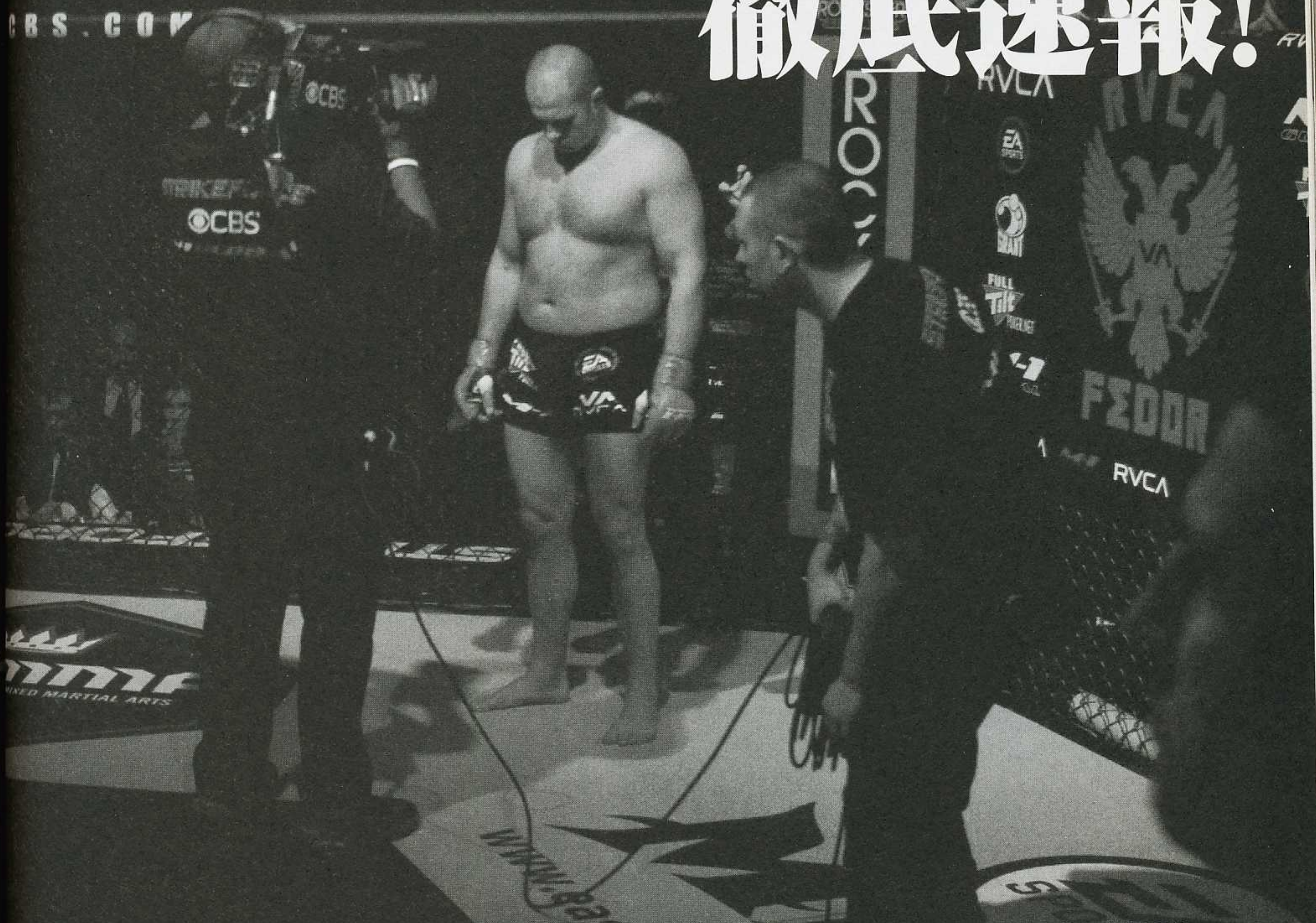
──そんなことを言ってましたか（笑）。

渕 「マイクがウケるってわかってたら、もっと早くマイクをやればよかった」とか、笑いながら言ってたよ。木村さんとは、そんな楽しい思い出ばかりだな。

【10年6月3日／都内・全日本プロレス事務所にて収録】

ふち・まさのぶ■1954年1月14日、福岡県出身。74年に全日本プロレス入門。80年代末から90年代にかけて、世界ジュニア王座連続14回防衛の長期政権を築くなど、一時代を築く。現在は全日本プロレスの取締役として、スポークスマンとしての役割も務める。185センチ、105キロ。

6.26 ストライクフォース in サンノゼ

〝60億分の1〟の闘い、徹底速報！

7.3『UFC116』ヴァンダレイ・シウバ vs 秋山成勲
7.10『DREAM.15』青木真也 vs 川尻達也もやります！

椎名基樹のサムライ三昧

第50回

『ボーウィー・ソーウドムソンの衝撃』

サムライTVで見た、シュートボクシングの「維新 ISHIN 其の弐」の中継で知った、ボーウィー・ソーウドムソンは強烈なインパクトだった。

まずその不敵な面構えだけで、ただ者でないことがわかった。ムエタイ選手らしからぬ、プロレスラーのようにビルドアップされた上半身も目を引く。

ファイトスタイルも筋骨隆々の上半身が示すとおり、フック&アッパーを中心とした豪腕パンチで対戦相手をぶっ倒す、往年のマイク・ベルナルドのようなスタイル。パンチによるKO狙いで、一般的なムエタイスタイルとはかけ離れている。蹴りで距離を作る芸術的なムエタイに対して、彼はガンガン前進して、倒すか倒されるかのケンカスタイルが身上のようだ。

ネットで簡単に調べたところ、ボーウィーはそのファイトスタイルで、数年前にタイで絶大な人気を誇った選手らしい。タイの主要タイトルも獲得しているようで、識者に言わせれば、何をいまさらな、レジェンドなのかもしれない。

とにかくだ。「維新 ISHIN 其の弐」の梅野孝明vsボーウィー・ソーウドムソンは、それはそれは凄まじい試合だった。ボーウィーの衝撃ばかり書いたが、梅野選手もボーウィーと同じく「一本ネジが取れてんじゃん?」と思える、とんでもなく気が強いハードパンチャーで、そんな二人が対戦しちゃったもんだから、試合は、ドン・フライvs高山が遠くかすむほどの、男くらべとなった。

このベストバウトは、『YouTube』にアップされているようなので、お暇な方はぜひご覧ください。『YouTube』の検索で「ボーウィー」と入力すると、最初に出てくる三つの動画がそれ。「http://www.youtube.com/watch?v=p2nioR_5M5w梅野孝明(シーザー)vsボーウィー・ソーウドムソン(タイ)(1R)」、「http://www.youtube.com/watch?v=uHES6l0Qx6o梅野孝明vsボーウィー・ソーウドムソン(タイ)(2R)」「http://www.youtube.com/watch?v=uHES6l0Qx6o梅野孝明vsボーウィー・ソーウドムソン(タイ)(2R)(再開後)」というのがそれぞれの動画のタイトル。

この動画は、サムライ中継のカメラではなく、個人が花道から撮影したものらしく、コーナーポストが邪魔になって見えない部分もあるし、カメラも遠い距離にあるので、パンチがぶつかる迫力や、その音などは、中継カメラに劣る。しかし、個人撮影独特の生々しさがある。後楽園ホールということもあり、「前田・長州蹴撃事件」を思い出した。高田は大人だ!

とはいっても「前田・長州蹴撃事件」のビデオと大きく異なることは、この動画がHDの画質で見られることだ。一般撮影でハイビジョンっすよ、時代だなあ。HD画質だからパソコン画面いっぱいの大きさで鑑賞に堪えうるので、大変おすすめ。この動画、誰がアップしたかわからぬが、シュートボクシングの宣伝におおいに役立つであろうから、削除なんてマネはしないでくださいね(蛇足といらぬお世話ですが、あらためてお願いします)。

この梅野vsボーウィー、レフェリーのストップタイミングが素晴らしかった。毅然としていて、公正だった。それに比べて、『DREAM・14』のレフェリングは見ていて苛立ちがつのった。

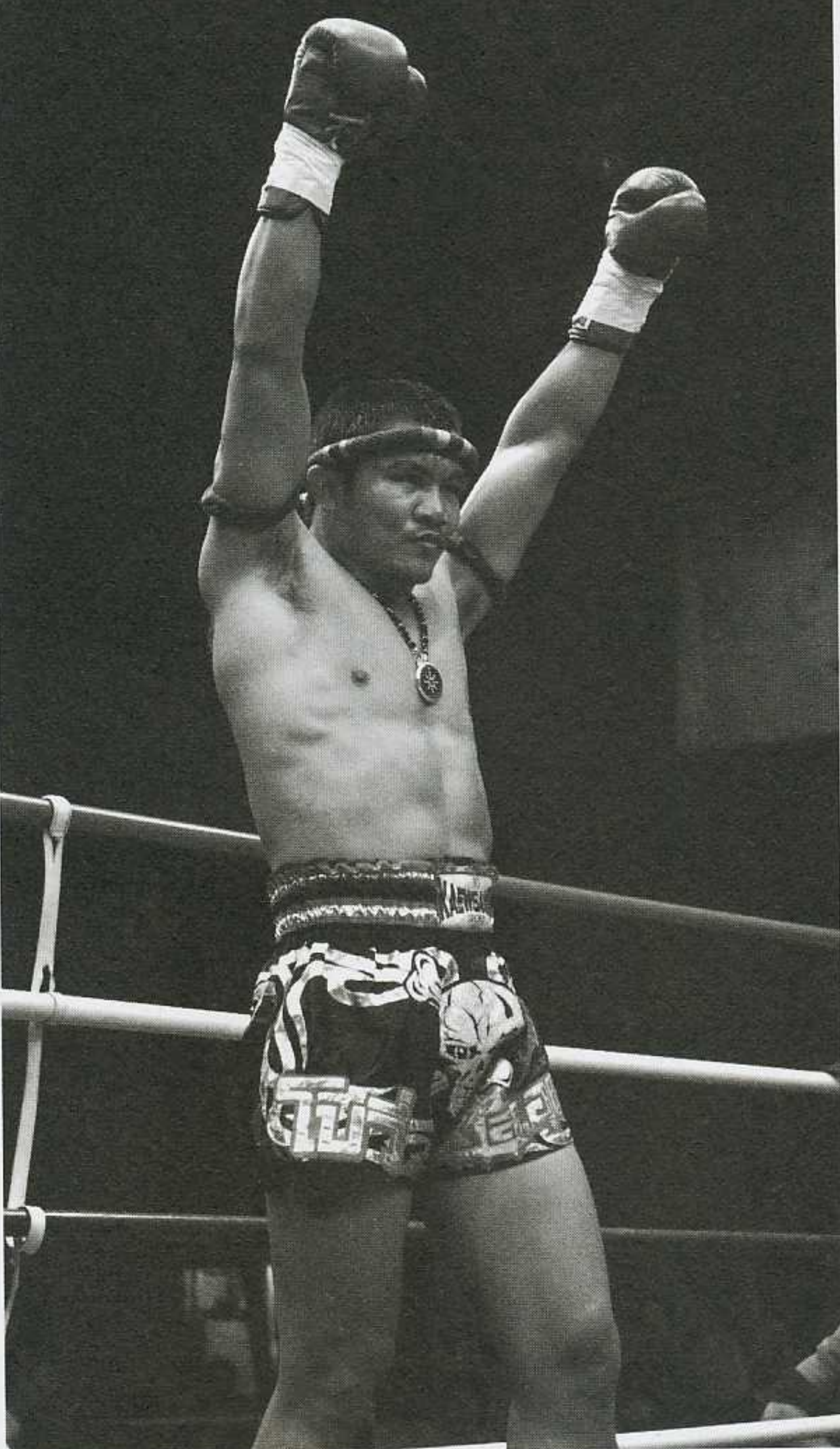
桜庭vsハレック。金網での対戦にもかかわらず、金網際で寝技の攻防中の二人の身体を触り、体勢を変えてしまうレフェリー。判然としないまま、苛立って見ていたら、放送席から「ハレックのトランクスが脱げそう」とかなんとか、自信のない声で説明が聞こえてくる。「トランクスが脱げそう」ってそれほど重大な局面だったのか? レフェリーがあのように、ちょっとトランクスを上げれば済む程度ならば、あのまま手を加えなくても大丈夫だったんじゃないか? そもそもトランクスの下はフルチンじゃないだろ? もし、どうしても服装を正す必要があるなら、一度ちゃんと立たせてトランクスの問題をクリアにして、スタンドから再開すべきじゃないか? トラブルにおいて、やむなく公正な条件において再開するのが、普通のスポーツとしての態度じゃないか?

また高谷vsヨアキムの金網際でのブレイクのタイミングが不可解で、これもまた苛立つ。ヨアキムは金網際のスタンドの攻防を制して、攻めまくっている最中だった。しかし、ブレイクがかかった。この直後に、ヨアキムはKOされてしまった。だからといって、高谷のKO勝ちの価値がなんら落ちるものではないが、好カードもレフェリーにぶち壊されてしまい、気が滅入る。DREAMは、この先もずっとこうなのだろーか? きっとこうなのだろう。

メジャーリーグベースボールで先日、ガララーガが完全試合達成目前で、最後の打者をファーストゴロに打ち取ったものの、一塁塁審がセーフのミスジャッジをして、完全試合がふいになってしまったことがあったが、スポーツの審判というのは往々にして、自分がその場の主役であると錯覚しやすいもののようだ。DREAMのレフェリングもそのたぐいなのだろうか。

今回のDREAMは、マッハの最後の試合になるかもしれぬので、ひさびさにPPVで観戦した。地上波放送とは違い、非常に楽しめた。とくにオープニグの演出は、PRIDE時代を思い出した。UFCにはない、日本的な演出の素敵さをあらためて認識した。好カードで、あんまり放送が長くならないようなら、PPV生観戦は買いの娯楽だな、と思った。

PS 修斗、リオン残念。UFC、ランペイジvsラシャド、凡戦で残念。

©シュートボクシング協会

これが"ムエタイ最強の破壊神"の異名を持つボーウィー・ソーウドムソン。その強さとアグレッシブなファイトスタイルは一見の価値あり。今年開催される"立ち技バーリ・トゥード世界一決定戦"『S-cup』参戦も決定的。これは楽しみだ!

日本MMA改革論

リングドクターが語る

つきることのない
ドーピング&減量問題に
大胆にメス入れ!

『SRC』&パンクラスリングドクター

齊藤直人

（武蔵村山さいとうクリニック）

マット界で常に話題となっているドーピング&減量問題。
試合内容に顕著に反映される問題だからこそ、本誌でもこれまでに何度か
取り上げてきた。今回は『SRC』などで活動する齊藤ドクターが、日本のMMAの構造を
抜本的に改革する取り組みについて、医学的見地から語ってくれた。

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑　試合写真／Josh Hedge（UFC）

『SRC』やパンクラスなどでリングドクターを務める齊藤直人ドクターに、本誌インタビューに登場いただくのは、昨年8月の138号に続いて今回が二度目。そもそもはそれより少しさかのぼった昨年の7~8月頃に、当時『kamipro Move』で連載されていた「kamipro事件簿」で、三沢光晴さんの死亡事故について語ってもらったのが最初だった。

もともとプロレスファンだった齊藤ドクターとマット界の最初の接点は、ノアだった。リングサイドにドクターがいないことも多い状況を見かねて、「自分にやらせてほしい」と手紙を出して直訴したのだ。必要性を感じていたノア側はこれを歓迎し、関東近郊の大会では何度かリングドクターとして招かれることになった。

だが、事故予防や身体のケアに対する考え方の違いなどから、ノアでの活動は1年足らずで終了。その後、縁あってパンクラスのリングドクターに就任し、『戦極』~『SRC』にも旗揚げから関わることになった。

前回、本誌に登場してもらったのは、三沢さんについての取材をしていたときに「まだまだ話したいことがあるんです！とくに格闘技界の減量の問題。これをどうにかしないと、格闘技はたいへんなことになりますよ！」という言葉をいただいたため。当時、ちょうどアメリカのアフリクションで予定されていたエメリヤーエンコ・ヒョードルvsジョシュ・バーネットの一戦が、ジョシュの薬物疑惑によって中止になってしまったという事件もあり、ドーピング、薬物問題もからめて話をうかがったのだ。

医療関係の問題にもっと真剣に着手しなければならないという意識は、多くの格闘技関係者が持っている。だが、目先のさまざまな問題の前に、わかっていてもついつい後回しにされがちな状況でもある。また薬物問題に関しては、アメリカのようなコミッションがないために、各団体の対応が不明瞭なことも確かだ。現に前回、ドクターに登場いただいたあとも、国内外でさまざまな問題が表面化している。この問題には、終わりがないのだ。

それを受けて、この5月には本誌が行なっているツイットキャスティング中継でも齊藤ドクターに登場いただき、この問題について語っていただいた。その際のお話が、ファンや関係者もあまり知らなかった情報も多々含まれていて好評だったこともあり、もう一度あらためて、インタビューすることになったというわけだ。

リングドクターとしての経験ももう10年近くになり、多くの選手のケアを無償で引き受けてもいる齊藤ドクターは、今回もマット界に非常ベルを鳴らす。そのベルの音を聴け！

じつは格闘技への造詣が関係者の誰よりも深いとされる『SRC』の向井徹代表。「公明正大」をキーワードに、主催者サイドとしてどんどんドーピング&減量問題に取り組んでいただきたいものだ。

──齊藤先生、先日は編集部のツイットキャスティングに出ていただいて、ありがとうございました。ドーピング検査のことや減量問題についてお話しいただきましたが、その内容があまりに興味深かったので、あらためてお話をうかがいに来ました！

齊藤　そうなんですか、なんでも聞いてください。

──さて、ツイキャスでは「6月の『SRC』から、医療関係のルールが新しくなる」というお話をされてましたね。

齊藤　ああ、あれなんですが、8月からの実施に変更になったんですよ。原案はもう細かい部分までできてるんですけど。

──なるほど。

齊藤　いままではへんな話、ルールって競技のことが多かったじゃないですか？　規定体重が○キロでいつ体重計に乗らないといけないとか。医療関係といっても、B型肝炎、C型肝炎、HIV、頭部のCTスキャンの検査結果を提出しないといけないというのが、ワケわからず漫然と1行か2行だけ書いてあっただけなんですよね。

──ワケわからず漫然と（笑）。

齊藤　そう。だから新しいルールでは、たとえばドクターでいうと、その権限というか、SRCコミッションドクターとして選手だけでなくセコンドとか、レフェリーとかまで含めて試合前から試合後まで管理しなきゃいけない、と定めているんです。

──レフェリーまでですか！

齊藤　そうです。なおかつコミッションドクターが診断をして、試合に参加していいよっていう基準をパスしなければいけない、と。コミッションドクター自身か、コミッションドクターの指定する医師の診断を受けないといけないんです。そうでないと、何も競技のことを知らない、極端な話、精神科の医師が診断書を書いたっていいことになるじゃないですか。偽造することもできてしまうし。

──確かに。

齊藤　そこを厳格にして、診断書を出してもらう、と。ただ診断書といってもいままでは診察所見もついてなくて、検査データを受け取っても検討しないケースもいっぱいあったんですよ。「全部陰性、CTも『異常なし』と書いてくれ」って言われたら、書いてしまう医者もいたかもしれない。だから指定したところで検査を受けて、決まった書式があるからそれに書きなさい、と。

──徹底するわけですね。

齊藤　それ以外に大事なのが、現病歴、既往歴、現在の身体の状況、飲んでいる薬の種類、家族の病歴も出しなさい、と。それを偽装したらファイトマネー全額没収ぐらいの勢いですね。血液検査もして、肝機能、腎機能、電解質など15項目ぐらい、指定されたデータを出しなさい、と。それ以外に……。

──まだあるんですか！

齊藤　心電図、視力、聴力、サチュレーション（酸素飽和度）、胸のレントゲン……とにかく人間ドックに近いぐらいのデータを提出しなければならないという決まりですね。プラス、診察もコミッションドクターなり、僕らが認める医師の診察じゃ

『SRC』には僕らの希望で医療関係の

ないといけない。なおかつ、僕らに関する

選手には単純に負担が多くなりますよね。

ないといけない。なおかつ、僕らに関する規定もあって、コミッションドクターは前日の予備計量か、もしくは本計量時には立ち会わないといけない。それで計量後に診察もします。その診察も、いままでにもやっていた当日の診察も通った時点で、SRCコミッションがライセンスを発行します。ただ、選手によっては診察後に点滴を打ったりするわけですよ。

――あとで詳しくうかがいますが、減量後の回復のためですよね。

齊藤　はい。そういう診察後の医療行為も、コミッションドクターに申請してOKをもらって、医療行為後もその証明を受けなければいけない、と。また、当日までに戻す体重の制限を作るか、それとも当日計量にするかという点をいま、議論中です。

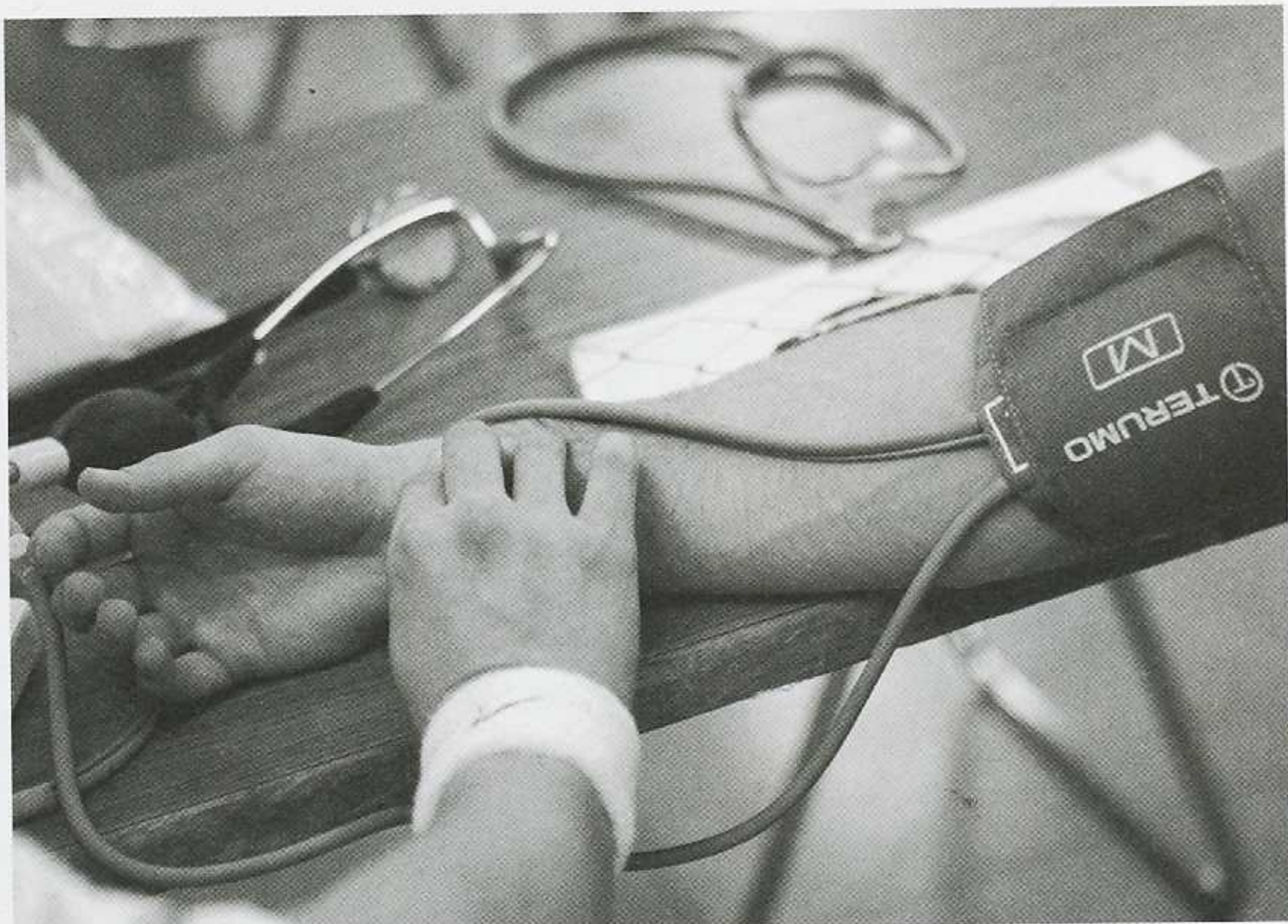
――厳しいですねえ！

齊藤　主催者サイドには、僕らの希望を全部飲んでもらって厳格にさせてもらいました。あと試合後も、ケガした選手に「はい、病院行ってね！」で終わりじゃなくて、コミッションドクターの指定する病院、救急車で搬送される病院での治療経過だとか治癒証明を出さなければ免許剥奪ということにして、試合後まで僕らが身体を管理するということになってます。

――そうなると、いままでのように過度の減量をして点滴で回復するのは……。

齊藤　禁止ではないですが、必ず提出しなさいということですね。何を入れてるかわからない状況だったわけですよ。まあないとは思うけど、興奮剤を入れることも可能だったわけです。そういうことは原則禁止。逆に点滴などが必要な状況で、僕らが「やりなさい」と言った場合はやらなきゃいけない。

――しかしそれだけ提出事項が増えると、選手には単純に負担が多くなりますよね。

齊藤　金銭的負担もいままでよりは大きくなりますけど、それ以上に守れるものが大きいんじゃないかと思ってるんです。いまは肝炎とHIVとCTだけ出させてる。それで試合に出た選手が、突然心筋梗塞になりました、と。それで命を落としたということが起こりかねないわけですよ。それで、じつは高血圧症で胸の痛みがありましたとか。それがあとからわかっても意味ないんですね。いまは健康診断も、ジムに入会するときぐらいしか必要ない。でも競技をする、試合をするにあたって僕ら医師が必要と言っているものを出して判断を受けていれば、防げることもありますから。ただ、試合でのケガの治療費などに関しては主催者が払うということになると思います。

選手を危険から守る立場にあるドクター。もちろん試合前にはドクターチェックが実施されているが、現場ではどのような検査が行なわれているのか、我々にまで届くことはほぼない。

『SRC』には僕らの希望で医療関係のルールを厳格にしてもらいました

――なるほど。

齊藤　でも、その提出が負担というよりも、僕らはあたりまえだと思うんですよ。どこが悪いのかもわからない選手をリングに上げて、何か起きたらドクターが守ってくださいと言われても困りますよね。そのためなんです。ただ、試合をするたびに出せということじゃないんですよ。ライセンス発行時に提出すれば、ある程度有効期間がありますから。

――ということは、『SRC』では選手ライセンス制に移行するということですか。

齊藤　そうです、そうです。そのための医療面の決まりを話し合って決めたということなんです。もちろん、試合で外傷があったりすれば、次の試合の前にこれを出しなさいと指定して出してもらうことはあります。それ以外では初参戦、初来日の選手には出してもらう、ということですよね。

――既往歴とか家族の病歴によって、ライセンスが発行されないということもあるんですか？

齊藤　あります。たとえば、喘息を持っていてまったくコントロールが効かないというようなときですね。あるいは拡張型心筋症、肥大型心筋症みたいな心不全になりやすい人だったりとか。あるいは実際にあった例ですが、眼球に腫瘍があって義眼を入れていた、と。

――義眼ですか！

齊藤　義眼が悪いっていうわけじゃないんですが、目に打撃をもらったときにどうなるかっていう問題ですよね。それからあきらかに高血圧だったり、頭部に手術の経験があったり。できるかできないかっていうのはそういう材料が出されたうえで、個々に判断されなきゃいけないと思うんです。逆にたとえば高脂血症、コレステロール値が高いとかいうのは止める理由にはなりません。慢性疾患ですから。やっぱり競技をやるにあたって危険なのは、心臓疾患ですよね。

――ただでさえ命の危険につながりやすいですからね。

齊藤　不整脈がバンバン出てるような人をこの競技に出して大丈夫なのか、出す必要があるのかっていうことですよね。もちろん心不全の既往があったら100パーセントダメってことじゃないですけど、現実的に大丈夫かっていうのは前日か当日に判断して、ダメなら試合させないということにしないといけないですよね。いままでは首から上の既往歴や現病歴がある人も多すぎたんで、それは把握しなきゃいけないなと思ってるんです。

――そのための材料が必要だ、と。

齊藤　はい。総合格闘技って、特別なところがあるじゃないですか？　押さえてれば勝つわけでもないし、瞬発力だけあればいいわけでもない。ボクシングともまた違いますから。それこそ金網だったら馬力があって押し込めば有利になる部分も

リングドクターが語る 日本MMA改革論

ある。いろんなものがからんでくるわけですよね。それをいかに平等にするかっていうのは主催者が考えることですけど、僕らはいかに安全にできるかってことを考えないといけない。

——選手を守るということですね。

齊藤　心筋梗塞がある選手が胸に「バーン!」と打撃を受けたら、AEDで電気ショックを与えたのと同じ状態になって、相手が殺人者になる可能性だってあるわけですよ。僕らもある程度既往歴がわかったうえでやってるなら迅速な蘇生処置がとれると思うんですけど、何にもわかってない状態だったら危険ですから。だからこれを機にルールを明確化して、総合格闘技を競技としてちゃんとやっていきたいという『SRC』の向井社長、レスリング協会の福田会長の希望があって、ボクシングのように決めていこうということになったんです。

——たとえば、ケガを隠して出場するために、当日に痛み止めを打っていたという話を聞くことがありますよね。そういうこともできなくなる?

齊藤　全部ダメということじゃなくて、あくまで申請して、それで大丈夫な範囲内かということですね。あと、直前に拳を骨折してても出る選手もいるじゃないですか?　骨折はもうドクターストップにしないといけないですよね。いままでは麻酔を打って出てた選手もいますけど、ドクターとしては選手の今後の生活を考えたら止めないといけない。

——ただ、故意に申請しないとか、すり抜けようとする選手も出てきそうですよね。

プロレス界でも昔から問題となっているドーピング問題。07年6月末には、クリス・ベノワが息子と妻を殺害したあとに自殺を図ったが、検死の結果、その体内からは通常の10倍に当たるテストステロン(男性ホルモンの一種)が検出され、内臓だけでなく精神への影響もささやかれた。

いままでは単に最初に決めた流れでやってるルールが多かったんです

齊藤　万引きと一緒で、隠れてやられるのはどうしようもないですけど、いままでは「万引きしちゃダメ」というルールもなかったような状態なんですよ。そこでルールを明確化しないといけない。そこに違反したら『SRC』の大会には二度と出られないということになるかもしれない、と。

——罰則も設けてるんですか。

齊藤　違反の程度によって、重大ならライセンスの永久剥奪ということまであるはずです。

——ただ、僕らからしてみればいままでの提出書類がそんなに不充分だったということのほうが驚きですね。

齊藤　そうですよ!　基本的にウイルス量の問題で、C型肝炎に感染することは極めて稀です。HIVも、ほとんどないです。僕は外科医ですが、手術中に自分の指に針を刺してしまったり、メスで切ってしまったりという事故も起きたりしますが、それでもほとんどうつらないですよ。B型はうつりますけど、C型やHIVよりは梅毒のほうがよっぽどうつりますね。そういう書類をなんで提出する必要があるの、と。相手方を守るため、というのはわかりますが、競技としては必要ないんですよ。CTもワケもわからず提出させてますよね。

——CTも必要ないんですか?

齊藤　必要ないというより、なんで頭だけケアするんですかってことです。CTだけでは見えないことも多いですし。たぶん、ボクシングから流れてきたルールなんですよね。ボクシングは頭部への打撃が集中するから、頭を重点的にケアしますけど、総合はそうじゃないですよね。それこそ、グラップリングルールなのにCTを出させてた例もあるんですよ。

——それは意味ないですね(笑)。

齊藤　でしょう?　だったら関節のレントゲンを提出させたほうがいいですよね。意味をわかってやってないという例ですよ。単に最初に決めた流れで、なんとなくやってるだけなんですよね。もちろん総合では頭への打撃もありますから、CTも必要です。だけど全身を使う競技だから、それ以外の部分、心肺機能とかも同じようにケアしないといけないんですよ。それに、もしHIVが陽性だったらどうするんですか、と。

——ストップにはできないんですか?

齊藤　陽性だとしても、個人情報だから相手方には言えないんですよ。そういうときにどうするんですかと主催者側に言っても、「うーん」って言うだけでしたからね。B型肝炎が陽性だからって、出血したら早く止めるかと言ったらそういうわけでもない。早く止めるという承諾も取ってないし、ドクターにはその権限もなかった。それなのに書類だけ出せというんだったら、それこそ選手に負担がかかるだけで意味がないですよね。ならばルールで明確化しようということですよ。

——いままでがいかに形式的だったかということですね。

齊藤　最初はドクターが関与して、PRI

リングドクターが語る日本MMA改革論

DEの初期の頃に頭の事故に関する何かがあったんじゃないかと思うんですよね。他団体とかプロレスとかで。その頃に決めて、15年ぐらいずーっと同じだったってことですよね。ただなんとなく、で。今回、初めてそこにメスを入れることになったわけです。

——そのルールのなかで薬物使用に関しても決めたんですか？

齊藤 ドーピングということですよね。そこに関しては僕らは関知せず、主催者に投げました。僕らは警察じゃないですから。選手の身体を守るという観点だけからすれば、興奮剤や麻薬、覚醒剤の使用を見つけたり禁止したりするというのは管轄が違いますからね。

——なるほど。

齊藤 それに、たとえばアナボリック・ステロイドを使用することが総合格闘技で有利かどうかはわからないわけですよ。

——パワーも出るし有利になるんじゃないかと、漠然とは思われてますけどね。

齊藤 たとえばベン・ジョンソンは100メートル走ですから、爆発力が出て有利になりました。でも高橋尚子さんは絶対使ってないじゃないですか。要するに、スタミナのスポーツと瞬発のスポーツでは全然違うわけですよ。でも、総合格闘技って両方ですよね。

——確かに、どちらかがありさえすれば絶対に勝てるってものではないですね。

齊藤 マラソンでステロイドを使ってムキムキにしても、それはかえってマイナスですよね。それが総合でどうかというのは、ハッキリいってわからないんですよ。だからそこは主催者の判断だと思います。ただし、ステロイドを使いすぎることで心臓に負担がかかったり、腎臓や肝臓に負担がくることはあきらかなんですよ。だから主催者側が使用OKということにして、選手が使用しているということを申請したら、僕らは心機能、肝機能、腎機能をチェックして、出場OKかどうかを判断するということですね。

——それも凄いですけどね（笑）。

齊藤 凄く極端なことをいえば、その大会のリングドクターとしては、選手がステロイドを使ってあとに後遺症が出ても関係ないんですよ。それをよくわからないまま、主催者の依頼で闇雲に尿を採って、陰でゴニョゴニョやっているのはドクターの仕事じゃないんです。それは、やりたいなら主催者がやることなんですよ。

——たとえば普段から齊藤先生のところに来ている選手が、「ステロイドを使ってみようかと思うんです」と言ってきたら、それは悪影響があるからと言って止める、ということですよね。

齊藤 まあそうです。ただ、僕のところに来ている選手にはそんな選手はいませんからね。

——もちろんそうでしょうけど（笑）。

齊藤 もし言ったら徹底的に止めますけどね。僕のところにはみんなケアのために来てますから、ウチも最近マッサージも入れて、リハビリから何からやってますから。痛いところがあったら薬を出すだけでなく整体的なこともやって、定期的に血液検査もしてるんですよ。肝臓や腎臓の数値が悪かったら、「プロテインが多いんじゃないか？」っていう指示も必ずしてますよ。それだけケアしてるにもかかわらず、ステロイドを使いたいって言いだす選手はまずいないですよね。

——それはそうですね。逆にドクターの立場から見て、試合にあたって禁止しないといけない薬物というのは？

齊藤 たとえば興奮剤は血圧を上げますから、出血したときに危ないからダメだというのはありますね。ただ、ドクターとして身体を守るという立場から、これは絶対にダメというものはとくにはないですけどね。

——そうなると、薬物問題というのも難しいところですね。

齊藤 まあスタイルにもよりますけどね。○○○○○なんか、やっぱり見るからにやってるじゃないですか。

——あ、やっぱり見るからに（笑）。

齊藤 それでパワーでガーッと押して勝っちゃいますけど、タイトルマッチで5ラウンドまで行ったら絶対に動けないですよね。ガーッと行って勝つっていう選手の薬物使用は反則に近いですけど、僕らは勝敗に有利かどうかは関知しませんから。それはやっぱり主催者側の問題ですよね。

——うーん……。

齊藤 許容範囲内のステロイドだったらいいんじゃないかとか、ドーピングにもい

薬物使用に関しては僕らは関知せず主催者に投げました

UFCカムバック当初はライトヘビー級戦線に参入するも芳しい戦績を残せなかったシウバは、今年2月にミドル級に転向。見事にマイケル・ビスピンから勝利を収め、7月4日にはあの秋山成勲と雌雄を決する。

リングドクターが語る 日本MMA改革論

ろいろありますからね。男性ホルモンをバンバン打つとか。あと逆に、慢性疾患を治療するために飲まなきゃいけないものを、そういうことで止めることになってもまずいんですよ。僕も正直、総合格闘技に関しては学問的にそこまでやれてないというのもあるので、絶対いい、悪いというのはわからないですよね。

――研究事例、材料の積み重ねが足りないということでもあるわけですよね。

齊藤 だと思いますよ。でも研究事例が出れば、それを悪用してくる選手も出ますから。

――そうか！ 科学研究と核兵器の関係みたいな。

齊藤 ただね、総合格闘技って、薬に頼って勝てる競技じゃないと思うんですよ。100メートル走だったら、体格とか身体能力がかなりものを言いますよね。日本人が世界記録を出すのは不可能だと思うんですよ。でもマラソンは逆ですよね。それはわかりやすいけど、総合格闘技は「なんだかわかんない」ものじゃないですか？ 体重をきちんと合わせて、そこに向かって身体を作ってやるっていうことのほうが重要ですよね。総合格闘技の深さって、ただ薬を使えばどうにかなるというほど浅いものじゃないと思うんですよ。それより、薬で瞬発力だけ上げてる、パワーだけ凄いっていうのとか、どんなのが来てもしのげる身体と健康をキッチリ作るほうが強いんですよ。だからもう、ステロイドうんぬんなんていまさらどうでもいい、と思うんです。だから○○○○○なんかもスルーされてるんじゃないですか？

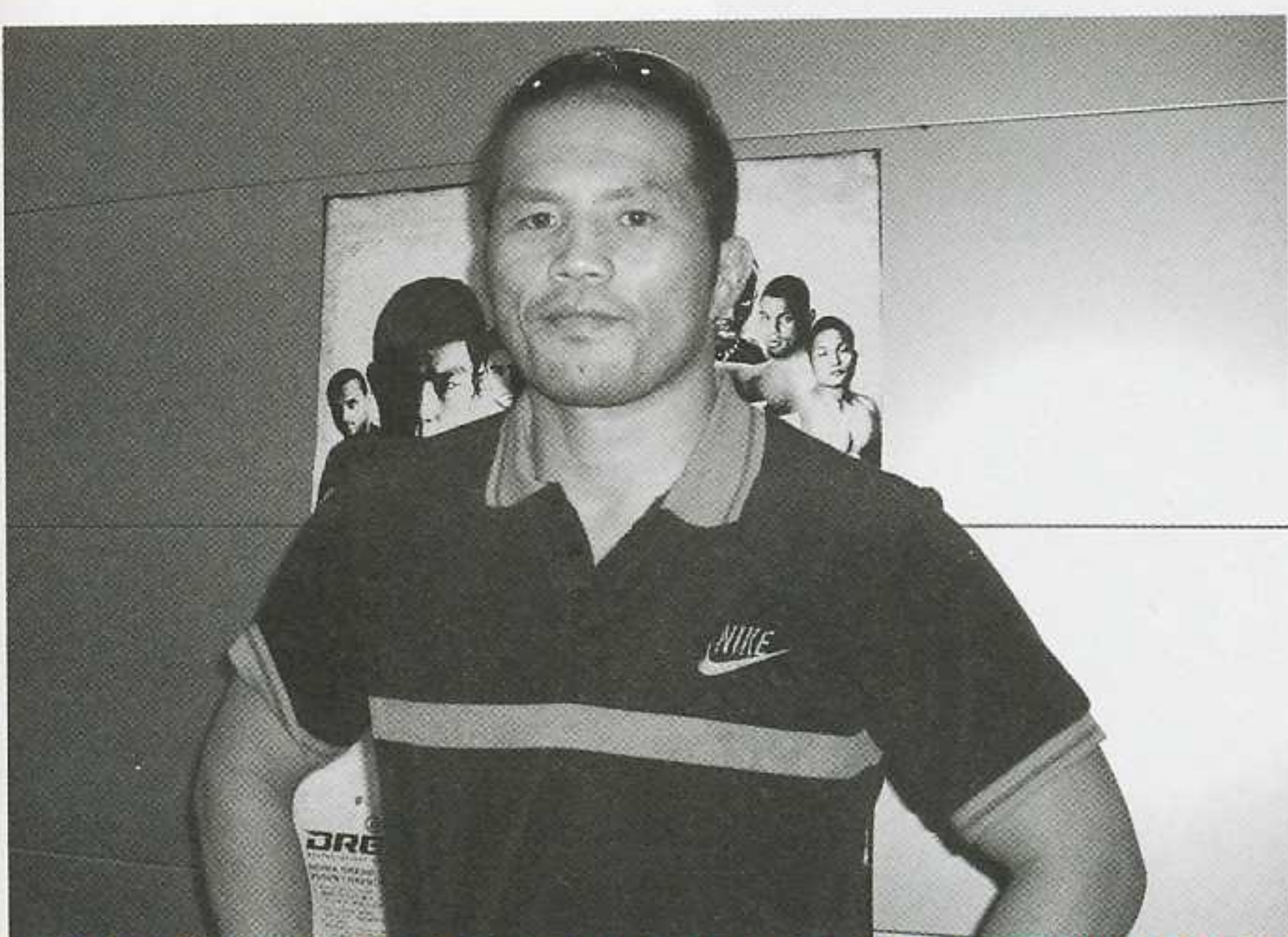
――そこはまた別の問題という気もしますけどね（笑）。その身体を作るという部分でクローズアップされるのが減量ですよね。最近は階級を下げる選手がより一層多くなってきてますが。

齊藤 だからこそ、制限を設けるべきですよね。技術が向上してレベルが上がっているから、もう無差別級はありえない。「柔よく剛を制す」は絶対ないですよね。ミノワマンは特例としても。だからさっきも少し出ましたけど、前日計量をやめて当日にしたい、と。それも究極は、入場してきてリング下で体重計に乗って、パスならリングに上がる、ダメなら次の試合、というやり方ですよね。

――それは凄すぎませんか（笑）。

齊藤 まあそれは究極すぎるので、試合の1時間前に計量するのがいいと思うんですけどね。

――1時間前ですか！ それで選手は動けますか？

齊藤 アップが終わって動ける状態での

日本で減量に苦しむ印象のあるファイターといえば桜井"マッハ"速人。昨年のDREAMウェルター級GPでは再々軽量でようやくパス、試合に影響がなかったとは言えないだろう。

昨年4月のケージフォースではマーカス・ドナヒューの体重オーバーにより、大会当日にメインが吹っ飛ぶ前代未聞の自体が発生。GCMでは選手の安全面を考慮し、ドナヒューの失格負けを宣告した。

計量は前日に行なうのはやめて試合の1時間前にするのがいいと思います

体重を合わせるっていうことですよ。それが一番公平ですよね？ だっていまは、試合の30時間ぐらい前に計量してるんですよ。どう考えても70キロではない選手がリングに上がって、「いまから70キロ、ライト級の試合を行ないます！」って言っても、それは意味ないですよ。そこは主催者側が決めるにしても、それで膨らましすぎることは、確かに有利になるんですよ。体重が重いほうがいいんだから。選手もそれがわかってるから、計量後に増やそうとするんです。でも僕らは、選手にそれを強いてしまうことになるわけですよ。

――ルール上、認めてるわけですからね。

齊藤 だから、計量後に点滴を10本とかバーッと打って、メシをガンガン食って、水をどんどん飲んで10キロ増やしました、と。でもルールの範囲内です、と。当日に相手より1キロでも重くなってればパワーで勝てるんだと選手は思い込んでますからね。そういうことを強いちゃってる現状が選手の身体には非常に負担になってるんで、それをルールで制限することで守ってあげられるんじゃないかとは思ってますけどね。

――ケージフォースではすでに、当日に上の階級まで上げてはいけないという「安全計量」を実施してますよね。久保豊喜社長は、「本当は当日計量にしたいけど、減量で頭蓋骨の中の水分も減っているから脳へのダメージが大きくなる。その回復の時間をとらないと」と言っていました。

齊藤 その話自体は正しいと思います。ただ、それは減量で水を抜いてカピカピになるという前提での話ですよね。そもそもカピカピにまでしなければ、水を戻す時間もいらないわけじゃないですか。ちゃんと5分3ラウンド、総合格闘技を闘えるという状態で体重計に乗ればいいんですよ。

――よりナチュラルに近い状態というわけですね。

齊藤 そうです。いまは戻すのがあたりまえになってるから、10キロ戻せる選手と戻せない選手とだったら、無差別級になっちゃってるわけですよ。それで僕のイメージでは、戻した選手のほうがやっぱり馬力で勝ってる感じがしちゃうんです。と

くに外国人。それはフェアじゃないと思っちゃうんです。観客目線では「フェアじゃない！」でいいんですけど、ドクターの目からしたらそれを強いてる現状をルールで変えなきゃいけない。それが一番平等だろう、と。

――なるほど。戻すことが身体によくなさそうだというのは漠然とはわかってるんですが、具体的にはどんな悪影響があるんでしょうか。

齊藤　簡単に言えば腎不全で、身体が脱水状態になるから腎臓に凄く負担がかかるわけですよ。あとは脱水を一気に補正するためにガーッと点滴を打ったり水を飲んだりするから、心臓にも消化管にも肝臓にも負担がいきますよね。とくに心臓と腎臓にはメチャクチャ負担がきますよ。ショック状態から戻してるようなものですから、悪いことだらけですよ。

――一番大事な試合直前の時期に、好きこのんで身体を痛めつけてるわけですね。

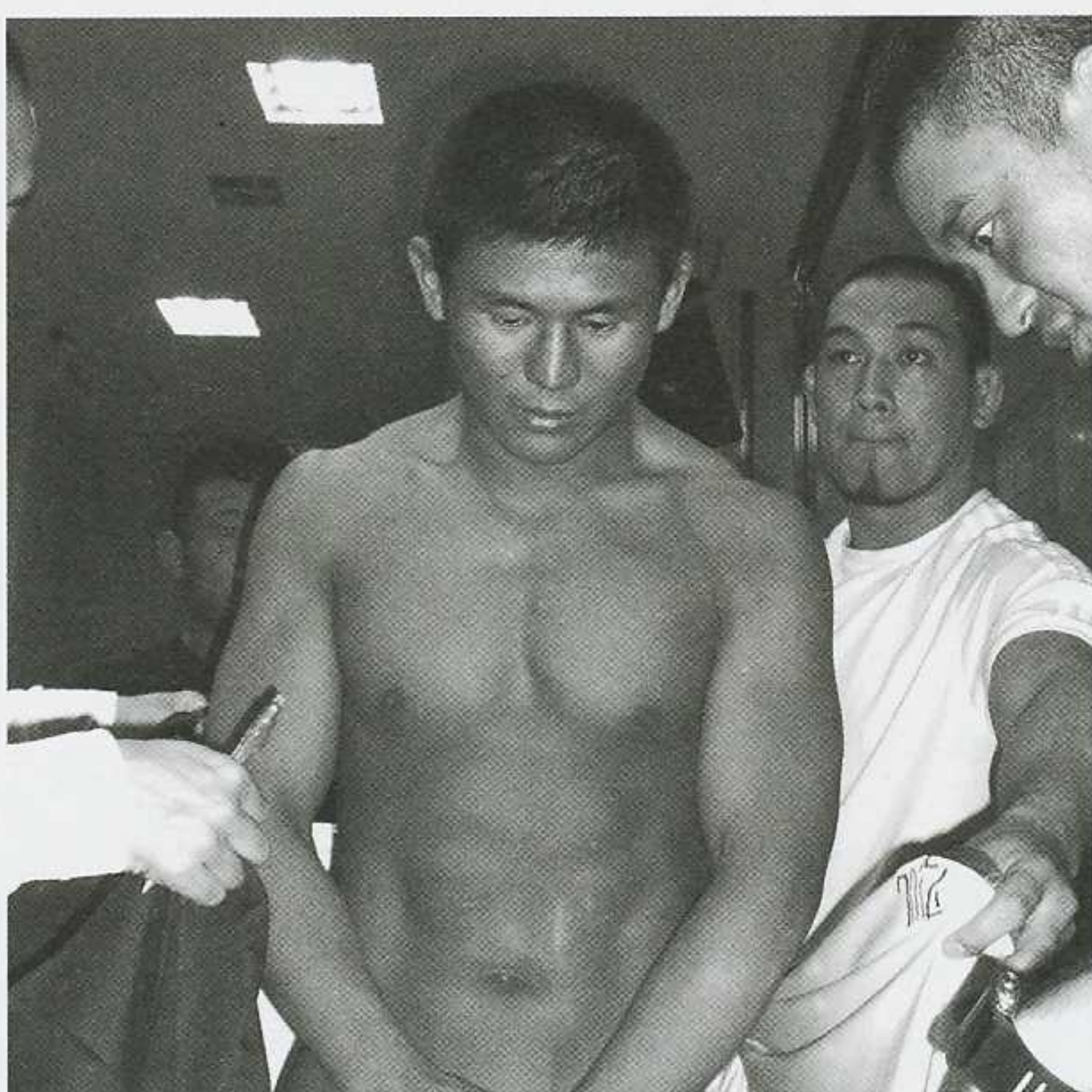
齊藤　そうです。だからダメだと言うんです。ただ当日計量は、主催者にしてみれば、いつかのケージフォースみたいにメインが中止になったりするリスクがありますよね。

――前日計量だと、選手を入れ替えたり急きょ代役を用意する時間が、まだありますからね。DEEPが前日計量にするのはそのためだと、佐伯代表も言っていました。

齊藤　でも、『SRC』の向井社長には「中止になってもいいというぐらいのスタンスでやってください」って言ったら、「わかりました！」っていうノリでしたよ。凄く理解してくれて、「それでメインとセミが中止になったとしても、いい」と言ってくれましたから。お客さんから不満が出てもいいから、選手を守りましょう、と。素晴らしいですよ。それに選手は応えないといけないですよね。罰金が怖いってだけじゃなくて、それで身体を守ってるんだってことをもっとわかってくれれば、選手にも結果的にいいと思うんですよ。

――過度な無理をすることがなくなるから、選手寿命も延びるわけですよね。

齊藤　はい。あと意見として出たのは、「減量もサイドストーリーとしておもしろい。

このルール改革が流れに乗れば もっと格闘技の人気も上がると思います

ライト級に転向後、激しい減量により毎回苦しんでいる様子の北岡。「一気に戻した体重を一気に戻すのは得意」と本人は語るが、ファイターの過激な減量法に齊藤ドクターは警鐘を鳴らす。

そこまでも闘いだ」という人がいるんですよ。でも、そんなことを楽しんでる人はいないと思うんですよ！

――（笑）。楽しむより心配のほうが大きいですよね。

齊藤　少なくともドクターは楽しめないですよ。もしかしたらお客さんは楽しんでるかもしれませんが、ドクターとしてはそんな楽しみ方は認められないですよ。そんなのはバカな話で。いままでそれを見逃してきた主催者やリングドクターがダメだという話だと思いますよ。

――そこもキッチリしよう、と。

齊藤　いずれ総合格闘技全体がこの流れになればいいと思いますよ。僕らからすれば、これは改革だと思ってるんで。もちろん、そこからいろんな意見が出てくるでしょうから、そしたら臨機応変に変えていけばいいんで。何しろ、選手の身体を守るためのルールを作ってあげるっていうのは僕らの義務だと思うんで。僕も十数年やってますけど、それをやってこなかったのは僕らの怠慢だと思ってますから。

――今回、その土台が初めてできたわけですね。

齊藤　はい。これが一般化すれば、選手のコンディションもよくなって、みんなもっと試合ができるようになりますよ。以前のパンクラスなんかはほとんどナチュラルでやってたから、毎月ぐらいの勢いで試合に出てたじゃないですか？　それができなくなっちゃったわけですよ。

――いまは最低でも2～3ヵ月に一回というのが一般的ですね。

齊藤　試合寸前のメチャクチャな減量があるから、それは何カ月に一回しかできないですよ、身体がきつくて。試合だけのダメージじゃないと思いますよね。5分3ラウンドで受けるダメージだけだったら、何ヵ月もできないってことはないと思うんです。KOされたりとか大きな外傷を負ったりとかでないかぎりは。試合に至るダメージが大きすぎちゃって、そこがほとんどだと思いますよ。

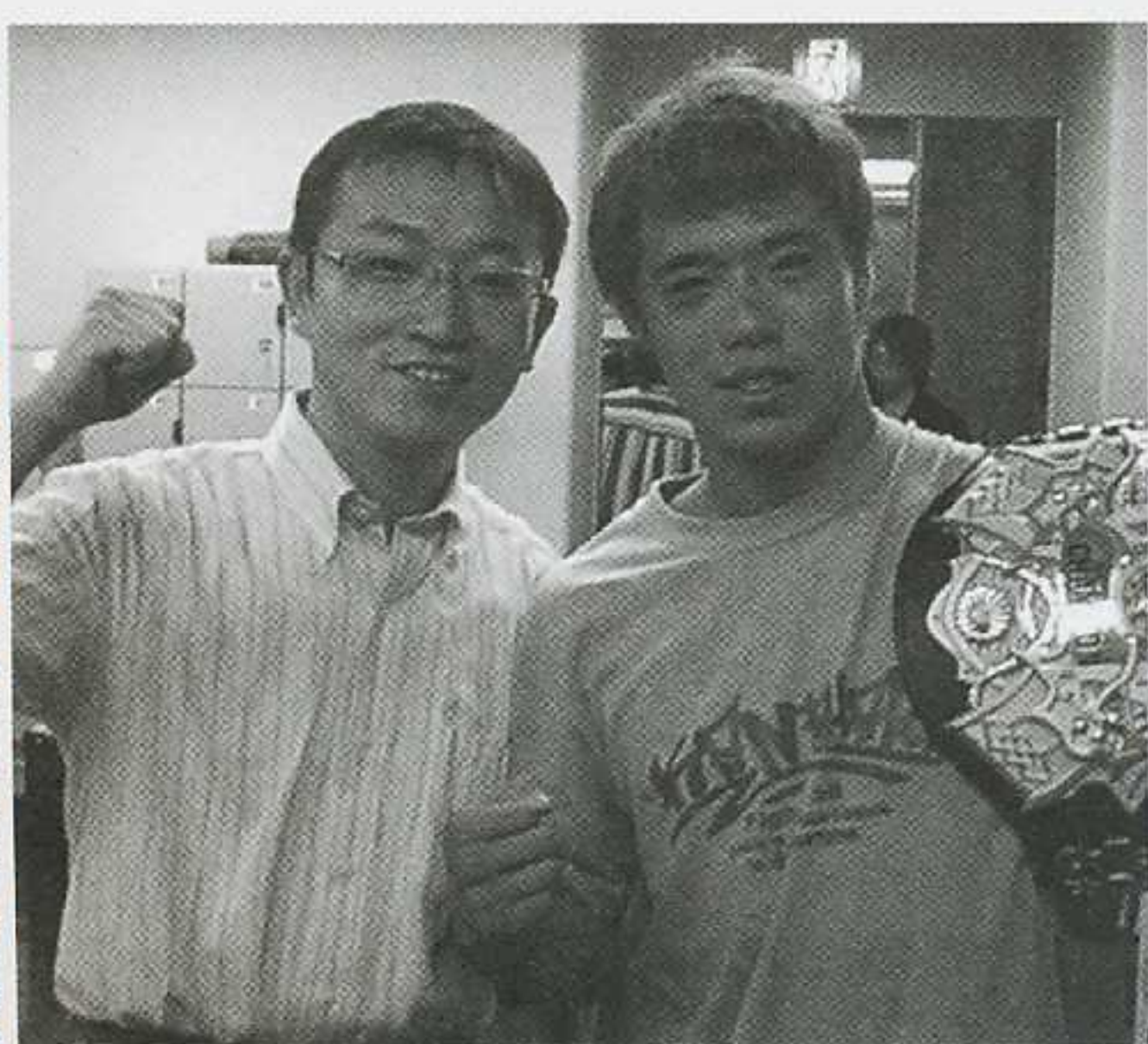
――なるほど。

齊藤　これでもっと選手が試合をこなせるようになれば、以前はパンクラスの大会に行けばほとんど必ず船木誠勝が観られたように、青木真也とか所英男、北岡悟がいつの大会に行っても観られるというなら、もっと格闘技の人気も上がると思いますよ。

――減量の負担を減らすことで、格闘技界のためにもなる、と。

齊藤　絶対そう思います。もうみんなやるべきなんですよ！

――わかりました。今日はありがとうございました！

【10年6月5日／都内・ディファ有明にて収録】

さいとう・なおと■都内・武蔵村山さいとうクリニックの院長を務めるかたわら、『SRC』やパンクラスのリングドクターとして活躍。選手からの信頼も厚く、パンクラスの近藤有己や北岡悟、"グラバカの菊田早苗、佐々木有生、山宮恵一郎から、地元・武蔵村山出身の金原正徳など、多くの格闘家が来院している。ブログアドレス→http://d.hatena.ne.jp/naoto-s_dr/

レフェリングとは何か？

ゲスト

野口大輔レフェリー

kamipro USTREAM 配信開始記念

kamiproがUSTREAM（ライブ動画の配信）を開始!!　記念すべき

坂井　主催者との窓口は全部島田さんが？

いじゃないですか？　べつにそれはレフエリーが介入するとかじゃなくても、やっ

やないか」っていうのはあります？　たとえば、こないだの桜庭（和志）選手とハレ

観客の成熟度やMMAの人気によってレフェリングも変えていくべきである

kamiproがUSTREAM（ライブ動画の配信）を開始!! 記念すべき第一回目のテーマは、ここ数年ファンのあいだで改善が求められている「レフェリング問題」——。かつてPRIDEやDREAMでレフェリーを務め、現在はフリーとして活動している野口大輔氏に登場してもらった。聞き手はジャン斉藤と坂井ノブ。この回のログは残念ながら保存していないが、ファンからの質疑応答を含めてリアルタイム配信は2時間にも及んだ。今回その一部をご紹介しよう！ ドゥ・ザ・ジャッジ!!

ちなみに本誌のUSTREAMではいまのところ「週プロ復帰記念！ 語ろうケンファー佐藤」や「俺たちのミルコ・クロコップ座談会」などが視聴できる。とりあえずUSTREAMで「kamipro」と検索してくれ！ 押忍。

斉藤 レフェリング問題を語るときによく言われるのは、主催者と競技陣が別機関じゃないっていう話があって。つまりレフェリーは主催者に雇われてるわけですよね。

野口 「主催者に雇われてる」っていう部分はとくに感じはしないですよね。僕の場合は主催者に雇われてるっていうより、島田（裕二）さん（の会社）に雇われていたので。DREAMとかPRIDEのなかでは、島田さんがトップで競技陣っていう輪っかがあったんで、だから島田さんを中心とした個体だったんです。

坂井 主催者との窓口は全部島田さんが？

野口 そうですね、基本的には全部島田さんがやってました。

斉藤 では主催者側とほかのレフェリーが、レフェリングについて直接お話をする機会はないわけですか？

野口 直接はほとんどないですね。そこは島田さんが競技統括でありルールディレクターなんで、そこへ主催者から「いまのレフェリングどうなの？」っていう疑問が下りてきて、それからほかのレフェリーと話をするみたいな感じです。大会が終わったあとには必ず反省会じゃないですけどミーティングをしますし、大会の前にもレフェリーとジャッジが集まって「この試合はこういう試合になりそうだね」とか、そういう話し合いはやります。

斉藤 では、何か主催者側から「こういうレフェリングが望ましい」という要請が入ったことはないですか？

野口 〝こういうレフェリーが望ましい〟っていうのはとくにはないと思うんですけどね（苦笑）。でもへんな話、レフェリーも「言われなくても空気は読めよ」みたいのがあるじゃないですか（笑）。

斉藤 いまの話を勝手に解釈すると、主催者側というのはレフェリーに競技的な部分を任せると同時に、「エンターテインメントとしても成立させてくれよ」という思惑があるわけですよね。

野口 僕はあるとは思いますよ。やっぱりおもしろいものを観てもらったほうがいいじゃないですか？ べつにそれはレフェリーが介入するとかじゃなくても、やっぱりデッカい会場の真ん中でずーっと膠着してたらお客さんも「ブレイクしろ！」って言うじゃないですか。それを「うるせぇな、これはちょっと動いてんだよ」っていうレフェリングをしてたら「何やってんの？」っていう話だと思うんです。

斉藤 野口さんはMMAがエンターテインメントとして確立する以前からレフェリーとしてこのジャンルに関わってますけど、やっぱり黎明期にはお客さんにわかりやすくするため、「介入」という言い方はあれですけど、レフェリーのほうも努力されていたと思うんですね。いまはだいぶ違って「そこまで気を使わなくてもいいんじゃないか」っていうのはあります？ たとえば、こないだの桜庭（和志）選手とハレック・グレイシーの試合のとき、ハレックのパンツが脱げそうになってレフェリーがドント・ムーブをしたら観客がいっせいにブーイングを送ったんですね。

坂井 こないだのDREAMはケージだったから、ドント・ムーブがなかったんだよね。

斉藤 だから僕は「みんな理解してるんだな」って思って。これがまだ2000年ぐらいだったら、べつにブーイングも起きなかったと思うし、ごく一部のマニアが文句をつけていたくらいだと思うんです。だから「成熟はしてるのかな」って気はするし、それと同時に〝レフェリングがエンターテイメントとして成立してるものを壊しかけてる〟っていうような意識がお客さんにある気がします。

野口 そういうのはあると思いますよ。初期PRIDEって、まずお客さんに総合格闘技というものを紹介しながら観ていただいてたわけじゃないですか？ それがいまはどんどんマニアックなものになって、一見さんが観て楽しむっていうものではなくなっている気がするんです。僕はそういったなかでレフェリングっていうものも徐々に徐々に変わってくるものだと思いますね。

斉藤 観客の成熟度やMMAの人気によって変えてくべきものである、と。野口さんはレフェリーは主催者側から完全に切り離したほうがいいと思いますか？

野口 でも正直、完全に別機関にするのは難しいと思うんです。僕はPRIDE時代、競技陣と主催者の関係は心地いいものだったし、べつに悪くもなかった。それに完全に別機関にしてしまうと「どう

現在フリーの立場でバチバチやKrushのレフェリングに携わっている野口氏。かつてはPRIDEやハッスルなどのメインレフェリーとして活躍していた。大会場から小規模会場のレフェリングまでを知りつくすマスターだ！

レフェリングとは何か?

なんだろう?」とは思います。結局レフェリーと主催者がケンカするとか、「我々の意思はこうだ」「そんなのだったらもうやらないよ」みたいになるのも、また面倒くさいなと思うんです。

坂井　PRIDEがアメリカでやったとき、野口さんはレフェリングは?

野口　してますよ。あのときは(ネバダ州の)ライセンスをもらって。

坂井　何か違いはありました?

野口　いや、普通にいつもどおりのレフェリングをしただけです。ライセンスは申請して、サインをしてもらうっていう感じです。その前に日本から職務経歴書みたいな資料は送ってます。

斉藤　たしかラスベガス大会の第1試合って島田さんなんですよね。試合はKO決着だったんだけど、PRIDEのレフェリングをほかのレフェリーに示すためなのか、凄くオーバーアクションで止めたという話があったと思うんですけど。

野口　そうです。とにかくお客さんにわかりやすくしなさい、と。アメリカのレフェリーって止めてるのか止めてないのかよくわからないんですよ。

斉藤　そういう意味じゃ島田さんはわかりやすいですよね(笑)。ちなみにそのときの報酬っていうのはどこから出たんですか?

野口　アメリカの小切手でもらいましたよ。

斉藤　じゃあそれはアスレチック・コミッションから出たんですか?

日本に関して言えば、レフェリーだけで生活するのは厳しいと思います

野口　ええ。

斉藤　でも、航空費はPRIDEが持つんですよね?

野口　よくわからないです(笑)。基本的に僕は島田さんの会社の社員で、1試合いくらじゃなく給料体制だったので、だから「大会につきいくらもらってる」っていうのはないんですよね。

斉藤　なるほど。でもへんな話ですけど、日本のレフェリーっていろんな団体を掛け持ちしてますよね。それではたしてレフェリーだけで生活できるのか、アメリカのレフェリーは逆に生活できるのかっていう。

野口　日本に関して言えば、ぶっちゃけレフェリーだけの報酬で生活は厳しいと思いますよ。

斉藤　そもそも掛け持ちしなきゃならないっていうのも、団体によってルールが違うわけじゃないですか。そのぶんブレは出てきますよね。

野口　出てくるとは思います。正直けっこうわからなくなりますから。

斉藤　そうすると報酬が上がることによって一つの競技に専念できたり、ある程度余裕を持って取り組めるっていうところはあるわけですよね。

野口　そこはあると思います。でも、いまは競技の数に対してレフェリーの数が圧倒的に少ないじゃないですか。だから掛け持ちせざるをえないというのはあると思います。

斉藤　でもレフェリーだけじゃ生活ができないから、ほかに何かしら格闘技関連の仕事を抱えながら、もしくは選手が現役引退して、一つの道としてレフェリーに進むみたいなことですよね。

野口　僕はバトラーツに最初トレーナーで入ったんですけど、そのときバトラーツには島田さんしかレフェリーがいなくて。島田さんはPRIDEとK—1を掛け持ちしてたんで「ほかにいないから、やらないか?」って言われてやり始めたんですね。

斉藤　いまのファンはプロレスと格闘技はまったく別物だという意識が凄く強いんですけど、プロレスの試合を裁いてる人間がすぐに格闘技の試合を裁けるのか?　って疑問に思っちゃうんですよ。

野口　僕はべつになんともなかったですけど。PRIDEを手伝うようになったのが、(アレクサンダー)大塚さんとマルコ・ファスがやった(『PRIDE・4』)くらいから手伝い始めて、そのあとぐらいでいわゆるオリベイラ事件があったじゃないですか。

坂井　『PRIDE・9』の入場時の火薬演出で全身に大火傷を負ってしまって。

野口　あの試合、じつは僕がレフェリーだったんですよ。それを言い渡されたのは大会前日、名古屋に入るじゃないですか。そのときの新幹線の中で島田さんに「おまえ、ちょっと1試合ぐらいやろうか」って。

斉藤　ダハハハ!　皆さん、これは2000年ぐらいの話ですからね(笑)。なるほど。なんか新弟子が先輩から「明日、パンツだけ用意しとけよ」みたいな話ですね。

野口　ほんとそうですよ(苦笑)。メチャクチャ緊張しましたもん、異常なくらい。しかも(そのトラブルで)リング上でずっと待ってて、最終的には試合がなくなって。

斉藤　これは勝手な見立てで怒られるかもしれないですけど、いきなり格闘技の試合を裁くよりプロレスの試合を経験したほうが舞台度胸をつける意味ではもしかしてうまくなるのかなって思ったんですけど。プロレスを経験していると、立ち回りがうまくなりますよね。

野口　絶対にプロレスは通過したほうがいいと思いますよ。プロレスって自分のイマジネーションを考えてやるじゃないですか　立ち位置とかジャマしちゃいけないとか。プロレスという特殊なものを通過したほうがいいと思います。そうすれば、プロレスのことをバカにするようなことをも絶対になくなると思いますよ。やっぱりプロレスも凄いなぁってなると思う。

坂井　気になるのは、リング上のレフェリーが周りの人たちの判断を仰ぐっていう状況がたまにありますよね?

野口　それは僕らの死角になってる部分を「サブレフェリーたち見てね」っていうアイコンタクトなんです。「そっちどうですか?」「いや極まってない極まってない」とか。だからレフェリーは極力その試合だけに集中。で、そのほかに関してはサブのレフェリーとかサブのジャッジであったりがロープから出た足を中に入れてとか、そういうのはやってもらっています。

斉藤　では、ドント・ムーブとかブレイクのタイミングを仰ぐということはないんですか?

野口　仰ぐっていうより、サブの人が「いや、もうブレイクしましょうよ」みたいのは顔でわかりますけど、最終的にはこちらの判断なので。で、たとえば試合が膠着してるじゃないですか?　そこでサブの人たちとアイコンタクトして「たぶんこのままいってもずっとこれなんで立たせましょうか?」っていうのはアイコンタクトでやりますけどね。

斉藤　ただ主権は……。

野口　あくまでもレフェリーですね。

ないですけど、動いてなかったら「アクシヨン!」の言葉をかけるし、膠着してたら

野口氏がレフェリーを務めた三崎vs秋山戦の裁定が世間を騒がせたが、二人を取り巻く政治的状況が問題をややこしくてしまったとも言える（結局、三崎勝利ではなくノーコンテストに裁定変更）。

斉藤　ただ主権は……。

野口　あくまでもレフェリーですね。

斉藤　主権はあくまでもレフェリーっていう話で、島田さん、というかいわゆるエンターテインメントレフェリング、レフェリーが試合を動かしていくみたいなものってあると思うんです。それを前に島田さんに指摘したら否定されて。でも、島田さんのレフェリングの肝は興行論だっていうんです。観客論。でもそれっていわゆるエンターテインメントレフェリングじゃないですか。

坂井　島田さんは〝エンターテインメント〟っていう言葉に含まれるいろんな意味を否定したかったのかもしれないけどね。

斉藤　野口さんは〝エンターテイメントレフェリング〟って言われ方はカチンときたりします？

野口　カチンとくるというか、やっぱりレフェリーが観ておもしろくないものは、お客さんが観てもおもしろくないじゃないですか。

斉藤　じゃあ「アクション！」って言ってるのは本音だったりするんですね（苦笑）。

野口　もちろんしますよ。「おまえらギャラもらって試合してるんだからもっとお客さんたちのために試合をしなさいよ」っていうのもあるわけじゃないですか。

坂井　それは主催者の言葉みたいに聞こえてしまいますけど、リングの中でそれを言えるのはレフェリーだけですからね。

野口　もちろんそれは選手に直接は言わないですけど、動いてなかったら「アクション！」の言葉をかけるし、膠着してたらブレイクする。至極あたりまえのことだと思うんですよね。

斉藤　そこは主催者側の思惑を読んでるわけじゃなく、純粋にエンターテインメントとして成立してほしいという。

野口　たとえば主催者側に「この選手（の人気を）上げたいんだよね」とか言われて、ブレイクして立たせてもその選手が勝つかっていうのはわからないじゃないですか（笑）。しかも試合中にそんな余裕はとてもじゃないですけど、ありません。

斉藤　だからそこで問われるのは、結局ドント・ムーブにしろブレイクにしろ、レフェリーのセンスじゃないですか？　ただ、そこのセンスの部分で、最近著しく欠けてるんじゃないかなっていう。それで自分が言ってるのは、レフェリング問題っていうのは結局エンターテインメント性の問題である、と。なぜならそのセンスのないレフェリングによって、エンターテイメントが壊されているんじゃないかっていうことであったり、逆にいえば島田さんってレフェリングはうまいと思うんです。だけど上手すぎて、主催者側の意図なんじゃないかなっていうぐらいに思えてしまう。センスがないレフェリーはセンスがなさすぎるし、島田さんは逆にうますぎるし。そういうエンタメレフェリングっていうものに対して、ファンがどっちにもアレルギーを示しているのがいまの現状なんですね。

レフェリーが観ておもしろくないものは観客もおもしろくないと思うんです

野口　なるほど。

斉藤　だったら逆に何もしないで、自然なかたちにしたほうがエンターテインメントとしていまは正しいんじゃないかって。

野口　でもたぶん、あれが自然なんですよ。きっといまDREAMとかでレフェリングをされてる方はあれが普通、自然ですから。べつにエンターテインメントに寄ってるとか、そういうのはまったく意識してないと思います。だからよく言われるエンターテインメントとか、レフェリーが試合を動かしてるとかっていうのは、とくに意識してるわけでもないですし、そう思われてるんだったら僕はレフェリーの技量として「あぁ、そういうふうに思われてるんだ」っていうぐらいです。

斉藤　とくに意識してるわけじゃないんですね。

野口　ただ日本はずーっとリングの文化だったわけじゃないですか。それをいまやっぱりケージにして、ブレイク、ルールが問題ってなったら、やっぱりいろんなハレーションが起きるとは思うんです。それでレフェリーがいけないとか、主催者がこんな試合を組んだのがいけないとかっていうのは、お門違いなんじゃないかと思うんですけど。

斉藤　だからレフェリングに関していえば、レフェリングがダメとか言ってるんじゃなくて、そこは「不信感」につきちゃうんですよね。いままでの積み重ね。そこで野口さんにとって絶対に外せない2試合があるのんです。まず国立競技場『Dynamite!』の吉田秀彦vsホイス・グレイシー。野口さんのレフェリーストップが物議を醸しましたけれど。

野口　でも正直言って、試合後に誰かに殴られて、あんまり覚えてないんです（苦笑）。

坂井　えっ、そんなことになってたんですか（笑）。

野口　試合後に突き飛ばされて、それで下のほうから誰かの拳が飛んできたのは覚えてるんですけど。気がつ付いたらリングの下で失神してたんです。

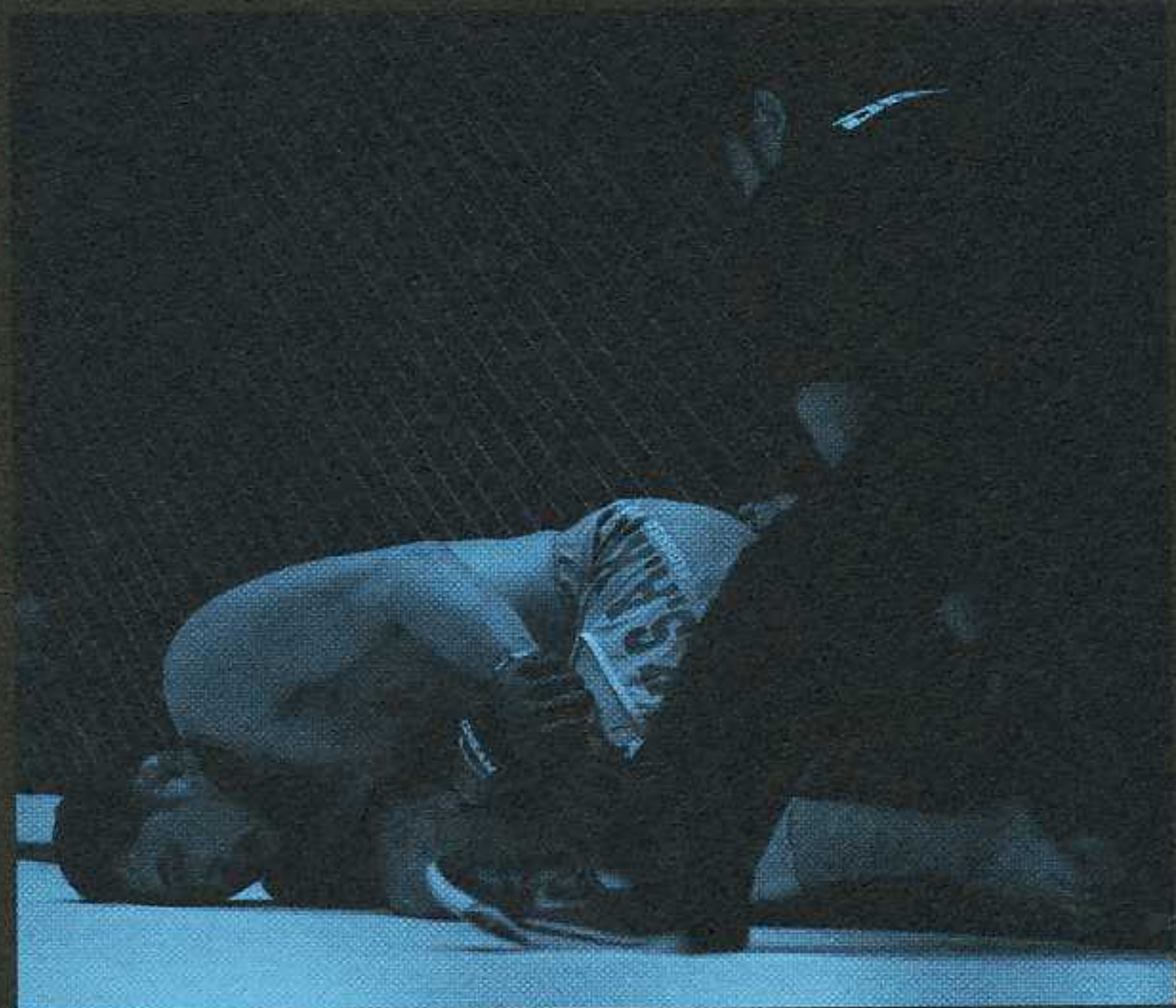
斉藤　それは危ないですね。意見書を出さないといけない（笑）。

野口　だからあまり覚えてないんですけど、あのとき僕は「ホイスが落ちた」と思ってストップしてるわけですよ。落ちた確信があったんです。

斉藤　あとから映像を振り返って、客観的に見て物議を醸すだろうなとは思いました？

野口　思いました。でも、最終的に自分が下した判断ですから。

斉藤　いまツイッターから「あれはそもそもレフェリーストップなしのルールだったのでは？」という質問が入りました。

野口　そうなんですよ。だから公式記録

『DREAM.14』で物議を醸した桜庭vsハレックのレフェリング問題。ケージはドント・ムーブがないルールだったが、ハレックのスパッツが脱げそうという理由でレフェリーが介入。千載一遇のチャンスを迎えていた桜庭は好機を逃すことに……。

は失神KOなんですね。で、船木vsヒクソンもレフェリーストップのないルールだから、あれも失神KOになるわけじゃないですか。

斉藤　なるほどなぁ。いわゆるレフェリーストップなしっていってもファッション的な部分があるわけですよね。試合を飾り立てる。

野口　だってレフェリーストップなしだったらレフェリーいらないじゃないですか（苦笑）。たとえば、ホントに失神して完全に落ちてても止めるレフェリーはやっぱりいるわけですよ。

斉藤　あの一戦を経験されて何か変わったことはあります？

野口　もう完全に吹っ切れました、いろんな意味で（笑）。これは余談なんですけど、その次のレフェリーが全日本キックだったんですよ。いわゆる物議を醸して世間的にも大騒ぎになってたんですけど、そのときのメインが小林聡vsサムゴーだったんです。で、僕は全日本キックでもそんなにキャリアがあるわけではなかったですけど、全日本キックの宮田（充）さんから電話がかかってきて「ぜひメインを裁いてほしい」と。まず「僕がやっていいのかな」って思うじゃないですか。そうやって騒がせた本人をメインで使うことで、宮田さんも何か言われる可能性があるし。それで宮田さんに「いいんですか、僕で？」「いいんです」って。そうしたらレフェリングしてても、なんて言うのか、言葉は悪いかもしれないですけど、もう迷いとかがまったくないんです。

斉藤　なるほど。童貞を捨てた感じですか（笑）。

野口　僕は格闘技の経験はアマチュアでしかなくて、周りの選手たちは頂点に立ってるような人たちじゃないですか。「なんでこんなヤツにレフェリングされるんだよ」みたいなムードが最初やってるときはあったわけですよ。でも、そういうコンプレックスみたいなものがなくなりました。だから宮田さんには異常なくらい感謝してるんですよ。

斉藤　で、もう一試合。『やれんのか！』の三崎和雄vs秋山成勲。

野口　あれはまったく問題ないですね。

斉藤　あの試合を整理すると、4点ポジションの顔面蹴りがないルールだったんですよね。で、フィニッシュが4点ポジションからの顔面蹴りだったんじゃないか、と。で、のちにノーコンテスト扱いになって。

野口　いわゆる4点ポジションっていうのは、僕のなかでは〝ロン・ウォーターマンポジション〟なんですよ。

坂井　ミルコvsロン・ウォーターマンにおけるフィッシュ状態ですね（笑）。

野口　だけど、あの場合は、秋山選手が倒れて立ち上がろうとしてきたときに三崎選手が蹴ってる。だから僕はグラウンドポジションではないという判断をしたんです。マットに手がついてる、ついてないっていうよりも。だから正直に言うと、なんでそんな騒ぎになったのかまったくわからなかったんですよ。

斉藤　仮に俺がレフェリーで「いや、いま

三崎vs秋山戦はなぜそんな騒ぎになったのかわからないんですよ

の反則だから」っていう裁定を下したら、
あの場はどうなってたんだろうね（苦笑）。

それはわからないですけどね。
斉藤　個性であったりを一切加味しない

上げます。「桜庭vsアローナのレフェリン
グについてはどう思われますか？　僕は早

手にかぎったことじゃないですけど、それ
よりもセコンドがタオルを投入しないこ

レフェリングとは何か？

の反則だから」っていう裁定を下したら、あの場はどうなってたんだろうね（苦笑）。

坂井　でも、それをちゃんとビシッと言ってくれれば、ある程度溜飲が下がったんじゃないの。和田京平ばりにさ。

斉藤　和田さんの天山広吉vs小島聡のIWGP&三冠統一戦のレフェリングは神でしょう。どう見ても60分ドローの展開で残り数分だったけど、天山が脱水症状で動けないから「小島のレフェリーストップ勝ち」を宣告したんだから。

坂井　毅然と（笑）。

斉藤　そう振る舞わないとエンターテインメントとして成立しない、お客が納得しないってことですよ。話はずれちゃいましたが、選手の個性によって基準が変わるっていうことはありますか？　たとえば青木真也はガードポジションからの仕掛けがいろいろあるから、普通の選手よりブレイクが気持ち長めになってるんじゃないかとか。あるいはスタンドファイター同士の試合で、グラウンドで膠着したら、この選手にはここから先の展開はないという判断のもとにブレイクは早いとか。

野口　それはありますよ。青木選手の場合はブレイクが長いっていうよりも、下で動くじゃないですか？　それでも上がガッチリ固めてたらブレイクしますけど、青木選手の場合は動くんでそこはやっぱりブレイクはとりづらいですし、ストライカー同士がグラウンドへいっても、これは動かんだろうっていうのがあれば、やっぱり早めにブレイクしますからね。

坂井　常に同じ定規を当てはめてやってるんじゃない、と。

野口　それをやってたらレフェリーは本当に機械でいいと思います。だからそれをエンターテインメントかと言われたら、それはわからないですけどね。

斉藤　個性であったりを一切加味しないっていうのは耳触りはいいけど、それはやめるほうが無難でしょうね（苦笑）。野口さんはいま現状のレフェリング体制で進むべきだと思いますか？

野口　べつに僕は全然いいと思いますけどね。変えていく必要性っていうのは、金網とかそういうのになったらまたわからないですけど、リングを使うイベントとかだったらべつにそんなにムリして変える必要があるのかな、はたして変えたところでどうなんだろうっていう。「何をどう変えるの？」みたいな。じゃあ「島田さんを外せば変わる？」っていう。そういうことじゃないと思うんですよね。

斉藤　そこは結局さっき自分が言いましたけど、「信用問題」じゃないですか。ちょっと信頼ができないっていうところがある。それはいまの環境を変えたところで、島田さんがやってるんだったら同じだっていう人もいるでしょうし、島田さんを外せば解決できる問題なのかっていうと……。

野口　そこもどうなのかなと思うんですけどね。だから僕は海外でも外国人のレフェリングの方を見ましたけど、やっぱり日本のレフェリーっていうのはしっかりしてますよ。

斉藤　そうなんですよ、これは誤解してる人がいるけど、海外のほうがけっこう適当なんですよね（笑）。だからといって日本はこのままでいいんだっていう気持ちはもちろんないんですけど。だけど日本はそれなりにちゃんとしてるよっていうのはありますよね。

野口　僕は日本のルールとかレフェリーというのは凄い整備されてると思います。

斉藤　では、ツイッターからの質問を読み上げます。「桜庭vsアローナのレフェリングについてはどう思われますか？　僕は早く止めてほしいと思って祈ってました」と。

野口　うーん、あれは僕のなかでもいろいろ考えたんです。正直言えば止めたかった、止めればよかったかなっていうのはあります。でも、凄い葛藤がありました。やっぱりお客さんからしたら「なんで止めないんだ？」っていうのもあるでしょうし。ただ桜庭さんが攻撃はもらってるけど失神はしない。でも攻撃は食らい続けてるっていう状況。だからあのとき思ったのは、ちょっとでも身体が崩れたら、ガクってなったらすぐ止めようと思ってたけど、なかなかやっぱり桜庭さんも……。正直あれは凄く迷いました。

斉藤　もう一つあるのはこれは桜庭選手にかぎったことじゃないですけど、それよりもセコンドがタオルを投入しないことを問題にすべきだみたいな話があって。結局レフェリーが早く止めたら止めたで選手側は「まだできた」って言うわけじゃないですか？　それをセコンド側も主張してるときがありますよね。あれってレフェリー側すると、おかしくないですか？

野口　おかしい話だと思います。選手を守る役目がセコンドですからね。

坂井　違う守り方になっちゃってる。

野口　だから髙阪さんとか田村さんは、自分のところの選手にタオルを投げますよね。自分のところの選手を守るのは大事ですけど、そういう守り方じゃなく、やっぱり選手の身体が一番大事じゃないですか。その選手を一番よく知ってるのはトレーナーであったりセコンドで、だから「レフェリーは止めてないけど危ないな」っていうのがわかるのがセコンドなわけですから。

斉藤　それでは最後に、野口レフェリーのレフェリングのキモを教えていただければと思います。

野口　どうですかね……自然にやるっていうことですね。ホント考えすぎず、考えすぎなさず。自然に、流れに逆らわず。流れるようにやるのがレフェリーとしていいと思います。カメラの位置だったりにしても自然に。

斉藤　最後にもう一つ。日本のレフェリング界は〝脱・島田〟をするべきでしょうか？（笑）。

野口　どうなんでしょうね、日本のレフェリング界は……僕はいま少なくとも〝脱・島田〟してますけど（笑）。

【10年6月9日／『kamipro』編集部からUSTREAM配信したものを再構成】

レフェリングというより、レフェリーの信頼問題だったりもする。問題を指摘されたあるレフェリーはブログ等でファンに対して挑発的なテキストをアップし、さらに信頼を大きく下げるかたちとなった。

お　いおい、ヒョードルに引退の噂があるって聞いたが本当かい？　引退後は政治家になるって噂なんだろ？　まったく冗談じゃないぜ。100歩譲っても引退はしてほしくないが、101歩譲って引退するなら、せめてTKのように解説ぐらいやってくれよお。もしくは本部長のように、ふんどし暴れ太鼓だな。60億分の1のふんどしはシビれるぜ！　アッハッハッハ！

JUNE号へのお便り紹介

青木真也のインタビュー記事がおもしろかったです。負けた青木の素直な気持ちが聞けてよかったです。
【京都府・杉本栄実さん・主婦・24歳】
D シンヤ・アオキは負けて、ユーたちは落ち込んでるそうじゃないか。アッハッハッハ！　そんな落ち込むことじゃないだろ？　オレなんて年中負けてるような人生だぜ。……え？　オマエとは次元が違うって？

ダナ・ホワイトのインタビューがおもしろかった。これだけ「ジャイアン節」を引き出し、載せられる『kamipro』スタッフには感心する。
【大阪府・若木翔平さん・高校生・17歳】
D いったいダナ・ジャイアンはいつから〝公式ランキング〟を作るようになったんだい？　これぞ独断と偏見じゃないのかい？　ん？　待てよ。ということは、オレもダナ様と親密になれば、ランクインの可能性があるってわけだな。クックックック。

西村修の記事がおもしろかった。プロレスにそれほど精通しているわけでもないですが、実直そうな人だという印象が残る人でした。政治への思いなどを感じられてよかったです。

【愛媛県・山口浩太さん・介護福祉士・25歳】
D おっと、政治特集をやったのはいいが、いまジャパニーズ・ポリティックスはたいへんなことになってるじゃないか。ミスター・ハトヤマ。非常に残念だが、ユーがハトのマネをしているときは、ジャパニーズじゃないオレも正直複雑な気持ちだったぜ。

ニック・ディアスのインタビューがおもしろかった。青木の敗戦をすべて分析していて、青木の置かれている状況をすべて見透かされているような感じでした。それにしても、ニックはいろんなものを悟っているような感じがして凄くかっこいいです。
【埼玉県・暴力柔術さん・家業仕分け・30歳】
D ニックはホントにかっこいいぜ。はっきり言ってオレの憧れだ。……え？　タツヤ・カワジリもニックをお手本にしているって？　どおりでヒゲのあたりに共通点を感じたわけだぜ。

HINATA選手のインタビュー記事がよかった。読んでて今後の活躍が楽しみになったから応援したくなった。
【福井県・大平一さん・無職・33歳】
D おいおい、ハジメがなぜ日菜太をアルファベットにしてきたのかまったくわからないぜ。ひょっとしてオレが読みやすいように気を使ってくれたのかい？　もしそうだったら、ユーは将来立派な人間になるはずだ！

北岡悟のインタビューがよかった。北岡さんっていつもよく考えてお話しますよね。こういう人にセコンドについてもらって青木選手は心強いと思います。
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・45歳】
D サトルはああ見えてもマジメだからな。それにしても、サトルはパンクラスでの復帰戦もちゃんと勝ったみたいじゃないか。まったくヒャッホーだぜ。またあの入場、やってくれよな！

政治をマジメに考えているのか皆目わからないキムケンのインタビューはなんなんでしょうか？　「猪木さんにできるなら俺でも」とか「選挙違反しながら活動していた」とか。政界は奥さんに任せて、夢の紅白出場を目指して精進してください。議員なんて、らしくもないぜ！
【福島県・カト→さん・プロ市民（笑）・39歳】
D このご時世、ヤワラちゃんも中畑清も出馬するって時代なんだぜ。政治ってのはまったくもってよくわからないぜ。しかし、キムケンにはどうせ政治家になるなら、子どもも手当なんてやってないで、オレ個人の手当も考えてほしいよな。クックックック。

国民新党
ww.kokumin.or.jp

JUNE号
おもしろかった記事
RANKING

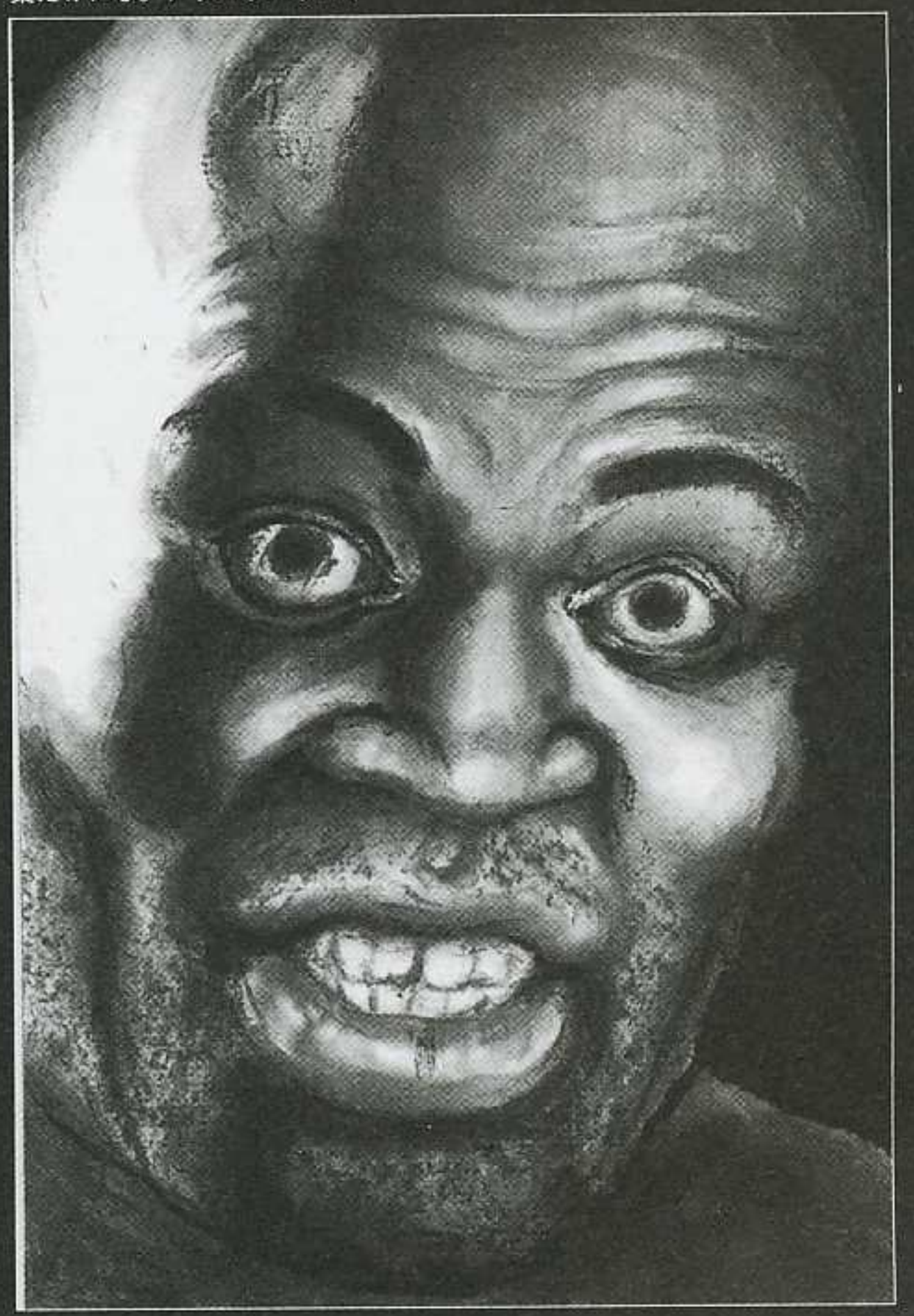
NO.1	青木真也
NO.2	ダナ・ホワイト
NO.3	西村修
NO.4	木村健悟
NO.5	川尻達也

おっと、ユーたちが心待ちにしていたシンヤ表紙のカミスペは、やっぱりシンヤがトップだったんだな。ダナの噛みつき具合もらしくてよかったぜ。しかし、特集ポリティックスはもっとたくさんできるんじゃないのかい？ 編集さんよお。たとえば、オレに出馬しないのか聞きに来たっていいんだぜ。クックックック。

おいおい、
ツイッターばかり
やってないで
イラストハガキを
描いてくれ！

ラッシャー木村は偉い!! 勃少魂! オレンジエビス2010!

熊本県・佐藤ZIV琢磨さん／ユーはターザンのイラストを大量に送ってきたボーイだな。しかし、ラッシャーってヤツのイラストはなかなかだ。きっとラッシャーも喜んでるだろうよ。またよろしくな！

東京都・剣洋人さん／おっと、これはオレが大好きなアンデウソンのアンちゃんじゃないか。編集のスズキィは漫☆画太郎みたいだと言ってたぜ。漫画特集だけにな。アッハッハッハ！

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!!

"読者ペイジ"
ジャクソン

147号へのお便り紹介

川尻選手のインタビューがおもしろかった。川尻選手の坂本竜馬コスプレがイカしてました。
【埼玉県・星喜幸さん・会社員・24歳】

D ユーはタツヤの龍馬姿がそんなに気に入ったのかい？　しかし、前号のこのページでも紹介したように、じつはもっとクレイジーな写真があったんだぜ。え？　見てない!?　……いまのでユーがこのペイジを読んでないってことが発覚したぜ。クッソー！（怒）。

アンデウソン・シウバの記事がおもしろかった。生い立ちから知れたのでおもしろかった。シュートボクセといろいろあったことも知らなかったのでおもしろかったです。
【千葉県・井ノ口学さん・会社員・27歳】

D アンデウソンってボーイはオレもいま大注目しているファイターの一人だ。強すぎてしょうがないから、ヘビー級のヤツらと対戦するって話もあるそうじゃないか。ダナは相当困ってるんだな。なんならオレがオクタゴンに入ってやってもいいんだぜ。クックックック。

ファイヤー原田インタビューがおもしろかった。あんなに味わいの深い選手だとは知らなかったので頑張ってほしいです。
【広島県・広川徹さん・会社員・40歳】

D ファイヤーっていうボーイは二言つぶやいただけであっという間にツイッターのフォロー数が300を超えたそうじゃないか。いまどきそんな人気者はなかなかいないぜ。ま、オレかファイヤーかって話だぜ！

JJサニー千葉のインタビューがおもしろかった。日本でのスターぶりをリアルタイムで知っている私らの世代には興味のある人です。
【和歌山県・新井雅文さん・会社員・49歳】

D このJJってオッサンはいったい何者なんだ……。オレは目からウロコが落ちちまったぜ。シンヤもタツヤもサトルも絶対に忍者の手ってヤツを使ってみるべきだ。

桜井"マッハ"速人インタビューがよかった。マッハさんとは同年代で絶対に勝ってもらいたい！　DREAMウェルター級GPで負けましたが、集中力が欠けてたように思いました。20代と30代とではあきらかに差があると思いますが、もう少し頑張ってください。楽しみにしています。
【埼玉県・稲葉耕三さん・会社員・35歳】

D おっと、ユーもきっと『DREAM・14』を観たと思うが、結果はユーが観たとおりだ……。しかし、ジャパニーズはこれで反撃のしがいが出てきたって感じじゃないのかい？　なんならオレが反撃してやってもいいけど、こう見えてもオレは少々高いから気をつけろよ。10万でどうだい？

中村カントクの「山口日昇プロレスデビュー顛末記」がインパクトがありました。オッキー沖田さんも男ですね。子どものためにも山口さんのビッグカムバックに期待しています。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・43歳】

D このヤマグチっていうミスターは『kamipro』の編集長だったらしいじゃないか。そういえば、オレはこのペイジで使った経費をまだもらってないぜ。ミスター・ヤマグチ、なんとかしてくれよな！

---

kamipro147号
おもしろかった記事
RANKING

- NO.1 川尻達也
- NO.2 榊原信行
- NO.3 中村祥之
- NO.4 JJサニー千葉
- NO.5 アンデウソン・シウバ

『kamipro』本誌のほうは、業界関係者が多いなかでJJってオッサンは大健闘じゃないか。やっぱりあの幻想あふれる語り口がみんな引っかかっているんだろ？　クックックック。刺激がほしいアンデウソンあたりは、このJJに指導を請うべきだとオレは思ってるぜ。そしたら一気にヘビー級王者間違いなしだぜ。

目撃情報が止まらない!

★先日のDREAMの会場で村上和成を見かけました。『kamipro』で対談が組まれていたこともあり、大塚の試合を見に来たのかなと思いました。会場の真っ正面に立っていたので、見かけた人も多いと思います。【東京都・岡田一さん】

★先日、プライベートで池袋をうろうろしていたら、うしろから何か声をかけられたので振り向いたら阿修羅チョロさんでした。元気そうでした。【東京都・スズキィさん】

★先日、スナック玉ちゃんに遊びに行ったら、笹原DREAMイベントプロデューサーを見かけました。かなり酔っぱらった様子で、周辺の警備員に向かって「あ、あそこにニック・ディアスがいる!」と叫んでいました。責任ある立場の人はいろいろたいへんなんですね。【東京都・堀江ガンツさん】

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって!　待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「ET」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』
からの投稿もできます。

プロレス&格闘技好きな
ボーイズ&ガールズにお知らせ!

ライター募集

ヒャッホー!　これはユーたちにはグッドニュースなんじゃないか?
ジャパニーズでロウホウって言うんだろ?　クックックック。
ま、そんな話は置いておいて、編集さんからこのページで
ライター募集の告知をやってくれないかと言われたんで、仕方がないから
けっこうなスペースを割いてやったぜ。
編集さんはいま記者会見に行って記事を書いてくれたり、
インタビューのおこしをやってくれる人を探しているみたいだな。
確かに、アイツらだけじゃあ、ろくな会見記事は書けないだろうからな。
アッハッハッハ!　とにかく、手伝ってくれるボーイズ&ガールズは
いますぐ履歴書ってやつを送ってくれよな!

募集要項

とにかく履歴書を以下のあて先に送ってくれ!

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1　ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「ライター募集」係まで

第55回

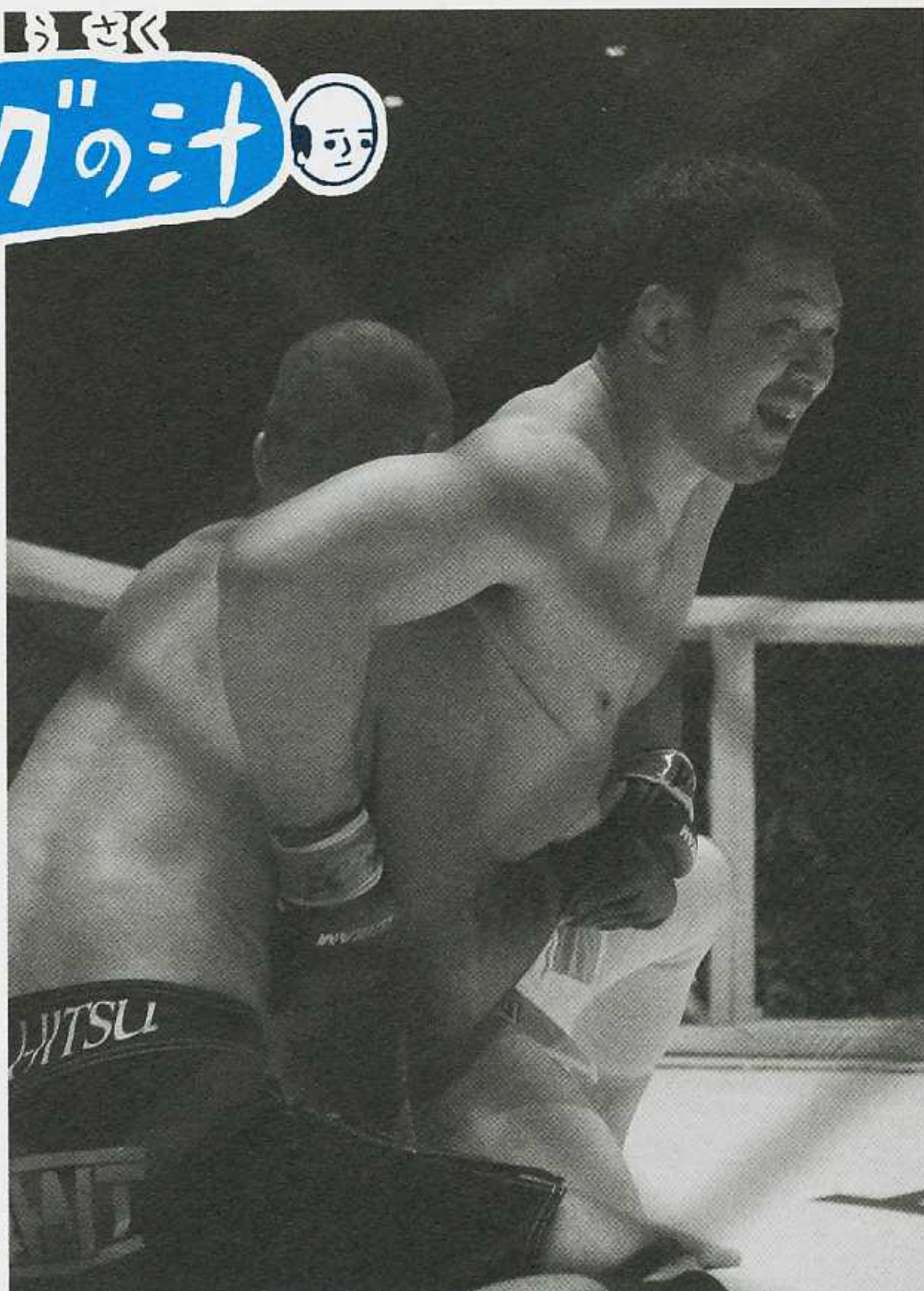
あと『UFC114』のボディにヒザで決着よかった

花くまゆうさく

豆リングの汁

いろいろ大会あったのでザックリと感想。

まずはDREAMのPPV。潰し合いのカード多くて興味深かった。勝ち残った宮田と高谷を見ると、いつも須藤元気の強さを思い出す。一日でこの二人からキッチリ一本勝ちした須藤元気は、やっぱ凄いよ。HDにたまっちゃうから観た試合はバンバン消してるけど、この須藤元気vs宮田&高谷はいまだに消せずHDに残っています。

桜庭vsハレック・グレイシーはどちらも一本取れそうだったからおもしろかった。高阪も田村も全盛期に柔道家から一本取られてるけど（グラップリング含む）、いまだ取られてない桜庭の強さは凄い。昔からここで言ってるけど、グラップリングで桜庭vs柔術家をたくさん観たい。メインでキッチリ一本取ったニック・ディアスも最高でした。

修斗の日沖vsリオン戦もよかったねえ。昔、高谷軍団がMAXにひどかった頃、高谷軍団の罵声浴びながら、高谷に負けた日沖と鈴木社長の悔しい姿がいまだ脳裏にあるので、ベルト巻いた日沖と社長の姿観るとなんかグッときました。

Hanakuma Yusaku
◎『ヒーローショー』と『ローラーガールズ・ダイアリー』が今年ベスト1かも、いまんとこ。

金ちゃんのどこまでやるの？

●第47回● アリスターと俺の"因縁"の巻

アリスター・オーフレイムがストライクフォースで凄い勝ち方したらしいね（5・15セントルイス大会でブレット・ロジャースにTKO勝ち）。ヒョードルが苦戦したヤツに圧勝したんでしょ？　凄いよね。まぁ、アリスターを新人時代から知ってる俺からすると、「あのボクちゃんが？」って感じなんだけどね（笑）。

アリスターはちょうどリングスのKOKぐらいから試合に出場し始めたんだと思うけど、あの頃はお兄ちゃんのヴァレンタイン・オーフレイムが凄く強くてさ、弟は強いお兄ちゃんについてきた〝ボクちゃん〟のイメージだったからね。

いまは、すっかり弟に抜かれたけど、あの頃のヴァレンタイン・オーフレイムは本当に強かったよ。ちょうど俺と山本喧一がキングダムからリングスに移籍してきたとき、ケマケンのリングス第1戦がオーフレイム兄でさ、ボッコボコにされてKOされたんだよね。

あの頃のヤマケンって、キングダムで実力をつけてきていたからさ、そのヤマケンが手も足も出ずにボコボコにやられたのを見て、「リングスってえらいところに来てしまったな」って思ったからね。

その直後に、たしか田村さんもあっさり足関節かなんかで一本負けしてるんだよ。そして、俺が初めてシュートでKO負けしたのもオーフレイムだからね。

たしか99年5月の有明コロシアムで、そのときはまだKOKに出る前のダン・ヘンダーソンとバーリ・トゥードでやるはずだったんだよ。ところが、その試合が流れて、オーフレイムとやることになったんだけど、ハイキックでKO負けしたんだよね。

当時の俺はチャンプア・ゲッソンリットとキックルールでやってるし、本場タイでムエタイの試合も3試合やってたから、打撃には自信があったんだけど。負けたから悔しくて、悔しくて。試合後、控室で初めて泣いたのを覚えてるよ。

その半年後くらいにリングス・オランダ大会があったんだけど、オーフレイムは対戦相手に俺を指名してきたんだよ。またKOで勝って地元でカッコいいところ見せようとしたんだろうね。

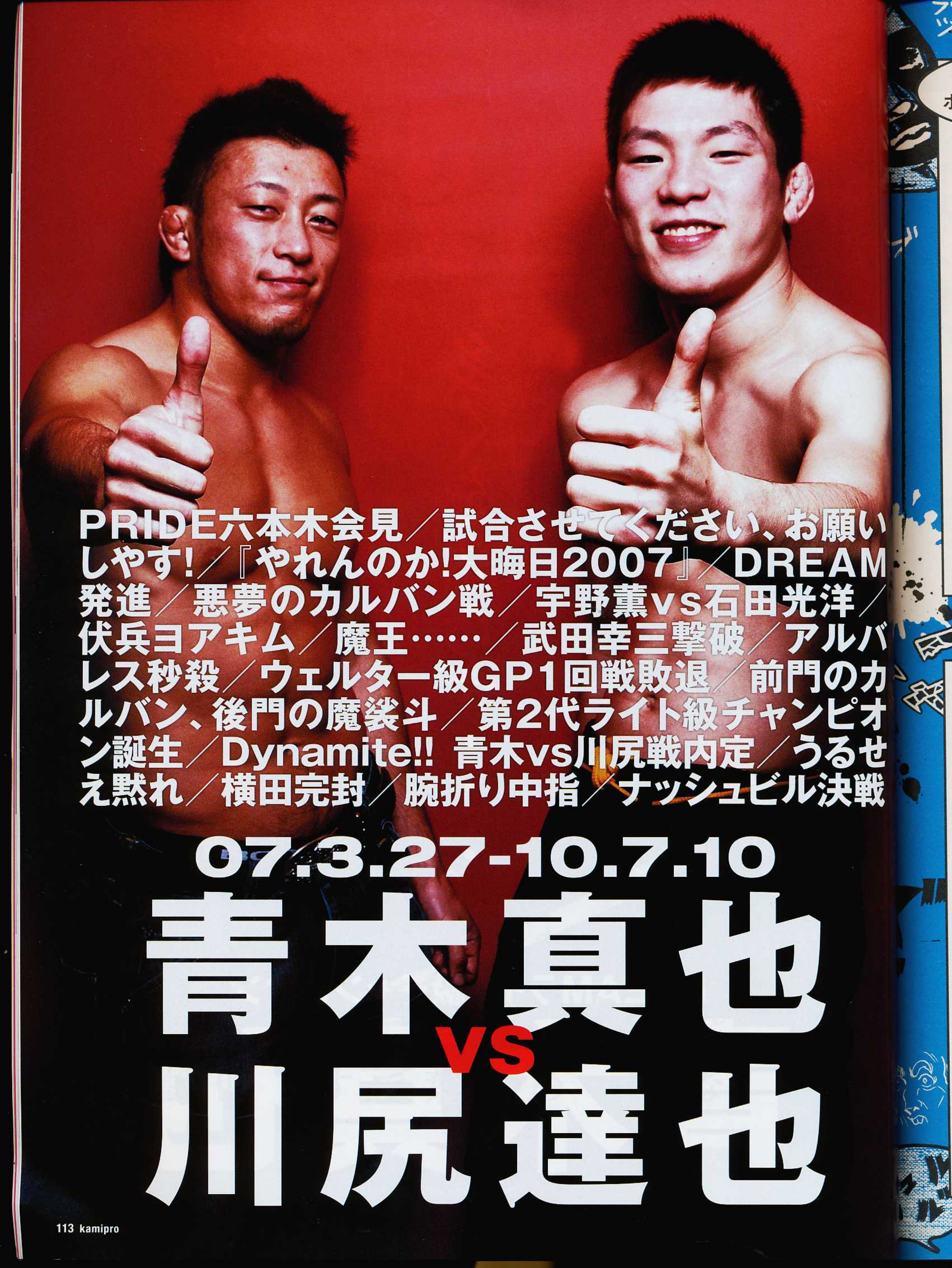
そのリマッチは運よく俺がパンチでKO勝ちして、敵地でリベンジできたんだけど、その試合後の打ち上げパーティかなんかで俺のところに来て「いつかおまえをKOしてやる」って言ってきたのが弟のアリスターだったんだよ。

その頃は、俺がメインクラスで向こうは前座だから「このボクちゃんは、何を言ってるのかな？」なんて余裕見せてたんだけど、そのあとメキメキ実力をつけてきて、何年かあと、ホントにPRIDEで対戦してKO負け食らっちゃったからね（苦笑）。

そのあとヘビー級に転向してからは、身体も大きくなって、とんでもなく強くなったもんね。DREAMではミルコも圧倒してさ、あの〝ボクちゃん〟が、いまや打倒ヒョードルに一番近いところにいるんだから、信じられないよね。

それにしても、ヒョードルvsアリスターって、よく考えたらリングス・ロシアvsリングス・オランダの対決なんだよね。「世界最強の男はリングスが決める」っていうのは、本当だったんだよ。

リングス・ジャパンだけが、なんだか元気なくなっちゃったから、俺たちもロシアやオランダに負けないように頑張らないとな〜。

でも、リングス・ジャパンもこんな化け物たちと、よく無差別級でやってたよね。あらためてリングスって凄い団体だったんだなって思うよ。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

PRIDE六本木会見／試合させてください、お願いしやす!／『やれんのか!大晦日2007』／DREAM発進／悪夢のカルバン戦／宇野薫vs石田光洋／伏兵ヨアキム／魔王……／武田幸三撃破／アルバレス秒殺／ウェルター級GP1回戦敗退／前門のカルバン、後門の魔裟斗／第2代ライト級チャンピオン誕生／Dynamite!! 青木vs川尻戦内定／うるせえ黙れ／横田完封／腕折り中指／ナッシュビル決戦

07.3.27-10.7.10

青木真也 vs 川尻達也

多くを語らず……。

DREAMライト級チャンピオン

青木真也

撮影／タイコウクニヨシ

青木真也、『DREAM・14』での挨拶同様、7・10『DREAM・15』川尻達也戦に向けて多くを語らず……シャアッ!!「何も語ることはないですね、ホント。とくに思い入れもないし、いつもどおりの一つの仕事。試合をするだけです」「あ、もう一つだけ。桜庭さんのところで練習させてもらってるんですが、凄く刺激になってます。『動けよっ！ 固めんなよっ！ 押さえ込むなよっ！ 勝つだけならアマチュアだよっ！ 極めれるからプロなんだろっ!!』。そんな言葉をもらったり、桜庭さんのエッセンスを取り入れたことで〝新しい青木真也〟が見せられるんじゃないかと思ってますね。以上です、シャアッ!!」

ということです。桜庭和志へのもとで練習する青木真也の映像はDREAMのオフィシャルホームページにて確認できます。押忍！

――川尻さん、前号の坂本龍馬のコスプレの評判はどうですか？

だからこそチャンス〟じゃないですけど。それにいまの状況だったら、僕が

だったら「もう上がり目もねえな」って感じなんですけど（笑）。

……（笑）。

――某団体（笑）。

川尻　なんか、青木くんと練習するとみんなが「メッチャ強いよ。スゲー

僕が勝たなきゃ日本のMMAはおもしろくならない

「青木に負けたらもう終わりだ」って気持ちです

運命の一戦に向けて背水の決意――。

川尻達也

ついに実現することになった青木真也との日本ライト級TOP対決。この一戦にたどり着くまでの紆余曲折を含め、クラッシャーの胸にはいま、いったい何が去来しているのか？　その並々ならぬ思いを語ってもらった。

聞き手／鈴木佑　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／今村陽子、乾晋也

――川尻さん、前号の坂本龍馬のコスプレの評判はどうですか？

川尻　あ、凄くいいですよ。ツイッターとかでもみんなカッコいいって言ってくれて。

――愛する奥さまの反応は？

川尻　へんなカツラを被った写メと一緒に「これが表紙になるらしいよ」ってメールしたら、「マジで言ってんの？」って驚いてました（笑）。

――ダハハハ！　カツラ着用のバージョンはちゃちでしたからね～。

川尻　まぁ、また機会があればやりたいです（笑）。で、今日はコスプレの話なんですか？（ニヤリ）

――何を言ってるんですか、もちろん待ちに待った青木さんとのタイトルマッチがテーマですよ！

川尻　……。

――どうしたんですか？

川尻　いや、待ちに待ったっていうか、もう待ちすぎて間延びしちゃった感があるんで意外と淡々としてるんですよね。

――そ、そうですか……。

川尻　ただ、僕が世界に行くためには絶対に越えなきゃいけない壁だっていうのはわかってるし、その相手と闘うタイミングが来たんだな、と。

――そのタイミングっていうのは川尻さんにとってはどうなんでしょう？

川尻　う～ん、ホントだったら大晦日にやるのがベストだったんですけどね。まぁでも、青木くんがメレンデスに負けて、いまの日本のMMAがこういう状態のなかでやるのも、ある意味スリリングというか、「おもしろいかな」って思いますよ。〝ピンチだからこそチャンス〟じゃないですけど。それにいまの状況だったら、僕が勝ったほうが展開的におもしろいでしょ？

――ギルバート・メレンデスに負けた青木さんに負けるわけにはいかない？

川尻　うん。周りのそういう気持ちも伝わってくるし、僕が勝たなきゃ日本のMMAはおもしろくならないかなって。あの、いままでには僕にも取りこぼしがありましたけど、そのときは常に上に誰かがいたんですよね。それは五味隆典であったり青木真也だったり。でも、いまは「俺が負けたらもう終わりだ」っていうくらい切羽詰まった気持ちなんですよ。

――それくらい自分を追い詰めている、と。

川尻　いまの心境的に一番近いのは、修斗でビトー〝シャオリン〟ヒベイロとタイトルマッチをやったときですね。まぁ、客観的に見ても青木くんがもう一回メレンデスとやるよりは、僕がやったほうが絶対に盛り上がると思いますし。というか、これでダメだったら「もう上がり目もねえな」って感じなんですけど（笑）。

――青木さんとともにDREAMを支えてきて、ようやくたどり着いたというような感覚ですか？

川尻　そうですね。DREAMの一つの終着点であると同時に、「これが終わりであって始まりである」みたいな感じですかね。やっぱり青木くんと二人で盛り上げてきたっていう気持ちは大きいですから。

――青木さんに対して戦友みたいな気持ちは？

川尻　それはありますよ。DREAMどうこうっていうよりも、2007年にあの某団体がなくなってから……（笑）。

昨年10月、青木がハンセンからライト級タイトルを奪取すると、川尻は「大晦日、俺の挑戦、受けてくれるよね？」と対戦アピール。しかし、このときは「検討します！」の一言ではぐらかされてしまう。その後、大晦日に実現の気運が高まるも『SRC』との対抗戦で流れ、さらに年が明けていよいよ実現かと思いきや、青木はメレンデス戦に乗り出し、しかも敗戦……。運命に翻弄され続けたクラッシャーの鬱憤が7月に爆発する!?

――某団体（笑）。

川尻　あの当時はホント気持ち的につらかったし、そういうなかで僕もDEEP道場に通って、実際に青木真也と肌を合わせて刺激を受けましたしね。

――青木さんはほかの選手と比べてどういう面が違うと思いますか？

川尻　なんだろう……自分の武器やスタイルをよく理解して、それで勝つための最短距離を知ってる、みたいな感じですかね。闘い方にムダがないというか。

――もう試合のシミュレーションは始めてます？

川尻　細かい対策とかは別にして、それは昔からお互いにそうだと思いますよ。まあ彼は特殊な選手なんで、あんまり考えすぎてもしょうがないんですけど。でも、確かにああいう特殊なタイプってやっかいですけど、一つ対処法がわかるとけっこう崩れやすいと思うんですよ。

――といいますと？

川尻　ミルコがそうでしたけど、ヒョードルに攻略されてからは意外ともろいところを見せるようになったじゃないですか？　そういう特殊な選手に強いのって、オーソドックスでしっかり基本ができてる選手だと思うんですよね。そういう意味では「オレ、いけちゃうかな」って。

――手応えを感じてるわけですね。

青木くんみたいな特殊なタイプは一つ対処法がわかると崩れやすい

川尻　なんか、青木くんと練習するとみんなが「メッチャ強いよ。スゲーよ、ヤバいよ」って言うんですけど、正直僕はそう思ったことがないんです。これはべつに試合が決まったから言ってるんじゃなくて、ずっと前からそう思ってて。確かに素晴らしい選手ですけど、試合を観ててもそこまで脅威を感じたことはないですね。

――ルールこそ違いましたけど、メレンデス戦は参考になります？

川尻　そうですね。負け試合っていうのはやっぱり一番の手本になりますから。まぁ、なんにしろ僕も楽しみだし、みんなにも楽しみにしててほしいですね（ニヤリ）。

――あと、5・29『DREAM・14』で対戦が発表されたときの残念なマイクアピールについても聞きたいんですけど……。

川尻　（さえぎるように）違うんです、あれは違うんです！　噛んでないです、噛んだわけじゃないんです。あれはしょうがない、ホントにしょうがない！

――まだ何も言ってないですよ（笑）。では、弁解をどうぞ！

川尻　（ムキになって）いや、だからスピーカーの反響が大きすぎて、自分のしゃべってる声がスピーカーからしか聞こえなくなったんですよ。で、しゃべってるのとスピーカーから聞こえる声にタイムラグがあるか

ら、何を言ってんだか途中でわけわかんなくなっちゃったんです！

——今日一番の力説ですね（笑）。

川尻 いや、ホントに悔しいんですよ。ビシッとキメてやろうと思ったのに失笑が起こって……。「ダメだこりゃ、もういいや」と思ってあきらめましたよ。ホントに今年一番の後悔ですね、アレは。

——対する青木さんは「シャー！」のひと言でしたね。

川尻 なんて言ってたのかわからなかったんですけど、なんだったんですか？ 勝俣州和のマネ？（笑）。

——でも作戦的には合ってましたよ、長々としゃべったら川尻さんみたいになってたかもしれない（笑）。

川尻 そうですね。たぶん青木くんもああなってましたよ。あ〜あ、せっかく事前にしゃべること考えてたのに……（ブツブツ）。

——ちなみにメレンデス戦が終わってから青木さんと会話はしましたか？

川尻 話しましたよ、富士急ハイランドでやったDREAMのファンイベントのときに。まぁ、試合に関する会話はないですけど、日常会話のレベルで佐伯（繁DEEP代表）さんとかを交えてしゃべったり。

——なんでも富士急行きのバスでは、菊野克紀さんも合わせてライト級トップ3が同じ空間にいたらしいですね。どんな雰囲気だったんですか？

川尻 う〜ん……僕は菊野選手とはしゃべったことないんで、そのへんは気まずいって感じでしたね。というか、僕はもともと人見知りであまり他人と話せないんですよ。

——……誰がですか？

川尻 僕が。

——え、誰がですか？

川尻 だから僕が！ なので、バスの中は微妙な距離感はありましたよね。佐伯さんが「おまえ、そっち行け」って感じでみんなの座席を決めたんですけど。

——川尻さんは菊野さんに対しては厳しいスタンスですよね。

川尻 というか、前も言ったことありますけど僕のことナメてるじゃないですか？ 「青木は強いけど川尻は……」みたいな。まぁ、ファイターなんだからべつに仲良くする必要もないし、いつか闘うだろうしね。

——菊野さんは「僕は伸びしろがまだまだあるから潰すならいまのうちですよ」って言ってましたけど。

川尻 まぁ「頑張って強くなってよ」って感じですよ、まだまだ彼には弱点がたくさんあるし。だからホントね、いまのMMAはオール5じゃないとダメなんですよ。髙阪さんのTKチャートで言ったら、打撃、寝技、組技、スタミナとかすべてがオール5の選手じゃないと世界では通用しないというか。

——なるほど。

川尻 だから、青木くんに関して言えば寝技は6とか7とかあるけどほかに低い部分があって、それは菊野選手も一緒だと思うんですよね。いわゆる特殊なタイプっていうか。でも、いま世界のトップで生き残ってる選手は、メレンデスやBJペンみたいにすべての面において基本ができる選手ですから。「打撃が秀でてる」「寝技が得意」っていう選手が幅を利かせてるのは日本くらいだなって思いますよ。でも、それじゃあいまのMMAの流れに対して遅い（キッパリ）。

——グラップラーやストライカーではなく、オールラウンダーであるべきだ、と。いまそのオール5を目指す過程のなかで、川尻さんにとってクラウドの秋山道場への出稽古は大きなものですか？

川尻 メチャクチャ大きいですよ。世界で闘ってる秋山（成勲）さんとか岡見（勇信）くんと練習すると、盗める技術がいっぱいあるから凄く刺激されるし。僕と同じ階級の人もいっぱい来てるんで、スパーでも負けたくないと思うし。

——かつて因縁のあった宇野薫さんとも練習してるそうですね。

川尻 まぁ、挨拶程度で仲良く話をするとかはないですけど、一緒に練習してますよ。こっちは嫌いじゃないですけど、向こうは嫌いなんじゃないですかね？ 僕がずいぶん突っかかったから（笑）。

——原稿用紙10枚分くらい突っかかってましたよね（笑）。

川尻 まぁ、会場とかでちょくちょく会うんで挨拶はしてたんですけど、話し込んだことはないですね。僕もいろいろ言っちゃったから「嫌われてるかな〜」と思ってあんまり踏み込めないっていうか。

——ファッションの話とかすればいいんじゃないですか、「宇野さん、いい靴履いてますね」とか（笑）。

川尻 ハハハ！ だって僕は興味ないですもん。

——秋山道場で五味さんとは遭遇しました？

川尻 いや、ないですよ。たぶん、五味くんが秋山道場に来たのはUFC参戦前の公開練習のときだけだと思いますよ。でも、会っても普通に練習するんじゃないかな。まぁ、こっちが挨拶しても向こうはシカトしそうですけど（笑）。

——以前、修斗でデビューしてから150回はシカトされたって言ってましたよね（笑）。

川尻 去年、五味くんと石田（光洋）くんが一緒に出場した修斗の大会があったじゃないですか？ あのときに五味くんとバックステージですれ違ったら、石田くんには「石田くん頑

いまのMMAはオール5の選手じゃないと世界には通用しない

川尻達也

5.29『DREAM.14』で川尻は「DREAMで青木真也と闘えることを誇りに思う。でも感傷に浸るのはいまで終わり。デビューして10年、そのすべてを出して青木を叩き潰したい」とアピール（噛んだところ含めて要約）。

川尻にとってチーム黒船時代からともに汗を流し、現在は秋山道場でも切磋琢磨している戦友、高谷裕之は難敵ハンセンを豪快に右ストレートでKO葬！ 川尻にとってはおおいに刺激になったようだ。

張ろうね、アハハハ！」とか言って握手したのに、僕とは握手してくれな

——またその解説が今回も評判だったらしいですね。TBSの方も「うま

んな「天才」って言ってますから。僕は2003年頃からの付き合いなん

ですからね。高谷さんの試合を観ると「オレも負けてらんない」ってよ

——ドキドキしない？

川尻 もちろん強さもそうですけど、

今回は深夜枠？　大丈夫、勝って9月のゴールデンに出るから（笑）

張ろうね、アハハハ！」とか言って握手したのに、僕とは握手してくれなかったですから。「なんだよ、その笑い方？」って思いましたもん（笑）。

――ダハハハ！　それだけ意識してるってことじゃないですか？

川尻　単純に嫌いなんじゃないですか？　まぁ、ファイターなんて嫌われてナンボですよ。とくに同じ階級の選手には。

――川尻さんはウチのインタビューで五味さんには辛らつなことを言ってますからね～。

川尻　そうか、そういう発言を引き出した『kamipro』が悪いんだ！　僕は悪くない。あとは煽りVで佐藤大輔さんに言わされたりもしたし……。まぁ、べつにどうでもいいんですけどね（笑）。

――さて、あの日の試合も振り返りたいんですが、マッハさんvsニック・ディアス戦をご覧になった率直な感想は？

川尻　いや、もう悔しかったですよ。最初、ニック・ディアスの打撃にマッハさんが苦戦するかなって予想してたんですけど、いきなりいいパンチを当ててたから「さすがだな」って思ったんですよ。あのタックルからのテイクダウンも完璧だったし、まさにMMAの闘い方だなって。ただ、最後はニックがうまかったですね。「これが世界の強さなんだな」って解説しながら思いましたよ。

――またその解説が今回も評判だったらしいですね。TBSの方も「うまい」って言ってたそうで。

川尻　ホントですか？　じゃあ、またやらせてほしいです！　でも地上波だから緊張しましたよ。隣に谷川（貞治EP）さんはいるし、佐々木希さんはいるし。

――なんで、のぞみんといると緊張するんですか？

川尻　だから僕は人見知りするからです！

――ふ～ん。では話を戻しまして、ほかの試合はどうでした？

川尻　フェザー級は凄くおもしろかったですね。とくに大沢（ケンジ）さんと前田（吉朗）選手の試合とか。

――かねてから川尻さんは憧れの存在として大沢さんの名前を挙げてますよね、髪型をマネしたとか（笑）。

川尻　髪型もそうですけど、大沢さんと一緒に練習してるとその動きとかにヒントを得ることが多いんですよ。凄く格闘技のことをよく考えてる人だし、周りはみんな「天才」って言ってますから。僕は2003年頃からの付き合いなんですけど、当時からかなり寝技を勉強させてもらいましたね。

――長い付き合いの選手が同じ舞台に上がって感慨深かったですか？

川尻　そうですね。大沢さん、入場してきたときに凄いガチガチだったんですよ。そしたらたまたま解説席の僕と目があったんで、「リラックス、リラックス」ってジェスチャーをしたら、OKみたいなポーズをしてくれて。いやあ、ホントに勝ってうれしかったですね。あと、凄かったのは高谷さん！

――見事にハンセンをKOしましたね。

川尻　あのハンセンが初のKO負けですからね。高谷さんの試合を観てると「オレも負けてらんない」ってよく思うんですよ。今回もメッチャやる気が出ましたから。全部練習してたことを出して、結果につなげたのは見事でしたね。いや、ホント凄かったな……（しみじみと）。

かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。09年7月には魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務める。昨年大晦日のSRCとの対抗戦では横田一則に完勝。茨城といなばのライトツナをこよなく愛する32歳。171cm、69.9kg

――次は川尻さんの番ですね。青木戦まであと1カ月ちょっとですけど、その後のビジョンを考えたりしてますか？

川尻　いやもう何も考えてないですよ。青木真也をKOすれば自ずと世界は見えてくるし。今回は勝ち方もそうですけど、倒し方にもこだわりたい。

――このDREAMの切り札的カードが、深夜枠での放送なのはちょっと残念な気がしますね。

川尻　最初は僕も「ゴールデンタイムだから7月でお願い」ってオファーされて、あとから深夜って聞いてビックリしたんですけど（笑）。これはっかりはいろんな大人の事情があるからしょうがないですよね。まぁ、7月に勝って9月のゴールデンに出るんで問題ないです！　それにアメリカで試合してもいいしね。

――そういえば1年前の7月は魔裟斗戦でしたね。

川尻　ああ、そうですね。

――そこから濃密な1年間だったと思うんですけど、今年に入ってからはまだ一試合もしてないという（笑）。

川尻　そうなんですよ、ホント勘弁してほしいですよ。商売あがったりですから。それに試合をしないとおもしろくないんですよ、人生が。ドキドキしないんで。

――ドキドキしない？

川尻　もちろん強さもそうですけど、やっぱり僕は格闘技に楽しさを求めてるんですよね。ぶっちゃけ、試合が近くなると毎回「なんで俺は格闘技をやってるんだろう？」って思うんですよ。ホントは他人と闘うことなんて好きじゃないし、「もう帰りたい、もう格闘技はこれで辞めよう」って。でも、試合に勝つと「ああ、やっぱりやってよかった。また頑張ろう」って思うんです。それに時間がすぎるとまた闘いたくなるし……もう麻薬と一緒じゃないですか？　僕は格闘技依存症なんです（笑）。

――ファイターにしかわからない感覚なんでしょうね。

川尻　たぶんファイターはみんなそうだと思うんですけど、KOで勝ったときの喜びは何事にも代えがたいもんなんですよ。たとえるならなんだろう、宝くじが当たったときと同じくらいの喜び？　当たったことないですけど（笑）。

――なんですか、それ（笑）。

川尻　いやもう、あの解放感とかハンパじゃないですね。うん、言葉で表現できないくらいたまんないんです。勝ったあとにリング上でたたずむほんの5分を味わうために、何カ月も苦しい練習に耐えてるって感じですね。

――青木真也という最高の相手に勝てば、それこそ最高のカタルシスを味わえそうですね。

川尻　そうですね。今回、KOで勝ったらメッチャ気持ちいいと思う。いや、やってやりますよ！

【6月2日／都内・某所にて収録】

暴力柔術、日本上陸！
桜井“マッハ”速人に完勝!!

NICK DIAZ
ニック・ディアス

「DREAMのベルトは根こそぎ俺がいただく。ザロムスキーもミノワマンも覚悟しておけ」

噂の“暴力柔術”がついに日本上陸！　これまで本誌のインタビューで、その不良のイメージとは裏腹な、知的なインタビューで人気急上昇中のニック・ディアスが、5.29『DREAM.14』に出場。日本ウェルター級のエース格であるマッハに1ラウンドで完勝してみせた。はたしのこの男の目にDREAMはどう映ったのか？　今回もニック兄貴節が炸裂する！

聞き手&撮影／石井文彦　試合撮影／今村陽子　構成／堀江ガンツ

――『kamipro』では、これまで二回インタビューさせてもらいましたが、不良のイメージとは裏腹な、知的なしゃべりが日本でも非常に好評なんですよ。

ニック　本当かい？　俺は日本で嫌われ者だとばかり思ってたんだけどな。

――いや、嫌われ者どころか人気急上昇中ですよ。ですから今回もサンフランシスコまでうかがったわけですから。

ニック　実感は湧かないけど、俺のインタビューが好評だなんてうれしいね。俺は本音しか語らない。今日もなんでも聞いてくれ。

――よろしくお願いします。まずは5・29『DREAM.14』での桜井〝マッハ〟速人戦を振り返ってもらいたいのですが、今回はどういった作戦でしたか？

ニック　1ラウンドからプレッシャーをかけて、早く試合を終わらせることを考えていたんだ。だからといって、あせったりはせずにコントロールできるチャンスを辛抱強く待ってね。スタンドでもグラウンドでも自分の技術は最高のものだって自信があるから、今回の試合に関しては作戦というより、いかにベストのコンディションで試合に臨めるかがカギだったんだ。

――試合の序盤はマッハ選手に押されていたようにも見えましたが。

ニック　俺自身は押されていたとは思ってないよ。サクライのゲームプランはパンチを出してテイクダウンを狙い、パウンドで試合を終わらせようとしていたんだろう。実際にそういう動きをしていただろう？

――打撃で先手を取って、タックルでテイクダウンに成功し、そこまではよかったんですけどね。

ニック　ただ、テイクダウンされたといっても、クロスガードは〝俺のポジション〟だ。まったくあわてることはなかったよ。

――最後のアームバーは、金網際の狭いスペースで見事に極めましたが、あのフィニッシュを技術的に説明してください。

ニック　簡単なことさ、あれはサクライのミスを突いたんだよ。俺は下からのクロスガードのポジションだったから、サクライは背筋を伸ばしてしっかりとパスター（上体を起こす動作）をしてコントロールするか、オープンにしないといけないのに、ガードの足のポジションを上げてアームをロックしたら、そのままの体勢でヒザ蹴りを脚やケツに入れてきたんだ。

――そうでしたね。

ニック　それでも腕をそのままの状態にして足を踏み出してきたんで、俺は下から脚を取りサクライをスイープしながらアームバーを極めたんだよ。サクライの大きなミスは、ちゃんとパスターでクロスガードから逃れようとしないで、ヒザ蹴りで対応しようとしたことだね。おそらく腕をロックされたんであせって対応したんだと思うんだ。いまリングでどのようにサクライがミスを犯したか見せてやるから写真を撮るといいよ（ここで柔術衣を着たパートナー相手にマッハに極めた腕十字の実演。122ページ参照）。

――なるほど。マッハ選手は対処を間違えたわけですね。今回、マッハ選手はアメリカでかなり追い込んだ練習をしてきたようですが、闘ってみてどんな印象を持ちましたか？

ニック　彼がハードなキャンプをやってたのは知っているよ。でも、俺のほうがいい練習環境でいいスパーリングパートナーがいることが、今回勝てた一つの要因じゃないかな。俺は試合を控えたWBA世

界スーパーミドル級王者であるアンドレ・ウォードのキャンプに入り、週に2～3日は彼とボクシングのスパーリングをしていたし、彼のコーチにもアドバイスをもらっていたからね。

——現役のボクシング世界王者とスパーリングしていましたか!

ニック そのほかにも、もちろんジェイク・シールズやシーザー・グレーシー・アカデミー所属のキックボクサーたちともスパーを重ねて試合に備えていたんだよ。柔術は毎日5分1ラウンドで5ラウンドはやっていたんだ。こんなに内容の濃いスパーや練習を積んでいるヤツなんてほかにはいないんじゃないかい? だから俺は自信があるんだよ。

——試合前「負けたら引退」を示唆していたマッハ選手ですが、試合後にそれを撤回したことについて何か感想はありますか?

ニック サクライはまだ学ぶべきことがたくさんあるから、絶対に引退なんかすべきじゃないよ。ただ、人間は一度頂点に持ち上げられると、自分にないものを認めないことが多くなるし、知らないことを「知らない」と言えなくなり、練習もおろそかになってしまうものなんだ。サクライも若くして頂点に立ったがゆえに、そういう部分があったんじゃないか? 彼はたしか俺に負けていま3連敗だと思うけど、そういった現実をちゃんと認めて、冷静に自分の足りない部分を判断して、もう一度頂点を狙ってほしいと思っているよ。

——DREAMの〝ホワイトケージ〟はどうでしたか?

ニック あのケージホワイトは好きじゃない。ちゃんと作られているように思えないんだ。

——そうですか? 網の素材が違うとは聞いていますけど。

ニック 網の素材はどうでもいいし、色は白でも黒でもまったく気にしないけど、マットの下がしっくりこないし硬い部分があった。このままでは、誰かがケガをしないか心配だよ。プロモーターはそういった構造をちゃんと理解して、ケージの下のメタル部分を早急に直して、ファイターの安全面にも考慮してほしいね。

——ホワイトケージに構造的な欠陥があるかどうかはともかく、試合前からあなたが「DREAMはケージではなく、リングでやるべきだ」と主張していた理由はなんですか?

ニック 俺はそもそもケージが好きじゃないんだよ。リングが好きなんだ。アメリカがケージを採用しているからって、なぜDREAMまでケージにする必要があるんだい? DREAMは〝正しいこと〟をやってるんだから、もっとリングにこだわるべきだ。

——なぜケージより、リングのほうが正しいと思うんですか?

厳しい表情で入場してきたマッハ。今回のニック・ディアス戦は「負ければ引退」を口にするほど期するものがあったが、ニックの最先端テクニックの前に敗れてしまった。復活に期待したい。

DIAZ

ニック リングを使うということは、マーシャルアーツの根源であるテクニックの攻防が見られるということなんだよ。日本のプロモーターやメディアは、「なぜリングが重要か」ということを、もっとみんなに伝えるべきだと思うんだ。リングの場合、選手はロープをつかんだり、腕をひっかけたりできないだろう? でも、ケージはフェンスに押し込むことができるから、スタンドのテクニックで相手を仕留めることより、まずケージに押し込むことを考える。とにかくリングとケージではまったく異なったゲームが要求されるように、カテゴリーの違ったスポーツとして見なくてはいけないんだ。

——ケージとリングでは、ちょっとしたルールの違いというより、別競技ですか。

ニック 競技の性質が違うと言ったほうがいいかな。MMAという〝スポーツ〟はケージでポイントを奪い合うゲームをすればいいけど、MMAをマーシャルアーツとしてとらえるなら、絶対にリングにするべきなんだ。DREAMには「マーシャルアーツ＝リング」という考え方を広めてくれることを期待しているよ。

——そうなると、普段リングで〝マーシャルアーツ〟をしている選手が、アメリカでケージという〝スポーツ〟で勝つのは、やはり難しいですか?

ニック ケージで試合をするのであれば、ケージ用の練習を積まないと絶対に無理だね。それにケージでは、〝ファイト〟というより〝ゲーム〟という意識を持たなくては絶対に勝てないんだよ。もちろんKOで決まることもあるけど、試合に勝つことにこだわれば、どうやってこのラウンドを取るかが重要となり、仮に押されていてもラウンドの最後にテイクダウン等でポイントを取れば、自分のラウンドとしてものにできてしまうだろう?

——アメリカではテイクダウンのポイントが高くつけられるらしいですからね。

ニック それに5分3ラウンドだったら、最初の2ラウンドを取ってしまえば、3ラウンドはKOされずに逃げきればいいってことになってしまう。これはまさに〝ゲーム〟そのもので、誰が見てもマーシャルアーツとは異なるものであることが理解できるだろう。

——ケージで行なわれるMMAは〝ゲーム〟ですか。

ニック 〝サバイバルゲーム〟そのものじゃないかい? たとえば、テイクダウンを取って5分3ラウンドの15分間、上になって押さえていれば勝者になれるんだから

ね。15分間そんな試合をやったあと、立ち上がって「俺は勝った!」なんて言ってる

て、そのことをアピールしてもらいたいんだよ。

マッハ戦のフィニッシュとなった腕十字を、かける方とかけられる方にわけて解説してくれたニック。"暴力柔術"の異名どおり、バイオレンスとテクニックが融合しているところが魅力だ。

［10.5.29 DREAM.14］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○ニック・ディアス vs 桜井"マッハ"速人×
（1R 3分54秒 腕ひしぎ十字固め）
ストライクフォース世界ウェルター級王者ニックと、DREAMウェルター級のエース、マッハが対戦。青木vsメレンデスに続くvsストライクフォース第2弾として注目されたこの一戦。序盤はマッハが積極的に打撃を出し、タックルでテイクダウンにも成功するが、ニックはマッハの隙をうまく突き腕十字を極め一本勝ち。DREAMvsストライクフォースは、またストライクフォースの勝利となった。

NICK

ね。15分間そんな試合をやったあと、立ち上がって「俺は勝った！」なんて言ってるヤツらはマ○○フ○○カーだぜ。下にいるファイターは「まだ"ファイト"はこれからだぜ」って思ってるのに、ただ押さえていれば勝ちなんて、おかしいだろ。そう思わないかい？

――試合として「勝ち」なんでしょうけど、相手を倒したことにはなりませんよね。

ニック　PRIDEやDREAMの場合は、そういうマ○○フ○○カーたちには、すぐイエローカードを出して「ファイトをしろ」とうながしていただろう？　"サバイバルゲーム"と違って、ラウンドの最後にイエローカードをもらって、そいつらは勝者になることはできないだろう？　ファイトしないで逃げ回っているようなヤツらにもイエローカードは出るし、もちろんブーイングだって出る。それが正常なんだよ。俺だって、そんなマヌケなゲームをすることは可能だけど、マーシャルアーティストとして、またプロのファイターとして、「本当にそれでいいのかい？」って、ずっと疑問に思っているんだ。

――アメリカのMMAそのものに疑問を持っている、と。

ニック　UFCでのディエゴ・サンチェス戦は、まさにディエゴがその"サバイバルゲーム"をやりやがったんだよ。ほかのショーだったら、間違いなくイエローカードが出ていた内容だぜ。とにかく、俺はMMAがマーシャルアーツであってほしいし、そのためにもDREAMはリングを使って、そのことをアピールしてもらいたいんだよ。

――なるほど。そのDREAMは、次回7・10『DREAM・15』で、今度はリングに戻して、青木真也vs川尻達也戦が実現します。この試合はどう思いますか？

ニック　次はリングなんだったら、俺もこっちのショーに出たかったよ（笑）。アオキvsカワジリについては、間違いなくみんなが喜ぶハイレベルな試合が観られるだろうね。カワジリにはパワフルなパンチがあるし、ストロングなレスラーでありファイターだ。対する青木は素晴らしいグラップリングを持っている、非常にタフなマッチアップだと思うよ。

――この試合はどんな展開を予想しますか？

ニック　アオキはメレンデス戦での教訓を活かしてくればサブミッションで極めることができそうだけど、カワジリだって、おそらくアオキvsメレンデス戦を参考にするだろうから、アオキにとっては難しい試合になるだろう。でも、これはアオキがサブミッションで勝たなくてはいけない試合だよ。

――青木選手がサブミッションで勝たなくてはいけない試合ですか。

ニック　この試合はアオキが、メレンデス戦で自分の弱点に気づきさらにハイレベルなファイターになったのか、それともメレンデス戦で弱点を暴かれて、これから先、誰と闘っても同じような作戦をとられて勝てないファイターになるのか、そこが

ケージは単なる"ゲーム"。リングでの闘いこそがマーシャルアーツだ！

試される試合になるわけだからね。
——なるほど。
ニック　カワジリはスタンドアップで攻めてくるだろうから、アオキはリーチを活かしてジャブ、左のストレート、右のフック、アッパーカット、とコンビネーションパンチを出しながら横にステップしてカワジリの距離の外を回りこみ、カワジリがテイクダウンを取りにきたらスプロールして頭にヒザを入れ、バックを取りにいくか、または上を取れたらパスガードにいかずに上から足をコントロールしながらパンチを落としていくという戦術も考えられるよね。カギはアオキがパンチを自分から出していき、距離をとりながら回り込むことになると思う。まあ、言うのは簡単だけど、実際に試合でやるとなるまでには時間がかかるんだ。
——頭でわかっていても実戦で使うとなると、違ってくるんでしょうね。
ニック　俺の場合は18歳からボクシングを本格的に始めたんだけど、それらを習得するまでに相当な数のパンチをもらったし、何年という時間もかかったんだ。いまでは参考となるビデオがたくさん出ているから、それらから吸収すれば習得する時間も短くできるはずだよ。カワジリのスタンドアップはアグレッシブでパワフルだけど、トップレベルと比べたらそれほどテクニカルじゃないからね。
——もし川尻選手が勝てば、打倒メレンデスのためにストライクフォースに乗り込んでくることも考えられますが、川尻選手はストライクフォースで通用すると思いますか？
ニック　カワジリはメレンデスと前にも試合しているだろう？　PRIDEでやった試合は、凄まじい殴り合いだった。あの二人がケージで再戦したら、前回同様にいい試合になることは間違いないだろうね。ただ、メレンデスはあの頃とは比べものにならないほど成長しているから、カワジリが強くなってるとはいってもメレンデスにはかなわないよ。
——あなた自身は川尻選手をどのように評価していますか？
ニック　10点満点で7〜8点というところだろうね。
——なかなか微妙な点数ですね（笑）。
ニック　いや、俺は高く評価しているつもりだよ。ライト級のトップクラスの一人だろうからね。
——シャードッグのランキングでは、ライト級3位がメレンデス、4位が青木、8位が川尻になっていますが、このランキングは妥当だと思いますか？

練習量には定評があるニック・ディアス。マッハ戦が終わってまだ間もないにもかかわらず、この日もインタビュー前にタップリとトレーニング。しかも数日前はトライアスロンにも参加したというのだから、そのアスリートぶりも驚きだ。

DIAZ

ニック　1位、2位は誰なんだい？
——フランキー・エドガーとBJペンです。
ニック　まあ、メレンデスは妥当だと思うけど、カワジリの8位っておかしいんじゃないのかい？
——もっと上ですか、下ですか？
ニック　もっと上でいいと思うよ。彼はここ数年、タフな相手と試合をしてきているし、最近の戦績ではアオキよりいい結果を残しているって記憶してるんだけど、違ったかい？
——勝るとも劣らない、という感じです。
ニック　だいたいシャードッグのランキングなんて、UFCで勝った選手だけで評価しているようなところがあるからな。そういえばヒロナカ（弘中邦佳）をKOした空手ガイはどうしたんだい？
——菊野克紀選手のことですか？
ニック　そう、キクノ。あいつは何位にランキングされているんだい？
——シャードッグのランキングでは、ベスト10圏外ですね。
ニック　おかしいな。俺はもしかしたらキクノこそ、ライト級の日本人でナンバーワンのファイターじゃないかと思っているんだ。
——へえ、そうなんですか！
ニック　いままでの日本人ファイターの問題は、素晴らしい技術をいくつも持っているのに、どこかに"穴"があるため、総合的にはトップになれないことが多かった。キクノもそのあたりが課題になるだろうけど、彼のスタンドアップは独特で素晴らしいと思う。世界ランキングではわからないけど、日本のファイターのなかだったら、すでにトップクラスにランクされてもおかしくないと思うよ。
——青木、川尻、菊野が日本のトップ3という感じですかね。
ニック　あともう一人いるだろう。ゴミ（五味隆典）に勝ったヤツの名前はなんだったっけ？　背の小さなヤツだよ。
——北岡悟選手ですか？
ニック　そうだ。アイツもトップクラスの一人だろう。でも、アイツはなぜか俺のことを嫌っているだろう？　だから俺もあいつのことは好きじゃないんだ（笑）。たしかアイツは俺がコージ・オオイシ（大石幸史）と試合をしたとき（05年6月4日『UFC53』、ニックの1ラウンドKO勝ち）コーナーでついてきていたんだ。
——そんなに北岡選手のことが嫌いなんですか？
ニック　冗談だよ（笑）。アイツのフットロックは素晴らしいよ。ゴミを極めたのもたしかフットロックだったろう？　アイツも日本のトップランカーと言っていいんじゃないか。
——その五味隆典選手が8月1日の『UFC・オン・バーサス』でジョー・スティーブンソンと対戦しますが、この試合はどう予想しますか？
ニック　ジョー・スティーブンソンのグラップリングテクニックは本当に素晴らしいものがあるよ。UFCのなかでも彼の右に出るヤツはいないんじゃないか？　ただし、彼ほど予想しづらいファイターもいないという事実もある。ベストのときと、そうじゃないときのジョーはまったくの別人になるからな。そういう意味で、この試合の一番のポイントはジョーのコンディションだよ。いずれにしても、ゴミが勝つとしたらスタンド勝負。グラウンドにいったら、ジ・エンドだろうね。
——では、あなた自身の話に戻します。同

アオキvsカワジリは、サブミッションで
アオキが勝たなきゃいけない試合だよ

じくシャードッグのウェルター級ランキングで、ストライクフォース王者であるあなたが、9位であることについて、どう思いますか？

ニック　冗談みたいなランキングだな。でも俺自身はランキングなんてまったく気にしていないんだ。いまGSP（ジョルジュ・サンピエール）を倒したってシャードッグのランキングは9位のままじゃないのかい？（笑）。

――ダナ・ホワイトがあなたに興味があるという発言をしていますが、あなた自身はUFCに興味はありますか？

ニック　もちろんダナは俺に興味を持つべきだし、持たなかったらおかしいよ。いま俺の上にランクされているのは、おそらくすべてUFCのファイターだろうからね。そいつら全員を倒したいし、その意味ではUFCに興味はあるよ。そして、なかでも一番対戦したい相手はGSPなんだ。

――GSPは強すぎて、なかなか興味深いマッチアップが組めないような状況ですけど、難攻不落のGSPをあなたならどう崩しますか？　また勝つ自信はありますか？

ニック　もちろん俺のほうがスタンドでもグラウンドでも、すべての面でGSPより上回っている。

――すべての面で上回ってますか！

ニック　ああ。唯一GSPが俺より優れている点があるとしたら、テイクダウンのスキルだろうね。それでも勝つのは俺さ。戦略的にはパンチを顔面に当てていき、相手が打ち返すところでカウンターを狙っていくような流れになると思う。テイクダウンを取られても、すぐに起き上がることを繰り返すだろうけど、GSPだってテイクダウンのカウンターでサブミッションを狙われることがわかっているだろうから、テイクダウンばかりを使ってこれないはずなんだ。そうなったら、俺はパンチでプレッシャーをかけ続け、GSPがファイトバックさせるようにし、カウンターを狙っていくようになる。とにかくスタンドでもグラウンドでも、常にアタックを仕掛けていくさ。

インタビューを行なった日は、ちょうど日本から来た郷野聡寛、日沖発、植松直哉もシーザー道場の練習に参加。ニックと郷野はスパーリングも一緒に行なっていた。

NICK

――当面の目標として、ジェイク・シールズがUFCに移籍したら、ストライクフォースのミドル級に転向を考えているというのは本当ですか？

ニック　ミドル級にかぎらずどの階級だって試合をしたいんだ。俺はゲームではなく、マーシャルアーツをやりたいから、階級にかかわらず強いヤツを倒したいんだよ。だから、一番闘いたい相手というのはヒョードルだ。

――ヒョードルですか！

ニック　彼はロシア人なのに民主主義的だって聞いたけど、本当かい？　どんな考えを持っていて、どんな強さなのか。いま一番興味のあるファイターだよ。まあ、ヒョードル以外にもストライクフォースにはいいファイターがたくさんいるからね。誰でも相手になってやるよ。二階級制覇なんかじゃなくて、ベストは全階級制覇なんだ。それはストライクフォースだけじゃなく、DREAMのベルトも含めてね。

――では、マリウス・ザロムスキーとDREAMウェルター級のベルトを懸けて、再戦するつもりはありますか？

ニック　ベルトはいくつあってもうれしいものだからね、喜んで再戦するよ。覚悟しておけよって。あともう一人、俺がDREAMで闘いたい相手がいるんだ。

――誰ですか？

ニック　もちろん、ミノワマンだよ。

――ミノワマン！

ニック　彼との試合は俺のなかでは〝ドリームファイト〟なんだ。彼の持つ無差別のベルトを懸けてほしいね。

――スーパーハルクのベルトまでほしがりますか（笑）。

ニック　あと、ミノワマンの着ているTシャツがほしいんだけど、ゲットしてくれないかい？

――……ミノワマン担当に聞いてみます。

ニック　ライト・オン！（笑）。

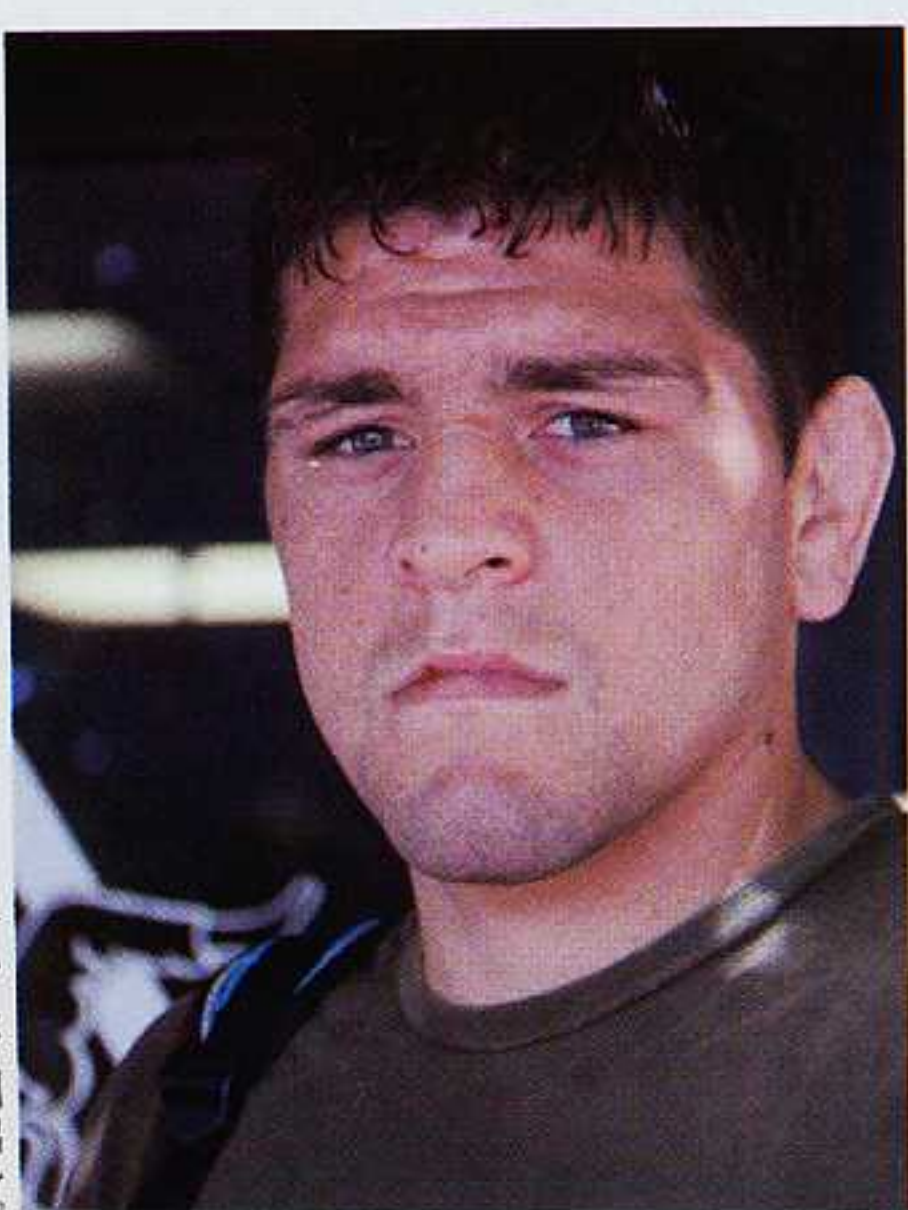
――ミノワマンやザロムスキーにかぎらず、今年中にまたあなたの試合が日本で観られる可能性はどのくらいありますか？

ニック　最初に言ったとおり、日本のファンは俺を嫌っているんじゃないのかい？

――そんなことまったく、逆にファンが増えてますよ。

ニック　オーケー、ユー・アー・ライト（笑）。それなら、今年中に必ず日本に戻ってくることを約束するよ。先月も日本で俺のテクニックを見せることができて光栄だったからね。ホントに俺は嫌われてるんだと思ってたんだけど、俺にもファンがいるって聞いて安心してるんだ。今後もシーザー・グレイシー・アカデミーの代表として日本で試合ができ、またファンに会えることを楽しみにしているよ。

――では、また日本でお会いしましょう！

【10年6月9日／米国カリフォルニア州サンフランシスコ、シーザー・グレイシー柔術アカデミーにて収録】

NICK DIAZ■1983年8月2日、米国カリフォルニア州出身。01年にデビュー。03年からは約3年間、UFCでも活躍。今年1月にはマリウス・ザロムスキーとの王座決定戦を制し、ストライクフォース世界ウェルター級王者となった。183センチ、77キロ。

神の子、2年半ぶりの衝撃復活!
フェザーの強者、そしてアメリカにも脅威の宣戦布告!?

「俺、調子よくなってきたけどどうする?」

山本"KID"徳郁

ついに"神の子"KIDが復活した! 約2年半、長い長いトンネルをくぐっていたKIDだが、『DREAM.14』キコ・ロペス戦で、これ以上ないKO勝利を勝ち取った。深い暗闇と、最高の光を体験した現在のKIDの心境とは!?

聞き手/堀江ガンツ 撮影/タイコウクニヨシ 試合写真/今村陽子

住宅
展示場

――まずは復帰戦での復活勝利、おめでとうございます！

KID　ホント、ありがとうございます。

――どうですか、約2年半ぶりの勝利の味というのは？

KID　もう、超うれしかった。ホッとした。なんか思い出した、「この感触だ！」みたいな。

――試合後はそのハッピーな感じが凄く出てましたね。

KID　もう、超うれしいっす。

――KID選手ってケガでのブランク以前はMMAではずっと負けなしだったじゃないですか。それでも2年間勝ちがないとやっぱり不安になったりしました？

KID　うん。勝ってたのはもう忘れちゃったっすね、ハハハハハ！　でも、なんか、負けが続いたのが不安だったのよりも、なんか俺やることがいっぱいあるわとか、そういう感じだった。どこを直さなきゃいけないとか、そういうのをずっと考えてたから。

――ファイトスタイルも凄く試行錯誤してましたよね。去年と今年とでもまず構え方から全然違いましたし。

KID　そうっすね。いろんなのを試して、ダメだったり。だからヒザをケガしてからは、前みたいにあんまステップとかしなかったんです。次ヒザやったら終わりかなという感じだから、レスリングも全然やんなかった。それでずっとムエタイのスタイルでやってたんだけど、でもムエタイもいいけど、総合にはちょっと向いてないなって。

――なかなか融合させるのが難しいんでしょうね。

KID　ムエタイスタイルだと組まれたりテイクダウンされるんで。だから、そっから足を使うようにしたんだけど、でも結果が出るのはずーっとあとだからね。それで今回やっと結果が出てきたって感じだったから。

――今回はレスリングシューズも履いてましたね。

KID　そうっす。去年の『Dynamite!!』は俺、裸足だったんすよ。対戦相手の金原選手はシューズ履いてたじゃないですか。だから、そんときに履けばよかったなって。ルールで「履くな」ってなったらべつにいいけど、やっぱ踏み込みとかもいいし、「履いてもいい」って言うんだったら、履いたほうがいいなって。

［10.5.29 DREAM.14］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○山本“KID”徳郁 vs キコ・ロペス×
（1R 1分41秒 KO）
暗闇の連敗から脱出したキコ・ロペス戦は、まさにKIDらしいKO勝利に。ハイ、ロー、右フックと一発当たれば倒れそうな強烈な打撃を振り回すロペスだが、KIDはその打撃に合わせてカウンターの右フック！　マジ、ヤベえ！

超うれしかった。なんか思い出した「この感触だ！」みたいな

――じゃあ今回はそういった試行錯誤がようやくしっくりきたというか、ここ2～3年の練習の成果がようやく『DREAM・14』でかたちになってきた、という感じですか？

KID　うん。いろいろ試して失敗したり。そのなかでもやっぱりケガが一番大きかったですけどね。

――今回はそこから復活するために期するものがあったと思いますけど、その思いっていうのはテーマ曲選びにも感じられたんですが。

KID　あ、テーマ曲は自分の友だちが作ってくれてるんですよ。大阪にいるんですけど、負けたり、ケガしたり、俺が落ちてるときとかにも一緒に旅に行ったり一緒にいてくれたりして。で、練習も、やっぱりケガでダメだったじゃないですか。そっから頑張って上がっていくときに、ずっとビデオ撮ってくれてて。その人はけっこう映画も撮ってたりもするんですけど。

――それはKID選手の映画を作ろうとしてるわけですか？

KID　なんかDVDを作ってるんですよ。俺のほかにもラッパーとか、アーティストとか、役者とか、その仲間のなかに俺もいて、ラッパーのドキュメントがあったり、役者のドキュメントがあったり、で、俺のドキュメントもあったりとか。

――ほう。KID選手の周りにはいろんな才能が集まってるんですね。

KID　そうそう。もうすぐ出すんだけど。で、いまDVDを作ってる。もう歌ってて、その人は歌も歌ってて、その人が入場曲を作ってくれたんですよ。

――あ、だから入場曲を聴いてるときに、「これはおそらく山本〝KID〟徳郁のこの試合に向けての気持ちをそのまま歌詞にして歌っている曲なのかな」って気がしたんですよ。

KID　俺は何も「こういうのを歌ってくれ」とか、「こういうのを入れてくれ」とか

は言ってないんすよ。ただ、一緒にいてくれて、俺が思ったこととかを感じ取ってく

れ、総合だったらそのままたぶん終わってた。だからけっこう打撃がくるんだなっ

たのが、「よし、これやろう！」に変わったというか。

変だった。でもあのときは、沖縄とかで本格的にボクシングをやってたわけじゃな

金原戦は、俺よくあんな状態でチャンピオンとやったなあって思う

は言ってないんすよ。ただ、一緒にいてくれて、俺が思ったこととかを感じ取ってくれたんだと思う。やっぱ、話したりするから。ふとした話とかも、ちゃんと覚えててくれたのかなって。

——だからこそ、ああいう曲ができたんですね。そうなると、復活勝利は自分のためだけでなく、みんなのためだったという感じですか？

KID うん、みんなのため。みんなのために勝ったって感じ。だからいつもと全然気持ちが違った。まあ、練習も沖縄とかこっちでもずっとハードにやってきたから勝つ気は満々だったけど、ただ、俺ってポカとかするときがあるじゃないですか。

——なるほど（笑）

KID そういう心配がちょっとだけあったから、まったく負ける気はなかったけど、安心はできなかったっすね。

——確かに、相手のキコ・ロペスはスピードもあって、けっこう強烈な一発もある感じでしたよね。

KID そうっす。まあ、一発は強かったですけど、でもやっぱボクサーの人とスパーリングやってたから、凄い遅く見えてた。試合前は『YouTube』とかで相手の試合を観れるじゃないですか。で、K-1とかも出てて、HIROYAくんとけっこうやり合ってたからなかなか強いのかなって。

——実際、強いでしょうね。

KID HIROYAくんの試合も、一回パンチで倒してたじゃないですか。あれ、総合だったらそのままたぶん終わってた。だからけっこう打撃がくるんだなって思ったし、周りも「グラウンドでいっちゃったほうがいいじゃない？」みたいに言われてたけど、いざ始まってみたら、「えーっ？」みたいな。「超おっそい！」って。

——ほう、そうなんですか。でも客席から見てたらもの凄く速いなって思いましたけど（笑）。

KID アハハハハ！　でも自分のなかでは落ち着いてできたからけっこう見えたんですよ。やっぱ、ボクサーと相当練習やってたから。

——じゃあ、フィニッシュの右のクロスも、ホント見えて「ここだ！」って身体が動いた感じですか？

KID そうっすね。全然、当たるところまで見えてたから。

——あれドンピシャでしたもんね。ひさびさに「これが山本〝KID〟徳郁だ」というような試合でした。沖縄合宿で指導してもらった平仲（明信）さんはあのパンチを見てどう言ってましたか？

KID 「想像してたより、ちゃんとできてた」って。「よかったよ」って言ってくれて。でもまだ自分のなかでは、試合振り返ってみて直さなきゃいけないとこがいっぱいあったんだけど。

——そうなんですね。ただ、ここで一回勝ったことで気持ち的に全然違うんじゃないですか？　いままでは「これやったらいいのかな？」ってどこか迷いながらやってたのが、「よし、これやろう！」に変わったというか。

KID ああ、うん。いまはちゃんと、いいサンプルじゃないけど、なんかいいパターンが見えたから方向が定まったかな。「じゃあ、あとはここととここ」ってやっていけばいい状態に近づけるかなって。

——なるほど。ただ、『Dynamite!!』の金原正徳戦も体調的にはよかったんですよね？

KID まあ、普通だったかな。でもなんか、（対戦相手の金原が）大きかったかな、みたいな（笑）。

——そうですよね（笑）。客席から見てても一回り体格が違って見えました。

KID だから入り込むのにちょっと大変だった。でもあのときは、沖縄とかで本格的にボクシングをやってたわけじゃないから。だからいま振り返って観てみたら「まったく動けてねぇな」って思う。よくあんな状態でチャンピオンとやったなあって（苦笑）。だから、デカいっすけど、もうちょい調子よくなってまた普通に試合させてもらえるんだったら勝てるかなと思ってる。テイクダウンだけ気をつければいけるって。

——テイクダウンはやっぱり一番きつかったですか？

KID 入り込むのと、あとはテイクダウンされて上に乗っかられたときに体格差を感じた。

——でも、考えてみたら『HERO'S』ではKID選手も70キロで闘ってて、いまは63キロ契約じゃないですか。でも、70キロでやってた頃よりも相手がデカくなってますよね（笑）。

KID そうそう。いまはみんな、減量するのうまいよね。

——だからアバウトなカテゴリーだと、このあいだ修斗に出てた日沖発選手と一緒の枠じゃないですか。でも、日沖選手はデカいですよね。体重は65キロですけど、身長は180ぐらいありますし。

KID ねっ！　だから俺的には60がベストなんで、60、65、70とかだったら、たぶんベストですよね。というか、そのほうがDREAMとかにとってもいいと思う。エンターテインメント色が強いのはいいんだけど、それだけだと続かないし、修斗みたいに階級ぐらいはカッチリやって。だって今回の『DREAM・14』のフェザー級も60、61、63、65（笑）。

——同じ階級なのに、みんな契約体重が

山本"KID"徳郁

違う（笑）。去年のフェザー級GPは山本KIDがいないと興行的にもテレビ的にもGPは実現できなかったと思いますけど、逆にいま60キロのバンタムを山本KIDの階級として新たな舞台を作ることも可能ですもんね。

KID あとはちゃんと階級決めて、ランキングじゃないけど、そういうのやったほうが客もわかりやすいし。やっぱいまはエンターテインメントだから、魔裟斗とか俺みたいのがいればってなって思うのかもしれないけど、俺がケガして負けるときもあるし、引退しちゃう人もいるし、そうなったら一気にガターンってなっちゃう。そうじゃなくて、ちゃんとガッチリやればたぶん長続きするんじゃないかな。

――KID選手がいるあいだに、そういうものを作っておくべきだ、と。

KID 俺が辞めてもちゃんと続かないと、俺の下のヤツが大変だから。

――ある種、その61キロのバンタム級を作るのも、またKID選手の役割になっちゃいますよね。

KID お願いしないとね。でも、トーナメントはもういい。あれはムチャクチャだもん（笑）。ちゃんとランキングがあったら、何位と何位が闘ってるとかわかるし。観てるほうは楽しいかもしれないけど、トーナメントは壊れる（笑）。

――魔裟斗選手の引退もあのトーナメントを毎年続けたのが遠因かもしれないですもんね。

KID たぶんヤになっちゃうんすよ。ブッ壊れるって。一発一発ちゃんとやんないと。

――確かに、選手って一試合一試合が重要ですもんね。ところで、今回ケージでの試合だったじゃないですか。体験してみてどうでした？

KID あ、ケージよかった！ なんか、気分的に閉じ込められた感があっていい。

――いいアドレナリンが出るという感じですか。

KID そうそうそう。全部それにしてほしい（笑）。でも、観客が見にくかったらまずいけど、ケージって外から見てて見やすいんですか？

――じつは網はあんまり気にならないんですよね。ただ、上のヘリの部分がちょうど選手の顔とかぶることとかがあって、そこは死角になっちゃいますね。でも、思ったより見やすいです。

KID へえ～。でもあれ、いいと思うんだよな。

――『DREAM・14』前はちょうどリングorケージ論争みたいなのが沸き起こっていましたけど、それとは関係なく、単純に闘う場としてやりやすいということですか？

KID うん。練習してるときも壁があるじゃないですか。だからなんかリアルだなって。総合には凄い合ってる、リングから飛び出さないし。おもしろい攻防になると思うしね。

ジョー・ウォーレン、チョン・ジェヒと連敗を喫していたKIDが大晦日に闘ったのは『戦極』フェザー級王者・金原正徳。だが、二人がリング上に並んだだけで一回りも二回りも体格差が違うことは一目瞭然。これが痛い3敗目となったが、いま闘えば勝てるというからあらためて観てみたい気もするぞ。

日本でやるべきことはやって アメリカには年一回は行ってみたい

――おもしろいといえば、それこそメインイベントのニック・ディアスvsマッハもケージ際の狭いスペースで十字が極まりましたもんね。

KID 凄いっすよね。だから壁がもう、床と一緒ですよ。マットが横にもあるみたい。だから床でも寝技、壁でも寝技、みたいな。

――そのケージといえば、噂によると今回のKID選手の試合はじつはストライクフォースで組まれる予定だったみたいですね。

KID うん。でも、あっちがビザの書類を送ってくるのが遅くて間に合わなかったみたい。いまって、ビザ取るの難しいんすよ。

――ああ、とくにアメリカは大変ですもんね。

KID それで、取れなかったから、遅かったからできなかったです。

――でも、ストライクフォースで闘ってみたいと思った理由はなんだったんですか？

KID まあ、あっちでちょっとやりたいなって。年に一回ぐらいはアメリカで。やっぱ俺、現役ももう最後のほうじゃないですか。でも、アメリカでやってねえなって。だからやりたいなって思った。

――今後もまたチャンスがあったら、やってみたい、と？

KID 今年、できたら一回行ってみたい。まあベースは日本なんで、こっちでやるべきことはやって。で、チャンスがあったら、みたいな。

――やっぱりそれは強さのイメージが完全にアメリカに移ってしまってるのもありますか。

KID そうっすね。だから、試したいというのもあるんですよね。青木選手が負けて、マッハさんが負けたのも、やっぱみんな慣れてないからだと思う。べつに弱いとは思わないし、でもあっちのヤツはそれでずっとやってきて、ルールがそれだし。

――そういう強さのイメージというのは、やっぱり取り戻さなきゃいけないと思います？

KID まあ、日本がというよりも、一人一人ね。ホント、人のことを俺は言ってらんないから。一人一人がやってればいいとは思う。

――ストライクフォースって、いま軽量級のベルトはないじゃないですか。だから、DREAMと一緒にバンタム級の統一のベルトができたらおもしろくなりそうですよね。

KID そうっすね、統一のベルトね。それは最高に楽しい。観てるほうもちょっと見入っちゃうよね。

今度は俺が吉朗くんとか大沢くんとか

――そうなるとKID選手は日本に軸足を置きながら、世界のベルトが狙うという

ゃないですか？

KID そうっす。あの二人とかはチャ

今度は俺が吉朗くんとか大沢くんとか狙ってる番だから楽しいっすよ

やまもと・きっど・のりふみ■1977年3月15日、神奈川県出身。01年修斗でプロデビュー。その後、プロ修斗、K-1MAX、『HERO'S』などで活躍し業界内外から絶大な支持を得る。DREAM参戦後はケガに悩まされ無念の3連敗となったが、『DREAM.14』で見事KO復活。ここから軽量級制圧を目論む。163cm、59.8kg。

山本"KID"徳郁

——そうなるとKID選手は日本に軸足を置きながら、世界のベルトが狙うということになりますね。

KID 最高っす！

——夢がありますよね。いまちょっと、ファンも格闘技にどういう夢を見ていいかわからないところがあるから。

KID そうそう。最初のほうはみんなエンターテインメントでワァーって盛り上がって「おもしろいヤツらが闘ってる」って感じだったけど、それも飽きちゃうじゃないけど、何か軸がないとね。ただ俺はまずほかの一線でやってるヤツらに追いつけるようにしないと。

——やるべきことをやらないと、と。

KID 俺はまだ、ちょっと調子よくなってきただけだから、調子に乗らないでね。まだ、目指してる身だから。だからいまフェザー級でやってる人たちに追いつけるようにしないといけないんじゃないかな。でも、今度は俺が狙ってる番だから楽しいっすよ。

——気分的には、そっちのほうが楽しいですか？

KID そうっすね。今回の試合をほかのフェザー級のヤツらに見せて、「調子よくなってきちゃったよ。どうすんの？」みたいな（笑）。

——ビビらせるわけですね（笑）。

KID そうそう。「KID、どうする？」みたいな感じに思われたりね。だから、あの前田吉朗くんとか大沢ケンジくんとか、一線でやってるすげえ選手がいるじゃないですか。そこらへんにいまは追いついて倒せるようにもっと調子上げていかないとね。

——そのへんとの試合っておもしろそうですよね。KID選手自身も燃えるんじゃないですか？

KID そうっす。あの二人とかはチャンピオンクラスだろうから、俺が完璧になったときに行きたいっすね。完璧になったら絶対に負けないから。

——いいですね。やっぱり山本"KID"徳郁が上がってこないと、格闘技界も寂しいですから。KID選手が出てるのに、テレビが深夜枠じゃいけないですし。

KID いや、それは俺に言わないで（笑）。俺はやってるだけだから。でもね、今回の放送は最初に俺の試合を持ってきてくれたからよかった！

——ダハハハハ！ それで、気になる次の試合ですけど、いつぐらいを考えていますか？

KID 次は7月って線もあったけど、ちょっとまだやりたいことがいっぱいだからね。だから、9月にもしできたらやりたいなって。

——じゃあ9月にアメリカで試合をして、大晦日というのが理想ですか。

KID ねっ、大晦日。楽しみだな。今年はいいよね。

——そういえば今年の初めって、負けたあとでも「いい年になりそう」って言ってましたもんね。

KID うん。だから去年の大晦日は、大晦日でもう悪いのは出しきったろみたいな。今年から晴れるだろうって思って。

——やっぱりそういう気持ちが大事ですよね。

KID うん、そう。俺、今年はいくから。

——いや、ホントにファンもおおいに期待してますよ。

KID うん。大丈夫。俺、その期待にちゃんと応えるから。

【10年6月7日／都内・KRAZY BEEにて収録】

——ウィッキー選手は本誌に初めてご登場いただくということでいろいろとお聞き

ないですかね（ニヤリ）。でもあの試合でおもしろかったのが、僕、所選手が吹っ切

顔つきがホントにバッと変わったんですよね。「倒しにくる！」って顔になってて。

きましたからね。だから「ストレスだろうなあ」って。

この"猿"はいったい何者なんだ!?

西浦"ウィッキー"聡生

いったいこのページはなんなんだ!?　と思った方も多いかもしれないが、正真正銘、西浦"ウィッキー"聡生の勝利者インタビューページである。『DREAM.14』所英男戦で衝撃KO勝利をあげたウィッキーとはいったい何者なのか？ウィッキーの笑い声とともにお届けします。

聞き手&撮影／松下ミワ　試合写真／乾晋也、今村陽子

所選手ってみんな「何か持ってる」って言うじゃないですか。それは……

――ウィッキー選手は本誌に初めてご登場いただくということでいろいろとお聞きしたいんですが、その前に今日はトレードマークのピンクヘアじゃないんですね。
ウィッキー あ、これっすか？　なんかピンクだと電車の中とかで子どもがジーッと見てくるんですよ。キャッキャッキャ！
――少年少女には刺激が強すぎるんでしょうか（笑）。
ウィッキー 見るにしても、ちょっと見てパッと目を離せばいいのに、ホントに乗ってから降りるまでずーーーっと見てるんですよ。困るんですよね。
――身体もゴツいし、子どもたちにとってはウィッキー選手は不思議なことだらけなんでしょうね。
ウィッキー そうそう。でも試合終わって気楽だから、最近はアイスばっかり食ってますよ。ただのデブっす。一回78キロまでいってヤバイって焦りましたから。
――な、78！　DREAMフェザー級が63キロだから、いま試合やったら15キロも減量しないとダメじゃないですか。
ウィッキー だから早く試合して、緊張感を持たないと。でもブラックサンダーのアイスがやめられないんですよ。
――ただ、『DREAM・14』所英男戦は実際に14キロ減量して臨んだんですよね？
ウィッキー そうです。ひと月くらいで。だからすげーキツかった。
――でも、試合では凄くキレキレに見えました。
ウィッキー まあ、試合は文句ないんじゃないですかね（ニヤリ）。でもあの試合でおもしろかったのが、僕、所選手が吹っ切れた瞬間がわかったんですよね。
――ほう、吹っ切れた瞬間ですか。
ウィッキー 一回グラウンドみたいになったときに腕を極めにきてたじゃないですか。
――所選手がかんぬきを狙ってる場面ですよね。
ウィッキー そのときに自分が逃げて立たせたんですよ。で、その立たせたあとの顔つきがホントにパッと変わったんですよね。「倒しにくる！」って顔になってて。所選手ってよく「何かを持ってる」みたいにみんな言うじゃないですか。試合になると途中まで負けててもいきなり勝ったりとか。それはたぶんこういう瞬間で顔が変わるのかなって思いました。
――へえ～、それはおもしろいですね。そんなの対戦した選手しか見られないですもんね。
ウィッキー "たぶん"ですけどね。自分は所選手じゃないからちゃんとはわからないけど、でもみんな気づかないから負けてるのかなって。
――そこでウィッキー選手も一歩も引かなかったのが勝ったポイントだったんでしょうか。
ウィッキー 自分も最初から殴られてもどうでもいいって思ってましたから。僕、アメリカ修行に行ったじゃないですか。
――今年の2月から4月まで、マット・ヒュームのもとで修行されてたんですよね。
ウィッキー そこでアメリカ人の選手を見てて、みんな守りよりも攻撃しか考えてないなって思ったんですよ。でも、そういえば守ってても体力は使うし、それなら最初から攻撃で全部使おうって思って。だから今回は詰めて詰めて殴られてもいいやって感じで闘ってました。
――確かにウィッキー選手のほうからガンガンいってました。
ウィッキー だから修行の成果っす。キャッキャッキャ！
――そういう意味では、今回の修行は相当プラスになったんですね。
ウィッキー 自信になりました。ホントにイヤだったけど（苦笑）。だって、マット先生が夢で出てくるんすよ。白髪まで出てきましたからね。だから「ストレスだろうなあ」って。
――あら、そんなに怖いんですか？
ウィッキー 怖い！　あの笑顔が怖いんですよ。あの笑顔でいきなり試合を組んでたりするんです。
――試合を組む？　いったいどういうことですか？
ウィッキー なんか前の日に凄くキツイ練習させられて、「もー、疲れた」という気持ちになってるときに、翌々日かな？　練習のあとにいきなり、誰かの試合を観に行くって言うから一緒に観に行ったら、自分の名前がエントリーされてたんですよ。しかも2試合も！
――えーっ！　そんな急に試合ってできるもんなんですか？
ウィッキー しかも、スパーリングマッチとか遊びの試合と思いきや、ちゃんとお客さんからお金も取ってレフェリーもいて、そんな状態で試合をするんですよ。自分、金ももらえないでただ緊張だけを味わいに行っただけでしたからね。
――やりますね、マット先生は。
ウィッキー 結果的には相手も弱かったし、すぐKOで勝てるような感じだったからよかったけど。だからそれ以降、マット先生にいつ何をされるか怖かった……。
――まるでお笑い芸人のドッキリみたいですね（笑）。
ウィッキー もう、やらされたほうは、それどころじゃないっすよ（笑）。
――いやでも、そんなことやってたら確かに自信になりますね。
ウィッキー あとは筋トレの仕方とか、身体の作り方も教えてもらったし、それはよかったです。昔もっと細かったですからね。たぶん、試合よりも減量のことばっか

［10.5.29 DREAM.14］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
◯西浦"ウィッキー"聡生 vs 所英男×
（1R 2分51秒 TKO）
序盤からジリジリとケージ際に追い詰めていたのはウィッキー。変則的な右フックで所が倒れると、そのまま鉄槌を連打しTKO勝ちに。うれしさのあまりケージの中で大暴れだ！

西浦"ウィッキー"聡生

考えてて、もともと瞬発力あるのに老人みたいな筋肉になってたんですよ。だから力がなかったけど、今回はちゃんといい筋肉を残しながら頑張ってやったんで。

――だとしたら、今回は全然負ける気がしなかったんじゃないですか?

ウィッキー　そうっすね。ひさびさの試合だし、自分がどんだけ強くなったというのが実感なかったから試合で感じました、変わったんだなって。

――ちなみに、ウィッキー選手ってノーガード戦法というか、闘い方が特殊じゃないですか。そういうのってマット先生に怒られたりしないんですか?

ウィッキー　たぶん「何やってんだ?」って思ってるはず(笑)。でも、昔から怒られてたけど、普通に構えるのはやりにくいからしょうがないんですよ。

――最初は普通に構えてたんですか?

ウィッキー　ずっと前は。けど、どうやってもやりにくいんですよね。闘ってたら知らぬうちにいまみたいになってたし。でも下げててもそんなにパンチもらわないんすよ、見えてたら。

――反応が速ければガードできる、と。

ウィッキー　だから真似してやってる人はたまにいるみたいなんですけど、その人たちはたぶん目が動くのが遅いのか、できなくてよくもらってるみたいで(笑)。出稽古とかに行くと、「ウィッキーさんの真似してやってます」って人がいるけど、勘違いして痛い思いをしてる人がいるみたいですね、キャッキャッキャ!

――確かに、あの闘い方は潔く見えちゃいますもんね。

ウィッキー　全然、普通にビビってるんすけどね。だからノーガードだけど必死に見てますよ。距離感とか凄く気にしてるし。

――そうしているうちに周りの理解も得てきたわけですか。

ウィッキー　うーん、どうだろう? なんか、自分も試合前は誰の言うことも聞かないから。

――ワハハハハ! いいですねえ、自由で。

ウィッキー　いや、でも自分も普段はちゃんと普通にやってるんですよ!

――そうなんですか(笑)。それは失礼しました。

ウィッキー　あ、でもアップのときもマット先生が来て指導してくれたんですけど、そういえば試合では全然違うことやってましたね。

――でも、ウィッキー選手ってあんまり怒られなさそうですよね。

ウィッキー　はい。人ってあきらめるんですよね。

――ちっちゃい頃からそうなんですか?

ウィッキー　そうっすね。適当っす。怒られても聞いてるふりして、聞かない、みたいな。

うーん、どうだろう? 試合前はもう誰の言うことも聞かないから

――一番タチが悪い!

ウィッキー　だから「わかりました」って言っても、全然わかってないことがあるんだけど(笑)。

――ちゃんと授業とか聞いてました?

ウィッキー　いや、聞いてたらもっと頭いいでしょ。でも、美術と体育だけ5だった。あとはほとんど1と2ばっかり。

――そうですか(笑)。

ウィッキー　だから美術のときだけマジメに描いてたんですよね。友だちの絵まで描いてあげたりして。国語の授業なのに友だちの彫刻を彫ってあげたりして、自分の周りだけ木のカスがいっぱいだったりとかね。

――カッコいいです! でも美術の道もあったのに、この道に進もうと思ったのはどうしてですか?

ウィッキー　まあ、なんか自分、学校も辞めたし警察にお世話になったりしたことがあって、「自分って何やってんだろう」ってむなしくなったりしたんですよ。そのときに付き合ってた彼女は大学の勉強とか凄くしてたけど、「自分は何やってんだ?」って。でも、自分のなかでスポーツは昔からできたから、そこは才能があるだろうって思って格闘技をやろうって。

――それで長崎から東京に出てきたわけですか。

ウィッキー　はい。だから「格闘技やりに行く」みたいなことをわざとみんなに言って、帰れない状態にしてましたね。

――なぜ格闘技だったんですか?

ウィッキー　なんか、言ってもちょっとわけわかんないかもしんないけど、男のなかで負けたくないみたいな、へんなこだわりが凄くあるんですよ。で、格闘技でも総合が一番危なく見えたから、それをやってる男の人がいるなら自分も負けたくないなって。それで、あえて一番危なそうに見えた総合格闘技を選んだというか。そっからすぐですね。パソコン持ってる友だちに「修斗」で調べてもらって、最初に出てきたのが横浜ジムだったからそこに行こうって。で、たぶん4・5メートルのマットがあるって書いてあったのかもしれないけど、それを自分は45メートルと間違って「凄いデカいジムでできる!」って思って期待を膨らませて来たんですよ。

――45メートル(笑)。そこらへんの体育館より大きいんじゃないですか。

ウィッキー　都会ってそういうイメージだったんです。でも実際に来たら凄くちっちゃいジムで、もちろん知ってる選手も誰もいないし。でもまあ、ここでいいやって思って、横浜に来ました。だからもう8年ぐらい経ったのかな。

昨年開催されたフェザー級GP開幕戦でDREAMデビューをはたしたウィッキーだが、エイブル・カラムに無念の判定負け。しかしアメリカ修行の成果か、身体のデカさは前ページの写真と見比べても全然違うぞ。

西浦“ウィッキー”聡生

「格闘猿」ってキャッチフレーズも「勝てばカッコいいんじゃないの」って

——「ウィッキー」という名前も横浜ジムの川口（健次）会長がつけたんですよね。

ウィッキー　イヤだったんですよ！　プロとして半年後に試合に出るぞってときだったんだけど、そんときに会長が「おまえは『ウィッキー』で出るぞ」って言われて。

——そんなにイヤだったんですか。

ウィッキー　「絶対イヤだ」ってずっと言い続けてました。ジムの人も「『ウィッキー』だけはかわいそうだ」ってずっと言ってて。で、さすがに自分も「ウィッキー」は逃げられるだろうって思ってたんですけど、川口さんがずっと「ウィッキー」って言い続けて、プロのライセンスの紙もらったら、もうボールペンで川口さんが「ウィッキー」って書いてたんですよね。

——強引ですねえ。

ウィッキー　自分はもうすげーイヤで、一回サンドバッグを殴りながら、「『ウィッキー』だけはイヤだ」ってずっと思ってて。でも次の日に行っても、やっぱ「ウィッキー」の紙は残ってるから、もうあきらめるしかないと思って。

——怒りをサンドバッグにぶつけても解消されなかった、と（笑）。いまもやっぱりイヤなんですか？

ウィッキー　いまはもう全然、実際「ウィッキー」っぽくなってきてるし。キャッキャッキャ！

——なんですか、「ウィッキー」っぽいって（笑）。

ウィッキー　なんか、ピッタリだってみんな言うし。だからたぶん、勝ってたらいい名前に聞えるのかもしんないなって。これで、10戦9敗とかの選手で「ウィッキー」だったらイタくてどうしようもないけど、勝ってたらどんな名前でもよくなるんでしょうね。

——それに便乗してか、煽りVのキャッチフレーズも「格闘猿」になってます。

ウィッキー　それも、「勝てばカッコいいんじゃないの」って誰か言ってました。

——なるほど。でも長崎にいたときに決めた道というのが、いま思うと非常にいい判断だったんですね。

ウィッキー　ナイス判断ですよ。だって、「格闘技やってなかったら、おまえどうなってたんだ？」ってよく言われます。自分、本気でやってるし、クターってさぼりたいですけど、みんな強くなっていくから自分も頑張んないとダメだからという感じっすね。おもしろいし。

——おもしろいですか？

ウィッキー　うん。おもしろい。減量キツくて「これ早死にするぞ」って思うんですけど、終わったらまたやろうって思うんっすよ。なんなんでしょうね。

——不思議ですね。

ウィッキー　たぶん、普通のじゃ刺激が足りないんでしょうね。あの緊張感で勝つからこそ、普通に生きてるだけで凄い幸せに感じるんです。メシも食えるし、試合のプレッシャーもない、人間ってこんなにラクなんだって思うんっすよ。だから、幸せさがよくわかっていいっすね。

——格闘技があまりにつらくてですか？

ウィッキー　つらい。普通が凄い幸せ。ストレスなく、メシ食えるのがいいっすね。

——アメとムチですね。ただ、今後はそのストレスがますます強くなっていくんじゃないですか？　今回所選手に勝ったことで、もう緩い位置にもいられなくなってきてるんじゃないかなって。

ウィッキー　そうですね。所選手に勝ったからというよりも、DREAMに出た時点から凄く焦ってます。それまでは正直チャランポランでもなんとか勝ってた感じはあったんですけど、やっぱDREAMで負けて悔しかったのもあったし、アメリカ行ってもっと焦りを感じました。なんかエスカレーターで下りのヤツを頑張ってのぼる、止まってるとすぐに下にいくぞ、みたいな。

——周りもどんどん強い選手が出てきてますし。

ウィッキー　ホント努力してるんすよね、アメリカ人。頭もいいし、みんなで映像観て研究してるんですよ。アメリカはそういう環境だったから、自分も「自腹切ってでもとにかくアメリカにはどんどん行かないと」って思ってます。

——そういえば、ウィッキー選手は「ビビアーノとか、ウォーレンとか、DREAMはすぐイヤな選手を呼んでくる」って言ってましたよね。

ウィッキー　そうなんですよ。どうせまた連れてくるんでしょ？　キャッキャッキャ！

——連れてくるでしょうねえ。

ウィッキー　けど、今回試合やってみて、なんかフィジカルがホントついたなあっていうのがあって。トップの人も強いんだろうけど、自分も前よりいけるんじゃないかと思ってきましたね。映像で観ててもほかの人よりも速いかもなって自分で感じたし。

——いや、ホントに最後のパンチなんかもの凄く速かったです。

ウィッキー　そういうのを感じて、やっぱ自信にもなりましたからね。

——では、ますますトップ戦線に食い込むウィッキー選手に期待したいですね。

ウィッキー　はい。頑張ります。でも、その前に減量しなきゃいけないかな。　キャッキャッキャ！

——頑張ってください（笑）。

【10年6月8日／都内・リアルエンターテインメントにて収録】

にしうら・うぃっきー・あきよ■1983年8月8日、長崎県出身。05年に修斗でプロデビュー。その後、修斗を主戦場とし、09年DREAMに初参戦。フェザー級1回戦では無念の敗戦を喫するも、『DREAM.14』所英男戦で衝撃のKO勝利。ピンクのヘアスタイルと右脇腹のタトゥーが印象的なファイティングアーティストだ。174cm、65kg。

『DREAM.15』に菊野克紀、そして大物フェザー級ファイター参戦か!?

「青木真也vs川尻達也は切ないなあ〜」

DREAMイベントプロデューサー
笹原圭一

『DREAM.14』の舞台で発表された青木真也vs川尻達也。
PRIDE末期から『やれんのか!』を経てDREAMで実現した
このカードに笹原EPはどんな思いを抱くのか?
さらに『DREAM.15』で"世界に発信するカード"とは!?

聞き手／ジャン斉藤

――笹原さん！『DREAM・15』が開
催される7月10日は「納豆の日」というこ

ち、川尻選手を大物選手を食って、もう待
ったなしという状況で組めれば一番いい

バルといったら川尻vs宇野薫とか、川尻vs
五味隆典とか、五味vs青木という意見が当

と盛り上げてほしいとか、そういうハード
ルですよね。だからその意味で「もう一度

―笹原さん！『DREAM・15』が開催される7月10日は「納豆の日」ということで、じつは同日に『ハッスル』もあるんですよ、西調布アリーナで。

笹原　西調布アリーナ！　……うーん、正直言葉がないなぁ。

―スピンオフの大会だという話みたいですけど。

笹原　おそらく〝スピンオフ〟という言葉ができて以来の規模の小ささでしょうね。それは。

―……と話し始めたものの、うまく話がつながらないのでさっそくDREAMの話に移りたいんですけど、今度のDREAMはある意味旗揚げ以来の一つの区切りになりますね。

笹原　そういう意味を持ってますね、青木真也vs川尻達也は。

―このカードが発表されて以降、周りの反響はどうですか？

笹原　もちろん「観たかった」という声もあれば、一部には「このタイミングじゃないだろう」という方もいます。「ちょっと時期を逸した」という意見も含めて。

―いいカードだからこそ最高のシチュエーションでやってほしかった、と。

笹原　ただ、これは主役が二人いる話なんで、一人だけだったら最高のタイミングは作りやすいんですけど、両方が最高のタイミングって過去を振り返ってもなかなかないんですよね。

―要はAさんとBさんが試合するときに、Aさんが軸になる場合は、Bさんがどういう状況であろうがカードが成立しますけど、今回はAが二人いるという。

笹原　でも、僕は結局試合を組むときが最高のタイミングだってことだと思うんですよ。それは青木選手がメレンデスに勝ち、川尻選手を大物選手を食って、もう待ったなしという状況で組めれば一番いいんでしょうけど、欲を言うとキリがないですからね。

―そうですよね。でも笹原さんにもいろんな思いがあるんじゃないですか？　PRIDE末期から『やれんのか！』を経て、DREAM3年目の今年に青木vs川尻が実現するというのは。

笹原　ありますねえ。だからホントに僕を含めた旧PRIDEチームの人たちから見ると、二人は息子のようでもあり、友だちでもあり、仲間でもあるんですよ。過去さまざまな局面で彼らに対するいろんな思いがあるんで、凄く簡単に言うと複雑な気持ちです。どっちかが勝って、どっちかが負けるわけですから。

―確かに。

笹原　それに、あの二人に関してはPRIDEデビューもそんなに変わらないし、どこかで交わっててもおかしくなかったんでしょうけど、ずっと交わらないままここでようやくですからね。もう、ライト級GPとか去年の大晦日とか、ちょっと考えても2回3回流れてますから。

―その二人についてDREAMのオフィシャルサイトなんかでは「因縁のライバル対決」というふうに打ち出してました。

笹原　あれは最初の打ち出しとして、わかりやすい表現をしたんです。たぶんライバルといったら川尻vs宇野薫とか、川尻vs五味隆典とか、五味vs青木という意見が当然あると思うんですけど、カード発表前まで当然「青木vs川尻」というのは言えないわけじゃないですか。その状況で「青木vs川尻」を匂わせるわかりやすい表現が〝ライバル〟かなって。なので、このあとの打ち出し方は変えますよ。ポスターコピーは「日本がもう一度夢みることができる。そんな闘いをしようじゃないか」で、サブコピーが「決着じゃない、始まりだ」ですから。

"PRIDE最後の遺伝子"である青木と川尻は07年に開催された『やれんのか!』に参戦。3年前の写真だが、当時の表情はまだどこかぼやっとした感も。ここ数年の"試練"が二人のオーラになっているということなのだろう。

―なるほど。ただ、このカードっていろいろ不思議なんですよね。さっき言った宇野vs川尻、川尻vs五味、青木vs五味とは違った立ち位置で、どっちが強いか白黒ハッキリさせてくれというムードでもないですし、それでいてこのタイミングで、それでも雌雄を決しなきゃいけないというか。加えて、必要以上にハードルが高いですしねえ。

笹原　確かに、ハードルは上がってます。

―ヘンな言い方ですけど、二人の闘いに興味がない人でさえハードルを高く設定してますよね。

笹原　過去を振り返ってもこんなシチュエーションはないですよ。もちろんお互いのなかでは白黒つけるというのは当然あるんでしょうけど、それよりも周りは二人にしかできない闘いを見せてほしいとか、この試合でジャパニーズMMAをもっと盛り上げてほしいとか、そういうハードルですよね。だからその意味で「もう一度夢みることができる闘いをしようじゃないか」ということなんです。

―次に行くためにやんなきゃなんない試合だ、と。しかし、なんですかね、この不思議な感覚は。たとえば小川vs吉田、桜庭vs田村みたいに、知らない人にでも語りたくなるような感じでもないんですよね。かといって、語る要素が少ないというわけでもないんですけど。

笹原　うーん。そことはちょっと違いますよね。

―語るには早すぎる、まだ生々しいという感じなんですかね。

笹原　だからもう「語るまでもない」というところがあるのかなあ。もともとこの二人って小川さんと吉田さんや、サクさんと田村さんみたいなに敵対し合ってるわけではないですからね。どっちかというと戦友として見られてるじゃないですか。

―結局は自分でやりたいという意思もあったんでしょうけど、基本的に二人は投げられた球は打つというタイプで、団体のために、日本のためにという姿勢ですよね。

笹原　まさしく献身ですよ。だから、どこかすでに切ない感じがしてるんですよね。

―ああ、そうですね。もちろん「自分がやりたいから闘ったんだ」って本人たちは言うでしょうけど、見え方として身を捧げているように見えます。川尻さんも、魔裟斗と闘ったりとか、青木戦が決まってたのをひっくり返されて横田戦を闘ったり。やっと青木戦かと思ったら、アメリカで青木が負けちゃって。一方、青木さんも道のりは半端ないですよね。でも、なぜかその道のりを言う気になれないんだよなあ。

笹原　たぶん「説明しなきゃわからないよ

二人の決着は、僕の理想を言えばもうダブルノックダウンですね！

うじゃ、観るな！」ということなんじゃないですか？（笑）。じつは無茶苦茶ハードコアな試合ですからね。

――かといって、そこで「わかるヤツしか観なくていい」と言っちゃうのも、DREAMというイベントの影響を考えると言えないですよね。

笹原 そりゃそうですよ。いまは格闘技からちょっと離れている人や、格闘技にほとんど触れたことのない人たちにも振り向いてもらえるようにするのが、我々の仕事ですから。

――ボクも一応編集長なんでそんなことは言えないんですけど（笑）。

笹原 だから本来なら二人が闘ってきた道のりを見てるだけでカードの意味がわかってもらえて、大晦日だとか、東京ドームとか、ゴールデンタイムとか、ホントに多くの方に観てもらえるような環境でやれたら一番よかったんでしょうけど、逆に言うと、いまの日本の格闘技の状況のなか、この状況でやらなきゃいけないということに意味を持たせなきゃダメですよね。

――『やれんのか！』以降、あの二人が無理してでもやんなきゃなんない格闘技界の状況があって、それが今回もまたやんなきゃならない状況があるというか。

笹原 そう。ただですね、いま僕は斉藤さんに勧められてツイッターをやらせていただいているじゃないですか。

――どうしたんですか、急に（笑）。

笹原 そのおかげで、ホントに好きな人たちが熱を持ってくれないかぎりは外には広がっていかないなというのは実感するんですよ。ジャンルが盛り上がらないのに、外には行きようがないですから。ホントに好きな人たちが「青木vs川尻を観なくては生きてる意味がないよ」くらいなことを熱弁したくなるような熱を作っていくしかないんですよね。いまその熱って小さくなってますけど、確かに熱はあると思うんですよ。じゃなきゃ人生の大切な時間を使って「リングだ、ケージだ」とか目を三角にして言ってないと思いますからね（笑）。

――ホントですね。でも、はたしてどういう試合になるのか……。

個人的には判定で終わってほしいなあ。

笹原 それはあっさり青木選手が一本を取ってもおかしくないし、川尻選手のパンチが当たる可能性だって全然ありますしね。ホントにどうなるかわからないです。でも、僕の理想を言えばダブルノックダウンですね！

――ワハハハハ！　ところで、そのほか『DREAM・15』のカードはどうなりそうでしょう？

笹原 参戦予定選手に入ってた菊野選手は大物外国人選手と組む予定ですね。菊野選手には5月の前の時点で、もう次は7月でキツい相手だというのは伝えてますから。

――おお、それは楽しみですね！

笹原 凄くいいと思いますよ。青木選手や川尻選手から見たときに、二人ともそうした壁を越えてきてるわけじゃないですか。そういう意味ではホントに試されるし、簡単に越えられるものじゃないですから。

2009年に対戦が実現するまで、毎年のように対決の意味や見どころが語られていた桜庭vs田村。こと青木vs川尻になると口数が減ってしまうのは、やはり雌雄が決してしまうことへの切なさのせいか。

――確かに。いや、菊野選手が出てこないことには、青木、川尻含めたライト級の物語が途切れてしまいますからね。で、出場予定選手にはアリスターもいるし、ゲガールもいましたが。

笹原 ライトヘビー級の2試合を組んで、勝者同士が次回で初代王者を賭けて試合する、という流れです。ヘビーに関しても次回につなげられるカードを組めればと思います。

――そんななかでフェザー級のカードは組まれないんですか？

笹原 じつはこれがフェザーは話をしている大物選手がいるんですよ。これが実現すれば、かなりいいと思うんだけどなあ。

――ほう。それはまだ決定ではないんですか？

笹原 …………でも、決まったら凄いと思いますよ！

――決まってないんですね（笑）。

笹原 構想どおりにハマってくれさえすればいけるのになあ（ぶつぶつ）。

笹原圭一

――むむっ。ちなみに、お話から察すると『DREAM・15』は世界のMMAに対して発信するような大会になるのかなと予想してるんですけど、9月はゴールデンじゃないですか。その場合、大会のカラーって変えるんですか？

笹原 やっぱりちょっと変わると思います。ゴールデンは所選手やKID選手とか、サクさんもそうだし。

――そこは同じジャパニーズMMAにしても、ワンウェイじゃないというか。

笹原 でも僕は違ってもいいと思ってます。たとえばDREAMが海外に出ていくという話をすると、「それよりもまず日本を盛り上げなきゃダメだ」という意見が当然出るんですけど、本当は両方必要なんですよ。世界に向けたMMAも大切だし、ゴールデンでいろんな人に観てもらえるような大会をやって盛り上げることも必要だし。ただゴールデンの大会も勝負論のあるカードはもちろん組みますよ、重たいクラスも含めて。

――そうすると、対世界を見据えた地盤を築くという意味ではやはり『DREAM・15』が重要ですね。

笹原 そうなんですよねえ。でも、どうなるんだろうなあ～。

――えー、どうやらまだ情報がぼんやりしている模様なので、続きは携帯サイト『kamipro ムーブ』の音声配信にてお届けできればと思います。

笹原 ……うーん、それまでに決まってるといいんですけどねえ（ぶつぶつ）。

――よろしくお願いします（笑）。

【10年6月11日／『kamipro』編集部にて収録】

※というわけで、本インタビューで語りきれなかった笹原EPの思いを音声配信する予定です！『kamipro ムーブ』のなかの新設コーナー『mimipro Mobile』にて、『DREAM・15』の見どころを存分に語っていただきます。アクセス方法は94－95ページをご参照あれ。

7.5『K―1 MAX』で念願の石川直生戦が実現!

「華も若さも一番なこの僕が今度は〝ET狩り〟やりまっせ!」

K―1の極ワルプリンス

才賀紀左衛門

前号の暴言連発インタビューで大きな反響を巻き起こした才賀紀左衛門。その際に「どつきたいわ〜」とアピールしていた石川直生戦が、なんと実現することに! さぁ、今回も好き放題〝モンちゃん節〟を響かせてもらいましょう!

聞き手/鈴木佑　撮影/吉場正和　試合写真/羽根田直人

——もしも〜し、紀左衛門さんですか? またまた『kami·pro』の取材なんですが。

紀左衛門　おぉ! どうしたんすか、2号続けてじゃないですか? いやぁ、うれしいわ〜。

——前回は好き放題にしゃべってもらったわけですけど。

紀左衛門　いやいや、僕、あのときメッチャ遠慮しましたよ!

——え、あれで遠慮してるんですか? そういえば谷川さんが「あのインタビューを読んでイラッとした」ってツイッターでつぶやいてましたよ。

紀左衛門　あ、それ僕も見ましたわ。「イライラしないでくれよ、怖いわ〜」って思いましたよ。いや、でもホンマ『kami·pro』さんのおかげで次のK―1で石川直生選手とやらせていただくことになりましてね!

——あ、今日もさっそく始まりましたね、ソロバン弾きが(笑)。

紀左衛門　いやいや、本心ですって! フフフ。

——今回は念願の石川戦が決まったわけですけど、どのタイミングで知らされたんですか?

紀左衛門　もう前日に「明日、トーナメントの会見があるから」って聞いて、「マジ? ラッキー!」みたいな感じでしたよ。でも、そもそも僕がトーナメントに出ないと、みんないい子ちゃんでつまらないじゃないですか? まぁ正味、「絶対、コイツら腹黒いわ」って思ってるんすけどね(笑)。

——谷川さんはツイッターで「紀左衛門、アリスターとやれ!」とか無茶言ってましたけど。

紀左衛門　僕、アリスターでも全然

かまわないですよ。バット持ってていなら余裕です!(キッパリ)。

紀左衛門　こんなん言ったらアレですけど、なんぼキックで凄いいうて

な、この兄ちゃん」って感じなんですけどね。フフフ。

んか一瞬で倒せると思うんやけどな。

——アリスターみたいにバットで?

んのことを「ETにたとえたのはうまい、そういう才能はある」ってほめ

紀左衛門　僕、アリスターでも全然

谷川さんは僕にとって
お父さんみたいな感じですわ

かまわないですよ。バット持っていいなら余裕です！（キッパリ）。

――特別ルールならOK、と（笑）。さて、会見では前々から「ETに似てる」と挑発してた石川選手に、実際のETばりに指を突き出すパフォーマンスを披露してましたね。

紀左衛門　ハハハハ！　向こうはオッサンやし、ちゃんと若者のジョークを理解して交信してくれるかなって思ったんですけどね。でも、やってくれんかったな〜、アイツ。で、そのあとにナオキックから握手求めといて、僕が握り返そうとしたらその手を引っ込めたでしょ？

――パッとすかしてましたね。

紀左衛門　あれはムカつきましたわ〜、蹴ってやろうかと思いましたよ！　でも、そのへんはさすがベテランだなって。そもそも僕が初めてキックを観に行ったときに試合してた選手ですからね。確か村浜（TAKEHERO）とやったときですわ。

――前に「ナオキックは才能もセンスもない」って言ってましたけど、認めてる部分もあるわけですか？

紀左衛門　フフフ。まぁでも、確かにキックボクシング界でカリスマ的存在だっていうのはわかる気がしますよ。ただ、なんかセリフが暑苦しいっていうか、クサすぎるでしょ？　たまに「何言ってんねん、パンチドランカーか？」って思うときありますからね。

――あいかわらずヒドいこと言いますね〜。

紀左衛門　こんなん言ったらアレですけど、なんぼキックで凄いいうても、キックとK−1は違うんでね。

――ほ〜、何が一番違いますか？

紀左衛門　もちろんルールも違うし、そもそも舞台が違うでしょ。キックは後楽園じゃないですか？　それに比べて僕は大きなところでしかやってないんでね。いやもう、ホンマ皆さんのおかげでね！（大声で）。

――フフフ。

紀左衛門　ちょいちょい、なんで笑ってますの？

――いや、心がこもってないなと思って（笑）。

紀左衛門　よう言いますわ！　これは本音ですよ、ホンマやらしい人間みたいに書かないでほしいわ〜。まぁそれはさておき、あの会見のときにナオキックが上から目線でコメントしてたやないですか？

――紀左衛門さんのことを「リング上で喧嘩とか殺し合いとかしたことがない選手」って言ってましたね。

紀左衛門　いやもう、「コイツ、ホンマもんの馬鹿なのか？」って思いましたよ。「何言ってんの？　ちゃんとルールがあるからスポーツなんでしょ？」って。そんなもん、修羅場だったら俺のほうが潜ってる数が多いに決まってるし、「喧嘩だとか殺し合いならいくらでもリングの外でやったんで。怖いこと言うな、この兄ちゃん」って感じなんですけどね。フフフ。

――〝大阪のヤンチャ代表〟としては喧嘩に相当自信があるんですか？

紀左衛門　まぁ、そこは大阪で僕の世代の子に聞いてくれたらわかるんじゃないですかね。「亀田？　亀田なんてヘタレやろ」って感じですよ、ハハハ！

――亀田三兄弟より才賀三兄弟のほうが凄い、と。

紀左衛門　いや、僕の弟二人はヘタレなんですよ。ヤンチャだったのは僕だけで。僕、一時期は周りからキ○ガイと思われてたからね。もう、昔はすぐにパッと手が出てたんで。だから、ホンマK−1なかったら僕なんてロクでもない人間になってたと思いますよ。というか正味、喧嘩だったらあのトーナメントに残ってるヤツなんか一瞬で倒せると思うんやけどな。

――アリスターみたいにバットで？

紀左衛門　いやいや、普通に拳ですよ、僕はスポーツマンですから！　まぁ、喧嘩だったら「会見が終わってからいくらでもやったるぞ」って思ったんですけどね。ホンマ、石川だけはナメたこと言いやがってからに……。まぁ、ナオキックもK−1で63kg級がなかった頃から、ずっと出場をアピールして頑張ってきたっていう面では凄いと思ってますけどね。でも、やっぱりもう30すぎやからね。今回は思い出作りができたってことでいいんじゃないっすか？　あとは僕とか大和哲也とか若い世代が63kg級を背負えばいいんですよ。K−1のヘビー級だってバダ・ハリが世代交代してるわけだし。

――そのバダ・ハリは最近、また反則で謹慎しちゃいましたけどね（笑）。

紀左衛門　いやいや、僕はそんなことしませんから！　なんてったってスポーツマンなんでね、フフフ。

――そんなスポーツマンの紀左衛門さんは、技術的に石川さんを警戒してる部分はありますか？

紀左衛門　アイツ、すぐ組んでくるっしょ？　僕、女に抱きつかれるのはウェルカムですけど、男に抱きつかれるのはノーサンキューなんで。これ、向こうに言っておいてくださいよ、「おまえ、つまんないから組んでくんなよ、殴り合おうぜ」って。

――ちなみに石川さんは紀左衛門さんのことを「ETにたとえたのはうまい、そういう才能はある」ってほめてましたね。

紀左衛門　いや、心のなかで相当腹立ってますよ。あれ、絶対ナルシストだから。ククク。

――しかし紀左衛門さんって有吉弘行ばりにたとえ上手ですよね。アリスターのこと〝黒アヒル〟とか（笑）。

紀左衛門　だって似てません？　「なんでアヒル口やねん」と（笑）。

――ということで、谷川さんも何かにたとえてもらいたいんですけど？

紀左衛門　いやいや、もうやめてくださいよ……（急に小声になって）。谷川さんのこと言ったら何があるかわかったもんじゃないでしょ？

――谷川さんは紀左衛門さんにとってどんな存在なんですか？

紀左衛門　優しいんやけど、時には厳しいみたいな……うん、なんかお父さんみたいな感じやな（ボソっと）。

――ダハハハ！

紀左衛門　いやあのね、僕、オヤジを中3のときに亡くしてるんですよ。だからこの際、谷川さんにお父さんになってもらおうかな思って。谷川さんって何歳ですか？

――たしか40代後半だったと思います（実際は48歳）。

紀左衛門　あ、うちのオカンと同じくらいですよ。お父さんで全然いけますね。フフフ。

――じゃあ、そのお父さんのために優勝するには大会当日に3試合勝ち抜かないといけないわけですが、そのあたりはどうですか？

紀左衛門　まぁ、先のことばかり考えるとポカするんで、まずナオキッ

©FEG Inc.

7.5『K-1 MAX』で最も注目を集めていると言っても過言ではないモンちゃんvsナオキック。
最年少vs最年長対決を制するのはいったいどっちだ?

才賀紀左衛門

クを倒すことを考えますわ。試合数は空手の大会で一日7試合も8試合もやってたんで問題ないですよ。

——ちなみにほかの選手で意識してる人はいます？　久保優太さんとは親交もあるらしいですけど。

紀左衛門　何回か一緒に練習したことあるんですよ。弟のＫＥＮＪＩは同じＫ－１甲子園組だし、僕は兄貴のほうは「兄やん」って呼んでるんですけどね。兄やんは凄くいいヤツですよ。でも、あんだけペコペコしてんのは絶対ソロバン弾いてまっせ（笑）。

——谷川さんも「久保きゅん」って呼んでかわいがってますよね。

紀左衛門　それは兄やんに厳しくしたらイジめてるみたいになるからですよ。でも、兄やんは実績は凄いのになんであんなオドオドしてるんやろ、なんかオカマっぽいでしょ？　まぁ、優しくてメッチャいいヤツなんですけどね。たぶん、向こうのブロックは兄やんが上がってくるんちゃうかな。

——同世代だと意識しますか？

紀左衛門　そうですね。理想としては「二人で決勝、どっちが勝っても文句なし」みたいな感じですわ。

——あ、なんかさわやかですね。

紀左衛門　なんてったってスポーツマンですから！　あと、今回ってゴールデンで流れるでしょ？　やっぱＫ－１はゴールデンでガンガンやってもらわないとね。

——紀左衛門さんは有名になりたいっていう欲は強いんですか？

紀左衛門　そりゃそうですよ。有名になってええ金もらって、ええ家買って、ええ車乗って、ええもん食べて。まぁ、女のほうは昔からモテてるんで問題ないですけどね、フフフ

——相当ブイブイ言わせてた、と？

紀左衛門　付き合った女は4人ですけど、寄ってくる女は多かったですよ。あのね、僕の家は昔からチョコ10個以上もらわないと家に入れてくれなかったんですよ。

——は？　なんですかそれ？

紀左衛門　オカンが「アンタはお母さんの子どもで顔は恵まれてるんやから」って。まぁ、実際に学生のときは20個以上もらってましたからね！

——凄いな～。まぁ、学生のときは勉強よりも運動できるほうがモテますもんね。

紀左衛門　よう言いますわ！　まぁ、かっこよくておもしろくて優しいみたいな感じでしたね。こんなん自分で言ったらアレやけどね、フフフ。

——大丈夫です、原稿ではバッサリカットしますから（笑）。あと、ファイヤー原田さんともツイッターで交流してましたね。健闘をたたえ合って。

紀左衛門　だから、僕はさわやかなスポーツマンなんですって！　まぁ、ファイヤー原田も会場を沸かすところなんかは凄いと思いますよ。

——原田さんは今度の大会で解説するみたいですよ。

紀左衛門　ええ、あの人しゃべれるんかなぁ？　とりあえずツイッターで「ほめてな」って言っとこ。

——ツイッターでいうと、紀左衛門さんは長島☆自演乙☆雄一郎さんに相当辛辣なこと書いてますよね？

紀左衛門　だって嫌いやもん。気持ち悪いから。

——ダハハハ！　そんな理由ですか？

紀左衛門　いや、前にちょっと会ったんですよ。アメ村を友だちとブラブラしてたら、自演乙が向こうから歩いてきたんですね。でも周りは誰も気づいてないからかわいそうだと思って、下向きながら「サインください」って言ったんすよ。そしたら「いま忙しいんで」とか断りやがってね！

——断られましたか（笑）。

紀左衛門　で、こっちが「チンタラ歩いてヒマそうだったじゃないですか？」って言ったら、自演乙が「あ、紀左衛門くん！　でも俺、オタクのライブがあって忙しいから」とか言われて、「コイツ、腹立つわ～」って。

——そんなことがあったんですね。

紀左衛門　で、こないだの会見のときに僕が携帯イジってたんですよ。そしたら自演乙が「勝手に俺の写メを撮るな」みたいなこと言ってきて。こっちにしたら「誰もおまえのことなんか撮ってないわ、ボケ」って感じでね。

——穏やかじゃないですね～。まぁ、階級も違いますし対戦はないでしょうけど。

紀左衛門　そうですけど、ホンマ気にくわないすわ。まぁ、僕もこう言いながら最近は「もっと我慢強い人間にならないとあかんな」とか思ってるんですけどね。やっぱり周りの人が応援してくれるからいまの自分があるわけやから、そのへんは裏切りたくないっていうか、言葉にしろもっと考えて話さんとあかんな、と。

——毒舌が注目集めながらも、そのへんは考えてるんですね。

紀左衛門　まぁ、でも盛り上げるのが自分の役目っていうのもわかってますし。ホンマ、Ｋ－１がなくなったら僕は路頭に迷いますからね。やっぱり63kg級なら僕が一番華も若さもあるから、結果を出せば絶対にＫ－１が盛り上がると思うんですよ。

——使命感がある、と。

紀左衛門　へんな話、ほかの選手はＫ－１がなくなっても、なんだかんだで普通の仕事をすると思うんですよ。でも僕にはそれはできないから、そのぶんＫ－１に愛情を持ってますよ。まぁ、今回はまずはナオキックから料理させてもらいますわ。あのね、僕が一番カッコ悪いと思ってることって、口だけってことなんですよ。

——自分は有言実行だってことですね。

紀左衛門　まぁ、見ててくださいよ。〝お父さん〟も喜ばせないとアカンしね。フフフ。

【10年6月7日／電話取材にて収録】

僕が一番カッコ悪いと思うのは口だけってことなんですよ

さいが・きざえもん■1989年2月13日、大阪府出身。K-1初登場は07年『Dynamite!!』でのHIROYA戦。ジャニーズ系の顔立ちからは想像できない毒舌がウリ？ ちなみにこのアイドルばりのプロフ写真は19才当時のモンちゃん。本人いわく「あんなん恥ずかしいんで勘弁してほしいですわ～」とのこと。168cm、60kg。

『FieLDS K-1 WORLD MAX 2010』
-70kg World Championship Tournament FINAL16
-63kg Japan Tournament FINAL

東京・代々木競技場第一体育館
7月5日（月）開始18:00

主要対戦カード

▶-63kg Japan Tournament FINAL準々決勝
上松大輔 vs 松本芳道／久保優太 vs 尾崎圭司
石川直生 vs 才賀紀左衛門／大和哲也 vs 裕樹

▶-70kg World Championship Tournament FINAL16
佐藤嘉洋 vs 山本優弥／長島☆自演乙☆雄一郎 vs アンドレ・ジダ
中島弘貴 vs アルバート・クラウス

チケット料金

SRS席20,000円／RS席13,000円／S席10,000円／A席6,000円

お問い合わせ

FEG TEL.03-6277-6088

「久保きゅん、久保きゅん♪」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年7月26日(月)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦好きなプロレス・格闘技マンガといえば?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部
「顔がETに似てる」係まで

※応募締切は2010年7月12日(月)当日消印有効

PRESENT*01

1名様

サイン入り

エル・ソラール 本人使用サイン入りマスク(着用写真付き)

[非売品]

今回の闘道館からのプレゼントは「日照時間が最も長い夏至の日に合わせて」ということで、太陽仮面エル・ソラールのマスク! しかもサインつきだ!

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*02

1名様

サイン入り

5.30 修斗 JCBホール大会 出場選手 サイン入りポスター

[非売品]

今年上半期の修斗のビッグイベントのポスターに、当日出場した日沖発やリオン武、そして佐藤ルミナなどの選手のサインがギッシリ!

x-shooto■http://www.x-shooto.jp/

PRESENT*03

1名様

遠藤浩輝直筆 サイン色紙

[非売品]

今号に登場した『オールラウンダー廻』の作者・遠藤浩輝先生のイラスト入りサイン色紙! グローブには「SHOOTO SINCE 1985」と入るこだわりよう!

講談社『イブニング』■http://kc.kodansha.co.jp/magazine/index.php/02134

PRESENT*04

1名様

宮下あきら直筆 サイン色紙

[非売品]

同じく今号に登場の『魁!!男塾』の作者・宮下あきら先生はご存知、江田島平八のイラストを「紙プロである!!」のセリフ入りで描いてくれました! 押忍!!

『男塾』公式サイト■http://sj.shueisha.co.jp/contents/otokojuku/index.html

PRESENT*05

1名様

単行本

『最強ワル列伝 実録 格闘王』

[竹書房/¥580(税込)]

蝶野正洋、緑健児、小川直也、川崎タツキ、秋山成勲が、その波瀾万丈の半生を語った劇画本! いまだから語れる真実が収録された一冊。

竹書房■http://www.takeshobo.co.jp/mgr.m/main/index

PRESENT*06

1名様

FRONT / BACK

6号ロケット Tシャツ

[アートジャンキー/¥3,990(税込)]

名古屋インディープロレス界の若きエース(2010年現在小3)、ミスター6号公認のTシャツ! デザインは得意技の6号ロケットがモチーフ。サイズはM。

アートジャンキー■http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*07

1名様

FRONT / BACK

サイン入り

キング・モーサイン入りTシャツ

[非売品]

さまざまな選手をサポートする凄腕整骨師ケン・ヤマモト先生(はなまる整骨院)が、モーのサイン入りTシャツを提供してくれました! サイズはM。

はなまる整骨院■http://www.hanamaru-genki.com/

PRESENT*08

1名様

FRONT / BACK

NNNプリントTシャツ

[NO NEED NEW/¥3,150(税込)]

インパクトのあるシンプルさを追求し、素材とデザインにこだわった服創りをしているNO NEED NEWのブランドロゴが大きく入ったTシャツ。サイズはS。

NO NEED NEW■http://www.no-need-new.com/

PRESENT*09

1名様

DVD

『ディック・スレーター&タリー・ブランチャード』

[クエスト/¥5,040(税込)]

スーパースターの往年の勇姿と現在の素顔を追った感動のドキュメント。今回は"喧嘩番長"ディック・スレーターと"ザ・ミッドナイト・スタリオン"タリー・ブランチャード。

PRESENT*10

1名様

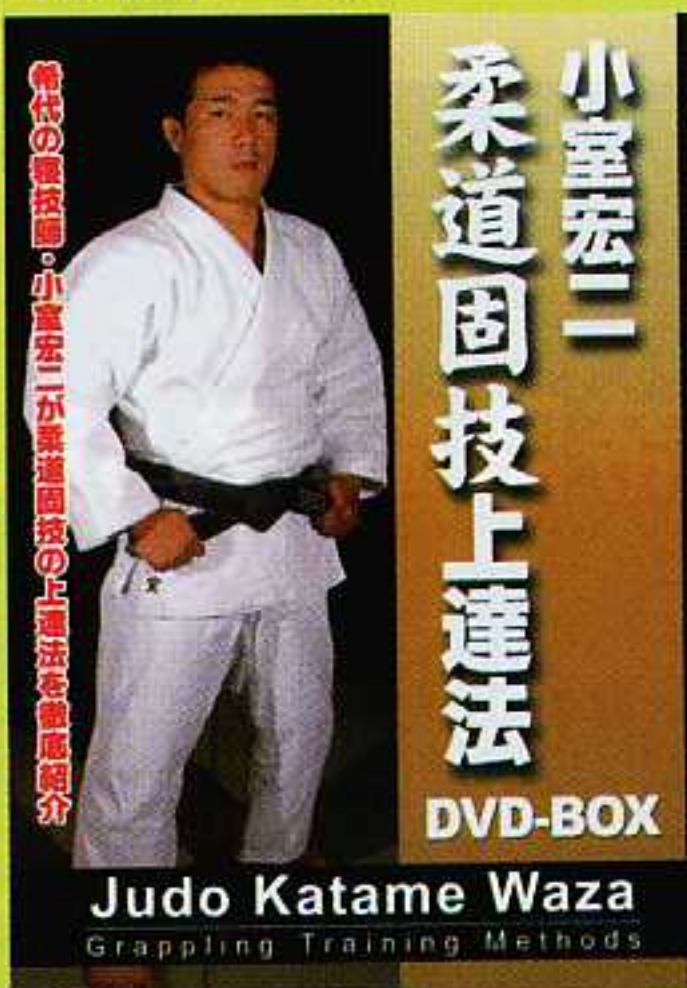
DVD

『小室宏二 柔道固技上達法 DVD-BOX』

[クエスト/¥15,750(税込)]

小室宏二が柔道固技の上達法を徹底紹介!『小室宏二 柔道固技上達法 上巻』『小室宏二 柔道固技上達法 中巻』『小室宏二 柔道固技上達法 下巻』をセットにしたDVD-BOX。

PRESENT*11

1名様

DVD

『南里 宏 試割の極意』

[クエスト/¥5,880(税込)]

「試割は武士が刀の切れ味を試した試し斬りと同じだ」と語る南里師範。空手家の肉体がどこまでの破壊力を持つのか? 超人伝説を体現する男の衝撃映像がここに!

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro148 応募券 **帯広ちゃん**

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! **http://kamipro.com/**

kamipro 紙のプロレス
No.148
2010年7月7日 発行

行人
浜村弘一
集人
斉藤慎一
青柳昌行
集統括本部長
ジャン斉藤
集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（オランダ応援のため非番）
身名誉バイザー
吉田 豪
っ人
ジャイ子
集次長（函館新スタンド観戦密航）
松林 貴
ザインGM
出田 一（TwoThree）
ザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）
ザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）
メラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
立ち向かえ!!
入江before（TwoThree）
誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
務部
樽本"1200dpi"義之
集庶務
原 正典
山内ユリコ
集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子
インブーツマダム
廣橋久美子
行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
刷
図書印刷株式会社
力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

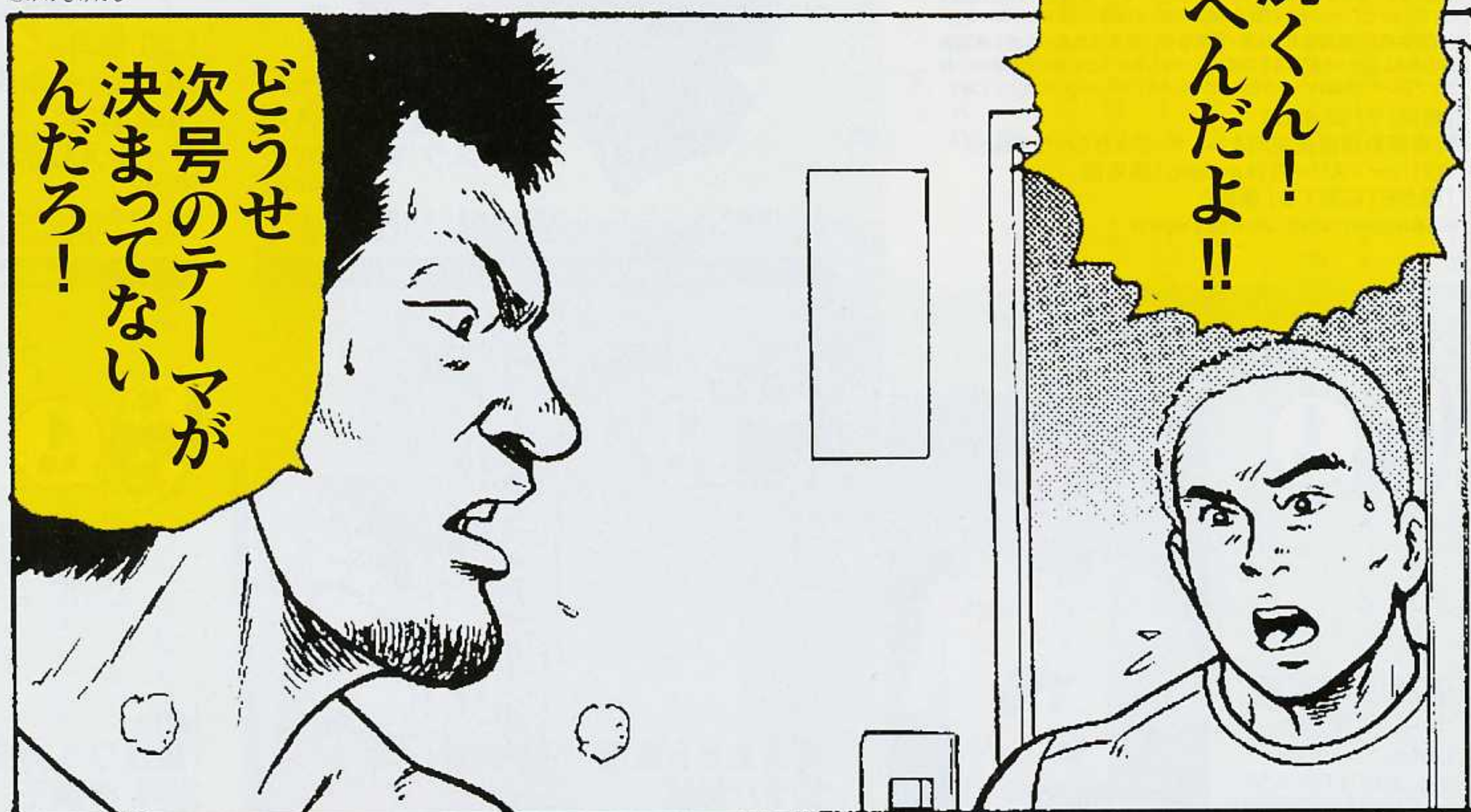
書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下
の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては
以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あら
じめご了承ください。

カスタマーサポート］
☎0570-060-555
受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
ールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

個人情報の取り扱いについて
書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関
してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社
ブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL:
tp://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・
リシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

©みのもけんじ

川尻くん！たいへんだよ!!

どうせ次号のテーマが決まってないんだろ！

次号特集テーマは

未定

NEXT ISSUE

6.26皇帝降臨、7.3秋山vsヴァンダレイ戦徹底詳報!

kamipro Special 2010 AUGUSTは7月13日（火）発売予定!

青木vs川尻! 7.10『DREAM.15』徹底特集!

No.149は7月23日（金）発売予定!

※地域によっては多少発売日が遅れることがあるでござる!